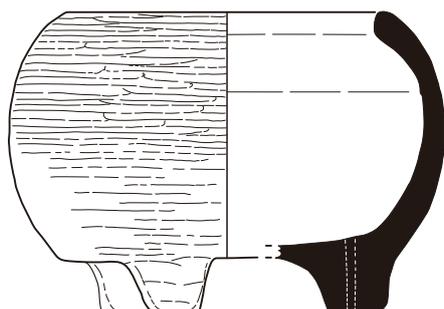


平安京左京四条二坊十六町跡・

本能寺城跡



2017 年

国際文化財株式会社



平安京左京四条二坊十六町跡・

本能寺城跡

2017年

国際文化財株式会社





1 北区第3遺構面 全景（東から）



2 北区第3遺構面 全景（北から）



3 南区第2遺構面 全景（東から）



4 北区第2遺構面 半地下式土坑 158SK (南東から)



5 南区第2遺構面 土器集積土坑 322SK (南東から)



6 北区第3遺構面 八角形井戸 088SE (西から)



7 北区第3遺構面 辻子 699SF (北東から)

# 例 言

1. 本書は、京都市中京区三条通油小路下る三条油小路町 156・158・160・162・164 番他における、平安京左京四条二坊十六町跡・本能寺城跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、三菱地所レジデンス株式会社の計画する、集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査である。文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 92 条の規定により、京都府教育委員会に届出をし、8 教文第 5 号の 67 で許可を受け、文文財第 497 号の受付番号 15H431 で通知され実施したものに当たる。
3. 調査の体制は、京都府教育庁指導部文化財保護課並びに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもとに、国際文化財株式会社西日本支店が契約し、西日本調査室が実施した。
4. 発掘調査の面積は、385㎡である。
5. 発掘（現地）調査の期間は、平成 28 年（2016）8 月 1 日～平成 28 年（2016）10 月 25 日まで実施した。
6. 発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制にて行った。

主任調査員 辻 広志  
調 査 員 村尾政人  
補 助 員 千喜良 淳、廣本広美  
整 理 員 千喜良淳、長林 大、河野凡洋、加藤麻里、川端佳子、嶋本広行、廣本広美、森 直美、  
菟場育美、谷口有紀子、大橋裕子、小林郁也、花井晶子  
作 業 員 株式会社アート
7. 発掘調査は辻、村尾が、整理作業は辻、河野、千喜良、廣本、花井、小林が主に担当した。
8. 遺構の写真撮影は辻、村尾が、遺物の写真撮影・遺構番号の管理と遺物の取り上げは村尾が行った。
9. 本書の執筆は、第 1 章第 1 節、第 2 章第 2 節を村尾が、第 4 章第 1 節、第 2 節 1・2、第 5 章第 1～3 節を千喜良が、第 4 章第 2 節 3 を河野が、第 4 章第 3 節を高橋 敦（パリノ・サーヴェイ(株)）が、第 1 章第 2 節、第 2 章第 1 節、第 3 章第 1・2 節、第 5 章第 4 節とその他を辻が行った。編集は、辻の指示の下に花井、大橋、小林が行った。
10. 遺構図に使用した基準点水準点の設置（座標・水準測量）及び遺構平面図の作成は、テクノシステム株式会社が行った。
11. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができた。ご芳名を記して感謝の意を表します。

飯田 功、家崎孝治、伊藤淳史、内山和雄、馬瀬智光、川勝文男、桐山秀穂、渋谷善博、島津 功、  
関戸敏樹、園田和洋、武田 豊、谷口尚之、辻 康男、中本良治、新田和央、藤井尚夫、藤田秀臣、  
村田茂雄、宮本 博、持田 透、山田邦和、山本 琢、吉川義彦（五十音順）  
京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、  
京都府立京都学・歴史館資料課、（公財）京都市埋蔵文化財研究所、三菱地所レジデンス株式会社、

株式会社アクセス都市設計、三条油小路町内会、株式会社アート、テクノシステム株式会社、株式会社吉田生物研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社、野口計画管理株式会社、三星商事印刷株式会社、西近畿文化財調査研究所

## 凡 例

1. 遺構に使用した座標値は、世界測地系平面直角座標系VI（測量成果 2011）に基づいており、方位は座標北を北として表記し、本文中では単位の「m」を省略した。標高は、海拔高（東京湾平均海面高度）を使用し、本文中では「T.P.」を省略した。
2. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1994）に準拠した。
3. 使用地図は、25,000 分の 1 を「京都西南部」（国土地理院発行）より、2,500 分の 1 を「壬生」（京都市都市計画図）を調整して用いた。
4. 遺構図は、各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 20・40・75・80・100・150・200・300・400 分の 1 とした。
5. 遺物実測図は、各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 3 分の 1 とした。
6. 本書に収録した各資料の図は、本書の体裁に合わせて整えるために、それぞれ縮小拡大し加筆した。
7. 本書に収録した図・資料等の引用・参考文献、索引は、各章の本文末に纏めて掲載した。
8. 遺構番号は 001 に始まる 3 桁の通し番号とし、遺構の性格（種類・属性）は下記の呼称か略記号を遺構番号の後ろに付した。遺構番号は、建物、柵（塀）、自然河道、試掘トレンチを除き現地調査時のものをそのまま使用した。実測図・写真図版共に一致している。  
柵（塀）：SA、建物：SB、溝：SD、井戸：SE、路（小径）：SF、池：SG、土坑：SK、河道：SR、柱穴：P、不明遺構：SX
9. 出土遺物の年代については、下記の文献を主に使用した。

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要第 3 号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996 年

小森俊寛「京から出土する土器の編年的研究 - 日本律令的土器様式の成立と展開、7～19 世紀 -」京都編集工房 2005 年

750年頃	840年頃	930年頃	1010年頃	1080年頃	1180年頃	1270年頃	1360年頃	1440年頃	1500年頃	1580～90年頃	1660年頃	1740年代頃	1820年代頃
京II期 (京都I期)	京III期 (京都II期)	京IV期 (京都III期)	京V期 (京都IV期)	京VI期 (京都V期)	京VII期 (京都VI期)	京VIII期 (京都VII期)	京IX期 (京都VIII期)	京X期 (京都IX期)	京XI期 (京都X期)	京XII期 (京都XI期)	京XIII期 (京都XII期)	京XIV期 (京都XIII期)	京XV期 (京都XIV期)
古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中
新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新

なお、「小森編年京〇期」の記載については、「京〇期」と略して使用した。

10. 「本能寺」の名称については、今日まで存続している寺院（寺町通御池下ル下本能寺前町）であり、旧跡は元本能寺、旧本能寺などと記載するのが本来ではあるが、「本能寺の変」という大事件との係わりもあり、これまでどおり「能」の字の表記（正確には「能」の字）も含め、本書ではこれまでどおり「本能寺」の呼称を用いる。
11. 本書では、室町時代末期から安土桃山時代を、便宜上「戦国時代」と呼称する。

# 本文目次

巻頭カラー

例言 / 凡例 / 目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	4
第2章	位置と歴史的環境	6
第1節	位置	6
第2節	歴史的環境	6
第3章	遺構	13
第1節	基本層序と遺構面	13
1.	基本層序	13
2.	遺構面	15
第2節	遺構	27
1.	遺構の概要	27
2.	第1期の主要遺構	27
3.	第2期の主要遺構	27
4.	第3期の主要遺構	29
5.	第4期の主要遺構	33
6.	第5期の主要遺構	37
7.	第6期の主要遺構	37
8.	第7期の主要遺構	41
9.	第8期の主要遺構	46
10.	第9期の主要遺構	53
11.	第10期の主要遺構	54
12.	第11期の主要遺構	56
13.	第12期の主要遺構	57
14.	第13期の主要遺構	59
15.	第14期の主要遺構	59
16.	第15期の主要遺構	61
17.	第16期の主要遺構	64
18.	第17期の主要遺構	66
第4章	遺物	69
第1節	遺物の概要	69
第2節	出土遺物	70
1.	包含層出土の土器	70
2.	遺構出土の土器	71

3. 包含層及び遺構出土の瓦	86
第3節 井戸 088SE 井戸枳材の樹種同定	91
はじめに	91
1. 試料	91
2. 分析方法	91
3. 結果	91
4. 考察	91
第5章 総括	93
第1節 井戸 303SE、土坑 322SK、池状遺構 588SX の遺物組成	93
1. はじめに	93
2. 遺物組成について	93
第2節 八角形井戸 088SE についての一考察	96
1. はじめに	96
2. 八角形井戸 088SE について	96
3. 平安京城での類例	97
4. 八角形井戸 088SE と縦板組井戸の特徴	99
第3節 半地下式土坑 158SK についての一考察	101
1. はじめに	101
2. 半地下式土坑 158SK について	101
3. 半地下式土坑の類例	102
4. 半地下式土坑の分類	105
5. まとめ	106
第4節 「本能寺城」の範囲と遺構の変遷	113
1. 「本能寺城」の範囲	113
2. 遺構の変遷	113
3. まとめ	130

遺物観察表・図版  
抄録 / 奥付

## 挿 図 目 次

図 1 調査地位置図 1 (1:500,000)	1	図 17 北壁 1 断面図	20
図 2 調査地位置図 2 (1:2,500)	1	図 18 東壁 1 断面図	21
図 3 平安京条坊復元図における調査地の位置 (1:40,000)	2	図 19 北壁 2 断面図	22
図 4 試掘トレンチと調査実施範囲	3	図 20 東壁 2 断面図	23
図 5 2Tr 平面図・断面図	3	図 21 第 1 遺構面	24
図 6 地区割と壁面位置図	4	図 22 第 2 遺構面	25
図 7 南区調査風景 (東から)	5	図 23 第 3 遺構面	26
図 8 北区調査風景 (北から)	5	図 24 土坑 537SK	29
図 9 北区調査風景 (北から)	5	図 25 湧水導水遺構	30
図 10 現地説明会風景 (東から)	5	図 26 井戸 303SE	31
図 11 調査地の四行八門割図	7	図 27 井戸 088SE	32
図 12 条坊と周辺調査地の位置図 (1:2,500)	11	図 28 辻子 699SF・側溝 643SD	34
図 13 西側・拡張区北壁断面図 1	16	図 29 町屋建物 771SB~774SB・ 柵 (塀) 767SA~769SA	35
図 14 西側・拡張区北壁断面図 2	17	図 30 土坑 076SK	36
図 15 南壁断面図 1	18	図 31 土坑 100SK	36
図 16 南壁断面図 2	19		

図 32	町屋建物 761SB ~ 765SB、 柵 (塀) 775SA・776SA	39	図 60	出土遺物 2	73
図 33	土坑 113SK・土坑 114SK	40	図 61	出土遺物 3	75
図 34	土坑 521SK	41	図 62	出土遺物 4	78
図 35	町屋建物 745SB ~ 749SB・ 柵 (塀) 766SA・半地下式土坑 158SK	42	図 63	出土遺物 5	79
図 36	柵 (塀) 766SA	43	図 64	出土遺物 6	81
図 37	半地下式土坑 158SK	45	図 65	出土遺物 7	83
図 38	土坑 115SK	46	図 66	出土遺物 8	85
図 39	町屋建物 754SB ~ 759SB	48	図 67	出土瓦 1	86
図 40	土坑 085SK	49	図 68	出土瓦 2	87
図 41	土坑 160SK	49	図 69	出土瓦 3	88
図 42	土坑 109SK	50	図 70	出土瓦 4	89
図 43	土坑 322SK	52	図 71	出土瓦 5	90
図 44	溝 598SD	54	図 72	分析試料 (木材)	92
図 45	溝 598SD・溝 566SD・土坑 597SK・ 土坑 606SK	54	図 73	八角形井戸 088SE	96
図 46	溝 351SD セクション 1	55	図 74	八角形井戸 088SE 井戸枠材	97
図 47	溝 351SD セクション 2	55	図 75	井戸 137	97
図 48	土坑 075SK	56	図 76	井戸 57・井戸 58	98
図 49	土坑 729SK	58	図 77	SE1・井戸 8	99
図 50	土坑 620SK・土坑 104SK	58	図 78	半地下式土坑 158SK	101
図 51	建物 752SB	60	図 79	半地下式土坑分類図 1	108
図 52	井戸 345SE	61	図 80	半地下式土坑分類図 2	109
図 53	柵 (塀) 750SA	62	図 81	半地下式土坑分類図 3	110
図 54	建物 751SB	63	図 82	半地下式土坑分類図 4	111
図 55	井戸 623SE	63	図 83	第 1 ~ 4 期遺構変遷図	115
図 56	土蔵 753SB	65	図 84	第 5 ~ 7 期遺構変遷図	116
図 57	その他遺構図 1	66	図 85	第 8 ~ 10 期遺構変遷図	117
図 58	その他遺構図 2	67	図 86	第 11 ~ 14 期遺構変遷図	118
図 59	出土遺物 1	70	図 87	第 15 ~ 17 期遺構変遷図	119
			図 88	文政 3 年 (1820) 「三条油小路町並絵図」 (『近江屋吉左衛門家文書』 (京都府立京都学・歴史館蔵)	128

## 表 目 次

表 1	周辺調査地一覧	9	表 3	出土遺物概要表	69
表 2	遺構変遷表	28	表 4	遺物観察表	131

## 図 版 目 次

図版 1	1 南区第 1 遺構面 全景 (東から)
図版 2	1 南区第 1 遺構面西側 全景 (東から) 2 同 673SK (北西から) 3 同 719SX・676SE・371SX (北から) 4 南区第 1 遺構面東側 306SD・023P (北から) 5 南区第 1 遺構面 029SX (南から) 6 同 371SX (南西から) 7 同 029SX レンガ造りカマド (南から)
図版 3	1 南区第 2 遺構面 全景 (西から) 2 同 全景 (東から) 3 南区第 1 遺構面西側 397SK (南西から) 4 南区第 2 遺構面西側 351SD・374SK 他 (北から) 5 同 351SD・391SK 他 (南から) 6 同 351SD・405SK 他 (南西から) 7 同 351SD・322SK 他 (北東から)
図版 4	1 南区第 3 遺構面東側 301SK・312SK 他 (北から) 2 同 691SK・680SK・314SK 他 (北から) 3 同 314SK・316SK (北から) 4 同 311SK・316SK・733SK・310SK・318SK 他 (北から) 5 同 305SK・302P 他 (南から) 6 同 306SK・307SK・308SK・351SD 他 (南から) 7 同 314SK・315SK・316SK・733SK 他 (南から) 8 同 314SK・315SK・316SK・733SK・317SK・320SE 他 (南から)
図版 5	1 南区第 3 遺構面東側 314SK (北から) 2 同 314SK (南から) 3 同 320SE (南から) 4 同 674SE (北東から) 5 同 322SK (南西から)
図版 6	1 南区第 3 遺構面西側 391SK・351SD 他 (西から) 2 同 397SK 他 (南東から) 3 同 028SK・353SK 他 (南から) 4 同 334SK・354SK・405SK 他 (南から) 5 同 406SK・405SK 他 (南西から) 6 同 405SK・406SK・330SK・351SD 他 (南から) 7 同 321SK・404SK・320SE 他 (北から)
図版 7	1 南区第 3 遺構面西側 374SK・390SK 他 (北から) 2 同 372SK・355SK 他 (北から) 3 同 516SE・348SK 他 (北から) 4 同 405SK・346SK・354SK 他 (北から) 5 同 405SK・344SK・346SK 他 (北から) 6 同 405SK・330SK・345SK・344SK 他 (北から) 7 同 330SK・323SK・351SD 他 (北から) 8 同 422P・423P・407P・417P 他 (北西から)
図版 8	1 322SK 遺物出土状況 (南から) 2 同 東側細部 (北側から) 3 同 西側細部 (北側から) 4 同 断面 (西から) 5 同 完掘状況 (南西から)
図版 9	1 303SE 全景 (東から) 2 同 西側 縦板残存状況 (東から) 3 同 北側 縦板残存状況 (南から) 4 同 東側 壁面 (西から) 5 同 南側 縦板残存状況 (北から)
図版 10	1 北区第 1 遺構面 全景 (東から) 2 同 全景 (北から)

図版 11

- 1 北区第1遺構面 全景(東から)
- 2 同 西側遺構1 (南西から)
- 3 同 西側遺構2 (北西から)
- 4 同 東側遺構1 (東から)
- 5 同 東側遺構2 (南から)

図版 12

- 1 北区第1遺構面西側 053SD(西から)
- 2 同 678SK・586SK・802Tr(西から)
- 3 同 734SD 塩ビパイプ埋設溝(西から)
- 4 同 679SK レンガ造りカマド・718SK・672SK(西から)

図版 13

- 1 北区第2遺構面 全景(東から)
- 2 同 全景(北から)

図版 14

- 1 北区第3遺構面 全景(北西から)
- 2 同 全景(北東から)

図版 15

- 1 北区第3遺構面南側 部分景(東から)
- 2 同 中央 部分景(東から)
- 3 同 北側 部分景(東から)
- 4 同 東側 部分景(北西から)
- 5 同 北側 085SK(南東から)
- 6 同 北側 087SK・088SE 周辺遺構(北西から)
- 7 同 北側 094SK(北西から)
- 8 同 北側 077SK・078SK(北西から)

図版 16

- 1 北区第3遺構面北側 619SK(東から)
- 2 同 104SK・620SK(西から)
- 3 同 622SK・114SK(東から)
- 4 同 559SK・622SK(東から)
- 5 同 113SK・115SK・114SK 他(東から)
- 6 同 115SK・150SK 他(北西から)
- 7 同 623SE(南東から)
- 8 同 087SK(南西から)

図版 17

- 1 北区第3遺構面北側 729SK(南東から)
- 2 同 682SK・061SK(北から)
- 3 同 075SK・160SK(北西から)
- 4 同 061SK・160SK(北東から)
- 5 同 072SK・076SK(西から)
- 6 同 604SK(北から)
- 7 同 597SK・606SK 周辺(西から)
- 8 同 597SK・606SK(西から)

図版 18

- 1 北区第3遺構面南側 113SK・115SK 周辺(東から)
- 2 同 150SK(北東から)
- 3 同 587SK・150SK 他(東から)
- 4 同 587SK(東から)
- 5 同 728SE 北側(東から)
- 6 同 675SE 他(東から)
- 7 同 608SK 他(北から)
- 8 同 500SK 他(東から)

図版 19

- 1 北区第3遺構面南側 608SK・549SK 他(南西から)
- 2 同 608SK・550SK・548SK 他(南から)
- 3 同 543SK・542SK 他(南西から)
- 4 同 542SK・543SK(北東から)
- 5 同 543SK・516SE(南東から)
- 6 同 543SK・516SE(北西から)
- 7 同 543SK(西から)

図版 20

- 1 北区第3遺構面南側 593SK・672SK 他(北東から)
- 2 同 593SK・592SK(北東から)
- 3 同 586SK・581SK・592SK 他(西から)
- 4 同 503SK・603SK・672SK 他(西から)
- 5 同 617SD(南から)
- 6 同 617SD・537SK・527SK(北から)
- 7 同 617SD・521SK 他(南から)

図版 21

- 1 拡張区 全景(北から)
- 2 同 全景(南から)
- 3 同 全景(西から)
- 4 同 652SK 内出土石臼(東から)
- 5 同 650SP の根石(東から)

図版 22

- 1 半地下式土坑 158SK 全景(北東から)
- 2 同 全景(西から)
- 3 同 全景(北から)
- 4 同 柱穴 121P(北西から)
- 5 同 柱穴 117P(北から)

図版 23

- 1 088SE 八角形井戸枠検出状況(東から)
- 2 同 井戸枠内堀込後の状況(北から)
- 3 同 井戸内側面(南西から)
- 4 同 井戸枠内東側の状況(西から)
- 5 同 井戸枠内北側の状況(南から)
- 6 同 井戸枠内石敷(南上から)

図版 24

- 1 598SD 全景(北から)
- 2 同 全景(南から)
- 3 同 東溝(北から)
- 4 同 西溝(北から)
- 5 同 西岸東岸の杭跡(東上から)
- 6 同 分岐点の杭跡(東上から)

図版 25

- 1 588SX 全景(北西から)
- 2 770SR 自然河道(6-1層)と588SX(北東から)
- 3 588SX 全景(西から)
- 4 同 全景(東から)

図版 26

- 1 辻子 699SF 全景(北から)
- 2 辻子 699SF と柵(塀)766SA(西から)
- 3 辻子 699SF 上の柵(塀)766SA 開口部(東から)
- 4 辻子 699SF 舗装礫の断面(東から)
- 5 同 舗装礫撤去後の地山面(北東から)

図版 27

第1遺構面包含層(1~3)、第2遺構面包含層(5)、溝351SD(7)、溝604SD(13)、土坑589SK(23)、池状遺構588SX下層(33・34・36・38)、井戸303SE(39・42~46)

図版 28

井戸303SE(47・49~52・55・60・62)、土坑618SK(66・68・70)、土坑314SK(75)、井戸088SE(77・80)、土坑030SK(86)、土坑301SK(87)、土坑543SK(95)、土坑307SK(96・97・99)、半地下式土坑158SK(103)

図版 29

半地下式土坑158SK(105)、土坑556SK(109)、土坑406SK(110~122)、土坑334SK(123・124)、土坑114SK(129)

図版 30

土坑114SK(130~133)、井戸320SE(137・142・145・146)、土坑322SK(147~151・153~155・157・159~161・163)

図版 31

土坑322SK(171・172・174~176・180~182・184~188)、土坑330SK(190・192)、土坑619SK(194)、土坑652SK(195)、土坑368SK(196・198)、溝026SD(200・204・205)、土坑353SK(206)

図版 32

包含層(207~211)、土坑527SK(212)、井戸303SE(213~215・217・219・220)、土坑301SK(222)、土坑729SK(223)、土坑322SK(224)、柱穴068P(225)、井戸160SE(226・227)、土坑318SK(228)、土坑587SK(229)、土坑598SK(230)

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査に至る経緯は、京都市中京区三条通油小路下る三条油小路町 156 番他（図1・2）にて三菱地所レジデンス株式会社が計画し、株式会社アクセス都市設計が設計する集合住宅建設が予定されたことが発端となる。計画される建物は、約 860㎡の敷地に建築面積約 760㎡を測る 5 階建て建造物である。

今回の調査は、この集合住宅建設に伴う埋蔵文化財の記録保存を目的とした発掘調査で、周知の埋蔵文化財包蔵地である「平安京左京四条二坊十六町跡」・「本能寺城跡」（図3）を対象として行った。

さらに、これらの調査において、遺跡の性格をより詳しく知り得る成果の確保と歴史的な位置付けを行うと共に、当地の歴史教育の一助とすることを目的とした。

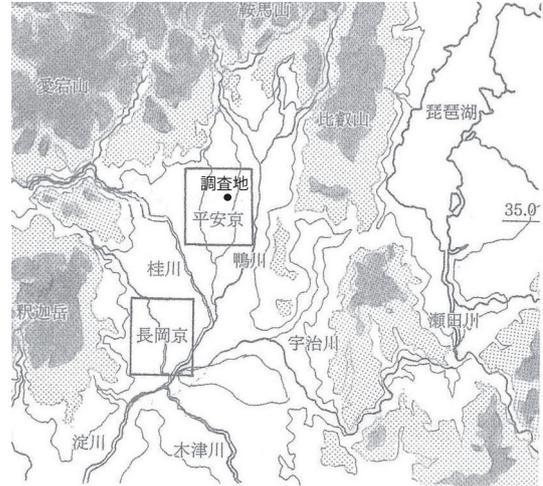


図1 調査地位置図1 (1 : 500,000)

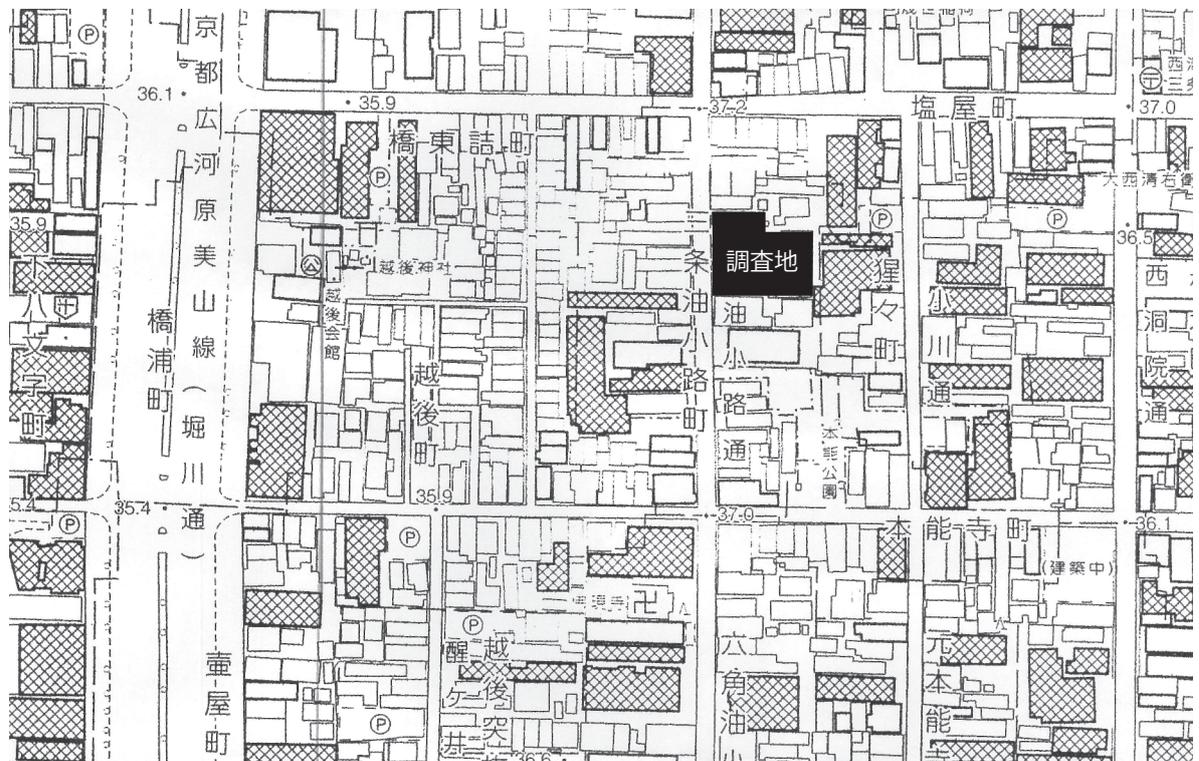


図2 調査地位置図2 (1 : 2,500)

当調査地の周辺では、平安京跡の三条から五条、一坊から三坊の近接した地域の調査や本能寺城跡に伴う調査の成果がある。平安京跡の調査例は、当調査地から北側へ約 200m 地点の三条二坊六町、三条二坊九・十町、南側に隣接する四条二坊十五町、南西側へ約 200m の四条二坊六・十一町、南東側へ約 200m の四条三坊七・九・十町、南東側へ約 600m の五条三坊十一町の調査成果がある。

平成 28 年 4 月 19 日に京都市文化財保護課は、これらの状況を踏まえて、建造物建設に伴う開発地域の遺構・遺物の有無、残存状況を把握するための試掘調査を行った。

試掘調査は、調査対象地に 1Tr～4Tr の 4 本のトレンチが設定 (図 4) された。

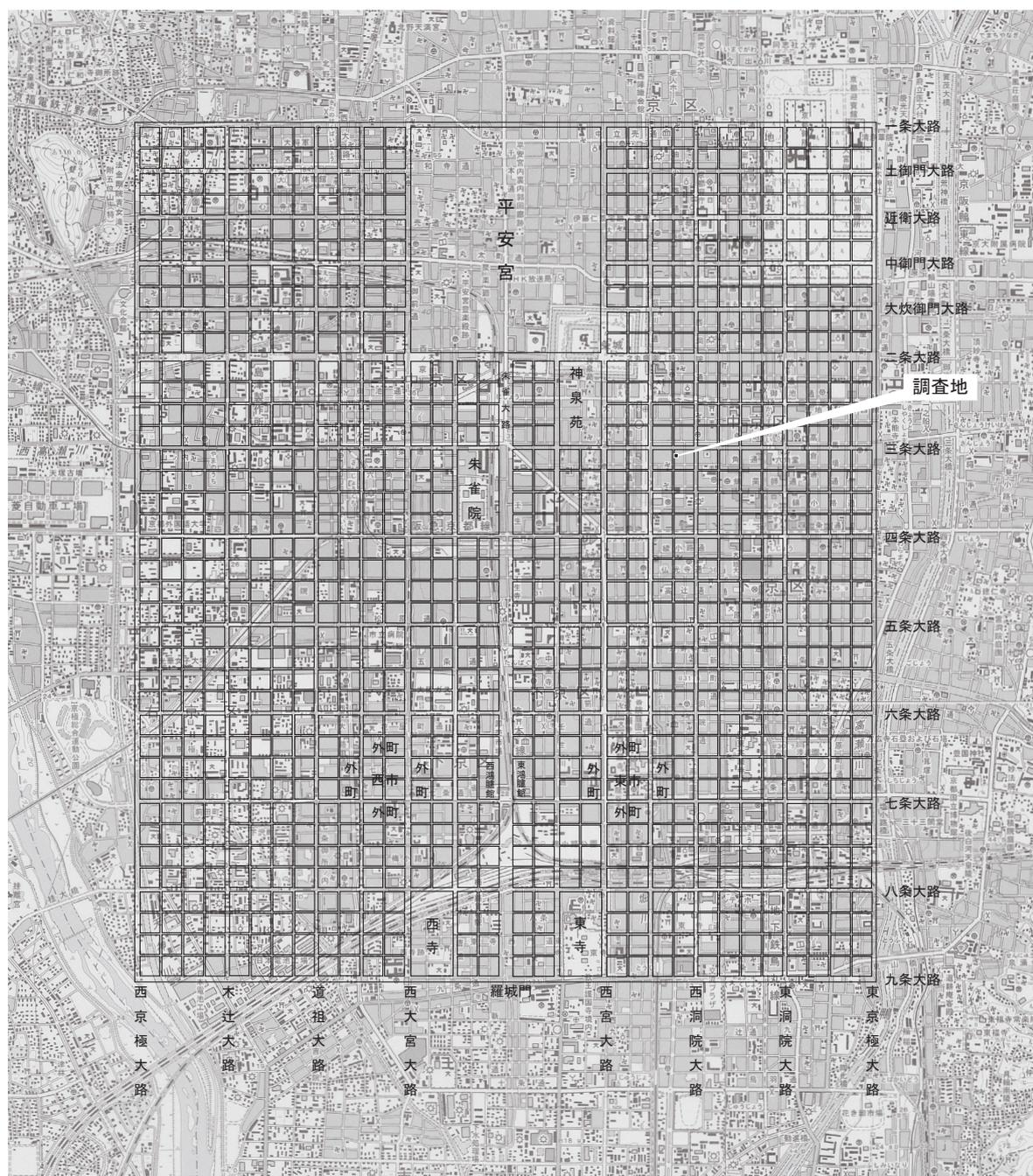


図 3 平安京条坊復元図における調査地の位置 (1 : 40,000)

調査地は駐車場用地や組合事務所として活用される以前、染物工場として利用されていたため、既存建物の基礎等の攪乱によって遺構が失われている可能性が予測された。1Trは北側にて東西方向の全域を把握するために設置されたトレンチである。西側と中央に大きな攪乱があり、明確な遺構は確認されていないが、灰黄褐色泥砂層の近世盛土と褐灰色泥砂層の遺物包含層と遺構残存部が検出されている。遺構までの深度は、浅いところで約1mを測る。2Tr(図5)

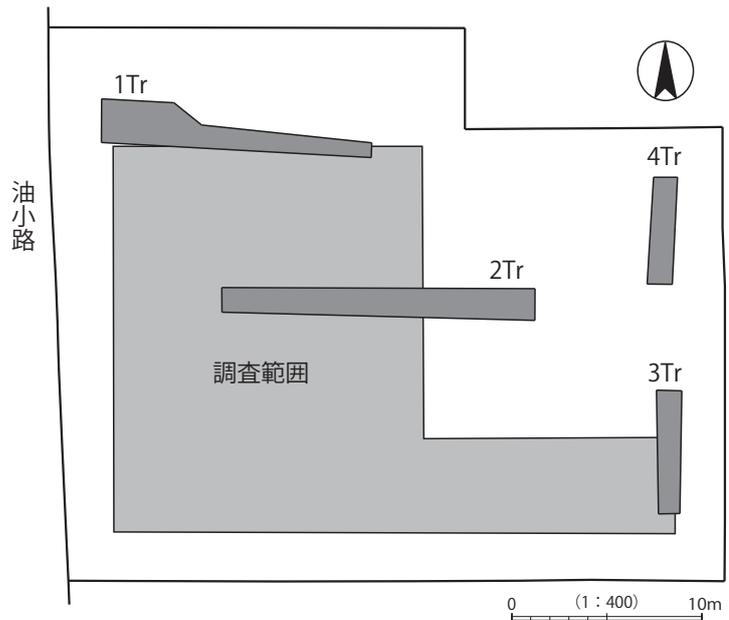


図4 試掘トレンチと調査実施範囲

は中央に設置されたトレンチである。東側の3分の1は大きな攪乱によって削平を受けており、遺構の残存は望めないことが判明している。西側は表土から約1.5m下位で黒褐色泥砂層の近世、中世の整地層と灰オリーブ色泥砂層の近世・中世の包含層、土坑、溝が確認されている。3Trは北東側に設置された小型のトレンチである。当トレンチでは黒褐色シルト層の中世盛土、明黄褐色シルトの地山が確認されている。顕著な遺構は確認されていないが、良好な残存状況を示しているものと考えられた。4Trにおいては黒褐色泥砂層の近世盛土、暗灰黄色泥砂層の中世盛土が確認されている。南側には表土から約1m下位にて褐灰色泥砂層の大型の土坑が3基検出されている。

試掘の結果、当地には中世から近世にかけての多くの盛土と遺構、遺物包含層の存在が明らか

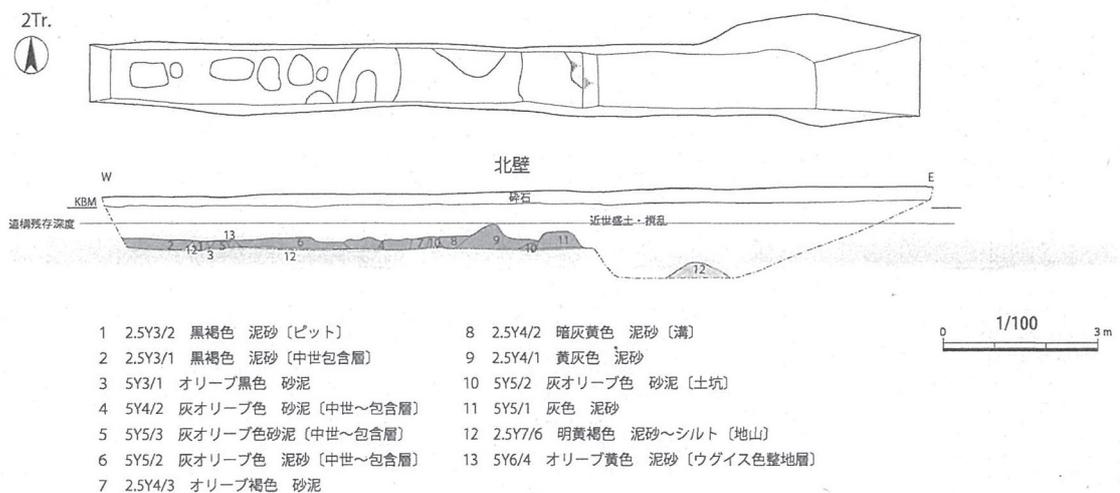


図5 2Tr 平面図・断面図

となった。個々の遺構の規模、形状などの詳細な性格は不明であったが、中世～近世の遺構が良好な状態で存在していることが判明した。また、大きな攪乱を受けているものの、表土から約1.5m内で地山が検出され、遺構を確認できたことから、本調査の実施に関わる判断材料を得ることができた。

これらの成果から、発掘調査の必要性が生じたため、建造物を設計する三菱地所レジデンス株式会社と京都市文化財保護課との間において調査の事前協議が持たれた。その結果、調査範囲は建物が計画されている敷地範囲に東西長16m×南北幅20mと、南辺側を幅5mにて東側へ13m突出させた、L字状の調査区(図4)が設定された。

発掘調査は京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化財保護課の指導を受け、三菱地所レジデンス株式会社より委託を受けた国際文化財株式会社西日本調査室が発掘調査を行うことになった。

## 第2節 調査の経過

発掘調査は、掘削土の搬出が不可能であるため、調査範囲を南区(東西29m×南北5m)と北区(東西16m×南北15m)に二分し、反転して調査を進めた。

地区割は、世界測地系平面直角座標系VI(測量成果2011)に基づく調査区の北西角を原点(X=-110,000m、Y=-22,485m)とする5mメッシュである。地区割の呼称(図6)は東方向にA～Gのアルファベットを、南方向に1～5の数字を用いて標記した。

壁面及び壁面図の呼称は、図6に示した。

発掘調査の経過概要については、下記の通りである。

調査の準備工は、施主側との着手打合せと位置出しを平成28年(2016)7月26日に行い、重機搬入、事務所等の設置、仮設電気水道等の敷設、基準杭の設置を7月31日までに終了した。

現地調査の開始は、平成28年(2016)8月1日に京都市文化財保護課による調査範囲の位置確認後に、南区より重機による表土掘削を開始した。今回の調査における遺構検出面は、試掘調査の成果を取り入れ、各区共に3面の遺構面(第1～3遺構面)について調査を行った。両区共に染物工場であった時の中型・大型の井戸やレンガ造り

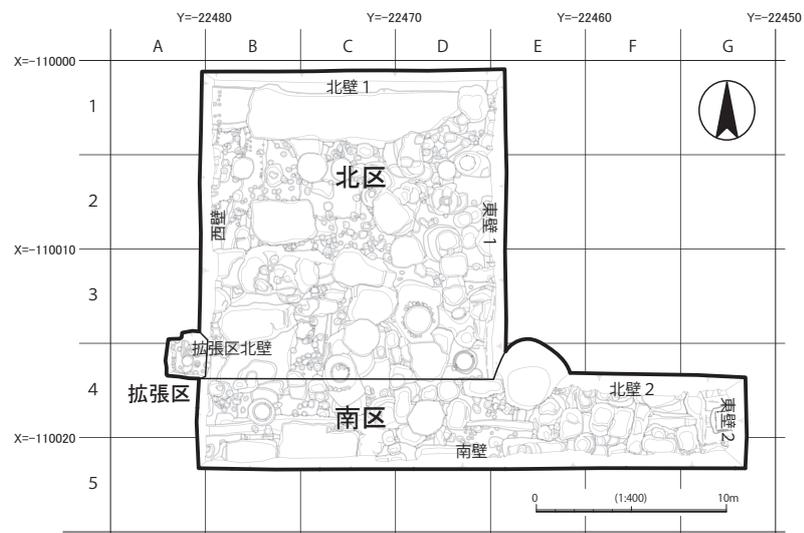


図6 地区割と壁面位置図

のカマド、漆喰やモルタル造りの洗い場やカマドの焚口等が残り、調査区中央部が広範囲に攪乱を受けていた。さらに、北区北側の組合事務所跡の下も大きな攪乱坑となっていた。南区の第1遺構面は8月5日に、第2遺構面（図7）は8月10日に、第3遺構面は8月31日に全景写真撮影と測量を終了し、翌日の9月1日に埋め戻しを行った。

北区は、9月2日より表土掘削を開始した。第1遺構面は9月9日に、第2遺構面（図8）は10月6日に、第3遺構面（図9）は京都市文化財保護課による最終段階確認を10月17日に受け、この時に指示のあった油小路東側溝の位置確認を目的とした拡張区を10月21日に新たに設け終了した。10月24日・25日には埋め戻しを行い、平成28年（2016）10月25日に施主側の確認を得て現地調査を全て終了した。

なお、この間の10月20日には、地元対象の現地説明会（図10）を開催し、約50名の市民と報道関係者の参加があった。また、翌日の10月21日には検証委員会の同志社女子大学教授山田邦和氏の来跡があった。

撤去工は、翌日の10月26日から重機・発掘資材等の搬出を行った。その後、11月25日まで出土遺物の1次整理を現場事務所にて継続して行い、作業を終了した。11月28日・29日に事務所・仮設電気水道等の搬出撤去を行った。整理調査は、伏見の整理事務所を中心に実施した。



図7 南区調査風景（東から）



図8 北区調査風景（北から）



図9 北区調査風景（北から）



図10 現地説明会風景（東から）

## 第2章 位置と歴史的環境

### 第1節 位置

調査地は、京都盆地中央の沖積地であって、現在の行政区分では京都市中京区三条通油小路下の三条油小路町156番他に位置する。京都盆地の場合、淀川水系の支流河川は大きく三つに分けられる。盆地東側を高野川と賀茂川が合流し南流する鴨川、盆地西端を丹波高地を水源とし西南部に流れる桂川、右京の紙屋川・御室川等の桂川に合流する小河川群から成る。流域面積は、鴨川が約6割を占めて最も大きく、桂川は1割にも満たない。この河川の洪水氾濫に伴う土砂供給の繰り返しによって形成されたのが、現在の京都盆地である。調査地の地形分類<sup>1)</sup>は、鴨川が作った南西傾斜の完新世段丘面（段丘面Ⅲ）上の扇状地帯に所在する。この地形面では、縄文時代晩期までの遺構や河川が検出されている。調査地周辺の微地形は、小川通から東は西洞院通に約0.4～1.0m下がり、新町通から西も西洞院通に約2.3～3.1m下がり、西洞院通を流れる西洞院川に流下する南北の細長い谷状の低地を形成している。さらに油小路通から西は堀川通（堀川）に約1.1～1.7m下がっている。第3遺構面地山層上面の標高は、凡そ北東端が標高36.2m、南東端が標高36.1m、北西端が標高36.1m、南西端が標高36.1mであり、攪乱による削平はあるものの調査地が緩やかな南西傾斜の地であったことを示すものである。

### 第2節 歴史的環境

調査地の平安京跡内での条坊呼称は、左京四条二坊十六町（図3）に位置し、調査地は北を三条大路、東を西洞院大路、西を油小路、南を六角小路に囲まれた北西部にあたる。また、四行八門制（図11）においては、西一行の北二～四門と、西二行の北二～四門の西側が、今回の調査地に相当すると考えられる。

左京四条二坊十六町の平安期に所在した諸邸宅等<sup>2)</sup>は、12世紀初頭に下野守藤原為元の邸宅が存在していたことが記されている（『今昔物語集』巻二九）。また、長寛元年（1163）に六角大宮から起こった火災によって、四条二坊の北側半分が焼失し、検非違使別当（大理）藤原顕長邸宅の南車宿などが罹災している（『清辨眼抄』）。12世紀後半には大納言藤原実定の邸宅（『春日権現験記絵』）があり、藤原実国が同居していた。安元三年（1177）の太郎焼亡により、実定の邸宅は全焼している（『清辨眼抄』）。なお、当町の周辺には現在多くの染色業を営む家々がみられるが、その起源は宮本武蔵との決闘で有名な吉岡憲法が西洞院四条にて家伝の染物業<sup>3)</sup>を開業したことに始まると伝えられている。

当調査地の南側である左京四条二坊十五町では、平安時代後期の11世紀末から12世紀初頭にかけて太政大臣藤原実季の四条坊門亭が所在していた（「東京図」『拾芥抄』）とされているが、

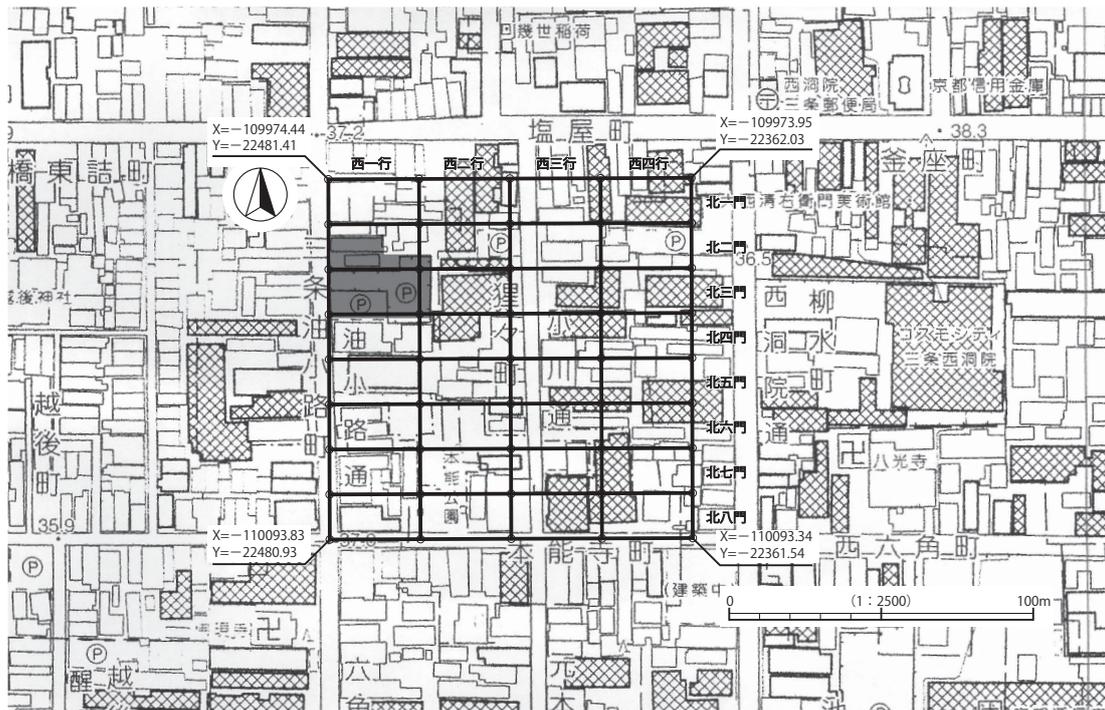


図 11 調査地の四行八門割図

この邸宅は寛治八年（1094）に火災に遭い、倉三棟が焼失し、宝物財貨の多くが灰となったことが記載されている（『中右記』寛治八年（1094）五月十六日条）。また、この町の北東角は12世紀中葉に藤原某女の所有地であったこと（『平安遺文』2700号）や、当町の西半分は建保五年（1217）に僧最賢から黒御前なる人物に譲渡されたことが記されている（『鎌倉遺文』2305号）。

調査地の油小路通西側に接する左京四条二坊九町では、10世紀末にこの町の東部に井戸があり、疫病が流行した際にこの「小井」の井戸水を飲めば病が治ると触れたため、民衆が殺到したとの記述（『日本紀略』『本朝世紀』正暦五年（994）五月十六日条）がある。『仁和寺所蔵古図』にはこの町に藤原泰武という人物が住んでいたとしている。また、この町の南西に位置する西二行北七門の一戸主は、土地売券によると11世紀末から摂津守藤原某→その子・周防守藤原公基→その未亡人・尼妙智→太皇太后宮権大進伊賀守藤原清家→僧頼禅→典薬史生清原市清の順で所有者が変わったと記されている（『平安遺文』1245・1294・1343・1344・1392号）。12世紀中葉、九町東部に左中将源雅道の邸宅があったが、天養元年（1144）の火災で焼失したことが記されている（『本朝世紀』天養元年三月二十二日条）。また、12世紀末に九町東部の南北一丈六尺、東西五丈七尺の清原行定（行貞）の宅地において、彼の死後に遺産相続争いが起こっている。（『鎌倉遺文』432・464～466・2256号）。

戦国期に調査地南側の十五町に所在した本能寺は、日本史上において最も著名な事件の一つである「本能寺の変」の舞台である。天正十年（1582）に明智光秀は、備中高松城の毛利勢と対峙していた羽柴秀吉の加勢を命じられ、丹波亀山の居城を夜半に発ち、老ノ坂を越え沓掛に至ったところで急遽軍勢を洛中に向ける。本能寺に無防備の状態で宿泊していた織田信長は、就寝中に1万3千の兵に攻撃され、自刃している。現在の法華宗本門流「本能寺」は寺町御池に所在

しているが、当地に建てられたのは「本能寺の変」の後に豊臣秀吉の都市改造によって洛中の寺院が寺町に集められ、天正十九年（1591）に再建されたものである。創建当初の本能寺は「本応寺」と号し、応永二十二年（1415）頃に開山の日隆によって油小路高辻と五条坊門の間に建立された法華宗の寺院であった。しかし、応永二十五年（1418）に日隆と妙本寺（現在の妙顕寺）月明との宗内対立により、妙本寺の教徒によって破却される。その後、永享元年（1429）に西陣の「内野」に再建される。永享五年（1433）には寺号を「本能寺」と改めて、六角以南・四条坊門以北・櫛笥以東・大宮以西に日承が建立した。天文元年（1532）には、浄土真宗本願寺門徒の入京の噂が広がり、武装した法華宗徒（町衆）と管領細川晴元や支配下の茨木長隆等が、山科本願寺を焼き討ちするなど、大規模な法華一揆が始まった。天文五年（1536）には、上総茂原妙光寺の法華宗徒であった松本新左衛門久吉が比叡山西塔の僧・華王房の説法を論破したこと、同年に日蓮宗が、「法華宗」を名乗ることを止めるように延暦寺が室町幕府に裁定を求め敗訴したこと、山門は京都法華衆の撃滅を決議し、天文法華の乱（天文法難）が勃発した。当事件は、延暦寺が敵対関係にあった他宗派の園城寺・東寺・興福寺・本願寺等への協力を取りつけ、六角定頼の援軍を加えて約6万の衆徒によって洛中洛外の法華宗の二十一本山を焼き払い、法華衆の3千とも1万ともいわれる人々を殺害したといわれる。さらにこの時に、法華寺院と町衆が集住する下京の全域と、上京も三分の一ほどが焼失した。その後、六角通・四条坊門通・油小路通・西洞院通に囲まれた四条二坊十五町の方一町の土地を土倉の沢村氏から天文十四年（1545）に購入した記録が『本能寺史料』『熊谷家文書』に残されている。そして天文十六年（1547）には、法華宗の帰洛が勅許され、本能寺が十五町に再興された。この本能寺は入洛した信長が宿所として接収し、「御殿」を普請して定宿として使われていたが、天正十年（1582）六月二日、「本能寺の変」によって焼失した。

本能寺城の位置<sup>4)</sup>については、今日までに二三の説がある。大きく分けると一町四方の規模を有する一町説と、南北方向に二町と東西方向に一町の規模を有する二町説である。本能寺の地名は、北部に本能寺町、中央に元本能寺町、南部に元本能寺南町として残り、その範囲は二町説を伺わせる。このため、京都市遺跡地図では、二町説を含めた広い範囲を周知の遺跡「本能寺城跡」としている。

一町説は寺地売券（権利書）に「本能寺、下京六角与四条坊門、油小路西洞院中間 方四丁町事、雖し為二沢村千松私領一相二副本証文数通一売渡候分明也」（『本能寺史料』（永禄十年）九月四日条）と記されていることから、西は油小路通、東は西洞院通、北は六角通、南は蛸薬師通であり、広さは約120m四方だったことが推測される。また、『洛中洛外図屏風（上杉本）』から推測すると、本能寺城の東側を南北方向に通る西洞院通東側と東西方向に通る四条坊門通南側に土塀が描かれており、西洞院通の中央にみられる川と四条坊門通南側の土塀と壕は防衛的な下京惣構を現したものと推測できる。絵図には寺域内の詳細な状況は描かれていないが、瓦葺と板葺建物各2棟と塀がみられる。

二町説は、江戸時代の国学者であった、森幸安によって作成された絵図が発端と考えられてい

る<sup>5)</sup>。位置は南北方向に約 240m の長辺を有する十五・十六町の二町を対象としたものである。時期は江戸時代中期の宝暦三年（1753）である。その絵図は京都の様相を復元した『中古京師内外地図』<sup>6)</sup>と『中昔京師地図』<sup>7)</sup>の2枚があり、前者は平安時代から室町時代、後者は戦国時代を描いている。また、辻垣晃一・森洋久『森幸安の描いた地図』<sup>8)</sup>によると、成立年代は宝暦三年で、内容年代は応仁～天正とされる。これらの二町説は、後の『京都坊目誌』<sup>9)</sup>にも受け継がれ、十五町・十六町を対象とした「東西一町、南北二町」を本能寺としており、また、当地の地名も広範囲に本能寺町として登記される。現在もその地名は、本能寺町・元本能寺町、元本能寺南町がある。これらの中で最も古い地名は、寛永十四年（1637）に江戸幕府京都大工頭の中井家によって描かれた『寛永十四年洛中絵図』の中に記載されている「元本能寺南町」である。この絵図には小川通の東西側、蛸薬師通の南北側に掲載されているが、後の寛永十八年（1641）作成の『寛永十八年以前平安城街並図』には「七間ざいけ（在家）町」、宝暦十二年（1762）刊行の『京町鑑』には「元本能寺在家町」と改名している。このように森幸安が地図を編さんした18世紀前半では、本能寺の旧地をこえて本能寺の地名を冠する複数の町が存在したために、二町説が生まれたものと考えられる。

本能寺城跡内の発掘調査は、十五町の寺域にて①中央、②北東辺、③東辺、④南東辺の4箇所（図12・表1）が2007年と2012年に行われており、個々の調査においては、寺城の北辺、東辺、南辺が確認され、大きな成果が得られている。

寺域のほぼ中央で2007年に京都市文化市民局によって行われた調査<sup>10)</sup>では、平安時代中期の土坑や室町時代前期から後期の遺構が検出されている。本能寺城に該当する遺構面は2面検出され、遺構には本能寺城の建物と考えられる礎石を据えたと考えられる柱穴、土坑が検出され、焼土と共に焼けた瓦が出土しており、「本能寺の変」にて炎上したことを裏付ける重要な成果が得られている。

表1 周辺調査地一覧

番号	所在地	調査概要	参考文献
1	中京区小川通六角下元本能寺町	平安時代後期の井戸を検出。鎌倉時代から室町時代から水溜遺構検出。室町時代後期の土坑から本能寺の建物の一部を検出。	『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局、2008年
2	中京区西洞院通六角下池須町	平安時代前期の土坑跡、室町時代の土坑跡、掘立柱を検出。本能寺建立時の井戸、外堀と考えられる旧西洞院川を検出。軒丸瓦が出土。	『本能寺城跡 - 平安京左京四條二坊十五町 -』古代文化調査会、2012年
3	中京区西洞院通六角下池須町412	平安時代後期の井戸を検出。室町時代から安土・桃山時代の土坑、溝から鬼瓦、軒丸瓦、琥珀軸端、卒塔婆が出土。江戸時代の溝、土坑から国産施釉陶器、輸入陶磁器が出土。	『本能寺跡発掘調査報告書 平安京左京四條二坊十五町』関西文化財調査会、2008年
4	中京区西洞院通六角下池須町423-7	室町時代後期の溝から川跡、本能寺南限の濠を検出。安土・桃山時代から江戸時代の土坑、井戸を検出。	『平安京左京四條二坊十五町跡・本能寺城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2007-11、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2008年
5	中京区蛸薬師通油小路東入元本能寺南町	平安時代～室町時代の四條坊門小路路面・南側溝、平安時代の建物、ビット、土坑、井戸を検出。鎌倉時代～室町時代の建物、井戸、濠、石室、桃山時代～江戸時代の石垣、土蔵基礎を検出。	『平安京左京四條二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-5、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2003年

北東隅の調査 2<sup>11)</sup> は、2012 年に古代文化調査会によって行われた。調査成果としては当寺の建立された時期の井戸や外壕と想定される西洞院川が検出されている。当調査では、当地より約 16m 南側で行われた調査 3 で検出されている石垣を用いた内堀の続きが検出できるものと予測されていたが、堀の延長部分には堀と同時期の井戸が検出された。この予測外の結果から、堀の形状は当調査地の手前で西側に折れ曲がる新たな展開となった。また、「天」の字をへら書きした平瓦等の瓦溜りが出土しており、当地が本能寺城域内であることを証明している。

東辺の調査 3<sup>12)</sup> は、2007 年に関西文化財調査会によって行われた。調査では、本能寺城跡の東辺に関わる濠・構・石垣や西洞院川を埋め立てた整地層、焼けた瓦が発見されている。濠の中から出土した多量の瓦は、当寺が「本能寺の変」にて焼失した凄まじい状況を物語るものといえる。また、濠は石垣を有した堅固な造りであり、寺域の内側に位置することから、二重に構えた重装備であった可能性や、寺内の特定の建物を囲っていたことも推測される。これらの構を必要とした理由には、信長が単独で寺を城塞化したとする見解<sup>13)</sup> と、「天文法華の乱」があったので寺が単独で防衛のために城塞化したものであり、信長が築いたものにしては規模が小さいとの見解<sup>14)</sup> がある。

南東隅の調査 4<sup>15)・16)</sup> は、2007 年に（財）京都市埋蔵文化財研究所によって行われた。調査の結果、江戸時代後期の井戸 SE05、土坑 SK01 と江戸時代前期の土坑 SK03 が検出され、その遺構の基盤となる桃山時代の遺物包含層の直下にて旧西洞院川 SD12 を埋め、整地した固く締まった層より東西方向の濠 SD04（本能寺南濠）、小礎石、土坑 SK09・10、更に下位にて旧西洞院川 SD12 が検出されている。SD12 は当調査区において最下層にて検出した遺構面となり、室町時代前期以前の遺構は全てこの流路によって削平を受け、古く遡る遺構は検出されていない。また、調査地が狭かった関係から川跡の規模については不明であるが、当地より約 60m 北側の調査 3 地点でも同様の川跡を埋め立てた整地層が検出されていることから、旧西洞院川 SD12 は室町時代中期から安土桃山時代末頃までに幾度かの改修、整地によって西側が埋め戻されることで狭くなり、街路を宅地・耕作地化した巷所は東側へ拡張されて張り出す状態となっていたことが伺われる。この状況は『本能寺文書』の中にみられる「彼四町々同巷所等」の記述と一致し、「方四町、巷所」を含めて当寺が巷所化した可能性も考慮しておく必要がある。

また、2002 年に（財）京都市埋蔵文化財研究所が行った本能寺城南側の十四町（元本能寺南町）の調査 5<sup>17)</sup> では、四条坊門小路（蛸薬師通）の路面と濠とみられるみられる SD2000 を検出した。この SD2000 は、下京惣構の濠と考えられるものであり、その南側には『洛中洛外図屏風（上杉本）』に描かれる四条坊門南側に沿う土塀が存在していたものと考えられる。また、調査地は下京惣構跡に江戸時代前期に本田甲斐守（政朝）京邸があった所で、その一角から検出された土坑 SK2053 は、1620～1650 年頃に比定される造営時の廃材処理坑と考えられ、出土した多量の遺物は当時の武家屋敷の生活を知る好資料である。

このように、十五町の本能寺と本能寺城、十四町の下京惣構に関する調査例はみられるが、十六町での調査例はなく、今回の調査が初めてのものとなる。

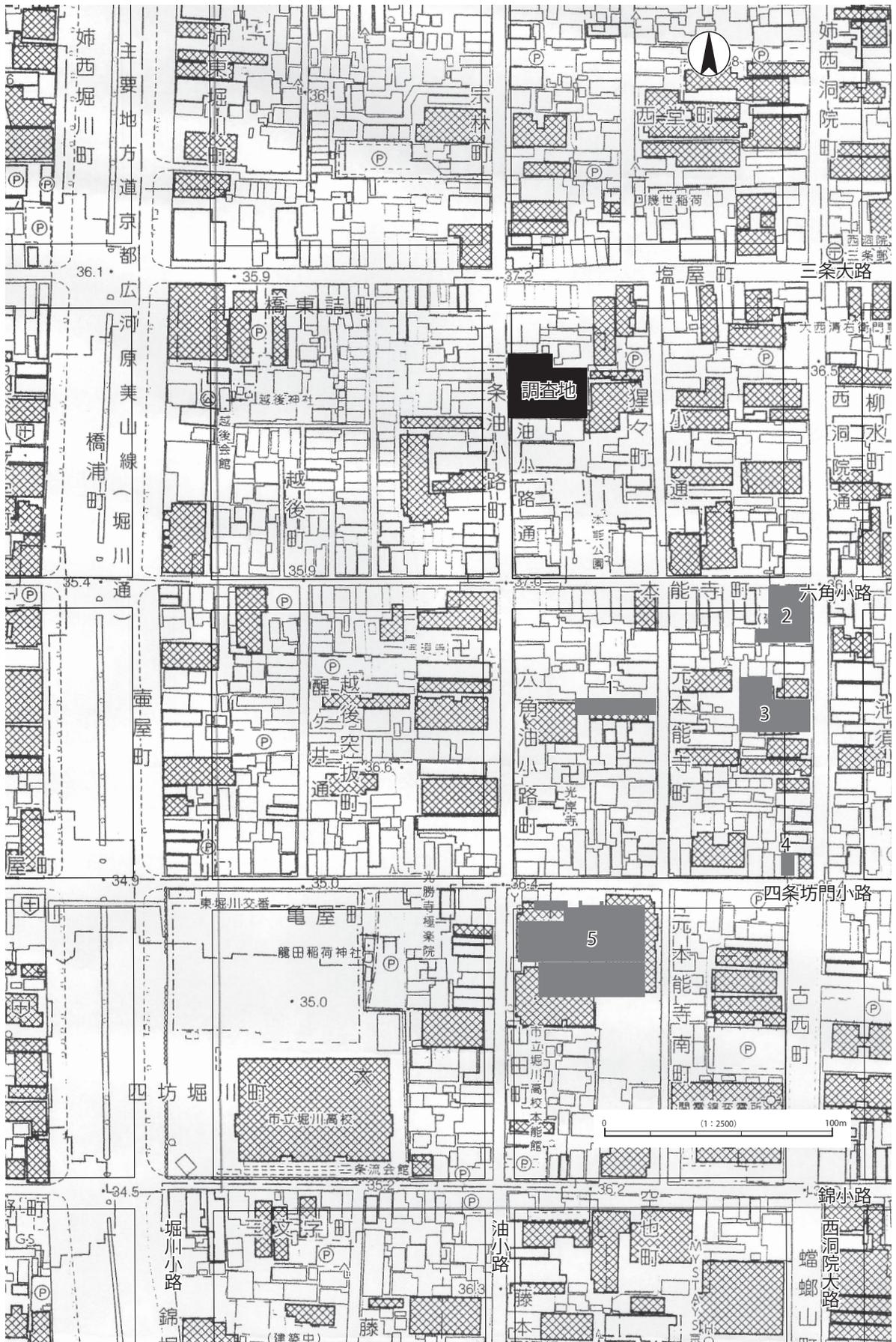


図 12 条坊と周辺調査地の位置図 (1 : 2,500)

<註、引用参考文献>

- 1) 河角龍典「歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化」『京都歴史災害研究』第1号、立命館大学歴史都市防災研究センター 2004年
- 2) 山田邦和「左京と右京」『平安京提要』古代学協会・古代学研究所 1994年
- 3) 吉岡憲法を開祖とする剣法の一門、家伝であった染物業「憲法染」。福住道祐『吉岡伝』1684年
- 4) 河内将芳「中世本能寺の寺地と立地について - 成立から本能寺の変まで」『立命館文学』609 2008年
- 5) 平尾雅幸「本能寺の変遷」『リーフレット京都』No.211、(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2006年  
平尾雅幸「本能寺 - 町名の変遷」『リーフレット京都』No.212、(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2006年
- 6) 森幸安『中古京師内外地圖』平安 - 安土桃山時代カ (901-1600) 寛延三年 (1750)
- 7) 『京都・激動の中世』京都文化博物館 1996年、森幸安『中古京師内外地図』『中昔京師地図』宝暦三年 (1753)
- 8) 辻垣晃一・森洋久『森幸安の描いた地図』臨川書店 2003年
- 9) 碓井小三郎編『京都坊目誌』上京之部乾上巻之六 - 十一 平安古考学会 1915年
- 10) 「平安京左京四条二坊十五町・本能寺城跡1」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 11) 家崎孝治『本能寺城跡 - 平安京左京四条二坊十五町』古代文化調査会 2012年
- 12) 吉川義彦『本能寺跡発掘調査報告 - 平安京左京四条二坊十五町』関西文化財調査会 2008年
- 13) 今谷明・国際日本文化研究センター「信長が寺を城塞化するために造った堀と推測する」
- 14) 西川幸治・京都大学名誉教授 (都市史)「天文法華の乱を経験した寺側が設けた防御施設」
- 15) 平尾政幸『平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 16) 山本雅和『「本能寺の変」を調査する』リーフレット京都No.231 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2008年
- 17) 平尾政幸ほか『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-5 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年

# 第3章 遺構

## 第1節 基本層序と遺構面

この第1節では、調査区全体の基本層序と検出した遺構面について、その概要を記す。

### 1. 基本層序

調査区全体の傾斜は、6層の地山層では自然河道と同じ北東から南西への傾斜であるが、表層では南北がほぼ水平で、東西は調査区東側で街路奥が標高37.6m、調査区西側の街路（油小路通）側が標高37.1mで、西側傾斜であった。

基本層序は、調査区を全周する6面と拡張区1面の壁面図（図13～20）から、1～6層に大別した。各層の概要は、下記の通りである。なお、各壁面図の1層は、層数が多いこと、壁面間の連続性が乏しいため、各壁面図内での層名とし、調査区全体を統合した同一の層名とはなっていない。

1層は、現代の駐車場整地層である1-1層（碎石）から、江戸時代前期の堆積層である。現況の1-1層下の厚さ0.3～0.4m間の薄層の多くは、漆喰叩床（三和土）とその整地層の互層から成るが、これらは「元治元年の大火」（1864）の火災処理土坑を切るもので、幕末・近代～現代の遺構である。油小路通より奥の調査地東側では、南壁1-11～14層のように江戸前期の洪水堆積層も残っていて、現状に近い街路（油小路通）側への前面排水の傾斜を作り出している。しかし、江戸時代の堆積層は、概して時間幅の割に堆積層の厚みが薄く、近現代の遺構に攪乱されて残りが悪い。

2層は、2-1層（灰黄褐色シルト質粗砂層）と2-2層（にぶい黄色シルト質粗砂層）から成り、南区南壁側ではこの二層間に2-1'層（暗灰黄色シルト質細砂層）が薄く介在する。これらの2-1・2層は土壌層で、2-1層が水田土壌もしくは畠土で、2-2層が水田土壌と考えられ、2-1'層は洪水堆積層である。堆積時期は、2-1層が京XI期中の16世紀中葉頃、2-2層が京X期中の15世紀後葉頃と推測される。この2-1層上面を、第1遺構面とした。

2-1層の層厚は、調査区全体に広く10～45cmの厚さで分布していて、拡張区においても20cm余りを確認できる。街路（油小路通）側の西壁では何れの地点においても2-1層しか確認できず、2-1'・2層は街路（油小路通）側よりも奥の東側に、それも南北に分布している。

2-1層上面の西壁南北方向の高さ（標高）は、攪乱が激しいが、その高さ（標高）は北西隅から南に3.3mで36.74m、11.5mに幅30～40cmの畦状高まりがあり、その手前で36.75m、頂部で36.8m、その2.8m南では36.75mと5cm余り落ちて、20.3mで36.77m、南西隅の高まりでは36.87mと再び10cm余り上がっている。中央の畦状高まりと南西隅の高まりとの距離は約10mで、その間は比較的的水平である。東壁1南北方向の高さ（標高）は、北東隅で36.85m、北

東隅から南に 2.4m で 36.74m、6.8m で 36.53m、北東隅に高まりが予想される。

これに対し東西方向である南壁の 2-1 層上面の高さ（標高）は、南西隅の高まりが 36.87m、南西隅より東に 13.1m で 37.04m と 17cm 余り落ち、さらに 16.2m で 37.06m、18.4m では 36.9m とやや下がり、25.7m では 37.0m と 10cm 上がる。北壁 1 の高さ（標高）は、北西隅より 3.9m で 36.42m、7.4m で 36.45m、7.9m に幅 40～50cm の畔状高まりがあり、頂部で 36.55m と約 10cm 上がり、9.5m では 36.48m と逆に 7cm 余り下がり、11.7m では 36.5m に、北東隅では 36.54m と僅かに上がる。さらに、北壁 2 の 2-1 層上面の高さ（標高）は、南区北東隅より 5.9m で 36.98m、8.7m で 36.92m と南壁とほぼ同じ数値の高まりとなっている。

2-2 層の層厚は、調査区の中央に南北に堆積するもので、南壁では最大 40cm の厚さを測る。

2-2 層上面の東壁 1 南北方向の高さ（標高）は、北東隅が 36.54m で、北東隅より南に 3.3m で 36.39m、6.8m で 36.37m と、北東隅の高まり以外は大きな変化は無く、ほぼ水平である。

2-2 層上面の南壁東西方向の高さ（標高）は、西壁側は存在しないが、南西隅より東に 13m で 36.7m、16.1m で 36.68m、18.7m で 36.64m、20.3m で 36.6m と僅かに上がっていて、南西隅より東に 24m 以内には見られなくなっている。

2-1' 層は、2-2 層の上に 2～7cm の厚みで自然堆積している。北壁 1 東西方向の高さ（標高）は、南壁同様に西壁側には存在しておらず、北西隅より東に 3.9m で 36.42m、6.4m で 36.4m、7.4m で 36.45m であったものが 7.9m では 36.55m まで上がって幅 50cm 余りの畦状の高まりを作り、9.5m では 36.5m、11.7m で 36.5m、北東隅では 36.54m と比較的レベルである。北西隅から東に 7.5～8.5m に区画（畦）が存在した可能性がある。また、南区 2 の壁面には、南壁東側と同様に 2-2 層は見られない。

3 層（黄褐色シルト質細砂層）は、調査区西壁側の街路（油小路）側のみで確認される層で、4 層の掘り込み層と考えられるが、堆積層の可能性もある。土壌化程度の高い層で、畠地土壌と考えられる。

4 層（暗灰黄色シルト質細砂層）も調査区の西壁側から北壁 1 側にかけて確認できる洪水堆積層で、土壌化程度の小さい層でその上面は締まりが強く、2-2 層・3 層上面と共に 4 層上面を第 2 遺構面とした。4 層の層厚は、10～50cm の厚みがあり、調査区の西側で厚い堆積となっている。4 層の堆積時期は、京 X 期中の 15 世紀後葉頃の堆積と考えられる。

3・4 層上面の西壁南北方向の高さ（標高）は、北西隅から南に 7.4m で 36.54m、9.5m で 36.6m、14.3m で 36.6m、15.7m で 36.64m と次第に 10cm 余り上がって高まりが見られ、17.4m では 36.53m と再び下がり、20m で 36.59m、南西隅で 36.6m と再び 7cm 上がる高まりが確認できる。

4 層上面の南壁東西方向の高さ（標高）は、南西隅から東に 1.4m までしか 4 層を確認できないが、南西隅の高さが 36.6m で東に 36.55m まで下がる、幅 0.5m 余りの畔状高まりを確認することができる。この 4 層の高まりが東側のどの付近まで広がっていたかは不明である。北壁 1 東西方向の高さ（標高）は、北西隅が大きく攪乱されて不明であるが、北東隅まで残る。北

西隅から東に 3.6m まで 36.22m、6.4m で 36.2m、8.5m で 36.17m と変化は少ないが、9.6m で 36.26m まで上がり、この付近に幅 0.6m 以上の畦状の高まりを想定でき、10.1m で 36.2m、13.6m で 36.34m、北東隅では 36.4m と北東隅でも高まりが見られる。

上層遺構の掘込が激しく正確さを欠くが、西壁の中央である北西隅から 12 ～ 15.6m 付近と南西隅、北壁 1 の中央である北西隅から 9.8m 付近と、北東隅に近い北西隅から 14 ～ 15.5m 付近に高い部分や段差があり、耕作地面の区画（畦）が存在した可能性がある。

5 層（灰黄色シルト質細砂層）は、平安京内で「平安時代後期に 11 世紀前半代の遺物を含むいわゆる「ウグイス土」で大規模な整地」<sup>1)</sup>が行われたと考えられている層である。しかし、堆積物の組成や固結状態、層理等から見るならば、扇状地帯の洪水初期にみられる溢流堆積泥土層と考えることができる。この 5 層についても、調査区の西壁側、北壁 1 側から東壁 1 側の一部に残るのみで、遺構面としての把握は困難であった。今回の調査区では遺物の出土はなかったが、これまでの調査成果から推測するならば、「11 世紀前半代」（京 V 期古・中）の堆積層と考えられる。

5 層上面の西壁南北方向の高さ（標高）は、残り少ない部分を繋いで見てみると、北西隅から南に 2.7m で 36.2m、7.3m で 36.2m、9.5m で 36.1m、19.8m で 36.3m、南西隅で 36.3m と、大きな落差は見られない。東壁 1 南北方向の高さ（標高）は、北東隅が 36.2m、南に 4.4m で 36.16m、6.8m で 36.2m と、これも大きな落差はない。

5 層上面の北壁 1 東西方向の高さ（標高）は、北西隅から東に 3.7m で 35.9m、8.2m で 36m、10.1m で 36m、12.4m で 36.14m、13.2m で 36.2m と次第に上がり、北東隅では 36.2m であった。緩やかな西～南西への傾斜であったと考えられる。

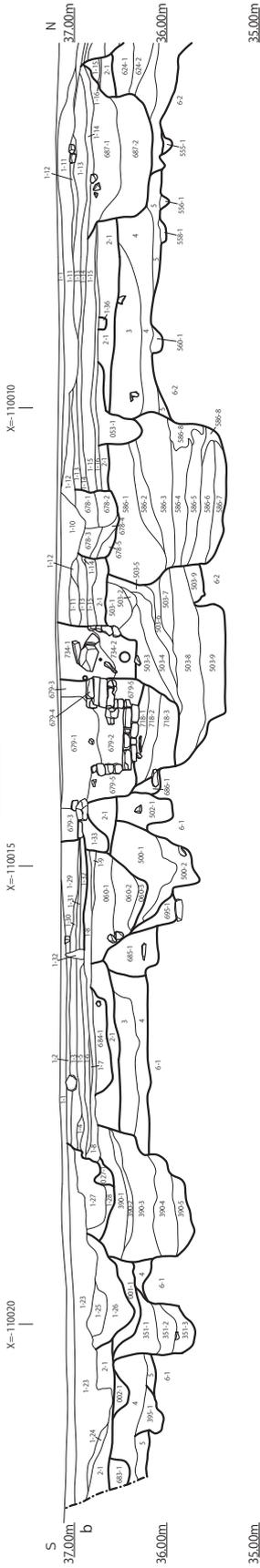
6 層は、地山層である。6-1 層（褐灰色シルト質細砂～粗砂層）と 6-2 層（明褐灰色シルト～シルト質細砂層）から成る。6-1 層は、6-2 層上を北東から南西に流れる時期不明（縄文時代カ）の自然河道 770SR の堆積物である。調査区内では幅 6 ～ 9m と最も大きな旧河道である。6-2 層は地山層で、完新世段丘面形成層<sup>2・3)</sup>である。6-1・2 層上面を、第 3 遺構面とした。

## 2. 遺構面

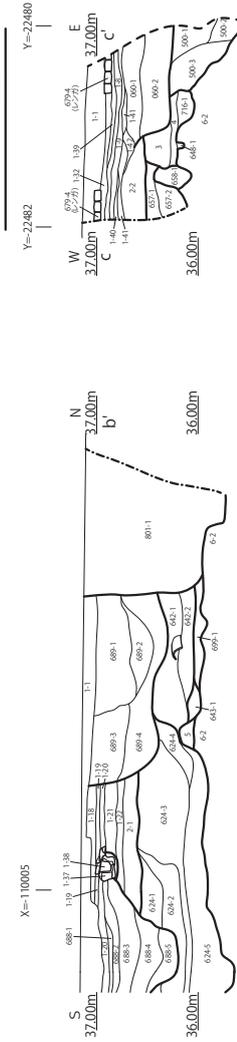
遺構面は、この基本層序の 2-1 層上面を第 1 遺構面（図 21）、2-2・3・4 層上面を第 2 遺構面（図 22）、6-1・2 層上面を第 3 遺構面（図 23）とする 3 面である。

しかし、各期の遺構面は、染色工場の窯場（レンガ造りのカマドと漆喰やモルタル造りの焚口）、井戸、洗い場などによる削平や盛土により著しく攪乱を受けており、層序は複雑で単一時期の遺構面として把握することは事実上困難であった。特に第 2 遺構面は、基本層序の 2-2・3・4 層上面の遺構であるが、多くの遺構が複雑に切りあっていること、2-2・3・4 層自体の残存率が悪いこともあり、北区の中央部の大部分とその東側にかけて、南区の北側では全く確認できず、第 3 遺構面の遺構と同時に調査を行った。このため、第 2 遺構面と第 3 遺構面の平面図には重複する遺構が多数みられる。

西壁



拡張区北壁



- 1-1 2.5Y5/1 黄灰色
- 1-2 10YR8/1 灰白色
- 1-3 2.5Y6/1 黄灰色
- 1-4 10Y8/1 灰白色
- 1-5 2.5Y8/1 灰白色
- 1-6 2.5Y4/1 黄灰色
- 1-7 10Y8/1 灰白色
- 1-8 2.5Y5/2 暗灰黄色
- 1-9 5Y7/1 灰白色
- 1-10 5YR6/1 褐灰色
- 1-11 2.5Y6/3 灰黄色
- 1-12 2.5Y6/2 灰黄色
- 1-13 10YR5/2 灰黄褐色
- 1-14 5YR5/6 明赤褐色
- 1-15 5YR4/1 褐灰色
- 1-16 10YR6/2 灰黄褐色
- 1-17 2.5Y4/1 黄灰色
- 1-18 2.5Y6/3 にぶい黄色
- 1-19 10YR5/2 灰黄褐色
- 1-20 5Y7/1 灰白色
- 1-21 2.5Y6/2 灰黄色
- 1-22 10YR6/2 灰黄褐色
- 1-23 2.5Y5/3 黄褐色
- 1-24 10YR6/2 灰黄褐色
- 1-25 10YR5/2 灰黄褐色

- 1-26 10YR6/2 灰黄褐色
- 1-27 2.5Y5/3 黄褐色
- 1-28 7.5YR8/1 灰白色
- 1-29 7.5YR7/1 明褐灰色
- 1-30 10Y8/1 灰白色
- 1-31 7.5YR3/1 黒褐色
- 1-32 10Y8/1 灰白色
- 1-33 10YR5/1 褐灰色
- 1-36 5Y7/1 灰白色
- 1-37 5Y8/4 淡黄色
- 1-38 2.5Y6/3 にぶい黄色
- 1-39 7.5YR7/2 明褐灰色
- 1-40 2.5Y6/1 黄灰色
- 1-41 2.5Y6/6 明黄褐色
- 1-42 2.5Y6/2 灰黄色
- 2-1 10YR5/2 灰黄褐色
- 2-2 2.5Y6/3 にぶい黄色
- 3 2.5Y5/3 黄褐色
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色
- 5 2.5Y6/2 灰黄色
- 6-1 7.5YR6/1 褐灰色
- 6-2 7.5YR7/1 明褐灰色

1-1 碎石

1-2 漆喰

1-3 砂礫 (φ~1cm) 混じりの細砂質シルト

1-4 漆喰

1-5 漆喰

1-6 細砂質シルト

1-7 漆喰

1-8 漆喰片・煉土を含むシルト質細砂

1-9 漆喰

1-10 砂礫 (φ~6cm) ・土管片・瓦片・煉土塊を含むシルト質粗砂

1-11 シルト質粗砂

1-12 砂礫 (φ~2cm) を多量に含むシルト質粗砂

1-13 煉土塊を含むシルト質粗砂

1-14 煉土塊を多量に含むシルト質粗砂

1-15 煉土塊・炭を多量に含むシルト質粗砂

1-16 シルト質粗砂

1-17 砂礫 (φ~1cm) ・炭を多く含むシルト質粗砂

1-18 煉土塊を含むシルト質粗砂

1-19 煉土塊を含むシルト質粗砂

1-20 漆喰

1-21 シルト質細砂

1-22 シルト質粗砂

1-23 砂礫 (φ~6cm) を多量に含むシルト質粗砂

1-24 シルト質細砂

1-25 砂礫 (φ~5cm) ・瓦片・煉土塊・土管を含むシルト質粗砂

砂礫 (φ~3cm) ・土器小片を含む粗砂~細砂質シルト

砂礫 (φ~17cm) ・煉土塊・漆喰片・炭を含むシルト質細砂

砂礫 (φ~18cm) を多量に含むシルト質細砂

砂礫 (φ~2cm) シルト質粗砂

漆喰

煉土塊・炭を含むシルト質粗砂

砂礫 (φ~1cm) ・漆喰片を含むシルト質細砂

漆喰

漆喰

煉土塊を含むシルト質粗砂

砂礫 (φ~3cm) ・煉土塊を多く含むシルト質粗砂

砂礫 (φ~6cm) ・煉土塊を含むシルト質粗砂

煉土塊を含むシルト質粗砂

砂礫 (φ~15cm) 混じりのシルト質粗砂

砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト質粗砂

砂礫 (φ~8cm) 混じりのシルト質粗砂

砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト質粗砂

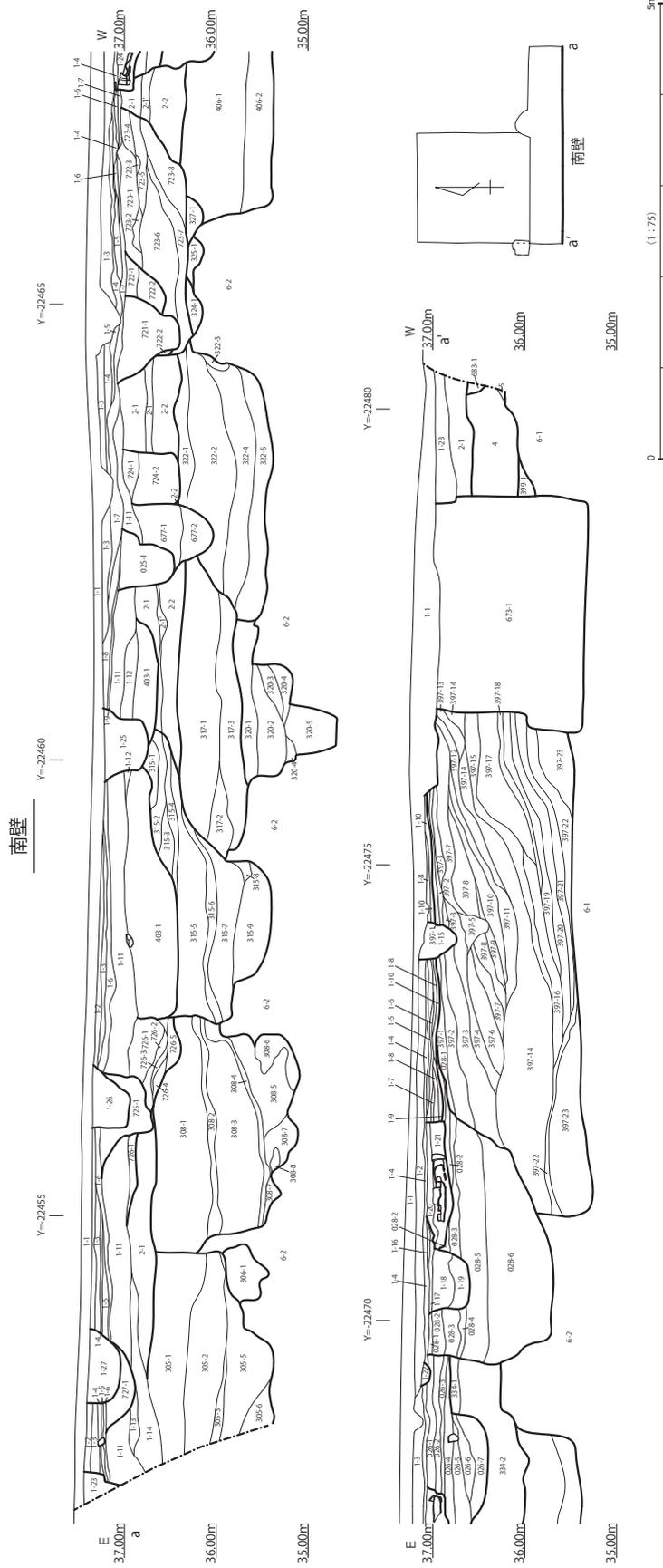
砂礫 (φ~3cm) を多く含むシルト質粗砂

シルト質極細砂~粗砂

図 13 西壁・拡張区北壁断面図 1

683-1	2.5Y5/3	黄褐色	砂礫 (φ~6cm) 混ざりのシルト質細砂	053-1	10YR4/1	黄灰色	目録を含むシルト質粗砂
001-1	2.5Y5/3	黄褐色	砂礫 (φ~3cm) ・土器小片を含むシルト質細砂	586-2	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫 (φ~9cm) を多く含むシルト質粗砂
002-1	2.5Y5/3	黄褐色	砂礫 (φ~6cm) 混ざりのシルト質細砂	586-1	2.5Y5/1	灰色	砂礫 (φ~2cm) ・地山塊を含むシルト質粗砂
395-1	2.5Y6/1	黄灰色	砂礫 (φ~9cm) 混ざりのシルト質中砂~細砂	586-3	10YR4/1	褐灰色	砂礫 (φ~6cm) 混ざりのシルト質粗砂
351-1	2.5Y6/4	にぶい黄色	砂礫 (φ~14cm) ・炭・土器小片を含むシルト質細砂	586-4	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫 (φ~4cm) ・地山塊を含むシルト質粗砂
351-2	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫 (φ~7cm) ・土器小片を含むシルト質中砂~細砂	586-5	2.5Y6/1	黄灰色	砂礫 (φ~4cm) ・地山塊を含むシルト質粗砂
351-3	2.5Y4/1	黄灰色	砂礫 (φ~9cm) ・土器小片を含む細砂質シルト	586-6	2.5Y6/2	黄灰色	砂礫 (φ~4cm) ・地山塊を含むシルト質粗砂
027-1	2.5Y5/4	黄褐色	細砂質シルト	586-7	2.5Y4/1	黄灰色	砂礫 (φ~3cm) ・瓦片・土器小片を多く含むシルト質粗砂
390-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~1cm) ・炭・土器小片を含むシルト質細砂	586-8	10YR6/6	明黄褐色	地山塊を多く含むシルト
390-2	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~1cm) ・炭・土器小片を含むシルト質粗砂~細砂	560-1	5Y7/1	灰白色	シルト質極細砂
390-3	2.5Y5/3	黄褐色	砂礫 (φ~14cm) ・地山塊・土器小片を含むシルト質粗砂~細砂	558-1	5Y7/1	灰白色	シルト質極細砂
390-4	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~8cm) ・土器小片を含むシルト質粗砂~細砂	556-1	5Y6/2	灰色	シルト質極細砂
390-5	2.5Y4/1	黄灰色	土器小片を含むシルト質粗砂	555-1	5Y6/2	灰色	シルト質極細砂
684-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~4cm) 混ざりのシルト質細砂	687-1	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~10cm) 混ざりシルト質粗砂
685-1	2.5Y4/1	黄灰色	砂礫 (φ~1cm) を多く含むシルト質粗砂	687-2	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~1cm) 混ざりシルト質中砂~粗砂
685-2	2.5Y6/1	黄灰色	砂礫 (φ~4cm) ・地山塊を多く含むシルト質粗砂	688-1	10YR6/1	褐灰色	焼土塊を含むシルト質細砂
060-2	5Y5/1	灰色	砂礫 (φ~11cm) ・土器小片を含むシルト質粗砂	688-2	10YR5/1	褐灰色	シルト質細砂
060-3	2.5Y6/4	にぶい黄色	地山塊を多く含むシルト	688-3	2.5Y5/2	暗灰黄色	焼土塊・地山塊を多量に含むシルト質細砂~シルト
500-2	5Y6/2	灰色	砂礫 (φ~12cm) ・土器小片を多く含むシルト質粗砂	688-4	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫 (φ~2cm) 混ざりシルト質粗砂
651-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~2cm) 混ざりのシルト質粗砂	688-5	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~2cm) 混ざりシルト質細砂
695-1	7.5Y5/1	灰色	砂礫 (φ~6cm) を多く含むシルト質粗砂	688-6	2.5Y6/3	にぶい黄色	地山塊を多く含むシルト質粗砂
502-1	7.5YR5/1	褐灰色	地山塊を多く含むシルト質粗砂	624-1	10YR5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~2cm) 混ざりシルト質粗砂
686-1	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫 (φ~5cm) を多量に含むシルト質粗砂	624-3	10YR5/1	褐灰色	砂礫 (φ~2cm) 混ざりシルト質粗砂
679-1	2.5Y6/1	黄灰色	砂礫 (φ~1~6cm) ・煉瓦を多く含むシルト質粗砂	624-4	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫 (φ~5cm) ・土器小片を含むシルト質粗砂
679-2	2.5Y4/1	黄灰色	砂礫 (φ~1cm) を多量に含むシルト質粗砂	624-5	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂礫 (φ~5cm) を多く含むシルト質細砂
679-3	10YR7/2	にぶい黄褐色	煉瓦	642-2	2.5Y6/1	黄灰色	砂礫 (φ~3cm) を混ざりシルト質粗砂
679-4	10YR7/1	灰白色		642-3	2.5Y7/4	浅黄色	砂礫 (φ~3cm) を多く含むシルト質粗砂
679-5	2.5Y4/1	黄灰色	砂礫 (φ~1~6cm) ・煉瓦を多く含むシルト質粗砂	689-1	10YR5/1	褐灰色	砂礫 (φ~6cm) ・瓦片・土器小片を含むシルト質粗砂
718-1	10YR6/2	灰黄褐色	瓦片を多く含むシルト質粗砂	689-2	10YR6/2	灰黄褐色	焼土塊・炭を含むシルト質粗砂
718-2	10YR6/1	褐灰色	砂礫 (φ~3cm) 混ざりのシルト質粗砂	689-3	7.5YR5/1	褐灰色	焼土塊・炭を含むシルト質粗砂
718-3	5Y6/1	灰色	砂礫 (φ~5cm) 混ざりのシルト質粗砂	801-1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~12cm) ・瓦片・土器小片を含むシルト質粗砂
734-1	7.5YR6/2	灰褐色	土管・塩ビ管を埋設するシルト質粗砂	060-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~11cm) ・土器小片を含むシルト質細砂
734-2	7.5YR7/1	明褐灰色	塩ビ管を埋設するシルト質粗砂	060-2	5Y5/1	灰色	砂礫 (φ~6cm) を多く含むシルト質粗砂
678-1	5YR5/1	褐灰色	焼土塊・炭を含むシルト質粗砂	500-2	5Y6/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~10cm) ・土器小片を含むシルト質粗砂
678-2	2.5Y5/1	黄灰色	炭を多く含むシルト質粗砂	500-3	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~1cm) 混じりのシルト質粗砂
678-3	7.5YR5/1	褐灰色	砂礫 (φ~2cm) ・焼土塊・炭を含むシルト質粗砂	716-1	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト質粗砂
678-4	2.5Y7/1	灰白色	シルト質細砂	648-1	2.5Y6/1	黄灰色	シルト質細砂
678-5	10YR5/1	褐灰色	砂礫 (φ~3cm) 混じりのシルト質粗砂	658-1	7.5YR6/1	褐灰色	シルト質粗砂
503-1	10YR5/1	褐灰色	砂礫 (φ~2cm) 混ざりのシルト質粗砂	657-1	10YR5/1	褐灰色	シルト質粗砂
503-2	2.5Y6/1	黄灰色	シルト	657-2	2.5Y4/1	黄灰色	砂礫 (φ~3cm) 混じりのシルト質粗砂
503-3	7.5Y6/1	灰色	砂礫 (φ~3cm) 混ざりのシルト質細砂				
503-4	2.5Y4/1	黄灰色	砂礫 (φ~1cm) ・炭・土器小片を含むシルト質粗砂				
503-5	2.5Y6/1	黄灰色	地山塊を多く含むシルト質粗砂				
503-6	5Y6/1	灰色	シルト質細砂				
503-7	5Y5/1	灰色	砂礫 (φ~1cm) 混ざりのシルト質細砂				
503-8	5Y5/1	灰色	砂礫 (φ~3cm) 混ざりのシルト質粗砂				
503-9	7.5Y6/1	灰色	砂礫 (φ~1cm) を多く含むシルト質粗砂				
503-10	10YR6/6	明黄褐色	地山塊を多く含むシルト				

図 14 西壁・拡張区北壁断面図 2

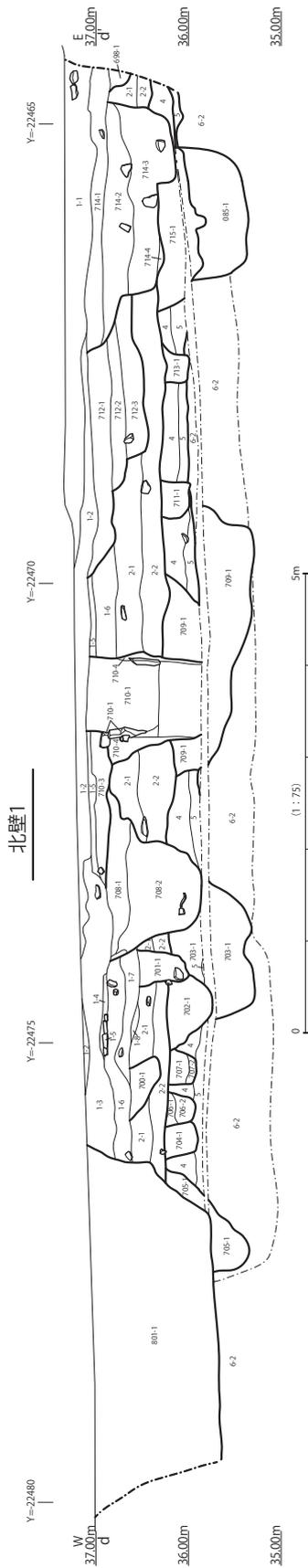


- |      |          |        |      |          |         |  |
|------|----------|--------|------|----------|---------|--|
| 1-1  | 2.5Y5/1  | 黄灰色    | 1-18 | 2.5Y6/1  | 黄灰色     | 砂礫 (φ~2cm) ・ 焼土塊を含むシルト質中砂~細砂           |
| 1-2  | 2.5Y6/1  | 黄灰色    | 1-19 | 2.5Y5/2  | 暗灰黄色    | 砂礫 (φ~3cm) ・ 焼瓦片・ 焼土塊・ 漆喰片を含むシルト質粗砂~細砂 |
| 1-3  | 2.5Y5/2  | 暗灰黄色   | 1-20 | 5Y5/2    | 灰オリーブ色  | 砂礫 (φ~5cm) ・ 漆喰片を含むシルト質粗砂              |
| 1-4  | 5Y6/2    | 灰オリーブ色 | 1-21 | 10YR7/1  | 灰白色     | 土管・ 漆喰片を含むシルト質粗砂                       |
| 1-5  | 10YR5/4  | にぶい黄褐色 | 1-22 | 2.5GY7/1 | 明オリーブ灰色 | 砂礫 (φ~3cm) を多量に含むシルト質細砂                |
| 1-6  | 10YR6/2  | 灰黄褐色   | 1-23 | 2.5Y5/3  | 黄褐色     | 砂礫 (φ~6cm) を多量に含むシルト質細砂                |
| 1-7  | 10YR5/3  | にぶい黄褐色 | 1-24 | 5Y5/2    | 灰オリーブ色  | 砂礫 (φ~8cm) ・ 漆喰片・ 土管を含むシルト質粗砂          |
| 1-8  | 10YR5/2  | 灰黄褐色   | 1-25 | 2.5Y6/3  | にぶい黄色   | 漆喰片を多く含むシルト質粗砂                         |
| 1-9  | 10Y5/2   | オリーブ灰  | 1-26 | 2.5Y7/2  | 灰黄色     | 焼土塊・ 漆喰片を含むシルト質粗砂                      |
| 1-10 | 10YR6/2  | 灰黄褐色   | 1-27 | 10YR5/2  | 灰黄褐色    | 砂礫 (φ~15cm) 混じりのシルト質粗砂                 |
| 1-11 | 2.5Y6/2  | 灰黄色    | 2-1  | 10YR5/2  | 灰黄褐色    | シルト質粗砂                                 |
| 1-12 | 2.5Y5/2  | 暗灰黄色   | 2-1' | 2.5Y5/2  | 暗灰黄色    | シルト質粗砂                                 |
| 1-13 | 2.5Y2/1  | 黒色     | 2-2  | 2.5Y6/3  | にぶい黄色   | 砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト質粗砂                  |
| 1-14 | 2.5Y6/2  | 灰黄色    | 3    | 2.5Y5/3  | 黄褐色     | 砂礫 (φ~8cm) 混じりのシルト質粗砂                  |
| 1-15 | 10YR5/1  | 褐灰色    | 4    | 2.5Y4/2  | 暗灰黄色    | 砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト質粗砂                  |
| 1-16 | 7.5YR6/2 | 灰褐色    | 5    | 2.5Y6/2  | 灰黄色     | 砂礫 (φ~3cm) 混じりのシルト質粗砂                  |
| 1-17 | 5Y6/2    | 灰オリーブ色 | 6-1  | 7.5YR6/1 | 褐灰色     | シルト質極細砂~粗砂                             |
|      |          |        | 6-2  | 7.5YR7/1 | 明褐灰色    | シルト~シルト質粗砂                             |

図 15 南壁断面図 1

683-1	2.5Y5/3	黄褐色	砂礫 (φ~6cm) 混ざりのシルト質細砂	723-8	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫 (φ~4cm) 混じりのシルト質細砂
399-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~1cm) ・土器片を含むシルト質中砂~細砂	327-1	2.5Y6/2	灰黄色	シルト質粗砂~細砂
673-1	2.5Y5/6	黄褐色	砂礫 (φ~13cm) ・焼土塊・焼瓦・陶磁器片を含むシルト質粗砂~細砂	325-1	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト質細砂
397-1	7.5YR6/2	灰褐色	砂礫 (φ~5cm) 混ざりのシルト質細砂	324-1	2.5Y6/1	黄灰色	シルト質細砂
397-2	5YR6/2	灰褐色	シルト質粗砂~細砂	025-1	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~18cm) ・瓦片・煉瓦片を含むシルト質粗砂
397-3	10YR5/1	褐色	シルト質粗砂~細砂	677-1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂礫 (φ~6cm) ・瓦片を含むシルト質粗砂
397-4	5YR5/6	明赤褐色	焼土塊・瓦片を含むシルト質細砂	677-2	10YR5/1	褐色	砂礫 (φ~3cm) ・瓦片・漆喰片を含むシルト質粗砂
397-5	5YR5/2	灰褐色	焼土塊・炭を含むシルト質細砂	724-1	2.5Y5/1	黄灰色	シルト質粗砂
397-6	10YR5/1	褐色	漆喰片を含むシルト質細砂	724-2	2.5Y6/2	灰黄色	砂礫 (φ~3cm) ・瓦片・漆喰片を含むシルト質粗砂
397-8	10YR6/1	褐色	焼土塊を含むシルト質細砂	322-1	2.5Y6/1	黄灰色	砂礫 (φ~13cm) 混じりのシルト質粗砂~細砂
397-9	5Y6/1	灰色	炭を含むシルト質細砂	322-2	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫 (φ~12cm) ・炭・土器片を多量に含むシルト質粗砂
397-10	2.5Y6/1	黄灰色	シルト質中砂~細砂	322-3	2.5Y6/2	灰黄色	地山塊
397-11	2.5Y5/1	黄灰色	シルト質細砂	322-4	5Y5/1	灰色	地山塊を多く含むシルト
397-12	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粗砂	317-1	5Y4/1	灰色	有機物を含むシルト
397-13	10YR6/1	褐色	砂礫 (φ~8cm) 混ざりシルト質細砂	317-2	5Y7/4	浅黄色	砂礫 (φ~19cm) 混じりのシルト質粗砂
397-14	10YR5/1	褐色	砂礫 (φ~3cm) を多く含むシルト質細砂	317-2	2.5Y7/3	黄褐色	地山塊を多く含むシルト質細砂
397-15	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粗砂~細砂	317-3	5Y5/1	灰色	砂礫 (φ~8cm) を多く含むシルト質細砂
397-16	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫 (φ~3cm) ・焼瓦片を含むシルト質細砂	320-1	2.5Y4/1	黒褐色	砂礫 (φ~1cm) を混じりシルト質粗砂
397-17	2.5Y5/3	黄褐色	砂礫 (φ~13cm) ・焼瓦片を含むシルト質粗砂~細砂	320-2	2.5Y3/2	黒褐色	シルト質中砂~細砂
397-18	7.5YR5/3	にぶい褐色	焼土塊を含むシルト質粗砂~細砂	320-3	2.5Y3/1	黒褐色	シルト質細砂
397-19	7.5Y5/1	灰色	焼土塊を含むシルト質粗砂~細砂	320-4	2.5Y2/1	黒色	シルト質中砂~細砂
397-20	7.5Y4/1	灰色	シルト質粗砂~細砂	320-5	2.5Y5/1	黄灰色	シルト質細砂
397-21	7.5Y4/2	灰オリーブ	シルト質粗砂~細砂	403-1	5YR5/4	にぶい赤褐色	砂礫 (φ~10cm) ・焼土塊・焼瓦片を含むシルト質粗砂
397-22	7.5YR5/1	褐色	シルト質粗砂~細砂	315-1	10Y4/1	灰色	炭を含むシルト質粗砂
397-23	7.5YR4/1	褐色	シルト質粗砂~細砂	315-2	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質細砂
028-1	5Y6/2	灰オリーブ色	シルト質粗砂~細砂	315-3	5Y4/1	灰色	シルト質粗砂~細砂
028-2	2.5Y5/1	黄灰色	シルト質中砂~細砂	315-4	2.5Y6/2	灰黄色	細砂質シルト
028-3	7.5YR5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~1cm) 混ざりシルト質粗砂	315-5	2.5Y6/1	黄灰色	砂礫 (φ~2cm) を多く含むシルト質粗砂
028-5	2.5Y6/1	黄灰色	砂礫 (φ~3cm) ・焼土塊を含むシルト質粗砂	315-6	2.5Y5/1	黄灰色	地山塊を含むシルト質細砂
028-6	2.5YR5/6	明赤褐色	砂礫 (φ~5cm) ・焼瓦片を含むシルト質粗砂	315-7	10YR5/1	褐色	シルト質細砂
026-1	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~3cm) ・焼瓦・焼土塊を含むシルト質粗砂	315-8	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質細砂
026-2	2.5Y6/1	黄灰色	焼土塊を含むシルト質細砂	315-9	2.5Y7/1	灰白色	地山塊を多く含むシルト質細砂
026-3	2.5Y5/1	黄灰色	漆喰片を含むシルト質細砂	725-1	5Y5/3	灰オリーブ色	シルト質細砂
026-4	10YR5/1	褐色	シルト質細砂	726-1	10YR5/1	褐色	砂礫 (φ~6cm) ・瓦片を含むシルト質粗砂
026-5	2.5YR5/1	赤灰色	焼土塊を含むシルト質細砂	726-2	10YR7/1	灰白色	細砂質シルト
026-6	10YR5/2	灰黄褐色	焼土塊を含むシルト質細砂	726-3	2.5Y6/1	黄灰色	細砂質細砂
026-7	10YR5/3	にぶい黄褐色	焼土塊を含むシルト質細砂	726-4	5Y6/1	灰色	シルト質細砂
334-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質細砂	726-5	10YR5/2	灰黄褐色	焼土塊を含むシルト質細砂
334-2	5Y5/1	灰色	砂礫 (φ~5cm) を多く含むシルト質粗砂	308-1	5Y5/2	灰オリーブ色	砂礫 (φ~3cm) を多く含むシルト質細砂
334-3	5Y4/1	灰色	シルト質細砂	308-2	5Y6/3	オリーブ黄色	地山塊を含むシルト質細砂
406-1	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~5cm) ・地山塊を含むシルト質粗砂	308-3	5Y4/2	灰オリーブ色	シルト質粗砂~細砂
406-2	10YR6/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~2cm) ・地山塊を含むシルト質粗砂~細砂	308-4	5Y6/2	灰オリーブ色	地山塊を多く含むシルト質粗砂~細砂
721-1	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫 (φ~12cm) ・瓦片・陶磁器を含むシルト質粗砂	308-5	5Y4/1	灰色	シルト質粗砂~細砂
722-1	5Y5/1	灰色	砂礫 (φ~4cm) 混じりのシルト質細砂	308-6	5Y6/6	オリーブ色	地山塊を多く含むシルト質粗砂
722-2	5Y6/1	灰色	砂礫 (φ~1cm) 混じりのシルト質細砂	308-7	5Y3/2	オリーブ黒色	有機物を含む粗砂~細砂
723-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~2cm) ・焼土塊を含むシルト質細砂	308-8	5Y6/6	オリーブ色	有機物を含む粗砂~細砂
723-2	2.5Y7/2	灰黄色	砂礫 (φ~1cm) 混じりのシルト質細砂	727-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粗砂~細砂
723-3	5Y8/3	淡黄色	砂礫 (φ~2cm) ・焼土塊を多量に含むシルト	306-1	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト質粗砂
723-4	2.5Y5/1	黄灰色	漆喰	305-1	5Y6/1	灰色	シルト質細砂
723-5	10YR5/1	褐色	シルト質細砂	305-2	5Y5/1	灰色	シルト質細砂
723-6	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト質中砂~細砂	305-3	5Y6/2	灰オリーブ色	地山塊を含むシルト質粗砂
723-7	2.5Y6/1	黄灰色	砂礫 (φ~5cm) を多く含むシルト質細砂	305-4	5Y5/3	灰オリーブ色	シルト質細砂
			砂礫 (φ~2cm) 混じりのシルト質細砂	305-5	5Y5/2	灰オリーブ色	シルト質細砂
				305-6	5Y4/1	灰色	シルト質細砂

図 16 南壁断面図 2



1-1	2.5Y5/1	黄灰色	砕石	801-1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~12cm)・瓦片・土器小片を含むシルト質粗砂
1-2	10Y7/1	灰白色	砂礫 (φ~22cm)・瓦片・煉瓦片を含むシルト質粗砂	700-1	10YR6/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~8cm)を多量に含むシルト質粗砂
1-3	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂礫 (φ~10cm)・煉瓦片・瓦片・陶磁器片を多量に含むシルト質粗砂	701-1	2.5Y5/1	黄灰色	シルト質中砂~細砂
1-4	10YR5/2	灰黄褐色	粗砂	702-1	7.5YR4/1	褐灰色	砂礫 (φ~6cm)・陶磁器片を含むシルト質粗砂
1-5	2.5Y8/3	淡黄色	砂礫 (φ~2cm)	703-1	2.5Y6/2	灰黄色	砂礫 (φ~15cm)・地山塊を含むシルト質粗砂
1-6	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂礫 (φ~1cm)	704-1	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~2cm)を多く含むシルト質粗砂
1-7	10YR5/2	灰黄褐色	煉瓦塊・漆喰片・瓦片を含むシルト質粗砂	705-1	10YR5/1	褐灰色	細極質シルト
1-8	5Y6/3	オリーブ黄色	シルト質極細砂~中砂	706-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粗砂
2-1	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~15cm) 混じりのシルト質粗砂	706-2	2.5Y6/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~3cm) 混じりシルト質粗砂
2-2	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト質粗砂	707-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~1cm)・土器片を含むシルト質粗砂
3	2.5Y5/3	黄褐色	砂礫 (φ~8cm) 混じりのシルト質粗砂	707-2	2.5Y6/2	灰黄色	砂礫 (φ~3cm) 混じりシルト質粗砂
4	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト質粗砂	708-1	2.5Y5/3	黄褐色	砂礫 (φ~23cm)・瓦片・煉瓦片を多く含むシルト質粗砂
5	2.5Y6/2	灰黄色	砂礫 (φ~3cm)を多く含むシルト質粗砂	708-2	2.5Y6/2	灰黄色	砂礫 (φ~13cm)・瓦片・漆喰片を含むシルト質粗砂
6-1	7.5YR6/1	褐灰色	シルト質極細砂~粗砂	709-1	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~12cm) 混じりシルト質粗砂
6-2	7.5YR7/1	明褐灰色	シルト~シルト質粗砂	710-1	10YR7/1	灰白色	砕石
				710-2	5GY8/1	灰白色	セメント
				710-3	7.5GY8/1	明緑灰色	砂礫 (φ~6cm) を含むシルト質粗砂
				710-4	10Y7/1	灰白色	砂礫 (φ~11cm) を多量に含むシルト質粗砂
				711-1	10YR5/2	灰黄褐色	炭・土器小片を含むシルト質粗砂
				712-1	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~10cm)・煉土塊・瓦片を含むシルト質粗砂
				712-2	7.5YR5/2	灰褐色	砂礫 (φ~12cm)・煉土塊・瓦片・炭を含むシルト質粗砂
				712-3	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~11cm)・瓦片・煉土塊を含むシルト質粗砂
				713-1	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粗砂
				714-1	10YR6/1	褐灰色	砂礫 (φ~8cm)・瓦片を含むシルト質粗砂
				714-2	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~15cm)・瓦片・煉土塊・漆喰片を含むシルト質粗砂
				714-3	2.5Y4/1	黄灰色	砂礫 (φ~15cm)・炭を多く含むシルト質粗砂
				714-4	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト質粗砂
				715-1	5Y5/2	灰オリーブ色	砂礫 (φ~5cm) 混ざりシルト質粗砂
				698-1	5Y5/1	灰色	砂礫 (φ~1cm) 混ざりシルト質粗砂
							シルト質粗砂

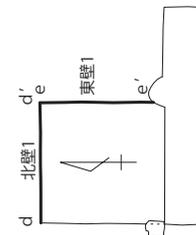
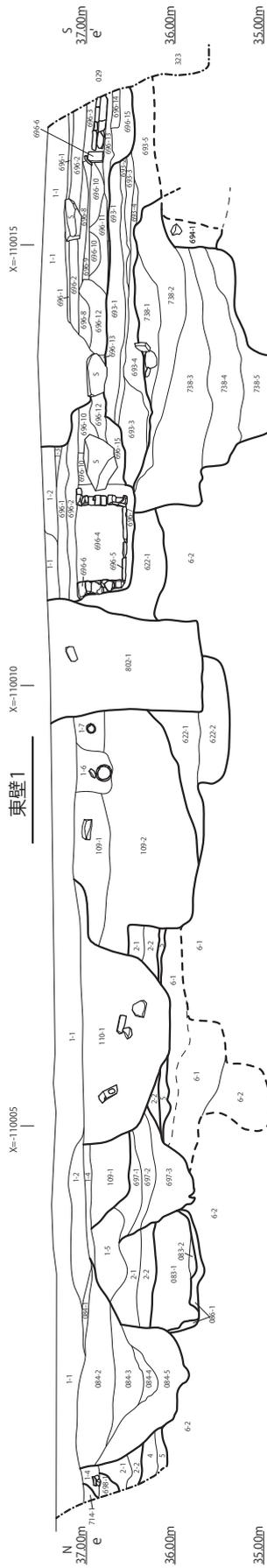


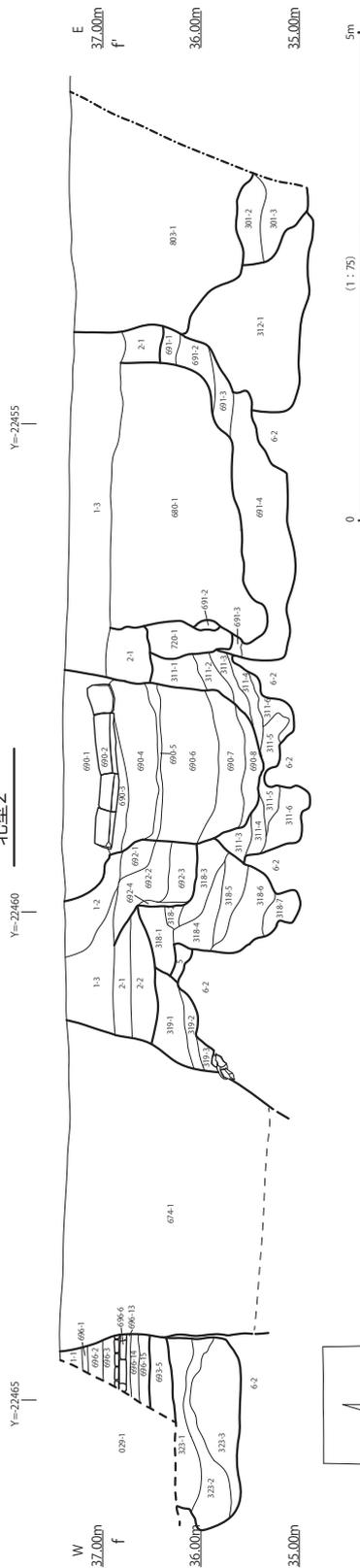
図 17 北壁 1 断面図



1-1	2.5Y5/1	黄灰色	砕石
1-2	10Y7/1	灰白色	砂礫 (φ~22cm) ・瓦片・煉瓦片を含むシルト質粗砂
1-3	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂礫 (φ~10cm) ・煉瓦片・瓦片を含むシルト質粗砂
1-4	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~2cm) ・煉瓦片・瓦片を含むシルト質細砂
1-5	2.5Y6/2	灰黄色	砂礫 (φ~3cm) ・煉土塊・炭を多く含むシルト質粗砂
1-6	7.5YR5/1	褐灰色	砂礫 (φ~10cm) ・煉土塊を含むシルト質粗砂
1-7	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト質粗砂
2-1	10YR5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~15cm) 混じりのシルト質粗砂
2-2	2.5Y6/3	灰黄褐色	砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト質粗砂
3	2.5Y5/3	黄褐色	砂礫 (φ~8cm) 混じりのシルト質粗砂
4	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト質粗砂
5	2.5Y6/2	灰黄色	砂礫 (φ~3cm) を多く含むシルト質粗砂
6-1	7.5YR6/1	褐灰色	シルト質極細砂~粗砂
6-2	7.5YR7/1	明褐灰色	シルト~シルト質粗砂
696-1	5Y5/1	灰色	砂礫 (φ~5cm) を含むシルト質粗砂
696-2	10YR5/1	褐灰色	砂礫 (φ~1cm) ・漆喰片・煉土塊・瓦片・煉瓦片・を含むシルト質粗砂
696-3	2.5YR5/1	赤灰色	砂礫 (φ~8cm) ・瓦片・煉瓦片・タイル片を含むシルト質粗砂
696-4	10YR4/1	褐灰色	砂礫 (φ~4cm) ・煉土塊・瓦片・煉瓦片・炭を含む細砂質シルト
696-5	2.5G8/1	灰白色	セメントモルタル
696-6	5YR6/6	褐色	煉瓦
696-7	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト質粗砂
696-8	7.5Y5/1	灰色	砂礫 (φ~5cm) を多量に含むシルト質粗砂
696-9	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~1cm) を含むシルト質粗砂
696-10	10YR3/2	にぶい黄褐色	砂礫 (φ~2cm) ・煉土塊を含むシルト質粗砂
696-11	5Y8/4	淡黄色	漆喰
696-12	5Y7/1	灰白色	漆喰
696-13	2.5Y7/3	浅黄色	砂礫 (φ~1cm) ・漆喰片を含むシルト質粗砂
696-14	10YR6/1	褐灰色	細砂質シルト
696-15	2.5Y4/1	黄灰色	砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト質粗砂
693-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粗砂
693-2	5Y5/2	灰オリーブ色	シルト質粗砂
693-3	2.5Y6/2	灰黄色	砂礫 (φ~2cm) 混じりのシルト質粗砂
693-4	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト質粗砂
693-5	10YR4/1	褐灰色	砂礫 (φ~1cm) を多量に含むシルト質粗砂
694-1	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粗砂
738-1	10YR5/1	褐灰色	砂礫 (φ~20cm) を多量に含むシルト質粗砂
738-2	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粗砂
738-3	5Y5/1	灰色	砂礫 (φ~5cm) 混じりシルト質粗砂
738-4	10YR4/1	褐灰色	地山塊を含む粗砂質シルト
738-5	10Y7/1	灰白色	大きな地山塊を含む粗砂質シルト
802-1	7.5YR5/2	灰褐色	砂礫 (φ~20cm) ・瓦片・煉瓦片・煉土塊・ナイロンを含むシルト質粗砂
109-1	7.5YR4/1	褐灰色	砂礫 (φ~5cm) ・煉土塊・瓦片・煉瓦片・炭を含むシルト質粗砂
109-2	5YR4/1	褐灰色	砂礫 (φ~10cm) ・煉瓦片・煉瓦片・炭を多量に含むシルト質粗砂
622-1	10Y4/1	灰色	シルト質粗砂
622-2	5Y5/1	灰色	地山塊を含むシルト質粗砂
110-1	2.5Y6/1	黄灰色	砂礫 (φ~30cm) ・ブロック片・煉瓦片・瓦片を含むシルト質粗砂
697-1	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~2cm) 混じりシルト質粗砂
697-2	2.5Y5/2	暗灰黄色	上層部に薄い泥層のみみられるシルト質粗砂
697-3	2.5Y5/1	灰白色	砂礫 (φ~7cm) 混じりシルト質粗砂
086-1	5Y7/2	灰白色	地山塊を多量に含むシルト質粗砂
083-1	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~3cm) ・土器小片を含むシルト質粗砂
083-2	5Y6/2	灰オリーブ色	シルトを含むシルト質粗砂
084-1	7.5YR7/2	明褐灰色	シルト質粗砂
084-2	7.5YR5/1	褐灰色	砂礫 (φ~3cm) ・煉土塊・炭を多く含むシルト質粗砂
084-3	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂礫 (φ~6cm) ・煉土塊・炭を多く含むシルト質粗砂
084-4	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粗砂
084-5	10YR6/3	にぶい黄褐色	砂礫 (φ~2cm) ・地山塊・煉土塊を含むシルト質粗砂
714-1	10YR6/1	褐灰色	砂礫 (φ~8cm) ・煉土塊を含むシルト質粗砂
698-1	2.5Y5/1	黄灰色	シルト質粗砂

図 18 東壁 1 断面図

北壁2



1-1	2.5Y5/1	黄灰色	砕石	砕礫 (φ~11cm)・瓦片・ガラス片・漆喰片・塩ビ管を含むシルト質細砂	
1-2	10YR7/1	灰白色	砂礫 (φ~3cm)	シルト	
1-3	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~3cm)	砂礫 (φ~12cm)・瓦片を含むシルト質細砂	
1-4	10YR7/2	にぶい黄褐色	砂礫 (φ~3cm)	砂礫 (φ~3cm)・瓦片を含むシルト質粗砂~細砂	
2-1	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~15cm)	砂礫 (φ~2cm)・瓦片を含むシルト質細砂	
2-2	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂礫 (φ~8cm)	シルト質粗砂~細砂	
3	2.5Y5/2	黄褐色	砂礫 (φ~5cm)	漆喰片を含むシルト質粗砂	
4	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~3cm)	砂礫 (φ~1cm)を多く含むシルト質粗砂	
5	2.5Y6/2	灰黄色	シルト質極細砂~粗砂	地山塊を含むシルト質粗砂	
6-1	7.5YR6/1	褐灰色	シルト~シルト質細砂	地山塊を含むシルト質粗砂	
6-2	7.5YR7/1	明褐灰色		シルト質細砂	
803-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~10cm)	瓦片・煉瓦片・漆喰片を含むシルト質細砂	
301-1	5Y5/1	灰色	ナイロン袋を含むシルト質細砂		
301-2	5Y4/1	灰色	シルト質細砂		
301-3	5Y5/2	灰オリーブ色	砂礫 (φ~11cm)	地山塊を含むシルト質粗砂	
680-1	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫 (φ~8cm)	煉瓦片・漆喰片を多く含むシルト質細砂	
312-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質細砂	地山塊を含むシルト質粗砂	
691-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫 (φ~12cm)	混じりのシルト質粗砂	
691-2	5Y5/2	灰オリーブ色	シルト質細砂		
691-3	5Y5/1	灰色	シルト質細砂		
720-1	10Y5/1	黄灰色	シルト質細砂		
690-1	10YR6/3	にぶい黄褐色	砂礫 (φ~10cm)	瓦片・煉瓦片・漆喰片を含むシルト質粗砂	
690-2	5Y8/2	灰白色	漆喰		
690-3	5Y6/3	オリーブ黄色	シルト質細砂		
690-4	2.5Y6/2	灰黄色	690-4	2.5Y6/2	灰黄色
690-5	2.5Y7/2	灰黄色	690-5	2.5Y7/2	灰黄色
690-6	2.5Y6/3	にぶい黄色	690-6	2.5Y6/3	にぶい黄色
690-7	2.5Y6/2	灰黄色	690-7	2.5Y6/2	灰黄色
690-8	2.5Y5/1	黄灰色	690-8	2.5Y5/1	黄灰色
311-1	10YR6/1	褐灰色	311-1	10YR6/1	褐灰色
311-2	10YR6/2	灰黄褐色	311-2	10YR6/2	灰黄褐色
311-3	10YR6/3	にぶい黄褐色	311-3	10YR6/3	にぶい黄褐色
311-4	5Y6/1	灰色	311-4	5Y6/1	灰色
311-5	2.5Y7/2	灰黄色	311-5	2.5Y7/2	灰黄色
311-6	7.5Y6/1	灰白色	311-6	7.5Y6/1	灰白色
692-1	10YR6/1	褐灰色	692-1	10YR6/1	褐灰色
692-2	7.5Y6/1	灰色	692-2	7.5Y6/1	灰色
692-3	2.5Y6/2	灰黄色	692-3	2.5Y6/2	灰黄色
692-4	2.5Y6/3	にぶい黄色	692-4	2.5Y6/3	にぶい黄色
318-1	5Y5/1	灰色	318-1	5Y5/1	灰色
318-2	10YR6/2	灰黄褐色	318-2	10YR6/2	灰黄褐色
318-3	7.5Y5/1	灰色	318-3	7.5Y5/1	灰色
318-4	2.5Y6/2	灰黄色	318-4	2.5Y6/2	灰黄色
318-5	5Y5/1	灰色	318-5	5Y5/1	灰色
318-6	5Y4/1	灰色	318-6	5Y4/1	灰色
318-7	5Y6/3	オリーブ黄色	318-7	5Y6/3	オリーブ黄色
319-1	10YR6/1	褐灰色	319-1	10YR6/1	褐灰色
319-2	5Y6/2	灰オリーブ色	319-2	5Y6/2	灰オリーブ色
319-3	5Y5/1	灰色	319-3	5Y5/1	灰色
674-1	2.5Y4/1	黄灰色	674-1	2.5Y4/1	黄灰色
029-1	10Y5/1	灰色	029-1	10Y5/1	灰色
323-1	10YR6/1	褐灰色	323-1	10YR6/1	褐灰色
323-2	7.5YR6/1	褐灰色	323-2	7.5YR6/1	褐灰色
323-3	10Y5/1	灰色	323-3	10Y5/1	灰色

図 19 北壁 2 断面図

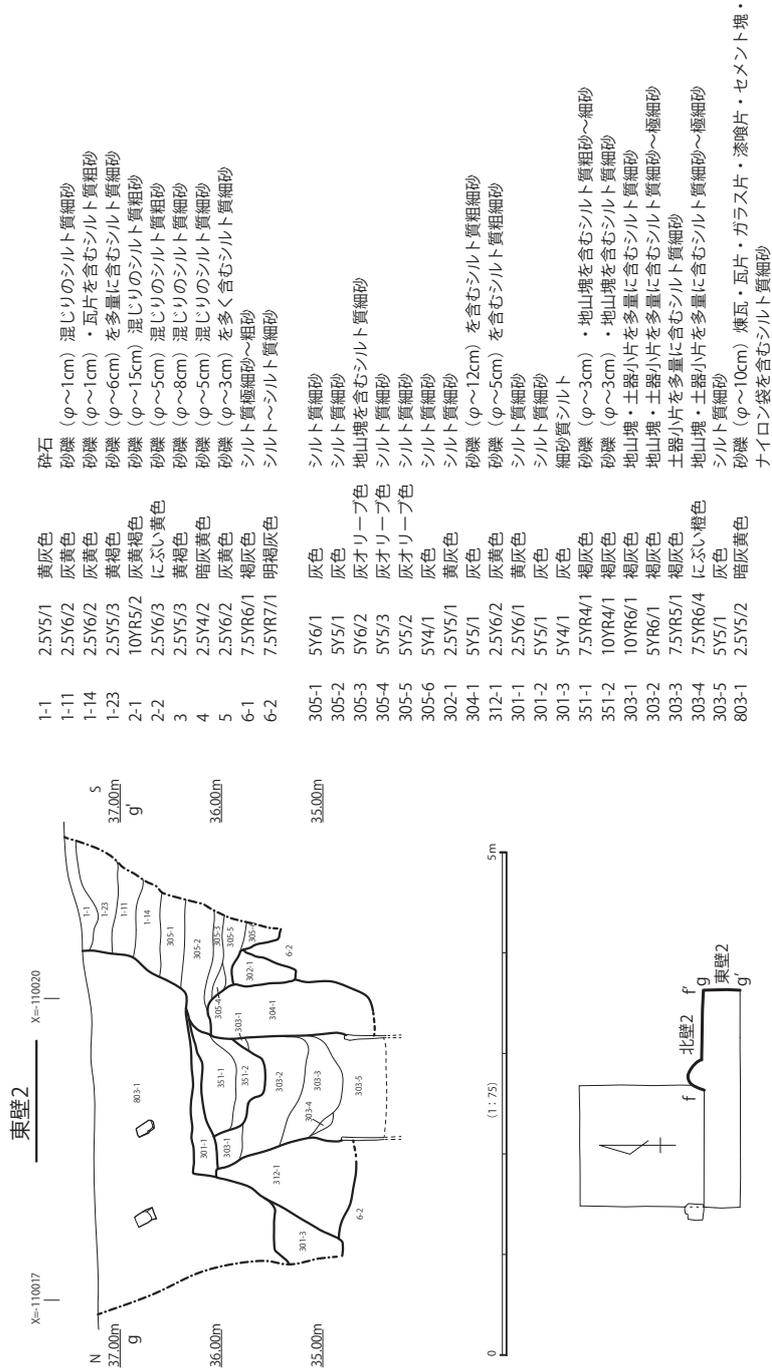


図 20 東壁 2 断面図

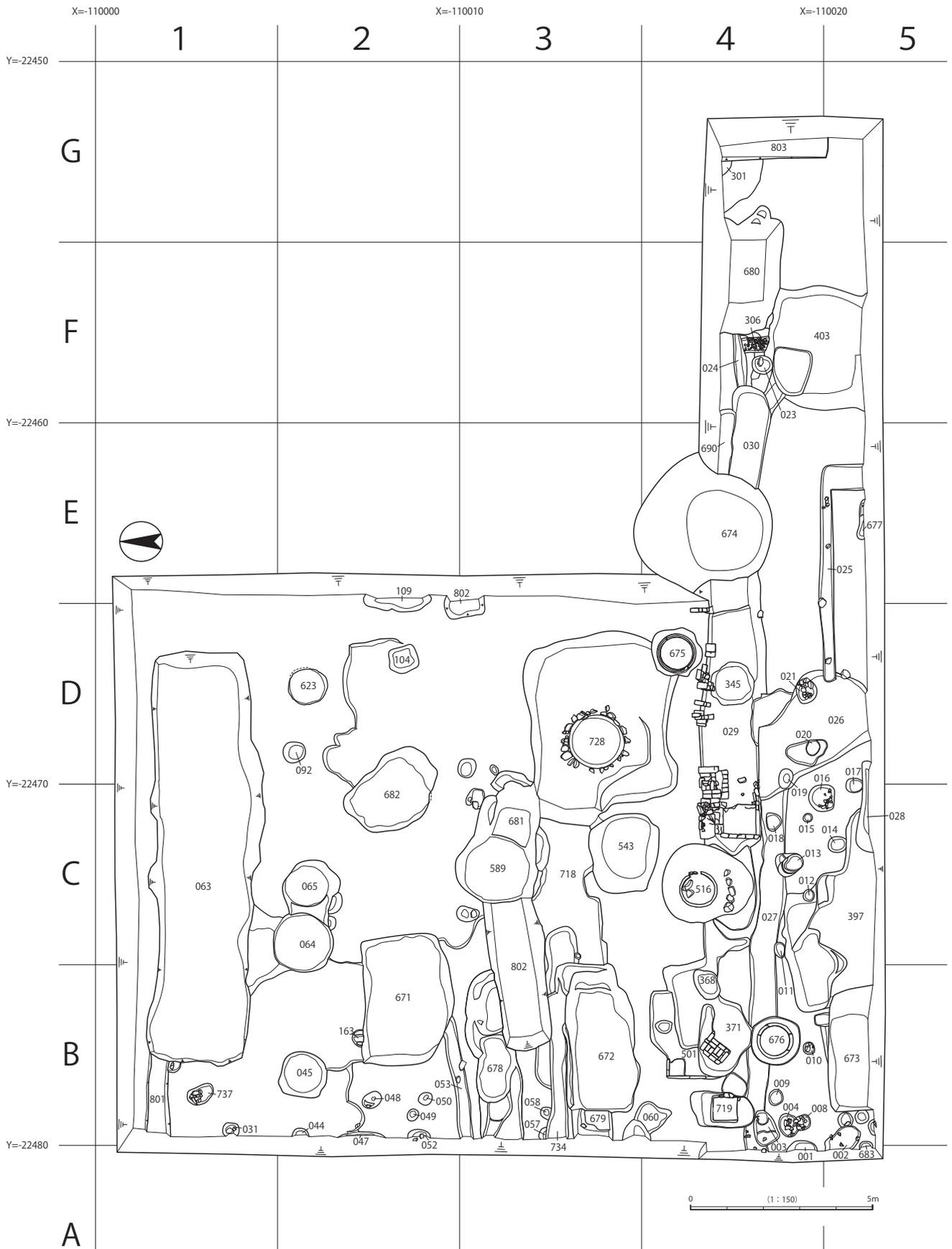


图 21 第 1 遺構面

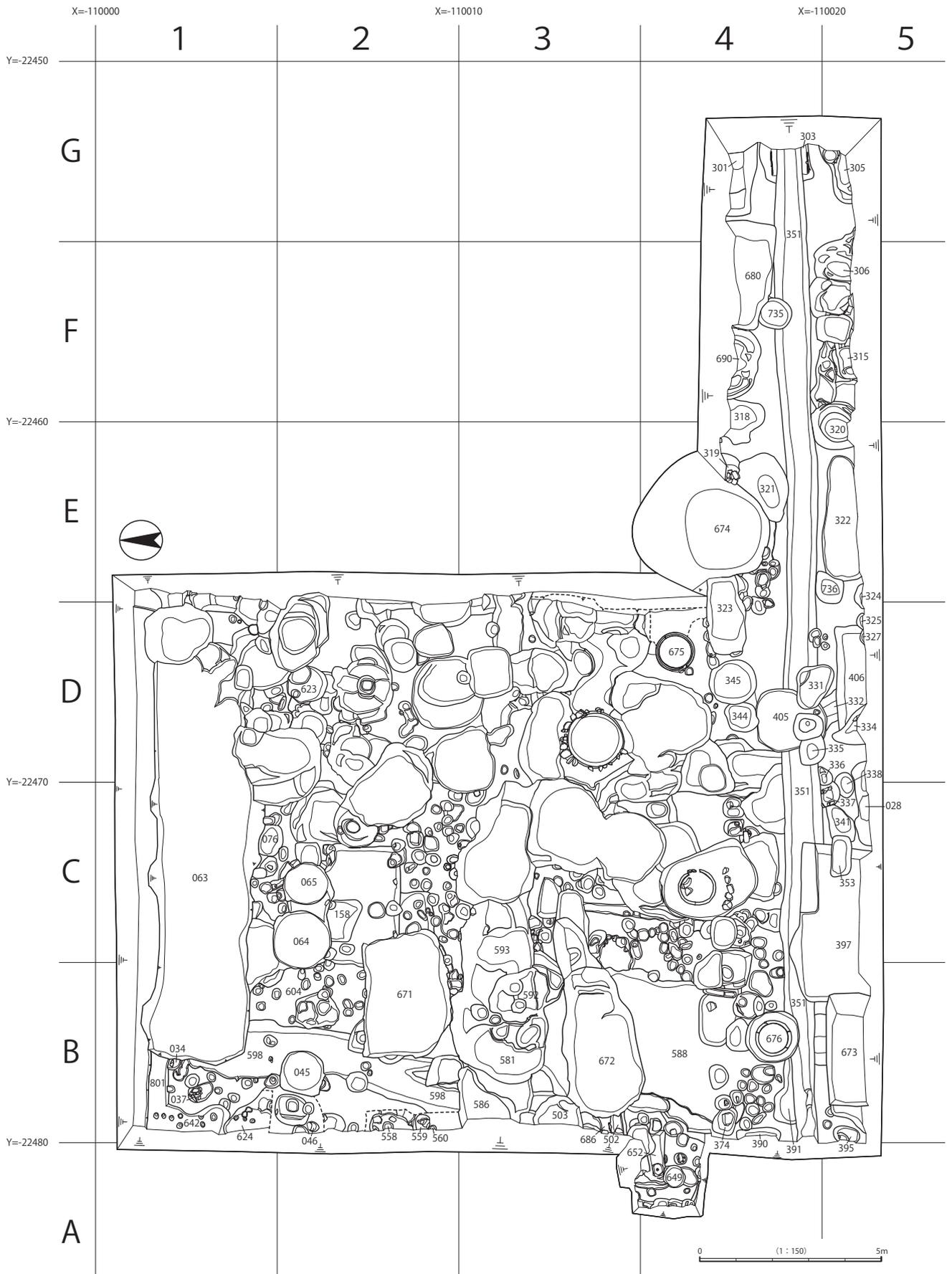


图 22 第 2 遺構面



图 23 第 3 遺構面

## 第2節 遺構

### 1. 遺構の概要

この第2節では、整理調査により遺構の帰属時期等が明らかとなった主要な遺構について、その概要を記す。

遺構数は、平安時代から現代までの約800基を検出した。遺構の性格は、土坑（廃棄土坑・便槽・半地下式土坑（穴蔵）・墓・土取り穴・抜取穴等）、井戸、溝（用排水路・雨落溝・側溝・土蔵布掘基礎・暗渠・埋設管理込溝等）、自然河道、池（用水池・園地等）、道（街区道路・辻子等）、窯場（カマドと焚口）、洗い場（水元）、叩き床などの他に、多数の柱穴（建物・塀（柵）等）があり多岐にわたる。

ここでは、先述したように単一の時期の遺構面を必ずしも把握しきれていないため、検出した遺構群を出土遺物や遺構の前後関係をもとに整理し、それを大まかな時代毎に第1～17期に遺構変遷表（表2）に区分して、時期の古いものから順に記述する。

### 2. 第1期の主要遺構

縄文時代晩期以前の遺構と考えられる。

#### 自然河道 770SR（図18・83）

調査区の北東から南西にかけて6-2層上を流れる、自然河道である。幅は北東側で約6m、南西側で広がり約7mを測る。旧河道底の高さは、北東側で標高約35.4m、南西側で標高約35.1m、南西に流れる。深さは、残存する6-1層の最大の厚みが、北東側で約0.7m、南西側で約1.2mである。堆積層は6-1層（シルト質極細砂～（極）粗砂の互層）で、下層に行くに従い小礫を多く含む自然堆積層である。なお、調査は壁面等の部分掘削のみで、全掘は行っていない。

出土遺物は、見られなかった。堆積の時期は、完新世段丘面形成層上を流れることから、縄文時代晩期以前の旧河道と考えられる。

調査地近くの史料に散見される、油小路通三条南の「小井」（『日本紀略』『本朝世紀』）や、西洞院通三条南の「柳水」（『雍州府志』『山域名勝志』『京羽二重織留』）も、同様の自然河道の湧水を用いた井戸であった可能性が考えられる。

### 3. 第2期の主要遺構

第2期の遺構は、小規模な柱穴と単層の土坑状遺構のみであった。建物遺構に繋がる柱穴や土坑は、調査区内では確認できなかった。

出土遺物についても、これらの遺構からは土師器の小片が出土したのみで時期の特定までには至らなかった。

表2 遺構変遷表

※ゴシック太字は本文記載遺構

時期	時代	小森編年 型式区分	実年代	主な遺構										備考	
				自然 河道	建物	柵(塀)	辻子	溝	井戸	池	土坑・穴蔵	その他(包含 層・柱穴等)			
1期	縄文晩 期以前			770											
2期		?											555・556・ 558	時期 不明	
3期	平安	V中	11世紀前半頃	5層洪水堆積										洪水	
		VI古～新					617	303・088		588・603・ 587・527・ 378・392	537・540・ 084	091・094・ 099・156・ 154・068・ 163・572・ 512・508			
		VI新末	1177年	安元3年(1177) 太郎焼亡										火災	
4期	鎌倉	VII古・中		771・772・ 773・774	767・ 768・ 769	699	643	(303・088)			076・100・ 140・310・ 371	570・118・ 385			
		VII中	13世紀前葉頃	建保元年(1213)・建保6年(1218) 大火カ										火災	
5期			VII(中)・ 新	13世紀中葉頃			(699)					086		荒地カ	
6期	室町	VIII古～新		761・762・ 763・764・ 765	775・ 776	(699)					113・606・ 521・372・ 373・391・ 105・618・ 373・315・ 305	072・125・ 541・532・ 343・325			
7期		IX古・中		745・746・ 747・748・ 749	766						597・115・ 314・319・ 158				
		IX中	15世紀前葉頃	応永～永享年間頃、層名不明洪水堆積										洪水	
8期	戦国	IX(中)・ 新X古・ 中		(754)・755・ 756・757・ 758・(759)				320			085・160・ 619・109・ 114・599・ 542・318・ 406・322・ 317	111			
		X中	15世紀後葉頃	文明年間頃、4層・2-2層洪水堆積										洪水	
9期			X(中)・ 新				598							水田・ 畑	
		X新・XI 古	16世紀初頭頃	天文年間頃、2-1層洪水堆積										洪水	
10期	江戸	XI古					351				075・ 100(上層)・ 355・344・ 334・312		水田・ 畑		
11期			XI中・新								078・346		荒地カ		
12期			XII古・中		A～E							077・729・ 608・330・ 368・557・ 620・323・ 330・321	347		
13期		XII新	17世紀中葉頃カ	寛永～延宝頃、1-11～14層洪水堆積										洪水	
		XII新											荒地カ		
14期	江戸	XIII古・ 中		A～E 752			027	013・681・ 345			016・023・ 683・104	026・049・ 058			
		XIII中末	1708年	宝永5年(1708) 大火										火災	
15期			XIII新・ XIV古・ 中		A～E 751	750		053・ 024	064・623・ 589・516・ 405			682・543・ 348・030・ 021・397			
		XIV中	1788年	天明8年(1788) 大火										火災	
16期	近現代	XIV(中)・ 新 XV古・ 中		A～E 753			053・ 306	045・728			109・680・ 403・028・ 671・672・ 673				
			XV中	1864年	元治元年(1864) 大火										火災
17期		XV(中)・ 新～XVI 現代		A～E				710・728・ 674・680・ 676・675			063・047・ 678・679・ 390・501・ 371・368・ 029・301・ 677	801・802・ 803			

#### 4. 第3期の主要遺構

小森編年京VI期古～新（以下、「京VI期古～新」とする。）の時期の遺構と考えられる。主たる遺構は町家遺構ではなく、範囲の広い宅地（屋敷）の一角と推測される。

##### 湧水導水遺構 537SK・617SD（図24・83）

C3・4グリッドに位置する。自然河道770SRの中央付近にあり6-1層の湧水が想定されることから、井戸枠を作らない湧水の土坑537SKと、その南に水を流す南北方向の溝617SDからなる、湧水導水遺構と考えられる。

537SK南西部と617SDの接続部は、次期の池状遺構の一部である587SKに壊され詳細は不明である。617SDの南側は516SE等が切っていて、その延長部分の所在は不明であるが、北側については確認できないので、北側への延長は無いものとみられる。

537SKの残存規模は、東西長1.08m、南北幅0.64m、深さ0.16m、東側が抉り気味に、西側が緩やかに上がる底面で、東西方向に主軸をもつ隅丸方形の土坑である。617SDの残存規模は、長さ2.24m、幅0.24～0.34mと南に広がり、深さ0.1～0.2mで、主軸は凡そN-1°-Eで南流する。

堆積層は、537SKが土器片を含む537-1層（図24）の単層で、617SDがシルト質細砂層（10YR4/1）である。

出土遺物には、土師器皿がある。

遺構の時期は、京VI期古である。

池状遺構588SXの東側にあつて、ほぼ同一時期の遺構と考えられることから、588SXと共に何らかの役割を果たしていたと思われるが、その性格については明確でない。

##### 湧水導水遺構 588SX・378SX・392SX・603SX・587SK・527SK（図25・83）

B3・4、C3グリッドに位置する。池状遺構（湧水土坑）588SX・603SXを中心に、南側に水を流す溝状遺構378SX・392SXからなる湧水導水遺構と考えられる。

588SXの北側には半地下式土坑672SK・671SKや大型土坑581SKに切られて603SXが残存し、南側も676SEや351SDに切られて溝状の378SXと392SXが僅かに残存する。この状況は、導水遺構537SK・617SDよりも規模こそ本遺構の方が大きいですが、極めてよく似ている。また、北側への延長については、攪乱が大きく不明な点が多いが、6-1層の範囲を考えるならば、それほど北側には延長しないものと考えられる。なお、603SXの東側には、土坑状とも溝状ともいえる拡張部が見られる。これは503SKの東側に土坑状の587SKが、さらにその上層に再掘削された土坑527SKがみられるためである。

池状遺構（湧水土坑）588SX・603SXの残存規模は、南北幅5.23m、東西幅3.8m、深さ0.35mで、南北に長い隅丸方形と思われる池状遺構である。溝状遺構378SX・392SXの残存規模は、南北

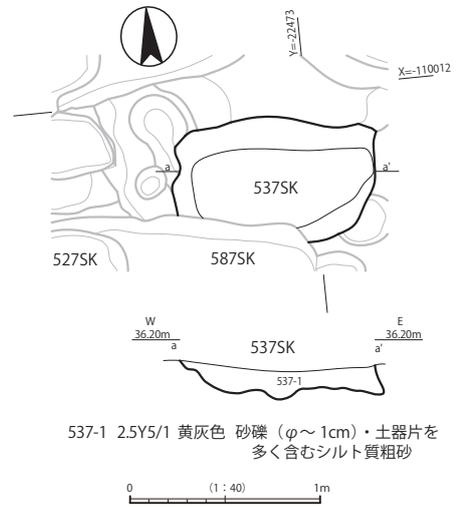


図24 土坑537SK

長 2.47m、東西幅 1.72 ～ 2.37m、深さ 0.3m で、池状遺構に深さ 0.15m 余りの溜水を残し南流させていたと考えられる。東側への拡張部である 587SK の残存規模は、東西長 2.4m、南北幅 1.1m、深さ 0.37m である。溝状あるいは土坑状で東側に拡張する。587SK の上部を再掘削する 527SK の残存規模は、東西長 1.63m、南北幅 0.97m、深さ 0.52m である。比較的深く掘り込んでいて、湧水が次第に減少していた様子がうかがわれる。

堆積層は 588SX・603SX・587SK が 4 層で、上層の①土器片を多く含むシルト質粗砂層 (10YR5/2) と、下層の②小礫と土器小片を多量に含むシルト質粗砂層 (5Y5/1) と、池底の最下層である③地山塊ブロック混じりシルト質粗砂層 (10Y4/1) と、④大きな地山塊混じりのシルト質粗砂層 (10Y7/1) からなる。最下層 2 層は層厚も薄く土器の包含は少ない。これに対し上層・下層の 2 層は、層厚も厚く土器小片を多量に包含していた。527SK の堆積層も 4 層で、527-1 ～ 4 層 (図 25) である。

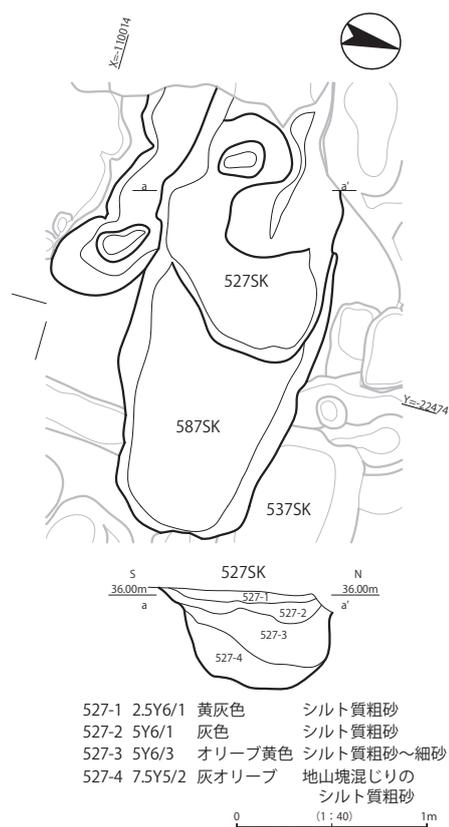


図 25 湧水導水遺構

出土遺物には大量に出土した土師器皿や、瓦質土器、白磁椀、青磁椀等と、須恵器円面硯、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀等のやや古い遺物がある。

遺構の時期は、京VI期古に掘削され、京VI期中に土坑 587SK で東側に拡張され、京VI期新には土坑 527SK の再掘削が行われたようである。

この池状遺構 (湧水土坑) 588SX・603SX と溝状遺構 378SX・392SX の遺構の性格については、湧水導水遺構 537SK・617SD と同様な、自然河道 770SR の湧水を利用した導水遺構と考えられる。小規模な湧水導水遺構 537SK・617SD を壊して、規模をさらに拡大して作られた遺構と考えられる。また、埋め戻しに当たって多量の破碎された主に土師器皿片が埋められていたことから、近接地にこれらの土器を日常的に使用する施設が存在していた可能性を示すものであろう。

### 井戸 303SE (図 26)

南区東壁 2 壁際の G4 グリッドに位置し、遺構東側は調査区外となる。方形縦板組横棧留式の井戸である。北側の土坑 312SK や南側の土坑 304SK を切り、上部を溝 351SD が東西に貫いて切られる。

303SE の残存規模は、掘方の南北が 1.36m、東西が 1.14m 以上を測る。確認面からの深さは、1.7m まで調査を行ったが、壁面の崩落により下層の調査ができなかったため、底面の深度は不明である。井戸枠外側の法量は、木質部の腐朽によりようやく残っている状態であり、上端はやや開いているが南北が 1.02m、東西が 0.75m 以上である。残存する縦板材の数は、最も残りの良い井戸枠西に幅 8 ～ 10cm の板材 11 枚の圧痕が、井戸枠南に幅 8 ～ 10cm の 4 枚、井戸枠北

に幅 8 ～ 12cm の 5 枚の圧痕が残されていた。これらの縦板材の中には、裏側に二重に重なるものもみられた。長さで残りの良いものは、井戸枠西で 72cm、井戸枠北で 87cm であるが、残存する厚みはどれも 3mm もない状態である。縦板は、当初から薄い板材を用いていたと考えられる。最下段と思われる横棧の部材が、一段のみ残る。井戸枠南のやや残りの良いものでは、芯材を用いた長さ 89.6cm、幅 8.7cm、厚さ 6cm の角材の各小口を 3cm × 3cm に相欠き柄としていた。これを 4 本用いて一辺 93cm 角の横棧としていたならば、3 尺四方の内法を持つ井戸枠であったと推測できる。なお、隅柱や支柱となる材は確認できていない。横棧のみ残して支柱を取り去ったか、当初から土圧で複数の横棧をもたせる方法であったかは分からない。

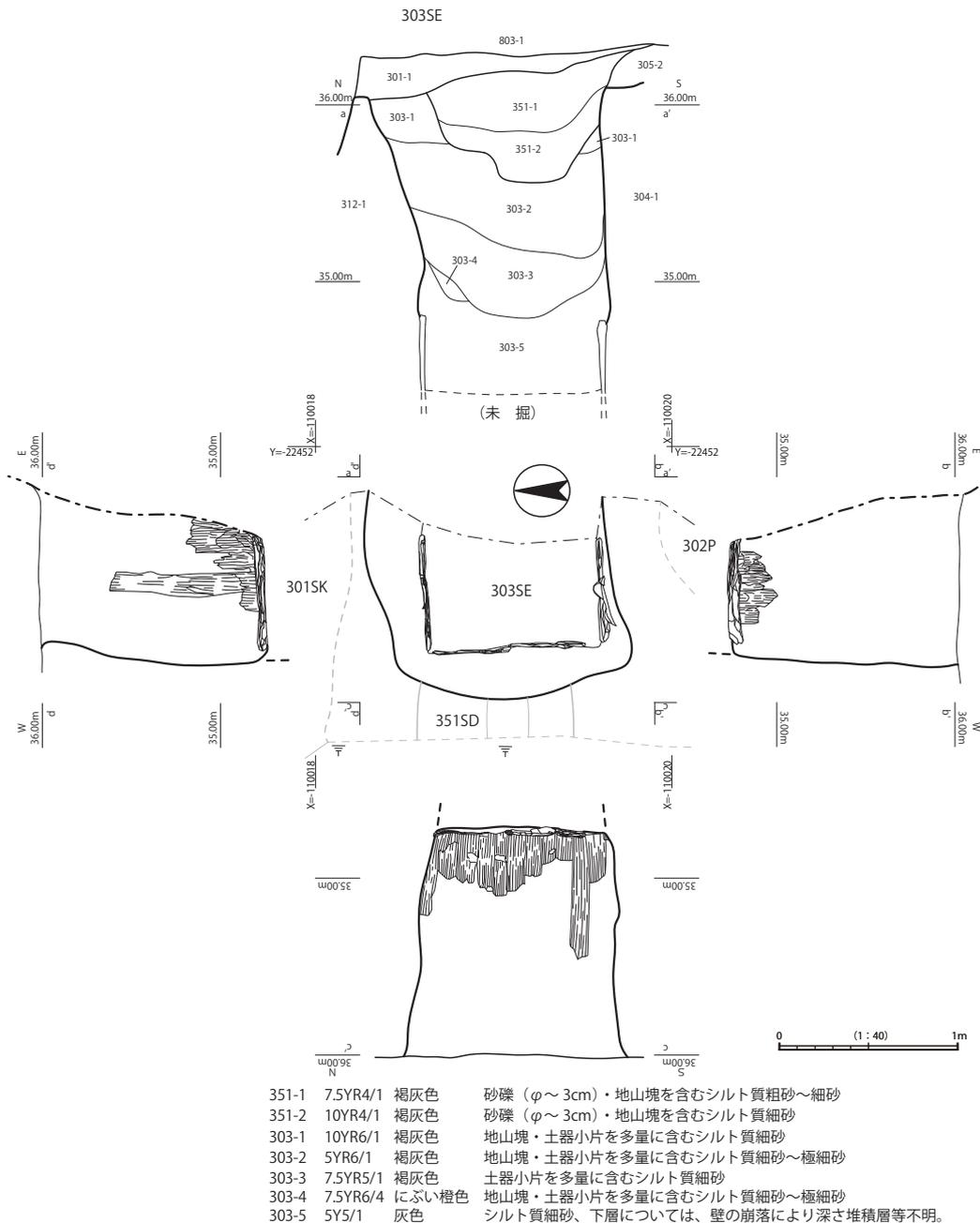


図 26 井戸 303SE

堆積層は、掘方ぎりぎりに井戸枠が収められているため、掘方の状況は良くわからないが、井戸枠内の堆積は 303-1 ～ 5 層までの 5 層である。

出土遺物は、土師器皿、須恵器壺、瓦器椀、白磁椀等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅵ期古～新を中心とする遺物群と考えられるが、第 5 章第 1 節の遺物組成の検討からは京Ⅶ期である可能性も指摘されている。

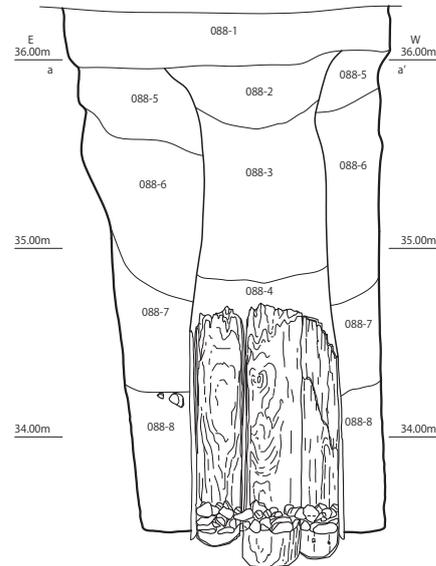
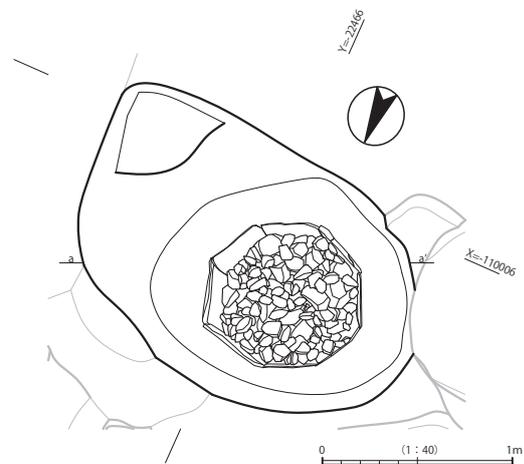
今回の調査区内では、数少ない明確な井戸遺構の一つである。覆土内からは大量の破碎された土師器皿が出土しており、廃棄の主体がこの井戸 303SE 周辺に存在したことを示すものであろう。

### 井戸 088SE (図 27・74)

北区東壁 1 壁際の D1・2 グリッドに位置する。縦板組矢板打ち込み式の、八角形井戸である。西側を井戸 623SE に切られ、東側は東壁 1 までである。

088SE の残存規模は、二段で下がる掘方の上段は東西長 2.16m、南北幅 1.35m、深さ 0.3m の楕円形で、下段はその西寄りに東西長 1.3m、南北幅 1.15m、深さ 2.45m の逆円柱形の掘方内に、八角形に 8 枚の縦板を打ち込んだ井戸枠を設ける。遺構底面は、確認面から深さ 2.75m、標高 33.48m である。井戸枠に使用されている縦板は 8 枚あり、土圧によりやや変形するが、井戸の内径は一辺 0.7 ～ 0.76m の八角形である。井筒内の底には、拳大の円礫が 12 ～ 18cm の厚みに入られていた。

井戸枠材 (図 74) の法量は、いずれも上端が腐朽していて全長の明らかなものは無いが、残存する最も長い⑤で約 1.5m、幅はどれも 30 ～ 32cm、厚さは 3 ～ 4cm で、第 4 章第 3 節の分析から杉材であることが明らかとなっている。これらの材の特徴は、②を除く 7 枚全てが先端部を矢板状に丸く加工するもので、井戸底のシルト～シルト質細砂 (6-2) 層に 10 ～ 20cm 打ち込んでいること、板目材の木表 (辺材側) を外側にするもの 5 材と、木裏 (芯材側) を外側とするもの 3 材であるが、どれも木端 (側面) 両側が内側に 60 ～ 70° 斜めに削り落とされている



088-1	10G6/1	緑灰色	砂礫 (φ～15cm) 混じりのシルト質細砂
088-2	7.5Y5/1	灰色	砂礫 (φ～20cm) 混じりのシルト質粗砂
088-3	5GY6/1	オリーブ灰色	砂礫 (φ～6cm) 混じりの粗砂質シルト
088-4	7.5GY6/1	緑灰色	砂礫 (φ～3cm) 混じりのシルト質粗砂
088-5	2.5Y6/4	にぶい黄色	地山塊を多量に含むシルト質粗砂
088-6	N5/	灰色	シルト質粗砂
088-7	7.5GY6/1	緑灰色	砂礫 (φ～8cm) 混じりの粗砂質シルト
088-8	10Y5/1	灰色	砂礫 (φ～10cm) 混じりのシルト質粗砂

図 27 井戸 088SE

ことである。板目材の乾燥時の反りを見て、木表側に反ることの多い性質を知った木材選びを行いつつ、木端（側面）両側の加工をし、柄穴や棧木、釘なしの相持たせで井筒上部まで組むのは、相当難しい作業であったと思われる。

堆積層は、最終層が 088-1 層、井筒内が 088-2 ～ 4 層の 3 層、掘方埋土が 088-5 ～ 8 層の 4 層である。

出土遺物は、土師器皿、白磁椀、青磁盤、須恵器、土師質土器、瓦質土器、瓦、石製品、埴塼等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅵ期中～京Ⅶ期中の長期にわたるものであるが、使用時期はもう少し後半に限定してもよいように思われる。

この 088SE に伴う建物跡は、今回の調査区の範囲内では検出されていない。もう少し、東側に存在したのと考えたい。

## 5. 第 4 期の主要遺構

京Ⅶ期古・中の時期の遺構と考えられる。主たる遺構は、町家遺構である。なお、第 4 期には第 3 期で上述した井戸 088SE と井戸 303SE が、出土土器からは存続していたとみられるが、使用できていたかは不明である。むしろ、第 4 期が主であった可能性も否定できない。なお、この第 4 期では第 3 期と記述が重複するので除外する。また、路に面して口を開く建物に、切妻造り平入りで妻壁の棟持柱と柱脚部に土台を据える構造である近世的京マチャを加えた、文献上の「町家」や「町屋」を総じて、以下「町屋建物」とする。この町家建物内の路側を「オモテ」、裏側を「オク」、町家建物外の裏側を「ウラ」と呼称する。柵か塀か、さらに土塀かは、どれも芯柱と控柱の柱穴が遺構として残るのみで、その上部構造までは判断できない。ここではこれらについても総じて、以下「柵（塀）」として記述する。

### 辻子 699SF・側溝 643SD（図 28）

北区北西隅の B1 グリッドに位置する。路面に舗装を行い、側溝を設けた、「町」内部の戸主に通じる小規模な路（小径）、「辻子」である。東側を攪乱土坑 063SK に、北側を試掘トレンチ 801Tr に、西側上部を土坑 642SK や攪乱 689SK に切られる。

699SF の残存規模は、長さ 2.17m、幅 1.96m で、主軸は東西方向である。南側のみ側溝 643SD が残るが、その残存規模は、長さ 1.87m、幅 0.3 ～ 0.43m、深さ 0.13 ～ 0.19m で西流し、主軸は N-84° -E 余りにややカーブを描く。路面の高さは、中央が標高 35.94m、北側が標高 35.87m、側溝側が標高 35.83m で、やや蒲鉾型に作られているが、断面図部分では南下がりになっている。

路面舗装材は、少し掘り込んで整地した荒れた地山 6-2 層上面に、699-1 層（砂礫（φ ～ 8cm）を多く含むシルト質粗砂層（5Y7/2））を敷いたもので、水捌けもよく硬く締まっていた。また、699-1 層上面には焼土の極薄い層が、路面の僅かな部分に残されているのが観察された。

側溝内並びに舗装材からは、土師器の小片以外に遺物は出土しなかった。

699SF は、四行八門制の西一行北一門と北二門の境にあって、北一門側の用地内に所在している。さらに、南側側溝 643SD がややカーブを描いていることから、条坊ラインの方位とは異なる方向に辻子 699SF が延びている可能性がある。

### 町屋建物 771SB ～ 774SB (図 29)

北区・南区の西側 B1 ～ 4 グリッドに位置する。油小路通に面する掘立柱の町家建物と推測されるもので、主軸が N-3° -E 余り東に傾く一群である。北側の 771SB は独立屋であるが、南側の 772SB ～

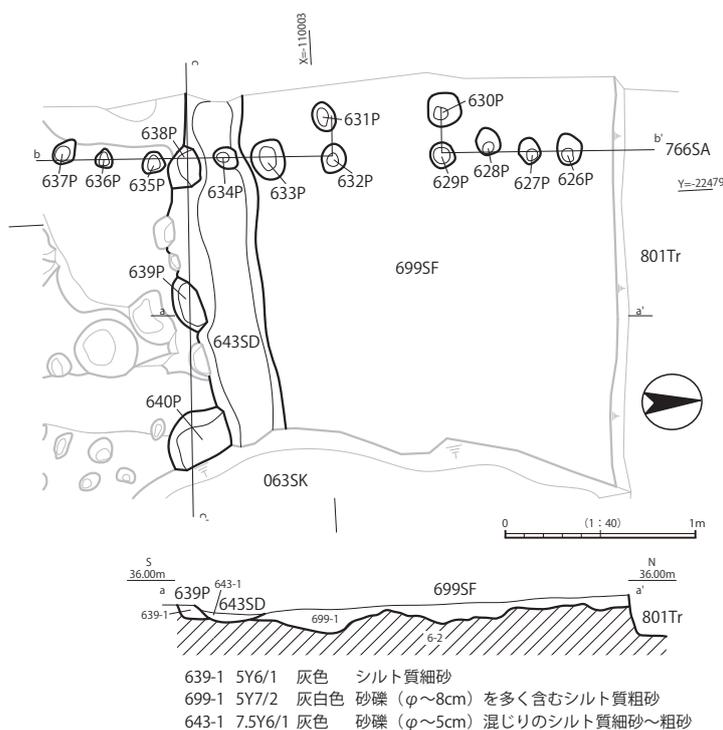


図 28 辻子 699SF・側溝 643SD

774SB は割長屋 3 房分と考えられる。なお、油小路通東側ラインが不明であるが、拡張区の南北溝 648SD を西端として各町家の規模を推測した。また、攪乱や遺構が多いこともあるが、いずれの建物内からも、叩きの土間痕跡やカマド、井戸は検出されなかった。

**771SB** 771SB は、南北間口 5 間 (約 5.7m、N1.2+1.1+1.2+ (1.1) + (1.1) S)、東西奥行 (妻行) 5 間 (約 5.45m、W1.25+ (1.1) + (1.0) + (1.0) + (1.1) E) 余りの独立屋の建物である。北側から 3.1m の奥壁際に東西 3 間 (約 2.2m、W0.75+0.75+0.75E) と、北側から 3.5m に東西 5 間 (約 5.45m、W1.25+ (1.1) + (1.0) + 1.3+0.8E) の柱列が復元できる。前者は間仕切りとみられるが、後者は間口が北側 3.5m と南側 2.2m の間に設けられた界壁とも見ることができ、2 房の割長屋である可能性もある。771SB の北側には辻子 699SF の南側側溝 643SD が接しており、南側には約 0.2m の隙間を開けて町家建物 772SB がある。また、771SB の南東隅には柵 (塀) 768SA が東側に延び、北東隅にも柵 (塀) 767SA が東側に延びていたものと推測される。

771SB 東側のウラには、この北側の柵 (塀) 767SA と南側の柵 (塀) 768SA に囲まれた範囲に、京VII期古までの土坑 100SK・土坑 076SK、3 期から続く井戸 088SE 等がみられる。

**772SB** 772SB は、南北間口約 3.5m、東西奥行 (妻行) 約 6.0m 余りの建物である。772SB ～ 774SB の 3 房は割長屋で、772SB は最も北側の房である。北側妻壁の路側から 3.8m に、掘立柱の 1 柱穴を確認できる。

**773SB** 773SB は、南北間口約 2.9m、東西奥行 (妻行) 約 6.0m 余りの建物で、割長屋の北から二つ目の房である。油小路通側 (路) を、溝 648SD までとする。

**774SB** 774SB は、南北間口約 2.7m、東西奥行 (妻行) 5 間 (約 6.0m、W (1.6) + (1.1) + 1.1 + (1.1))

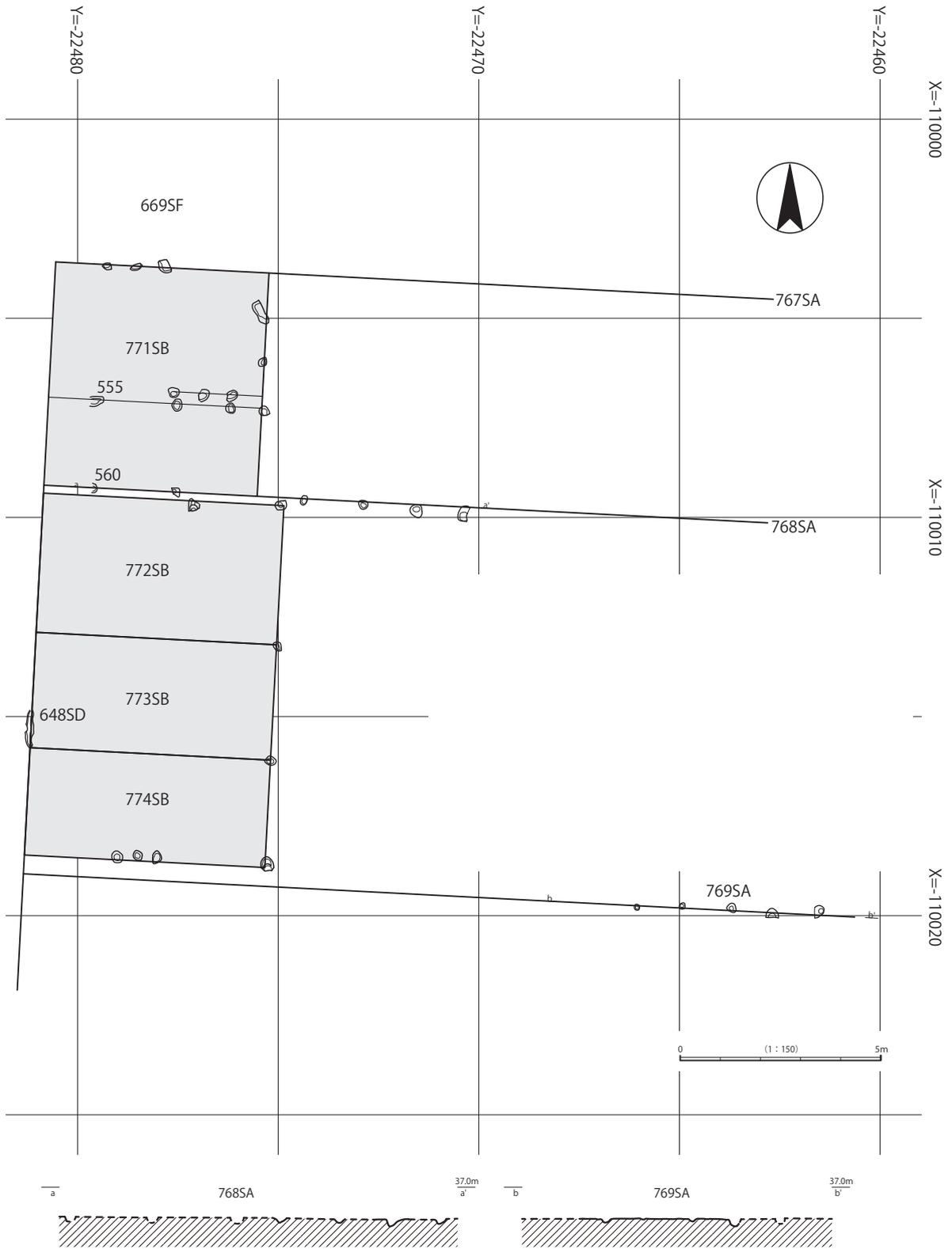


図 29 町屋建物 771SB ~ 774SB・柵 (塀) 767SA ~ 769SA

+ (1.1)E 余りの、割長屋の南端の房である。南側妻壁に掘立柱 3 柱穴が確認できる。建物内には、いずれも京Ⅶ期中の土坑 371SK がオク中央に、土坑 385SK が南側妻壁中央付近に見られる。

772SB ~ 774SB 東側のウラ、768SA と 769SA に挟まれた範囲には、京Ⅶ期古までの土坑 310SK と、京Ⅶ期まで遅れる可能性のある井戸 303SE 等が見られる。

### 柵（塀）767SA ~ 769SA (図 29)

北区・南区の B1、C2、D4、E4 グリッドに位置する。それぞれの延長距離は不明であるが、掘立柱の柵（塀）3 条と推測される、東西方向の N-93° -E 余りの傾きをもつ一群である。

**767SA** 767SA は、建物 771SB 北側妻壁の北東隅に取り付くと想定される柵（塀）である。北側の 699SF との境に設けられたと推定している。

**768SA** 768SA は、これも 771SB 南側妻壁の南東隅に取り付く柵（塀）である。残存距離は、南東角から 4 柱穴、4 間以上（延長 5.2m 以上、 $W1.1+1.5+1.3+1.3+XE$ ）が残る。772SB との間には、約 0.2m の隙間が生じている。

**769SA** 769SA は、774SB の南側妻壁より約 0.5m 南側に設けられたと考えられる柵（塀）である。残存距離は、774SB の南東隅から約 9.2m 東に離れたところに 5 柱穴、4 間以上（延長 4.5m 以上、 $WX+1.1+1.2+1.1+1.1+XE$ ）が残る。

### 土坑 076SK (図 30)

北区の C1 グリッドに位置する。柱穴 730P・731P を切り、柱穴 072P に切られる。

残存規模は、長軸 0.9m、短軸 0.77m、深さ 0.3m で、主軸は東西方向の楕円形土坑である。

堆積層は 076-1・2 層の 2 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅶ期古・中である。

### 土坑 100SK (図 31)

北区の D2 グリッドに位置する。東側の土坑 099SK・101SK・618SK を切り、西側の土坑 682SK に切られる。

残存規模は、長軸 1.88m、短軸 1.33m 以上、深さ 0.84m で、底部の標高は 35.36m である。主軸は北東方向で、楕円形土坑である。

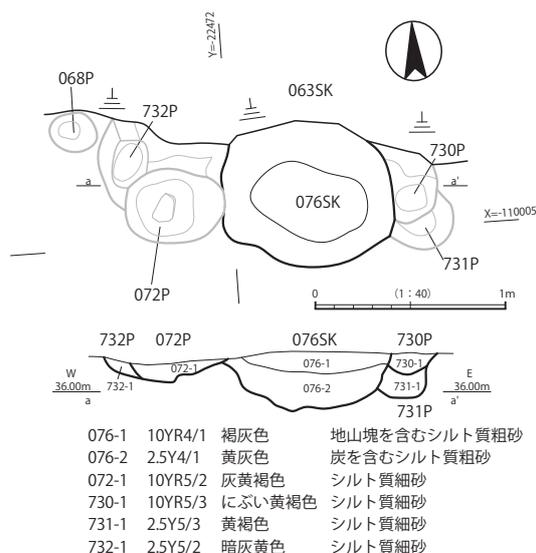


図 30 土坑 076SK

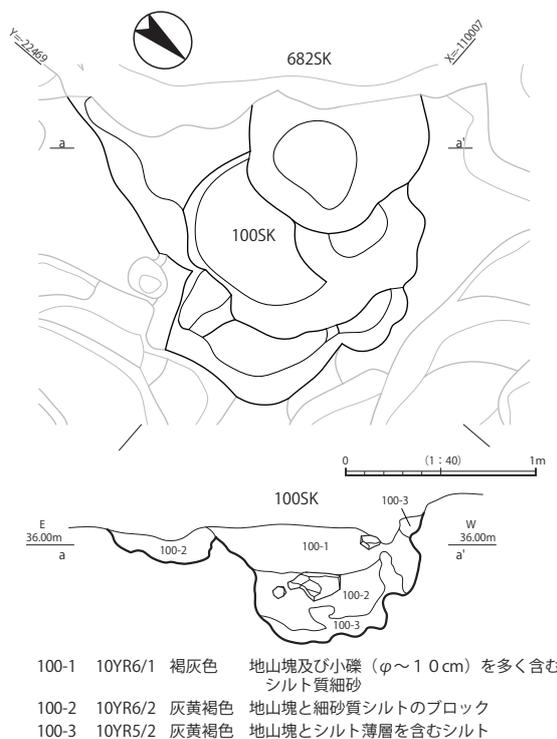


図 31 土坑 100SK

堆積層は 100-1 ～ 3 層の 3 層である。

出土遺物は、土師器、中国染付、白磁、土師質土器、常滑、瓦等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅶ期古である。

攪乱土坑 682 側の土坑底に、直径 48cm 余りの窪み痕跡があるので、曲物を井戸枠とした井戸であった可能性も残るが、堆積層が全て埋土層であることから土坑として扱う。

#### **土坑 310SK (図 23)**

南区の E4、F4 グリッドに位置する。北側を土坑 318SK・311SK が切り、西側を土坑 319SK が切る。

残存規模は、長軸 1.36m、短軸 1.04m、深さ 1.02m で、底部の標高は 34.93m である。主軸は南北方向で、楕円形土坑である。

出土遺物は、土師器、常滑等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅶ期古である。

この遺構は、土坑 100SK 同様に堆積層が全て埋土層であり土坑とみられる。

## 6. 第 5 期の主要遺構

京Ⅶ期新の時期の遺構と考えられる。この時期の遺構は、極めて少なく辻子 699SF と土坑 086SK のみである。辻子 699SF については、第 5 期にも存在していたものと考えており、記述は第 4 期で行っているため重複をさけるため省略する。なお、側溝 643SD の存在は不明であり確認できない。遺構は激減しており、調査地の大部分が荒地となっていた可能性が高いと考えられる。

#### **土坑 086SK (図 18)**

北区東壁 1 壁際の D1 グリッドに位置する。上層を土坑 083SK に切られ、南側を土坑 697SK に切られ、底のみが残る状態である。

残存規模は、長軸 0.83m、短軸 0.32m、深さ 0.19m である。東壁 1 の中に大部分が入り、主軸・形状等も不明である。

堆積層は、焼土片や炭を含む最下層の 086-1 層のみが残る。

出土遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、白磁、瓦等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅶ期新の時期である。

## 7. 第 6 期の主要遺構

京Ⅷ期古～新の時期の遺構と考えられる。主たる遺構は、町家遺構である。辻子 699SF については、この第 6 期にも存在したと考えており、記述は重複をさけるため省略する。

#### **町屋建物 761SB ～ 765SB (図 32)**

北区・南区の西側 B1 ～ 5、C1 ～ 5 グリッドに位置する。油小路通に面する掘立柱の町家建物と推測されるもので、主軸が N-2.5° -E 余り東に傾く一群である。北側の 761SB ～ 764SB は

割長屋 4 房分と考えられ、隙間を開けた南側の 765SB は別の割長屋の北端の房か独立屋と考えられる。なお、油小路通東側ラインが不明であるが、拡張区の柱穴 654P を西端として各町家の規模を復元した。また、攪乱や遺構が多いこともあるが、第 4 期同様にいずれの建物内からも、叩きの土間痕跡やカマド、井戸は検出されなかった。

761SB ～ 764SB 東側のウラ、775SA と 776SA に挟まれた範囲には、京Ⅶ期古までの小土坑 343SK・532SK、京Ⅶ期中までの大型円形土坑 113SK、土坑 618SK が、京Ⅶ期新までの土坑 105SK 等がある。

**761SB** 761SB は、割長屋 4 房の中では最も大きい房で、南北間口約 5.0m、東西奥行（妻行）5 間（約 7.6m、W (1.4) + (1.5) + (1.5) + (1.6) + (1.6) E) 余りの建物である。北側妻壁の路側から 2.9m に、掘立柱の 1 柱穴を確認できる。北側妻壁から南 3.3m に東西 7 間（約 7.6m、W (1.25) + (1.25) + 1.0+1.0+1.0+ (1.0) + (1.1) E) の柱列が推測される。間仕切りと考えられる。761SB の北側には辻子 699SF が残る。また、761SB の北東隅には柵（塀）775SA が取り付き、東側に延びていたものと推測される。

**762SB** 762SB は、南北間口約 2.7m、東西奥行（妻行）約 7.7m 余りの、北から二つ目の房である。建物内の中央北側界壁近くに、京Ⅷ期新の方形土坑 606SK が見られる。

**763SB** 763SB は、南北間口約 2.7m、東西奥行（妻行）約 7.7m 余りの、762SB と同じ規模の北から三つ目の房である。建物内のオク南側界壁近くに、京Ⅷ期古の方形土坑 521SK が見られる。

**764SB** 764SB は、南北間口 2 間（約 3.0m、N1.5+1.5S）、東西奥行（妻行）5 間（約 7.6m、W (1.4) + (1.5) + (1.5) + (1.6) + 1.6E) 余りの、北から四つ目、南端の房である。拡張区の柱穴 654P を油小路通東ラインの一部と推測した。南側妻壁の南東隅には、東に延長する柵（塀）776SA が取り付く。764SB 妻壁と南側の町家建物 765SB との間には、約 0.6m の隙間が見られる。763SB 同様に建物内のオク南側界壁近くに、京Ⅷ期中の方形土坑 372SK が、建物内の中央南側妻壁近くに京Ⅷ期古の土坑 373SK が見られる。

**765SB** 765SB は、北側妻壁を示すもので、独立屋の建物か割長屋かは不明である。南北間口 1 間以上（約 1.2m 以上）、東西奥行（妻行）7 間（約 8.2m、W (1.1) + (1.1) + 1.2+ (1.2) + (1.2) + 1.2+1.2E) 余りの建物である。柵（塀）は伴っていないようである。建物内には、北側妻壁側中央にやや大きい、京Ⅷ期古の土坑 391SK が見られる。

765SB 東側のウラ、776SA の南側には、京Ⅶ期新までの土坑 305SK・315SK 等がある。

#### **柵（塀）775SA・776SA**（図 32）

北区・南区の C1、D1、C4、D4 グリッドに位置する。それぞれの延長距離は不明であるが、掘立柱の柵（塀）2 条と推測される、東西方向の N-92.5° -E 余りの傾きをもつ一群である。

**775SA** 775SA は、建物 761SB 北側妻壁の北東隅に取り付くと想定される柵（塀）である。北側の 699SF との境に設けられたと推定している。残存距離は、761SB の北東隅から約 5.5m 東までに 2 柱穴が残り、5 間以上（延長 5.5m 以上、W1.1+ (1.1) + (1.1) + (1.1) + (1.1)

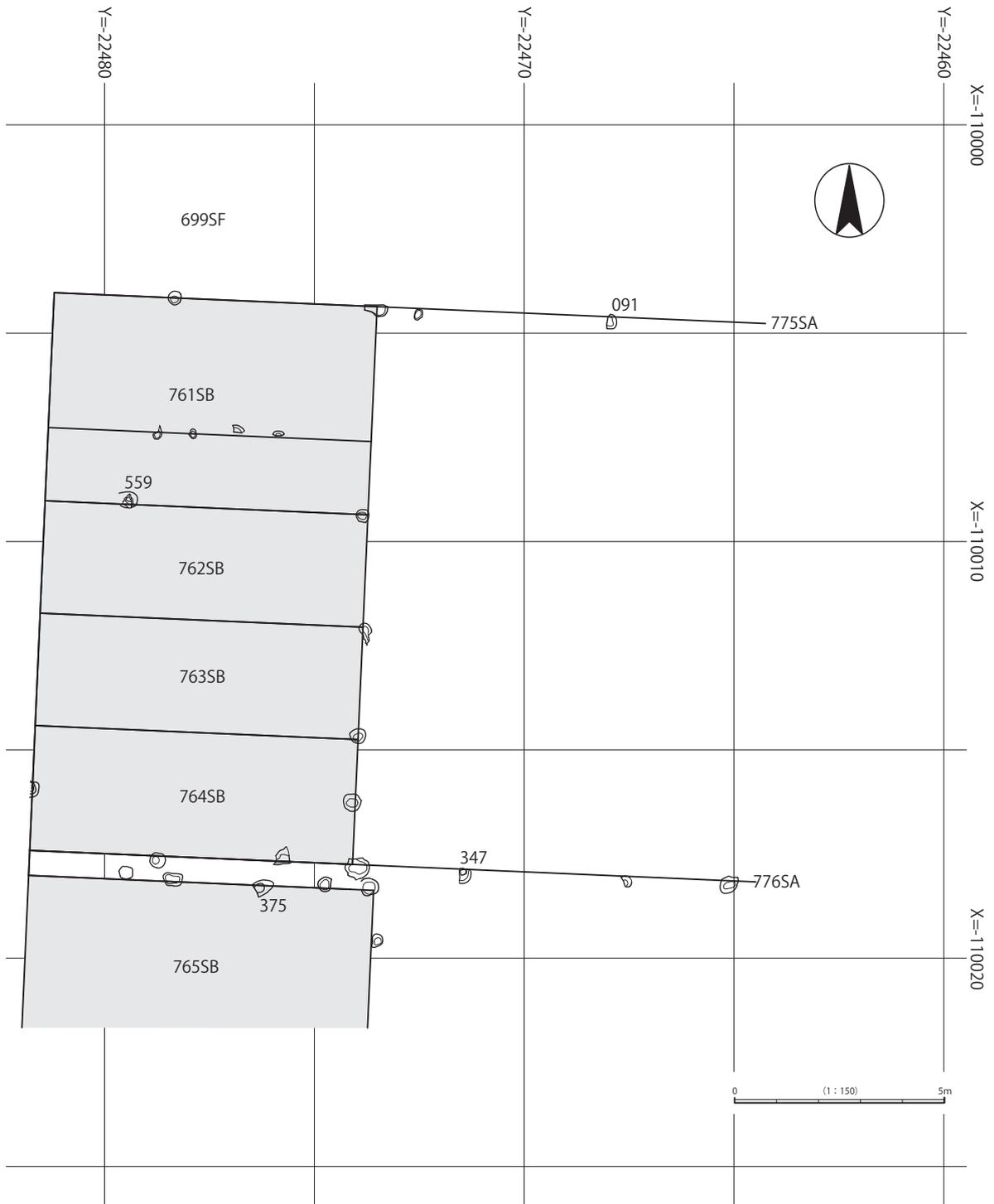


図 32 町屋建物 761SB ~ 765SB、柵 (塀) 775SA ・ 776SA

+XE) が推測される。

**776SA** 776SA は、建物 764SB 南側妻壁の南東隅に取り付くと想定される柵（塀）である。残存距離は、764SB の南東隅から約 9.1m 東までに 3 柱穴が残り、7 間以上（延長 9.1m 以上、 $W(1.3) + (1.3) + (1.3) + (1.3) + (1.3) + (1.3) + (1.3) + XE$ ）と推測される。

### 土坑 113SK (図 33)

北区の D2 グリッドに位置する。南側の土坑 115SK に切られる。

残存規模は、長軸 2.0m、短軸 1.96m、深さ 0.6m で、円形に近い土坑である。

堆積層は 113-1・2 層の 2 層である。

出土遺物は、土師器、白磁、常滑、瓦等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅷ期中である。

土坑 115 側の土坑底に、直径 39cm、深さ 18cm 余りの窪みがあるので、曲物を井戸枠とした浅い湧水井戸であった可能性も残る。

### 土坑 606SK (図 45)

北区の B2 グリッドに位置する。762SB の中央北側界壁近くにある。北側を 597SK に、南側を攪乱土坑 581SK・586SK に切られる。

残存規模は、長軸 0.7m、短軸 0.76m、深さ 0.36m で、主軸は東西方向、隅丸方形の断面が巾着状の土坑である。

堆積層は 1 層で、①シルトと小礫混じりのシルト質粗砂の互層 (7.5YR5/1) である。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、白磁、常滑、瓦等が出土している。

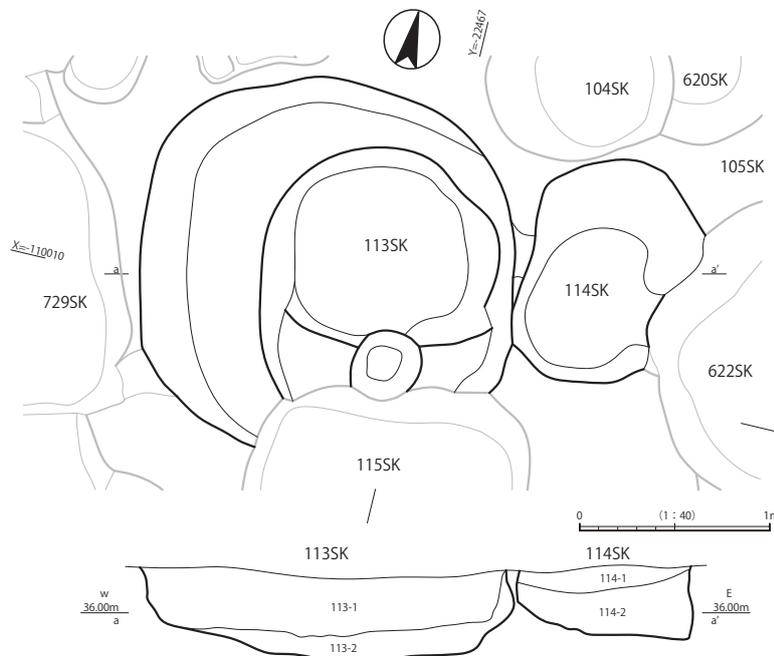
遺構の時期は、京Ⅷ期新である。

同様な建物内の隅丸方形土坑は、763SB の土坑 521SK や 764SB の土坑 372SK 等がある。その形状や建物内の位置が似通っていることも含め、注意を要する遺構である。

### 土坑 521SK (図 34)

北区の C3 グリッドに位置する。763SB のオク南側界壁近くにある。西側の湧水土坑 588SK を切る。

残存規模は、長軸 1.0m、短軸 0.98m、深さ 13cm で、主軸は東西方向、やや隅丸方形



113-1	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫 (φ~1cm)・地山塊を多量に含むシルト質粗砂
113-2	2.5Y5/2	暗黄灰色	砂礫 (φ~1cm) を多く含むシルト質粗砂
114-1	10Y5/1	灰色	砂礫 (φ~5cm) 混じりのシルト
114-2	2.5GY5/1	オリーブ灰色	砂礫 (φ~1cm) を多く含むシルト質細砂

図 33 土坑 113SK・土坑 114SK

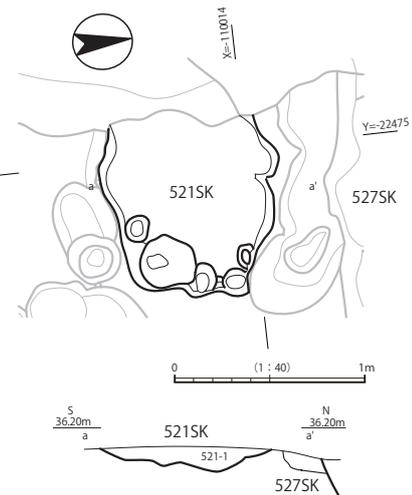
の浅い土坑である。東側土坑裾に5個の小ピットが並ぶ。

堆積層は、521-1層の1層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅷ期古である。

小ピットは、奥壁側を木杭で補強した痕跡かとも考えられるが、土坑の性格とも関係しているようにも思える。



521-1 10YR6/1 褐灰色 砂礫 (φ~2cm) 湿じりのシルト質粗砂

図34 土坑521SK

## 8. 第7期の主要遺構

京Ⅸ期古・中の時期の遺構と考えられる。主たる遺構は、町家遺構である。辻子699SFについては、この

第7期にも何らかの形で存在したと考えているが、上層と延長が攪乱を受けており、正確な状況は把握できていないため記述は除く。

### 町屋建物745SB～749SB (図35)

北区・南区の西側B2～4、C2～4グリッドに位置する。6期と共に油小路通に面する掘立柱の町家建物と推測されるもので、主軸がN-2.5°-E余り東に傾く一群である。北側の745SBは独立屋で、746SB～749SBは割長屋4房分と考えられる。本来、独立屋と割長屋の壁は接しているだけで、別壁であるが、攪乱が激しいこともあり2枚壁が明確に確認できていない。東側に繋がる柵(塀)についても、確認することができていない。なお、油小路通東側ラインが不明であるが、拡張区の柱穴649Pを西端として各町家の規模を復元した。また、攪乱や遺構が多いこともあるが、他の時期と同様にいずれの建物内からも、叩きの土間痕跡やカマド、井戸は検出されなかった。

746SB～749SB東側のウラには、京Ⅸ期古までの土坑319SK、京Ⅸ期中までの隅丸方形土坑115SKと長方形土坑314SK等がある。

**745SB** 745SBは、南北間口4間(約4.3m、N(1.3)+(0.9)++(1.0)+(1.1)S)、東西奥行(妻行)8間(約10.6m、W(1.8)+(1.2)+1.2+1.2+(1.4)+(1.4)+1.2+1.2E)余りの、独立屋の建物である。745SBの北側外には、辻子699SFの痕跡が残っていたものと考えられ、路から入る西側の口に南北方向の柵(塀)766SAが設けられている。南側妻壁には、割長屋の北側妻壁が接する。

建物内には、路から奥へ約6.2mの建物オクに、北側妻壁から約1.0m、南側妻壁からも約1.0mに、京Ⅸ期中までの半地下式土坑158SKが建物に平行して東西に設けられている。

**746SB** 746SBは、南北間口約3.2m、東西奥行(妻行)約7.0m余りの、割長屋の北から一つ目の房である。割長屋746SB北側妻壁を示す柱穴は、攪乱遺構により確認できていない。復元図35では同一壁のようにも見えるが、柱間間隔も異なっており2枚壁である。他に745SB



图 35 町屋建物 745SB ~ 749SB・柵 (塀) 766SA・半地下式土坑 158SK

か 746SB の遺構なのか明確でないが、北妻壁際中央付近に京Ⅸ期古までの隅丸方形で巾着袋型の土坑 597SK がある。

**747SB** 747SB は、南北間口約 2.4m、東西奥行（妻行）約 7.0m 余りの、割長屋の北から二つ目の房である。

**748SB** 748SB は、南北間口 2 間（約 2.4m、N1.2+1.2S）、東西奥行（妻行）約 7.0m 余りの、割長屋の北から三つ目の房である。7 期では、拡張区の柱穴 649P を路側の西端として復元している。

**749SB** 749SB は、南北間口 2 間（約 3.2m、N1.6+1.6S）、東西奥行（妻行）5 間（約 7.0m、W (1.4) + (1.4) + (1.4) + (1.4) E) 余りの、割長屋の南端の房である。この 749SB よりも南側の遺構については、確認できていない。

**柵（塀）766SA**（図 36）

北区の B1 グリッドに位置する。南北方向の N-2.5° -E 余りの傾きをもつ柵（塀）である。この 766SA は、辻子 699SF 上に南北に設けられていて、路から東側への侵入を規制する目的で作られている。

残存規模は、745SB の北西隅からオクへ 1 間目（1.8m）の柱穴付近から南北に 10 柱穴（626P～637P）が残り、南側から南北間口が 7 間（約 1.89m、S (0.24) + (0.24) + 0.24+0.24+0.39+0.24+0.3E）と、57cm 間隔をあけて 3 間以上（約 0.72m 以上、S0.24+0.24+0.24+XN）の、総延長 3.18m 以上が確認される。北側については、試掘トレンチ 801Tr にて不明である。また、間隔を開ける北側の柱穴 629P と南側の柱穴 632P には、其々西側の路側に 21cm 折れ曲がって、北側には柱穴 630P が、南側には柱穴 631P と、其々柱穴が見られる。しかし、これ以上の西側への延長については、西壁側で確認したが見つからなかった。

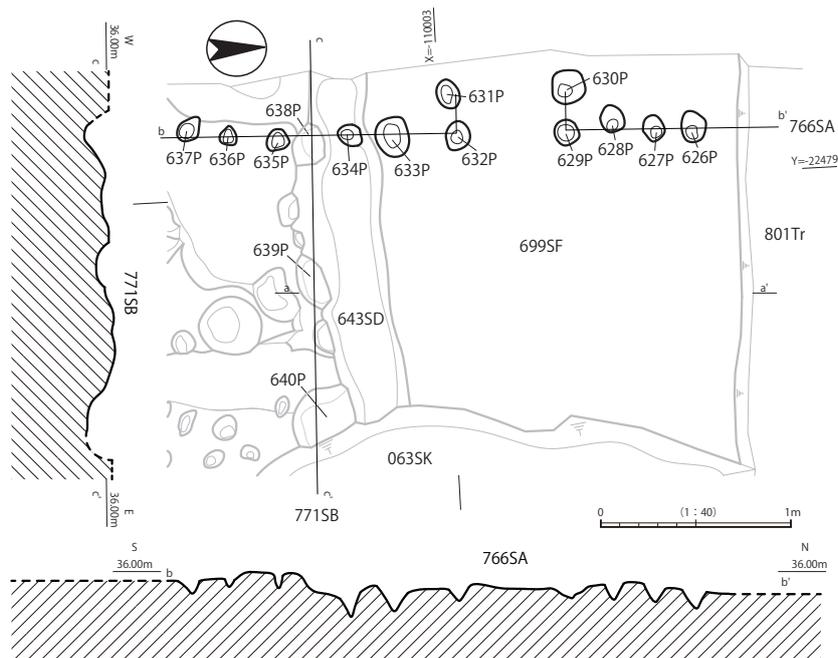


図 36 柵（塀）766SA

柱穴の形状は、どれも先の尖った杭状を呈していた。これらのことから 766SA を、塀よりも柵に近い遺構と考え、柱穴 629P と柱穴 632P を門柱とし、柱穴 630P と柱穴 631P を控柱とする簡素な冠木門（釘貫門）を考え、扉を設けていたものと推測することも可能かもしれない。いずれにしても、路から 1 間（1.8m）下がって、簡素な構造とはいえ 766SA の東側に、住宅か何かが存在したことを示すものであろう。

#### 半地下式土坑 158SK（図 37）

北区の C2 グリッドに位置する。江戸遺跡で「穴蔵」「地下式倉庫」等と呼ばれる、土天井でない長方形の土坑である。北側を井戸 064SE・065SE に、南西側を 671SK に切られる。

土坑 158SK は、四隅のうち南西隅を攪乱により失うが北西隅・北東隅・南東隅に柱穴を残し、西面を除き残り三面の中央に 1 基の柱穴をもつもので、現状では 6 個（168P・167P・645P・644P・121P・117P）の柱穴が残存し、そのうち 3 ヲ所（167P・121P・117P）の柱穴底に根石が残されていた。なお、西面の中央には柱穴を確認していないので、全体では 8 個の柱穴であったと考えられる。柱穴の深さは、床面から約 0.4～0.5m である。

土坑の残存規模は、上端が長辺 3.36m、短辺 2.09m、深さは約 0.65m で、下端が北側長辺 3.06m（下端の南側長辺 2.9m）、短辺 1.95m を測る。柱間規模は、北面 2 間（2.94m、W1.42+1.52E）、南面 2 間（2.78m、W（1.39）+1.39E）、東面 2 間（1.94m、N0.91+1.03S）、西面が 1 間（1.88m）と推測される。北面と南面は平行であるが、長さが異なるため、東面は斜めとなる。断面形状は、北面・西面・南面の壁面が比較的垂直に掘り下げられているのに対し、東面南側の壁面は斜め 42°の角度となっている。底面は、 $-1.5^\circ$ と僅かにではあるが東側に下がっており、東面で雨水や湿気の水を集めていたものと思われるが、溝や壺、枡等の集水施設の痕跡は確認できなかった。

堆積層は 5 層で、叩き床はない。地山塊を含む 158-3～5 層で埋め始め、これに炭を多量に含む 158-2 層で埋めていることから、最終は火災処理土坑として使われたものと思われる。壁際や床に圧痕も含め板材等の痕跡は、確認できなかった。

遺構の構造を、断面構造と床面痕跡、類例等から復元しておきたい。床面には叩き床が無いことから、掘立柱の天端を床面から約 6cm 余りで切り揃えた上面に桁と梁を渡し、さらに横木を渡して側壁際まで床板を張ったものとみられる。側壁は東面を除いてほぼ垂直であることから、板材の痕跡は確認できていないが、床板の上に別の一階床板までの長さの支柱を立て、その上に梁と桁を渡して井戸枳支柱の様なものを設けたと考えられる。この各面の後ろに、横板か縦板を柱の後ろ側に、横板なら落とし込んで積み上げ、縦板であれば横に並べて、板材と掘方の隙間に裏込めを行いながら固定し、これを一階床板の高さまで行う。そして、その上に天井板兼床板を架けていたと考えられる。その時の出入口は、東面の北側と南側の異なる傾斜と、わざわざ東面を二間としていることから、東面南側に階段を入れ出入口としていたのではないかと推測しておきたい。

出土遺物は、土師器、須恵器、白磁、常滑、埴等が出土している。

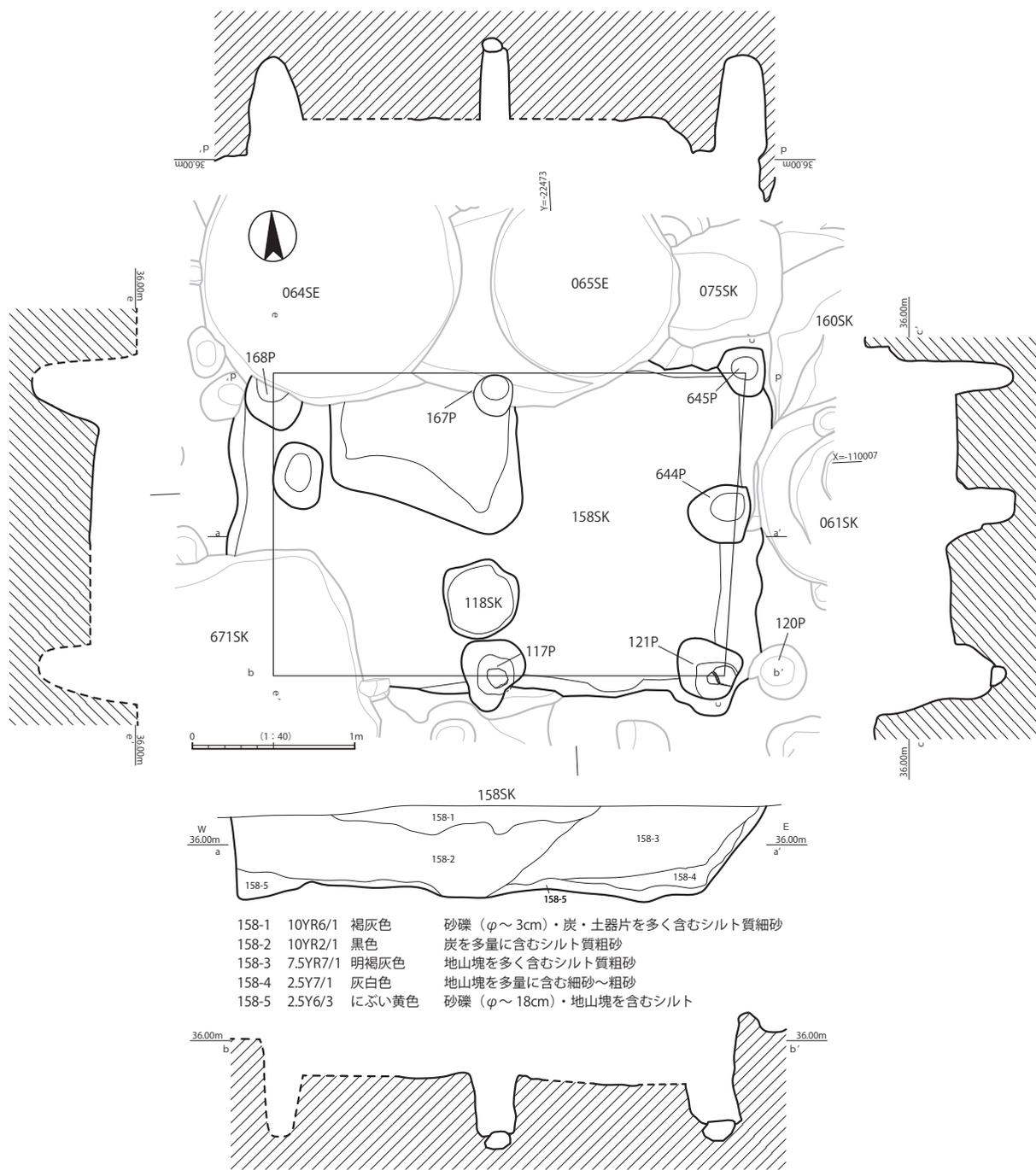


図 37 半地下式土坑 158SK

遺構の時期は、京IX期中までである。

平時での保管庫として、火災など緊急時の貴重品（その当時の人々にとって）の隠し場所として作られた施設であったのではないかと考えられる。

#### 土坑 597SK (図 45)

北区の B2 グリッドに位置する。北側の 745SB と 746SB の中間に位置するが、遺構の性格からは 746SB の中央北側妻壁際にあると解釈する。

残存規模は、長軸 0.78m、短軸 0.86m、深さ 0.42m で、主軸は東西方向、隅丸方形で断面が

巾着状の土坑である。南側には、同規模、同形状の土坑 606SK がある。

堆積層は 597-1・2 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、常滑等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅸ期古である。

### 土坑 115SK (図 38)

北区の D3 グリッドに位置する。746SB のウラに位置する。北側の土坑 113SK を切り、南側の土坑 559SK に切られる。

残存規模は、長軸 1.5m、短軸 1.34m、深さ 0.84m で、主軸は東西方向、隅丸方形の深い土坑である。

堆積層は 115-1～5 層である。

出土遺物は、土師器、瓦質土器、白磁、常滑、瓦等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅸ期中である。

### 土坑 314SK (図 23)

南区の F4・5 グリッドに位置する。

残存規模は、長軸 2.68m、短軸 0.84m、深さ 0.66m で、主軸はやや東に傾く南北方向、細長い土坑である。

堆積層は 3 層で、①シルト質粗砂～細砂層 (5Y4/2)、②地山塊を多く含むシルト質細砂層 (5Y6/5)、③有機物を含む粗砂～細砂層 (5Y3/3) である。

出土遺物は、土師器、灰釉陶器、青磁、白磁、瓦質土器、常滑等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅸ期中である。

あたかも木棺墓のように平面的には見えるが、断面形状と堆積層からは廃棄土坑と考えられる。

## 9. 第 8 期の主要遺構

京Ⅸ期新・京Ⅹ期古・中の時期の遺構と考えられる。京Ⅸ期新に始まり、京Ⅹ期古～中までの遺構である。第 8 期の遺構は、主に町家遺構であるが、第 12 期と共に遺構数が多い。

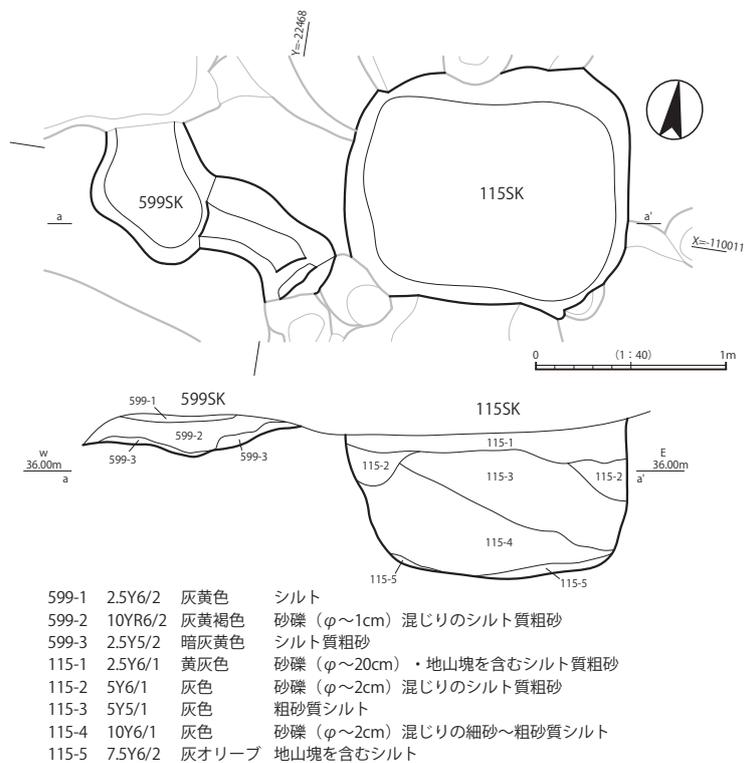


図 38 土坑 115SK

### 町屋建物 754SB～759SB (図 39)

北区・南区の西側 B1～4、C2～4 グリッドに位置する。油小路通に面する掘立柱の町家建物と推測されるもので、主軸が N-1°-E 余り東に傾く一群である。北側の 755SB とその南側の 756SB は独立屋で、757SB・758SB は割長屋 2 房分と考えられる。755SB の北側にも町家 754SB の存在が、758SB の南側にも町家 759SB の存在が、土坑、半地下式土坑、井戸等の分布等から推測されるが、建物自体は攪乱のため不明である。また、東側に繋がる柵（塀）についても、明確なものを確認することができなかった。なお、油小路通東側ラインが不明であるが、拡張区の柱穴 657P を西端として各町家の規模を復元した。また、攪乱や遺構が多いこともあるが、他の時期と同様にいずれの建物内からも、叩きの土間痕跡やカマド、井戸は検出されなかった。

754SB 東側のウラには、京 X 期中までの土坑 085SK 等がある。755SB 東側のウラには、京 X 期中までの土坑 160SK 等がある。756SB 東側のウラには、京 X 期古までの土坑 619SK 等が、京 X 期中までの土坑 109SK・114SK 等がある。757SB・758SB 東側のウラには、京 X 期古までの土坑 318SK 等が、京 X 期中までの土坑 599SK・542SK 等がある。759SB 内には、京 X 期古までの半地下式土坑 406SK 等が、東側のウラには京 X 期古までの井戸 320SE 等が、京 X 期中までの土器集積土坑 322SK や土坑 317SK 等がある。

**754SB** 754SB は、その規模は攪乱により不明であるが、東側のウラには京 X 期中までの土坑 085SK 等がある。

**755SB** 755SB は、南北間口 3 間 (約 3.1m、N1.2+ (1.2) + (0.7) S)、東西奥行 (妻行) 5 間 (約 6.0m、W (1.2) + (1.2) +1.2+ (1.2) + (1.2) E) 余りの、独立屋の建物である。南側妻壁は、756SB に接する。北側妻壁から南に 1.2m のところには、東西に間仕切り壁とみられる柱穴が有る。

建物ウラには、京 X 期古までの土坑 085SK と、京 X 期中までの 756SB の解体後に建物北東隅部分に設けられた土坑 160SK がある。

**756SB** 756SB は、南北間口 3 間 (約 3.4m、N (1.1) + (1.1) +1.2S)、東西奥行 (妻行) 10 間 (約 11.0m、W (1.1) + (1.1) + (1.1) + (1.1) + (1.1) +1.1+1.1+1.1+1.1+1.1E) 余りの、独立屋の建物である。南側妻壁は、割長屋の 757SB に接する。北側妻壁から南に 2.2m のところには、東西に間仕切り壁とみられる柱穴 3 個以上 (約 2.8m 以上、WX+1.2+1.2+0.4E) が並ぶ。

建物ウラには、京 X 期古までの井戸と考えられる土坑 619SK が、京 X 期中までの土坑 109SK・114SK 等がある。

**757SB** 757SB は、南北間口 3 間 (約 4.0m、N (1.3) + (1.3) +1.4S)、東西奥行 (妻行) 5 間 (約 7.6m) 余りの、2 房の割長屋の北側建物である。北側妻壁は、756SB に接する。

**758SB** 758SB は、南北間口 3 間 (約 4.5m、N1.5+1.5+1.5S)、東西奥行 (妻行) 5 間 (約 7.6m、W (1.9) + (1.3) + (1.3) + (1.3) +1.8E) 余りの、2 房の割長屋の南側建物である。南側妻壁には、759SB は接していないようで、隙間が想定される。

建物ウラには、京 X 期古までの土坑 318SK が、京 X 期中までの土坑 542SK・599SK・111SK 等がある。

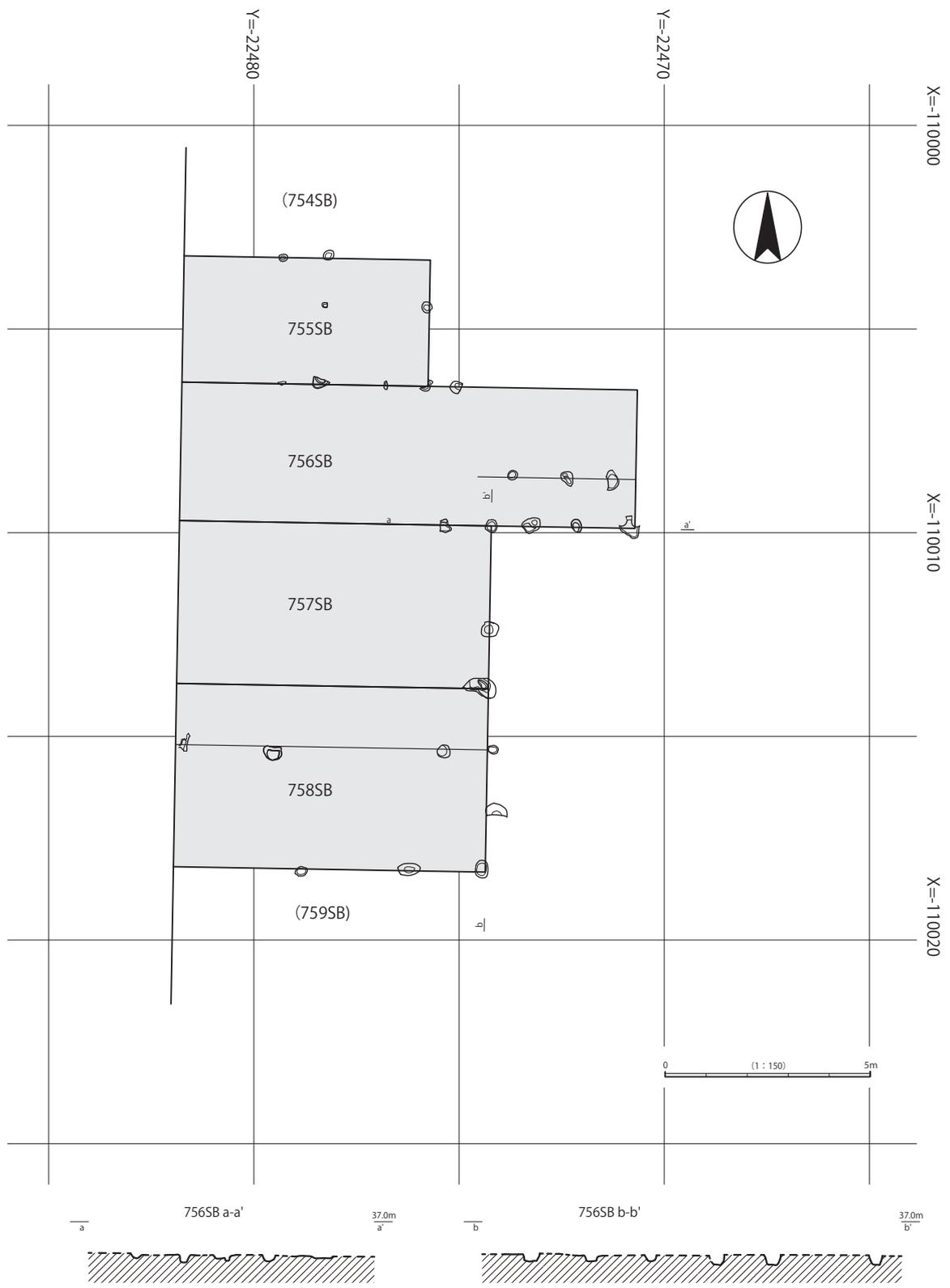


図 39 町屋建物 754SB ~ 759SB

**759SB** 759SBは、攪乱により建物を復元できないが、半地下式土坑406SKの存在から南北2m以上、東西17m余りの、独立屋の建物が想定される。調査区としては、最大の建物ではなかったかと考えられる。

建物ウラには、京X期古までの井戸320SEが、京X期中までの土器集積土坑322SKや土坑317SK等がある。

**土坑 085SK (図 40)**

北区のD1グリッドに位置する。西側の攪乱土坑063SKに切られる。

残存規模は、長軸2.02m、短軸1.6m、深さ0.94mで、主軸は南北方向、円形に近い楕円形土坑である。

堆積層は085-1～3層の3層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、白磁、瓦質土器、常滑等が出土している。

遺構の時期は、京X期中までの遺構である。

**土坑 160SK (図 41)**

北区のC2グリッドに位置する。西側の土坑075SKと、南側の土坑061SKと、東側の土坑077SKに切られる。

残存規模は、長軸1.96m、短軸1.62m、深さ0.41mで、主軸は北西方向、楕円形土坑である。

堆積層は160-1～4層の4層で、3層に細砂～粗砂層を挟む。

出土遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、瓦質土器、常滑、瓦等が出土している。

遺構の時期は、建物756SBの北東隅を壊しており、756SB廃絶後の京X期中の遺構である。

**土坑 619SK (図 23)**

北区のD2グリッドに位置する。西側の土坑0618Kを切る。

残存規模は、長軸2.2m、短軸1.7m、深さ

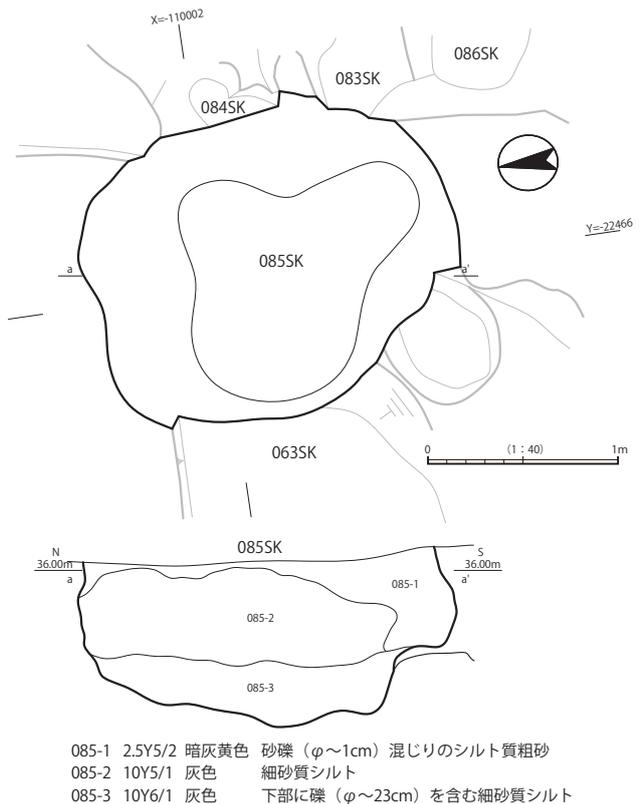


図 40 土坑 085SK

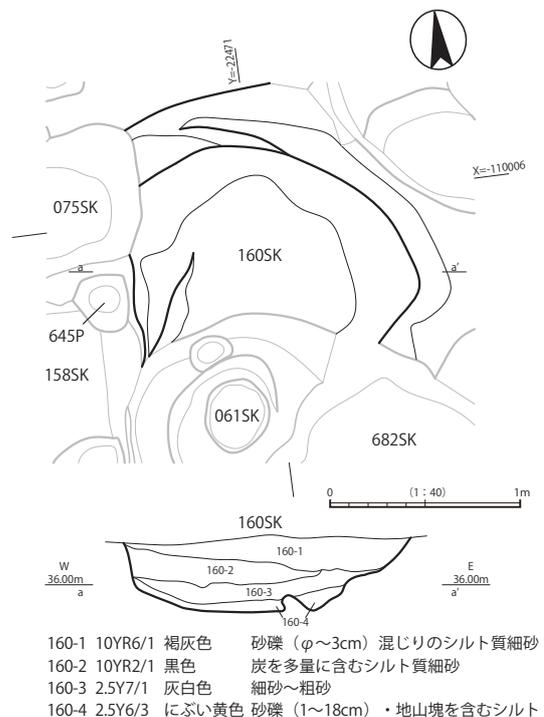


図 41 土坑 160SK

0.84m で、底部の標高は 35.22m である。主軸は東西方向、楕円形土坑である。

堆積層は 619-1 ～ 3 層の 3 層である。619-1 層・砂礫混じりのシルト質粗砂層 (2.5Y6/1)、619-2 層・砂礫混じりのシルト質細砂層 (2.5Y5/2)、619-3 層・シルト質極細砂層 (2.5Y5/2) であった。

出土遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、瓦質土器、常滑、瓦等が出土している。遺構の時期は、京X期古までの遺構である。

619SK の土坑底に、直径 50 ～ 54cm 余り、深さ 18m 余りの窪み痕跡があるので、曲物を井戸枠とした浅い湧水井戸であった可能性も残る。

#### 土坑 109SK (図 42)

北区の D2 グリッドに位置する。西側を土坑 620SK と、南側を土坑 622SK に切られ、大半を東壁 1 内とする。

残存規模は、長軸 1.58m、短軸 0.8m、深さ 0.46m で、形状が不明な土坑である。

堆積層は 109-1 層の 1 層である。

出土遺物は、土師器、瓦質土器等が出土している。

遺構の時期は、京X期中までの遺構である。

#### 土坑 114SK (図 33)

北区の D2 グリッドに位置する。東側を土坑 622SK に切られる。

残存規模は、長軸 1.24m、短軸 0.9m、深さ 0.4m で、主軸は南北方向、楕円形土坑である。

堆積層は 109-1・2 層の 2 層である。

出土遺物は、土師器、瓦質土器等が出土している。

遺構の時期は、京X期中までの遺構である。

#### 土坑 318SK (図 19)

南区の F4 グリッドに位置し、北側半分以上が北壁 2 に入る。東側を大きく井戸 690SE に切られる。

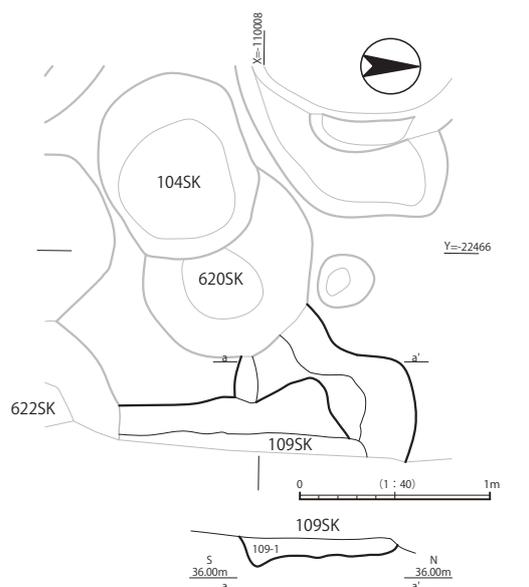
残存規模は、長軸 1.53m、短軸 1.46m、深さ 1.26m で、主軸は不明、楕円形土坑とみられる。

堆積層は 318-1 ～ 7 層の 7 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、青磁、常滑、信楽、瓦等が出土している。

遺構の時期は、京X期古までの遺構である。

底部の標高は 35.02m で、北壁 2 の断面形状も含め井戸であった可能性もある。



109-1 7.5YR5/1 褐灰色 土器片を多く含むシルト質細砂

図 42 土坑 109SK

### 土坑 599SK (図 23)

北区の D3 グリッドに位置する。北側を土坑 115SK に、南側を大きく土坑 150SK に切られる。残存規模は、長軸 1.2m、短軸 0.56m、深さ 0.59m で、主軸は不明、楕円形土坑とみられる。堆積層は 599-1 層の 1 層で、シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦質土器等が出土している。

遺構の時期は、京 X 期中までの遺構である。

### 土坑 542SK (図 23)

北区の C3 グリッドに位置する。北側を攪乱土坑 589SK に、南側を 543SK に切られる。

残存規模は、長軸 2.62m、短軸 2.11m、深さ 1.19m で、主軸は東西方向、三角形土坑である。

堆積層は、上層が井戸 728SE の掘方で攪乱を受けており、542-1 層・シルト質細砂層 (10YR4/1) が 20cm 余り残るのみであった。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器等が出土している。

遺構の時期は、京 X 期中までの遺構である。

底部の標高は 35.0m で、井戸であった可能性もあるが、不明である。

### 井戸 320SE (図 15)

南区の E5 グリッドに位置する。北側を溝 351SD に、上層を 317SK 等に切られ、南側は南壁に一部が入る。

残存規模は、長軸 1.51m、短軸 1.18m、深さ 2.2m 余りで、掘方は円形である。底部の標高は 34.7m 余りである。掘方は 3 段以上の段掘りで、井戸枠は断面構造からは最下段のみであったと考えられる。井戸枠は曲物とみられ、曲物自体は残存していなかったが、直径 50 ～ 60cm、高さは 50cm 余りであると推測される。

堆積層は、上部を土坑 317SK に壊され不明であるが、下層では 320-1 ～ 5 層の 5 層で、断面からは上部まで井戸枠があったようには観察できない。

出土遺物は、土師器、青磁、常滑、瓦等が出土している。

遺構の時期は、京 X 期古までの遺構である。

### 土器集積土坑 322SK (図 43)

南区の E5 グリッドに位置する。西側を土坑 736SK に切られ、南側が南壁に入る。

残存規模は、長軸 3.34m、短軸 1.02m 以上、深さ 1.03m で、主軸は東西方向、やや西側に広い隅丸長方形土坑である。底面の形状は、西側にやや下がる窪みがあるが、ほぼ平らである。断面が既に円弧を描くことから、短軸は 20 ～ 30cm 南で終わる可能性が高い。

堆積層は、322-1 ～ 5 層であるが、大量の完形品を含む土器集積は、この内の 322-2 層 (砂礫 (φ ～ 12cm)・炭・土器片を多量に含むシルト質細砂層) から出土したものである。遺物の出土状況は、完形品の土師器皿を中心に、折り重なるように出土しているが、断面に箱の様な痕跡は観察していない。よって、土器集積土坑としたが、土器を集中して廃棄した廃棄土坑と考えられる。

出土遺物は、土師器、灰釉陶器、青磁、白磁、瓦質土器、常滑、東播系陶器等が出土している。

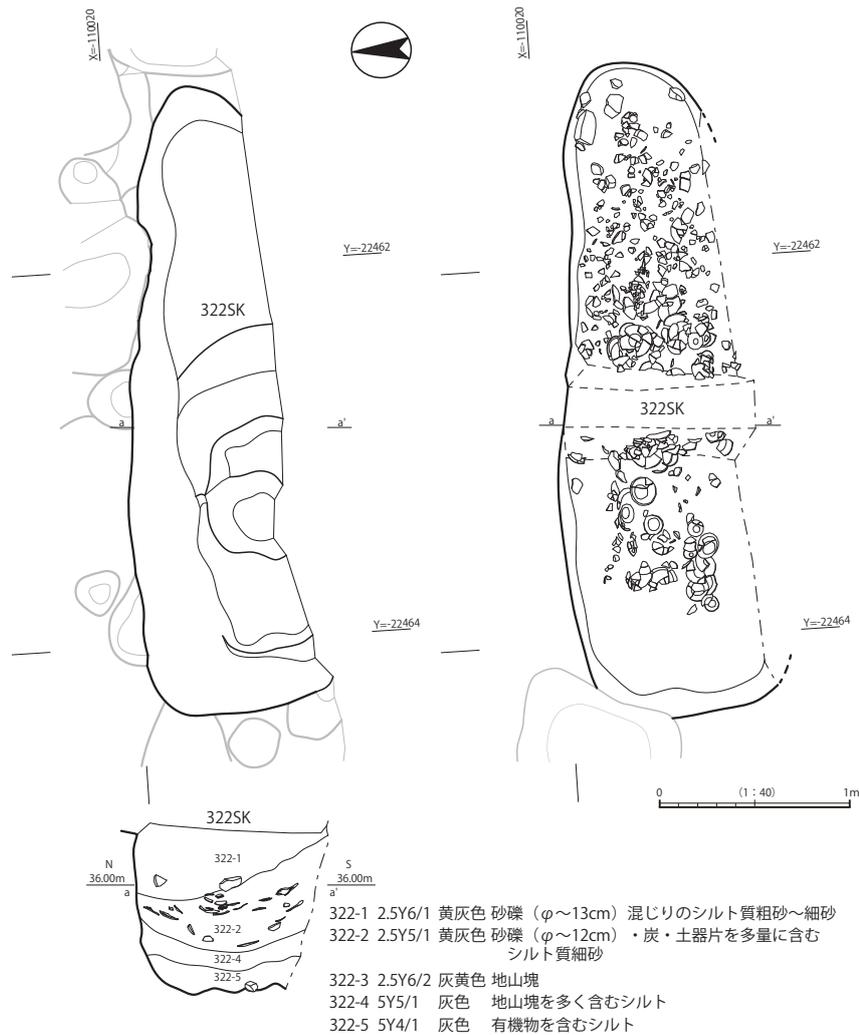


図 43 土坑 322SK

後述する、第 5 章第 1 節にて遺物組成を検討した。

遺構の時期は、京 X 期中までの遺構である。

322SK は、大型他建物 759SB のウラに設けられた、廃棄土坑と考えられた。土器の量を考えると、759SB を宅地（屋敷）とする人物がどのような性格の持ち主で、何故これ程の土師器皿を必要としたのか、他の北側の宅地との間に大きな格差が生じているように見受けられる。

#### 半地下式土坑 406SK (図 15)

南区の D5 グリッドに位置する。半地下式の方形土坑である。西側を土坑 334SK に切られ、北側の土坑 332SK を切る。南壁に大部分が入る。

残存規模は、長軸 3.32m、短軸 0.6m 以上、深さ 1.02m で、主軸は東西方向の長方形土坑である。底面の規模は、長さ約 2.5m、幅約 0.3m 以上で、比較的平らであるが僅かに東側に下がり、東辺に溝状の窪みが見られる。柱穴や板材の痕跡等は、確認していない。

堆積層は、406-1・2 層の 2 層で、406-1 層・砂礫 (φ ~ 5cm) ・地山塊を含むシルト質細砂層 (10YR5/2)、406-2 層・砂礫 (φ ~ 2cm) ・地山塊を含むシルト質粗砂~細砂層 (10YR6/2) で、

上下層に大きな変化は無く、一気に埋まった可能性が高いと考えている。

出土遺物は、土師器、緑釉陶器片等が出土しているが、極めて少ない。

遺構の時期は、京X期中までの遺構である。

406SK は、本来 759SB の床下に位置するため、406SK の東側で、土器集積土坑 322SK の西側までの間が、建物 759SB が存在した範囲と考えられる。

## 10. 第9期の主要遺構

京X期中の時期に洪水が発生し、その後の京X期新の時期の遺構と考えられる。調査地内に洪水による4層の堆積と、4層より低い場所に堆積した2-2層の堆積により、調査地が耕作地となった時期と考えている。

### 洪水堆積物と耕作土（図85）

4層（砂礫（ $\phi \sim 5\text{cm}$ ）混じりのシルト質細砂層）は、北区北東隅から円弧を描いて、北壁1側から西壁側、南区南西隅までの調査区北西側に堆積する。この範囲は、第1期の自然河道770SRのややカーブする外側部分に当たる。おそらく、洪水が自然地形を残していた自然河道770SRの窪地を流れたためであろうと考えられる。この洪水の溢流堆積物が、4層に相当するもので、砂礫混ざりであるのはそのためである。層厚は、西壁周辺から南区南西隅が最も厚く、約50cmあり、北区北東隅で約14cmほどである。

この4層上の高い部分を、4層の堆積方向に沿って流れているのが溝598SDである。この4層は、4層を耕作土とする土壌層である3層の存在でも明らかなように、畠として利用されていたことが土層観察からもうかがえる。さらに、後半期には2-2層での水田範囲を拡大した可能性のある畦らしきものが4層上にも散見されることから、一部水田化を図った可能性もある。

2-2層（砂礫（ $\phi \sim 5\text{cm}$ ）混じりのシルト質粗砂層）は、洪水による4層の内側、湾曲する流路側に堆積した堆積物で、さらに東側はポイントバー（突州）的な堆積があったと考えられる。このため、洪水の後には細砂～シルト分の多い堆積物が残される。この層を土壌化したのが2-2層である。層厚は、南壁の観察では最大37cmある。

この4層よりもやや低い位置に水田が行われたことは、大きな復旧作業を行うことができない場合や必要性が低い場合には、ごく自然な成り行きであったと思われる。この水田範囲は、当初の幅は18m余りであったと推測される。その後水田耕作を継続するため、溝598SDが用水路として設けられたと考えられる。なお、明確な鉄集積層やマンガン集積層が形成されていないため、それほど長期にわたる耕作ではなかったものと思われる。

### 溝598SD・溝566SD（図44・図45）

北区のB1・2グリッドに位置する。水田の用水路と考えられる。北側を攪乱土坑063SKに切られ、南側を土坑586SKや土坑581SKに切られ、南側の延長が分からない状態である。

残存規模は、延長7.6m、幅0.75～1.54m、深さ12～21cmで、主軸は北北東方向で南流する。598SDは、南側で2本に分岐しているように見えるが、当初の溝か支流が東側の流路・溝

566SD で、西側が主たる流路・溝 598SD である。分岐地点で溝幅が半減するため、当初は二分していたとみることができる。東側の支流である溝 566SD は、4 層上を南側に流していたようである。溝肩部の底には、杭先端の痕跡があり、溝肩の補強が図られていたものと思われる。

堆積層は、598SD が 598-1 ～ 4 層の 4 層で、566SD が 566-1 ～ 3 層の 3 層で、堆積層からも水が流れていたことは明確である。

出土遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦質土器、白磁、常滑、瓦等が出土している。

遺構の時期は、京X期新までの遺構である。

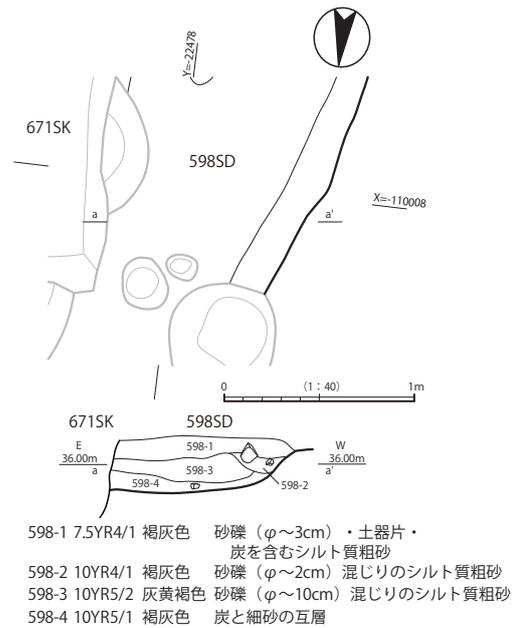


図 44 溝 598SD

## 11. 第 10 期の主要遺構

京X期新末から京XI期古初頃の時期に洪水が発生し、その後の京XI期古の時期を通じての遺構と考えられる。調査地内に洪水による 2-1 層の堆積があり、調査地の起伏が比較的平らな耕作地となり、水田耕作が行われた時期と考えている。

### 洪水堆積物と耕作土 (図 85)

2-1 層 (砂礫 (φ~15cm) 混じりのシルト質粗砂層) は、調査地全体を覆い、第 9 期の 4 層や 2-2 層の上に堆積した洪水堆積物で、平らな耕作地を形成した。南壁の 2-2 層上には、2-1 層 (シルト質細砂層) が薄くのっているところがあり、大雨や洪水の被害が 2-1 層堆積前にも起こっていた可能性がある。層厚は、北壁から南壁の厚いところでは最大 34cm あり、北北東方向からの緩やかな泥流堆積である。この堆積物を土壌化したのが 2-1 層である。

2-1 層上には、南区の東西方向に用水路である溝 351SD が設けられ、畦畔の状況を正確には把握できていないが、比較的方格な区画が作られていたようである。また、畦畔横には小規模な水溜かと思われる土坑 075SK・100SK 上層 (100-1 層)・355SK・344SK・334SK・312SK 等が見られる。

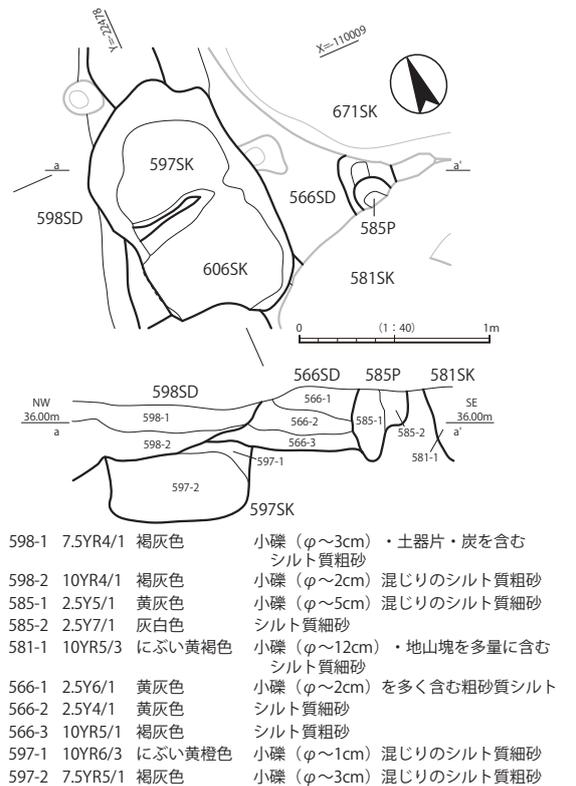


図 45 溝 598SD・溝 566SD・土坑 597SK・土坑 606SK

**溝 351SD (図 46・図 47)**

南区の B～G・4 グリッドに位置する。水田の用水路と考えている。中央を井戸 405SE や、南側を半地下式土坑 397SK に切られ、東端の井戸 303SE を切る。

残存規模は、延長 27.7m、幅 0.6～1.06m、深さ 0.58～0.92m と深く、主軸方向は東西方向である。溝底の深さから、西側に流していたものと考えられる。

堆積層は、351SD が 351-1～3 層の 3 層で、当初は滞水状態でシルトが堆積していたが、次第に流れのある細砂～粗砂の堆積となっていったようである。

出土遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦質土器、白磁、青磁、青白磁、常滑、肥前、瓦等が出土している。

遺構の時期は、京 XI 期古までの遺構である。

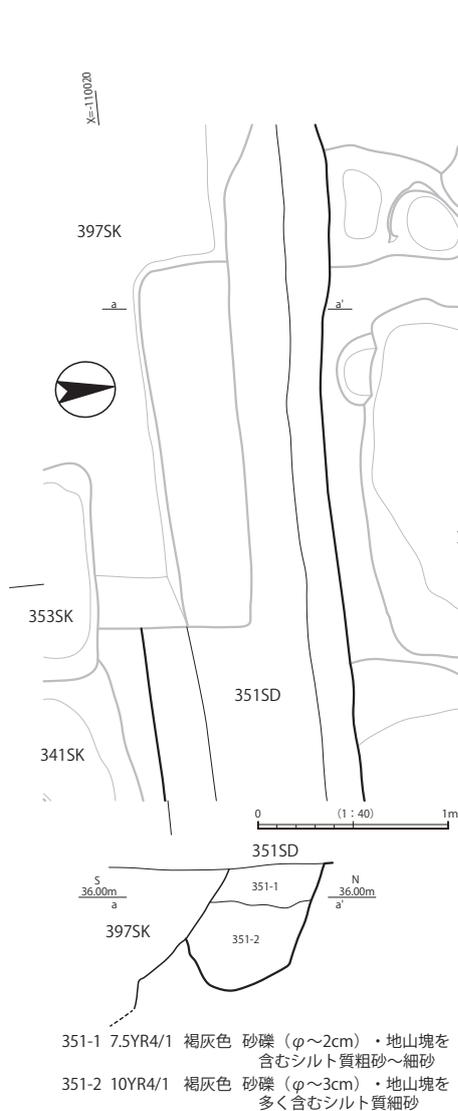


図 46 溝 351SD セクション 1

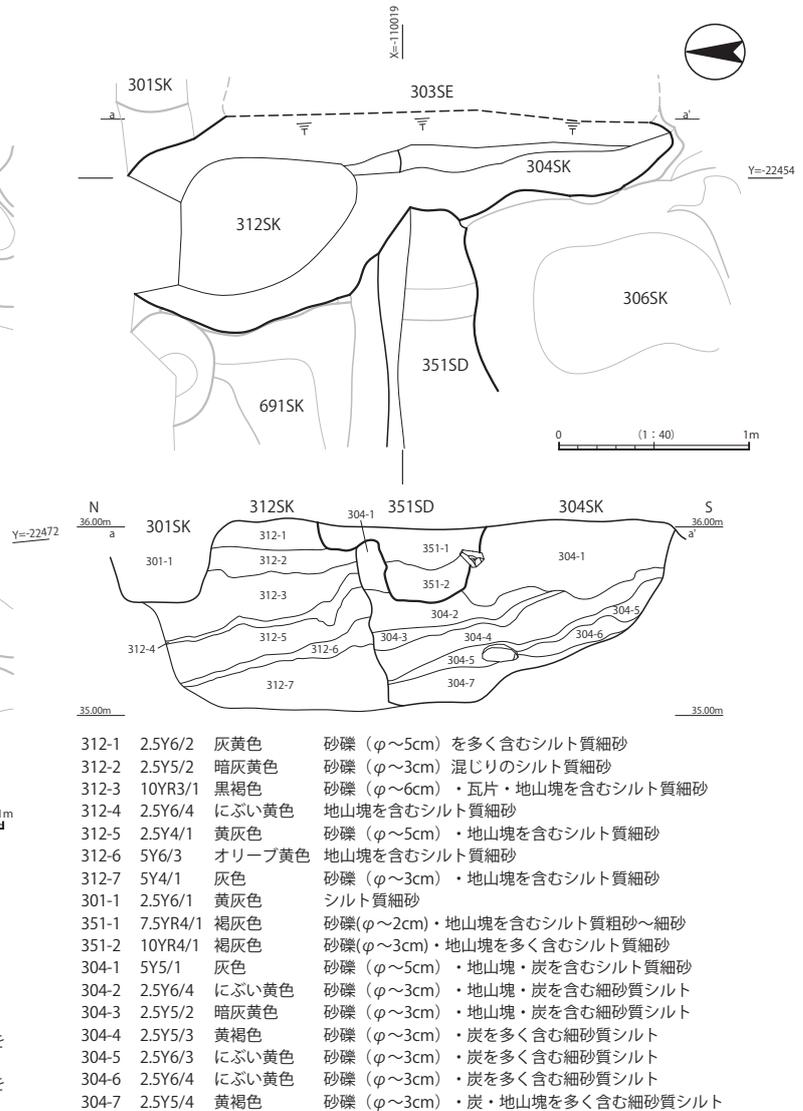


図 47 溝 351SD セクション 2

### 土坑 075SK (図 48)

北区の C2 グリッドに位置する。水田脇の水溜の土坑と考えている。西側を井戸 065SE に切れ、東側の土坑 160SK を切る。

残存規模は、長軸 0.68m、短軸 0.77m、深さ 0.54m と深く、主軸方向は東西方向である。

堆積層は、075-1 層の 1 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、常滑等が出土している。

遺構の時期は、京 XI 期古までの遺構である。

遺構の性格は、堆積構造を見ても長期間にわたって使われた痕跡はなく、単層のものが多く深いものが多いこと、京 XI 期古には溝 351SD や他の小土坑も全ての遺構が終焉を迎えており、原因は不明であるが水田を運用するのに必要な水の供給がない状況が生まれていたと推測しておきたい。このため、止む無く土坑 075SK・100SK 上層・355SK・344SK・334SK・312SK 等が水田畦畔脇に作られ、湧水を得ようとしたのではないかと考えられる。このことは、次の第 11 期の畠作に繋がっていくように思われる。

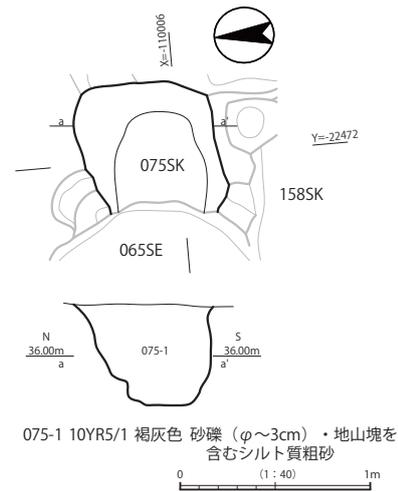


図 48 土坑 075SK

## 12. 第 11 期の主要遺構

京 XI 期中・新の時期の遺構と考えられる。遺構の数は、京 XI 期中の土坑 078SK と京 XI 期新の土坑 346SK があるのみで極端に少ない。水の供給が止まり、畠作地となった時期と考えている。耕作痕等は、上層の削平により残されていない。

### 土坑 078SK (図 23)

北区の D1・2 グリッドに位置する。水溜の土坑と考えている。西側を土坑 077SK に切られる。残存規模は、長軸 2.47m、短軸 1.4m、深さ 1.09m と深く、主軸方向は南北方向である。

堆積層は 078-1 ~ 4 層の 4 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、白磁、青磁、瓦質土器、常滑、瀬戸美濃、瓦等が出土している。

遺構の時期は、京 XI 期中までの遺構である。

土坑底の 2 か所から、湧水があったようである。

### 土坑 346SK (図 23)

南区の D4 グリッドに位置する。水溜の土坑と考えている。東側を土坑 405SK に、北側を土坑 547SK に切られる。

残存規模は、長軸 1.95m、短軸 0.92m、深さ 0.78m と深く、主軸方向は南北方向である。

堆積層は 346-1 ~ 3 層の 3 層である。

出土遺物は、土師器、白色土器、須恵器、青磁、瓦質土器、常滑、瀬戸美濃、瓦等が出土している。

遺構の時期は、京 XI 期新までの遺構である。

この時期は、調査区南側の四条二坊十五町において、天正十年（1582）に「本能寺の変」が起こっている。この時期、調査地内では、畠以外の遺構としては、この土坑 346SK のみが存在していたものと考えられる。

### 13. 第 12 期の主要遺構

京Ⅻ期古・中の時期の遺構と考えられる。町家遺構が再び現れ、第 8 期と共に遺構数が多い。

#### マチヤ A～E（図 86）

北区・南区の西側 B1～5、C1～5 グリッドに位置する。これまでと同じ様に油小路通に面する町家建物と推測されるもので、主軸が N-2.5°-E 余り東に傾くようであるが詳細は不明である。不明である理由は、町家建物の掘立柱の柱穴痕跡が残されていないからで、町家の建築方法に大きな変革が生じたためと考えられる。この町家建物の変化とは、妻壁や界壁の下に「土台」（台木）を置いて、その上に柱を立てる様になったためと考えられる。平入り建物の表口や裏口には、この時期であれば掘立柱を使用している可能性が高いため、その痕跡を丁寧に探せば、これに該当する遺構も発見されるであろうが、今回の調査区では表口は調査区外であり、裏口は攪乱が集中していて、今のところ確認できていない。おそらく、油小路通東側ラインからオクへ、約 9m の地点が裏口のラインであろうと推測されるのみである。また、この町家建物と密接に関わり町家建物を囲む柵（塀）についても、今回は確認できていない。しかし、各町家の背後には、井戸・湧水土坑や便所・廃棄土坑が必ずといってよいくらい存在しており、ウラの所有権が意識されだしていることを感じる事ができる。このため、各町家建物のウラに広がる廃棄土坑や井戸・土坑の並び等から主軸を想定し、独立屋と割長屋の町家建物とその所有権が及んでいたとみられる範囲を「マチヤ」として把握し、12 期では A～E の 5 軒のマチヤを復元した。

なお、攪乱や遺構が多いこともあるが、他の時期と同様にいずれの建物内からも、叩きの土間痕跡やカマド、井戸は検出されなかった。また、ウラにおいても明確な井戸は確認していない。

**マチヤ A** マチヤ A は、北区の西側 B1・C1 グリッドに位置する。南北間口については不明である。ウラには、京Ⅻ期古の土坑 077SK がある。

**マチヤ B** マチヤ B は、北区の西側 B2・C2 グリッドに位置する。南北間口約 5.4m と推測した。建物内のオモテ側中央には、京Ⅻ期中の小土坑 557SK がある。ウラには、京Ⅻ期古の土坑 729SK や、京Ⅻ期中の土坑 620SK がある。

**マチヤ C** マチヤ C は、北区の西側 B3・C3 グリッドに位置する。南北間口約 3m と推測した。調査範囲では、土坑や井戸の検出はなかった。

**マチヤ D** マチヤ D は、北区の西側 B4・C4 グリッドに位置する。南北間口約 4.6m と推測した。建物内のオク中央に、京Ⅻ期古の小土坑 368SK がある。ウラには京Ⅻ期古の土坑 608SK・330SK や、京Ⅻ期中の土坑 323SK・321SK・347SK がある。

**マチヤ E** マチヤ E は、南区の西側 B5・C5 グリッドに位置する。南北間口は不明で、ウラにも遺構は確認されなかった。空き地であった可能性も残る。

**土坑 729SK (図 49)**

北区の D2 グリッドに位置する。湧水土坑ではないかと考えている。西側の 156P を切る。

残存規模は、長軸 2.02m、短軸 1.76m、深さ 0.42m と浅い、円形に近い土坑ある。

堆積層は 729-1 ～ 3 層の 3 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、白磁、常滑、埴等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅻ期古の遺構である。

**土坑 620SK (図 50)**

北区の D2 グリッドに位置する。廃棄土坑と考える。西側の土坑 104SK に切られる。

残存規模は、長軸 1.11m、短軸 0.9m、深さ 0.85m と深い、円形に近い土坑ある。

堆積層は 620-1 ～ 3 層の 3 層である。

出土遺物は、土師器、信楽等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅻ期中の遺構である。

**土坑 323SK (図 19)**

南区の D4 グリッドに位置する。廃棄土坑と考える。東側の井戸 674SE に切られる。

残存規模は、長軸 2.14m、短軸 1.2m、深さ 0.73m と深い、主軸は東西方向で、隅丸方形の土坑である。

堆積層は、北壁 2 の 323-1 ～ 3 層の 3 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、信楽等が出土している。

遺構の時期は、京Ⅻ期中の遺構である。

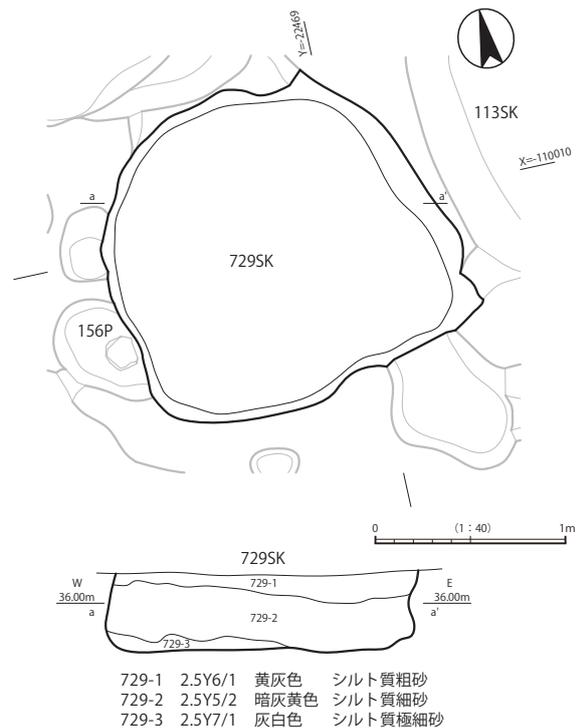


図 49 土坑 729SK

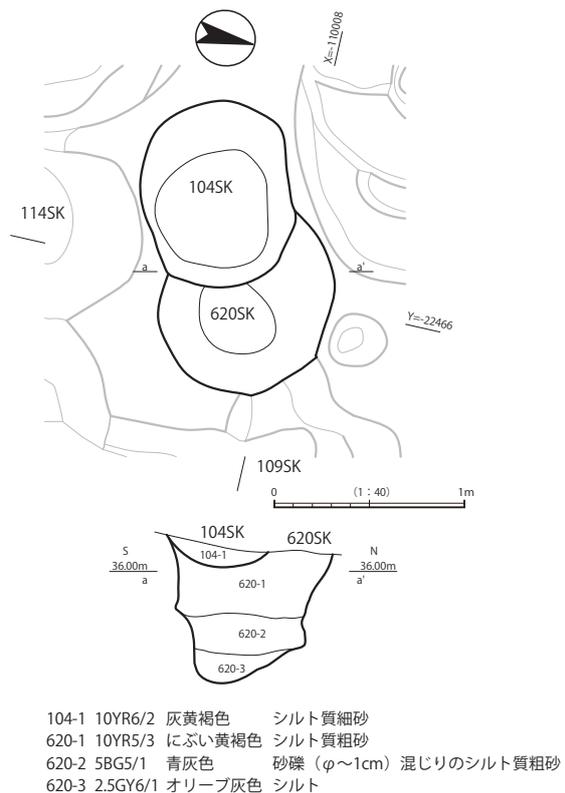


図 50 土坑 620SK・土坑 104SK

#### 14. 第13期の主要遺構

京Ⅻ期新の時期の遺構と考えられる。南区の東側に残る1-11～14層の洪水堆積層が、調査地全体を覆い、西側下がりの平坦な地形を作りだしたと考えている。この洪水の後、京Ⅻ期新の時期の遺構は全く検出されておらず、土壌化も進んでいないため荒地であった可能性が高い。

最下層の1-14層（砂礫（ $\phi$ ～1cm）・瓦片を含むシルト質粗砂層）と1-13層（シルト層）、さらに少し離れて層厚14cmの1-12層（シルト質粗砂～細砂層）は、最初の洪水の堆積物と考えられ、その後の1-11層の堆積で壊されて僅かしか残されていない。1-11層（砂礫（ $\phi$ ～1cm）混ざりのシルト質細砂層）は、残存層厚が最大30cmあり、調査区全体を覆ったと考えることができる。特に最終層である1-11層が土壌化されていないことから、堆積後は荒地であった可能性が高い。この層の堆積により、第1遺構面が形成されたと考えることができる。

また、堆積時期は12期の内でも後半期か、次の京ⅩⅢ期古にかかる時期となる可能性も残る。

#### 15. 第14期の主要遺構

京ⅩⅢ期古・中の時期の遺構と考えられる。町家遺構が、再び現われる時期である。

##### マチヤA～E（図86）

北区・南区の西側B1～5、C1～5グリッドに位置する。これまでと同じ様に油小路通に面する町家建物と推測されるもので、主軸はN-0°-E余りである。各マチヤのウラに同様な遺構である、井戸（・便所）等が姿を見せる。町家建物と密接に関わり町家建物を囲む柵（塀）については確認できていない。このため、各マチヤのウラに広がる井戸・土坑（・便所）の並び等から主軸を想定し、マチヤA～C/Dの3棟の独立屋町家建物と、マチヤEの独立屋の範囲を復元した。

なお、攪乱や遺構が多いこともあるが、他の時期と同様にいずれの建物内からも、叩きの土間痕跡やカマド、井戸は検出されなかった。

**マチヤA** マチヤAは、北区の西側B1・2、C1・2グリッドに位置する。南北間口については、約5.4mとみられる。東西奥行（妻行）については不明であるが、ウラには京ⅩⅢ期中までの外井戸065SEがあり、それまでの間が奥行（妻行）であるとみられる。

**マチヤB** マチヤBは、北区の西側B2・3、C2・3グリッドに位置する。南北間口については、建物Aとほぼ同じ約5.4mとみられる。東西奥行（妻行）については不明であるが、ウラには京ⅩⅢ期中までの外井戸681SEがあり、それまでの間が奥行（妻行）であるとみられる。ウラには他に、京ⅩⅢ期中までの便所と考えられる土坑104SKが見られる。

**マチヤC/D** マチヤC/Dは、北区の西側B4、C4グリッドに位置する。このマチヤC/Dは、第12期のマチヤCの敷地とマチヤDの敷地を一つにしたものと考えられる。第12期のマチヤDがマチヤCを加えて拡張したようにも見えるが、主体がどちらかは分からない。以後、「マチヤC/D」とする。南北間口はマチヤEとの境界である溝027SDの存在していた時期が約5.5m、溝027SDが消滅してからが約6.0m、東西奥行（妻行）については不明である。しかし、ウラには、京ⅩⅢ期中までの外井戸345SEがあり、それまでの間が奥行（妻行）であるとみられる。マチ

ヤC/Dと南側のマチヤEの間には、京XⅢ期古の遺構である東西方向の溝027SDが西流しており、妻壁は接していなかった。

**マチヤE** マチヤEは、南区の西側B5、C5グリッドに位置する。北側のマチヤC/Dとの間には東西溝027SDがあり、この溝の南側がマチヤEとなる。南北間口については、2m以上である。マチヤEの路側には、栗石の上に礎を置く独立屋建物752SBがあり、溝027SDと同時期の不定形大型土坑026SKを切ることから、京XⅢ期古以降の時期の建物と考えられる。マチヤEは、北側のマチヤA～C/Dとは溝027SDで限られていること、その後の建物構造の違いなど、格差が見られる。なお、調査区内に外井戸は、確認できていない。

**建物752SB** (図51)

752SBは、南区のB4・5、C4・5グリッドに位置する。南北間口は不明(約2m以上)、東西奥行(妻行)6間(約13.4m、W(2.7)+2.14+(2.14)+(2.14)+2.14+2.14E)余りの、主軸はN-0°-Eで、栗石の上に礎を置く独立屋の建物で、マチヤEの母屋である。柱穴010Pには礎が残るが、他の柱穴には、栗石が残るのみであった。礎を用いること、控え柱が無いことから、建物と判断した。

建物内オクの北妻壁際には、京XⅢ期古の円形土坑016SKがある。

**溝027SD** (図13・図21)

南区のB4・C4グリッドに位置する。区画溝ではないかと考えている。東側の不定形な大型土坑026SKに切られる。

残存規模は、延長10.2m以上、幅0.53～0.76m、深さ0.28mと浅い断面皿状の溝で、西側に流れる。

堆積層は027-1層の1層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦質土器、白磁等が出土している。

遺構の時期は、京XⅢ期古の遺構である。

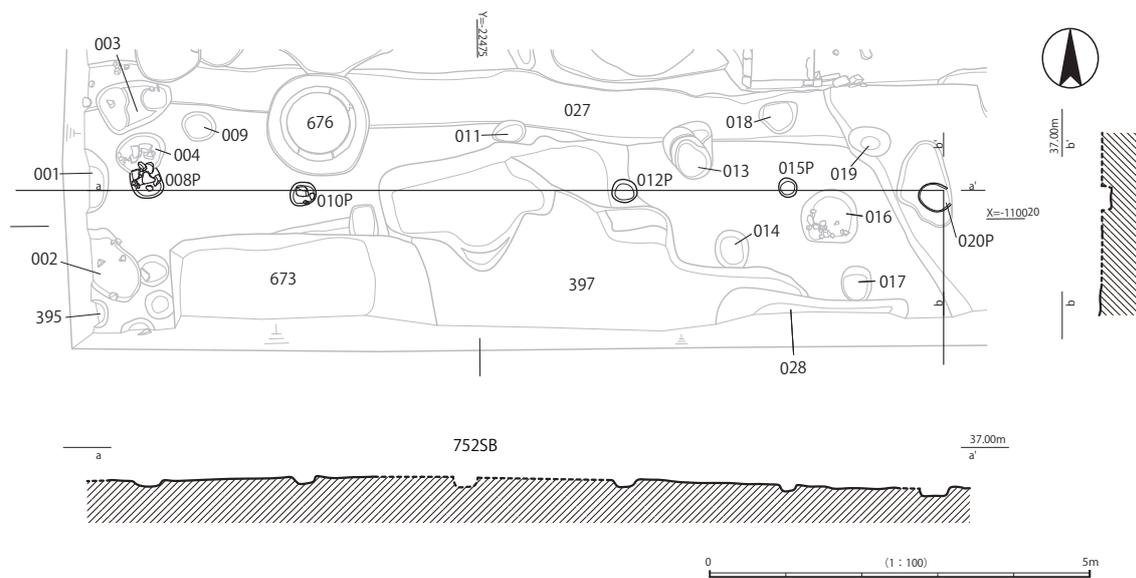


図51 建物752SB

## 井戸 345SE (図 52)

南区のD4 グリッドに位置する、マチヤDの外井戸である。上層を染色工場の窯場 029SK に切られる。

残存規模は、長軸 1.21m、短軸 1.08m、深さ 1.22m で、円形に近い井戸である。

堆積層は 345-1 ～ 5 層の 5 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、常滑、信楽等が出土している。

遺構の時期は、京XⅢ期中までの遺構である。

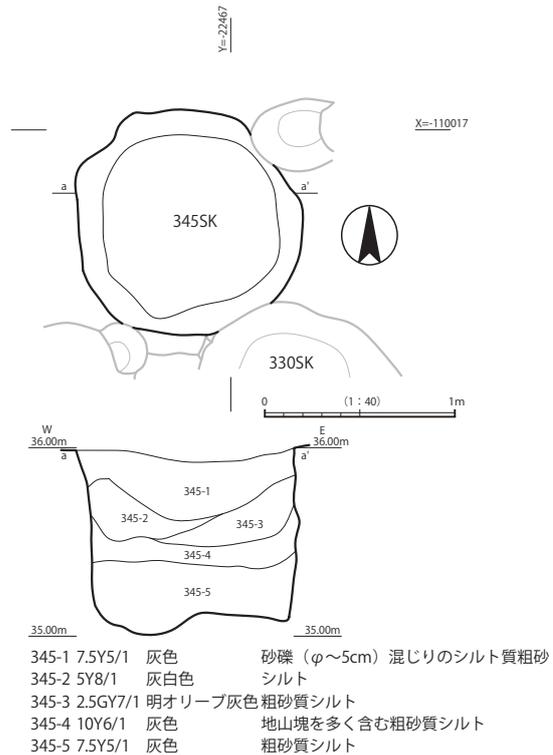


図 52 井戸 345SE

## 16. 第 15 期の主要遺構

京XⅢ期新・京XⅣ期古・中の時期の遺構と考えられる。第 14 期同様の町家遺構の時期である。

### マチヤ A ～ E (図 87)

北区・南区の西側 B1 ～ 5、C1 ～ 5 グリッドに位置する。これまでと同じ様に油小路通に面する町家建物と推測されるもので、主軸は N-2° -E 余りである。各町家のウラには、マチヤ E を除き、建物の裏口に近い敷地の南側に外井戸を設けている。マチヤ E は、建物裏口の敷地北側際に設ける。この町家建物と密接に関わり町家建物を囲む柵 (塀) については確認できていない。このため、各マチヤのウラに広がる井戸・土坑 (・便所) の並び等から主軸を想定し、マチヤ A ～ C/D の 3 棟の独立屋町家建物と、半地下式土坑をもつマチヤ E の独立屋の範囲を復元した。これらのマチヤ A ～ E の規模は、主軸が異なるものの、前代の第 14 期とほぼ規模は同じである。

なお、攪乱や遺構が多いこともあるが、他の時期と同様にいずれの建物内からも、叩きの土間痕跡やカマド、井戸は検出されなかった。

**マチヤ A** マチヤ A は、北区の西側 B1・2、C1・2 グリッドに位置する。南北間口については、約 5.4m とみられる。東西奥行 (妻行) については不明であるが、ウラには京XⅣ期中までの外井戸 064SE があり、それまでの間が奥行 (妻行) であるとみられる。また、さらに東側のウラには、京XⅢ期新の小さな井戸 623SE がある。

**マチヤ B** マチヤ B は、北区の西側 B2・3、C2・3 グリッドに位置する。南北間口については、建物 A とほぼ同じ約 5.4m とみられる。東西奥行 (妻行) については不明であるが、ウラには京XⅣ期中までの外井戸 589SE があり、それまでの間が奥行 (妻行) であるとみられる。ウラには他に、京XⅣ期中までの廃棄土坑 682SK が見られる。

**マチヤ C/D** マチヤ C/D は、北区の西側 B4、C4 グリッドに位置する。南北間口は約 6.0m、東西奥行 (妻行) については不明であるが、ウラには京XⅣ期中までの外井戸 516SE があり、

それまでの間が奥行（妻行）であるとみられる。このマチヤC/Dと南側のマチヤEの間には、0.7m余りの隙間があったものと考えられる。建物ウラには、井戸516SEに切られる京XⅢ期新の井戸かもしれない土坑348SKが南際にある。敷地オクには長い土坑030SKと溝024SD等がある。この敷地オクに廃棄土坑以外の遺構が発生するのは、この第15期からである。この時期以前の敷地オクは、廃棄土坑が順次横に作られ、最終的には第14期の様に穴だらけの状態となっていた。

**マチヤE** マチヤEは、南区の西側B5、C5グリッドに位置する。北側のマチヤC/Dとの間には約0.7mの隙間があり、その南側に建物751SBがある。南北間口については、2.5m以上（約5.7mカ）である。マチヤEの路側には、栗石の上に礎を置く独立屋建物751SBがある。マチヤEは、第14期と同じように、北側のマチヤA～Dとは建物構造の違いなど、格差が見られる。建物内オクには、京XⅣ期中の半地下式土坑397SKがある。建物ウラには、北側に七角形かと思われる京XⅣ期古の外井戸405SEや京XⅣ期中の土坑021SK等がある。

**柵（塀）750SA（図53）**

750SAは、南区のB1・2の西壁際に位置する。北側を試掘トレンチ801Trに、南側は大部分が西壁に入る建物である。しかし、大部分が西壁内と北壁1内に入り不明な点が多いため、仮に柵（塀）としておく。残存するのは、南北間口3間以上（約5.4m以上、NX+1.8+（1.8）+（1.8）+XS）、主軸はN-2°-Eで、路側の想定主軸から約2.4m東に入った南北方向に位置する。柱穴内に栗石を入れるもので、礎は出土しなかったが、建物と考えられる。ただし、奥行（妻行）2.4mの建物も疑問が残るが、前段の第14期との繋ぎの建物か、第16期までの大火後の繋ぎ建物となるのか、どの様な遺構になるのかは全く不明である。

**建物751SB（図54）**

751SBは、南区のB4・5、C4・5グリッドに位置する。マチヤEの母屋である。南北間口1間以上（約1.8m以上、N1.8+XS）、東西奥行（妻行）6間（約12.5m、W（1.8）+（1.8）+（2.0）+（2.3）+2.3+2.3E）余りの、主軸はN-2°-Eで、栗石の上に礎を置く独立屋の建物である。柱穴には、栗石が残るのみであった。礎を用いることから、柵（塀）ではないと判断している。

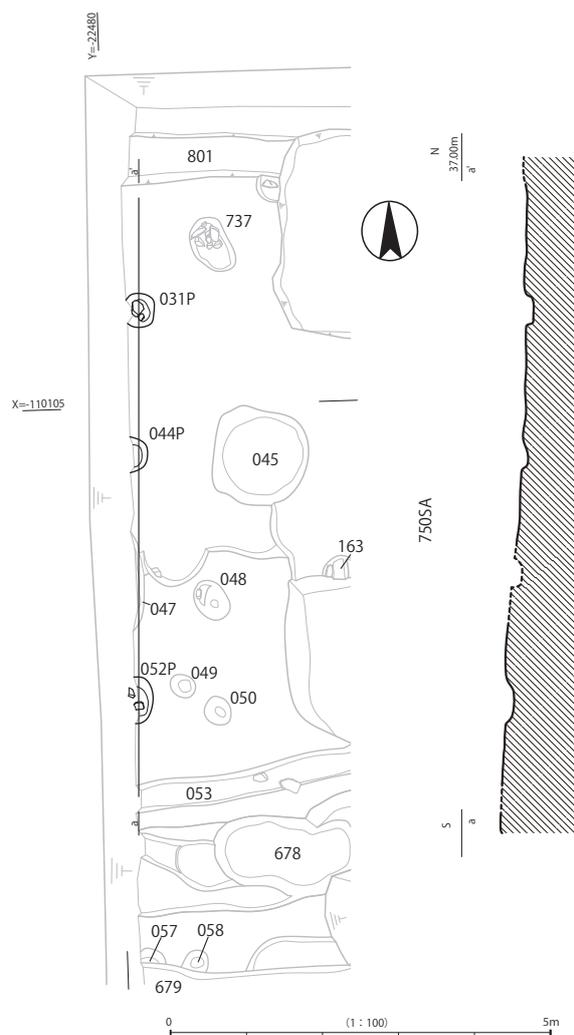


図53 柵（塀）750SA

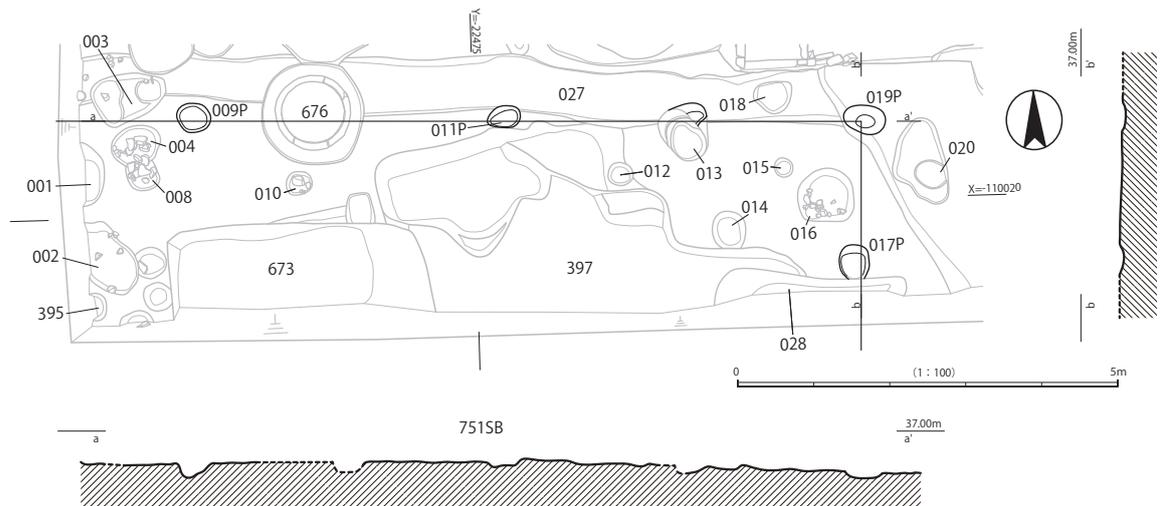


図 54 建物 751SB

建物内オクには、半地下式土坑 397SK を火災処理坑とした 397SK がある。

### 井戸 623SE (図 55)

北区の D2 グリッドに位置する。マチヤ A の外井戸である。東側の井戸 088SE を切る。残存規模は、長軸 1.06m、幅 0.96m、深さ 1.81m で、円形に近い井戸である。堆積層は 623-1 ~ 3 層の 3 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、肥前、瀬戸美濃、信楽、瓦、埴、常滑、信楽、貝等が出土している。

遺構の時期は、京 X Ⅲ期新までの遺構である。

### 半地下式土坑 397SK (図 15)

南区の C4・5 グリッドに位置する。マチヤ E の建物 751SB 内に設けられた、半地下式方形土坑である。西側を半地下式土坑 673SK に切られる。南壁に 1/3 余りが入る。

残存規模は、長軸 4.18m、短軸 1.97m 以上、深さ 1.64m で、主軸は少し東に傾くが東西方向の隅丸長方形土坑である。比較的底面は平らであるが僅かに東側に下がる。柱穴や板材の痕跡等は、確認していない。北東側の隅部は、長さ約 1.4m、幅約 0.4m の範囲に地山層まで掘り抜いていない部分があり、この部分が階段となっていて、出入口であった可能性が高い。

堆積層は、397-1 ~ 23 層の 23 層である。397-1 ~ 19 層は、焼土塊や炭を多く含むことから、半地下式土坑を火災後に火災処理土坑として再利用して

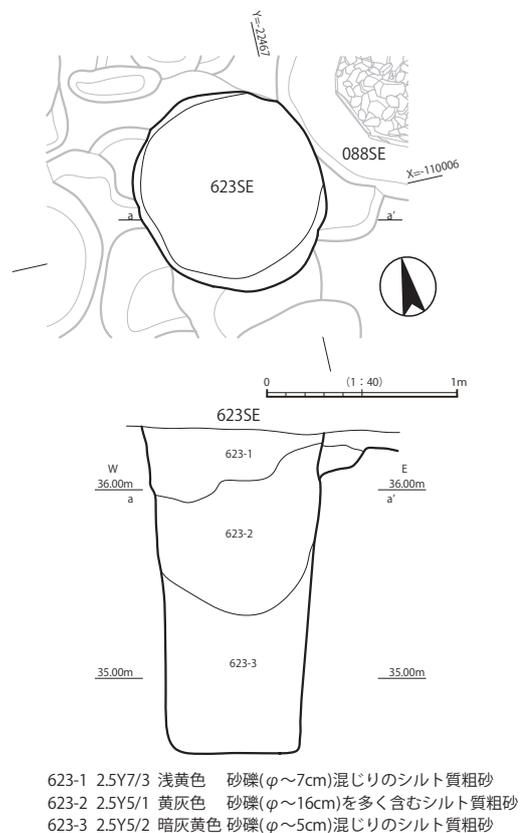


図 55 井戸 623SE

埋め戻されたものと考えられた。

出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、肥前、常滑、信楽、肥前、埴埴、スラグ、貝等が出土している。

遺構の時期は、京XIV期中の後半期の遺構である。

## 17. 第16期の主要遺構

京XIV期新・XV期古・中の時期の遺構と考えられる。第14・15期と同様な町家遺構の時期である。

### マチヤA～E (図87)

北区・南区の西側B1～5、C1～5グリッドに位置する。これまでと同じ様に油小路通に面する町家建物と推測されるもので、主軸はN-1.5°-W余りで、初めて西側に傾く。この主軸の傾きは、現状の油小路通の傾きと同じである。敷地奥行（妻行）も現状と同じであるとすると、油小路通東側から約34mと考えられる。各町家内には、マチヤAに内井戸045SEが、マチヤC/Dのウラに外井戸728SEが設けられている。この町家建物と密接に関わり町家建物を囲む柵（塀）については確認できていない。このため、各マチヤのウラに広がる井戸・土坑（・便所）の並び等から主軸を想定し、マチヤA～Eの4棟の独立屋町家建物を復元した。これらのマチヤA～Eの規模は、主軸が異なるものの、前代の第14・15期とほぼ同じである。

なお、攪乱や遺構が多いこともあるが、他の時期と同様にいずれの建物内からも、叩きの土間痕跡やカマドは検出されなかった。

**マチヤA** マチヤAは、北区の西側B1・2、C1・2グリッドに位置する。南北間口については、約5.4mとみられる。東西奥行（妻行）については不明である。建物内には京XV期中までの内井戸045SEがある。

**マチヤB** マチヤBは、北区の西側B2・3、C2・3グリッドに位置する。南北間口については、建物Aとほぼ同じ約5.4mとみられる。東西奥行（妻行）については不明である。建物内には、京XIV期新までの溝053SDと、多量の焼瓦・焼土・炭等の火災処理土坑として使われた、京XV期中までの半地下式土坑671SKがある。建物ウラには京XV期中までの土坑109SKがある。井戸は調査区内では確認できていない。

**マチヤC/D** マチヤC/Dは、北区の西側B4、C4グリッドに位置する。南北間口約8.0mとみられる、東西奥行（妻行）については不明であるが、ウラには補修されて第17期まで使われ続ける大型の外井戸728SEがあり、それまでの間が奥行（妻行）であるとみられる。建物内には、多量の焼瓦・焼土・炭等の火災処理土坑として使われた、京XV期中までの半地下式土坑672SKがある。このマチヤC/Dと南側のマチヤEの間には、第15期では約0.7m余りの隙間があったが、第16期では明確な隙間を確認できていない。マチヤC/Dウラの敷地東端には、大量の円礫を入れた深い石溝306SDがあり、これはこれまでの調査例から布掘りの土蔵基礎と考えることができる。この石溝306SDの東側には、半地下式土坑とみられる680SKがある。土蔵下

を利用した、半地下式土坑と考えられる。この土蔵の南北幅は復元できないが、東西規模は土坑 301SK に攪乱されていても現況の用地際（約 34m）までと考えると、長さ 4.5m 以上、8m 余りの大きな土蔵を推測することができるかもしれない。

**マチヤ E** マチヤ E は、南区の西側 B5、C5 グリッドに位置する。南北間口については、約 1.5m 以上（現況に近ければ、約 3.7m）とみられる。建物内オクには、2 基（673SK・028SK）の半地下式土坑がみられる。673SK は、建物内中央北側の界壁際に作られた、最終的には焼瓦・焼土・炭等の火災処理土坑として使われた、京 X V 期中までの半地下式土坑である。028SK も 673SK と同じで、建物オクの中央に作られた、最終的には焼瓦・焼土・炭等の火災処理土坑として使われた京 X V 期中までの半地下式土坑である。建物ウラには、コ字型の石溝 025SD に囲まれた東西方向の土蔵 753SB がある。この半地下式土坑 028SK と土蔵 753SB の間に、建物の東端が来るものと推測される。また、土蔵 753SB のウラには、北側のマチヤ C/D の敷地に食い込んで、焼瓦・焼土・炭等の火災処理土坑である土坑 403SK が作られている。京 X V 期中の時期に、マチヤの境が不明瞭となった時期があったことを示す。

#### 土蔵 753SB（図 56）

753SB は、南区の D5、E5 グリッドに位置する。遺構としては、マチヤ E 内に東西に長いコ字型の深い石溝 025SD に囲まれる範囲が、この土蔵となる。しかし、西側は当初から浅かったため、全周はしていない。東西方向の主軸は、N-91.5° -W 余りである。復元される建物規模は、南北間口 1 間半（約 2.7m）、東西奥行（妻行）3 間（約 5.45m）余りの建物と思われる。南側の境界とは約 60cm の隙間が、北側の境界とも約 0.4m の隙間が残されていたと推測される。

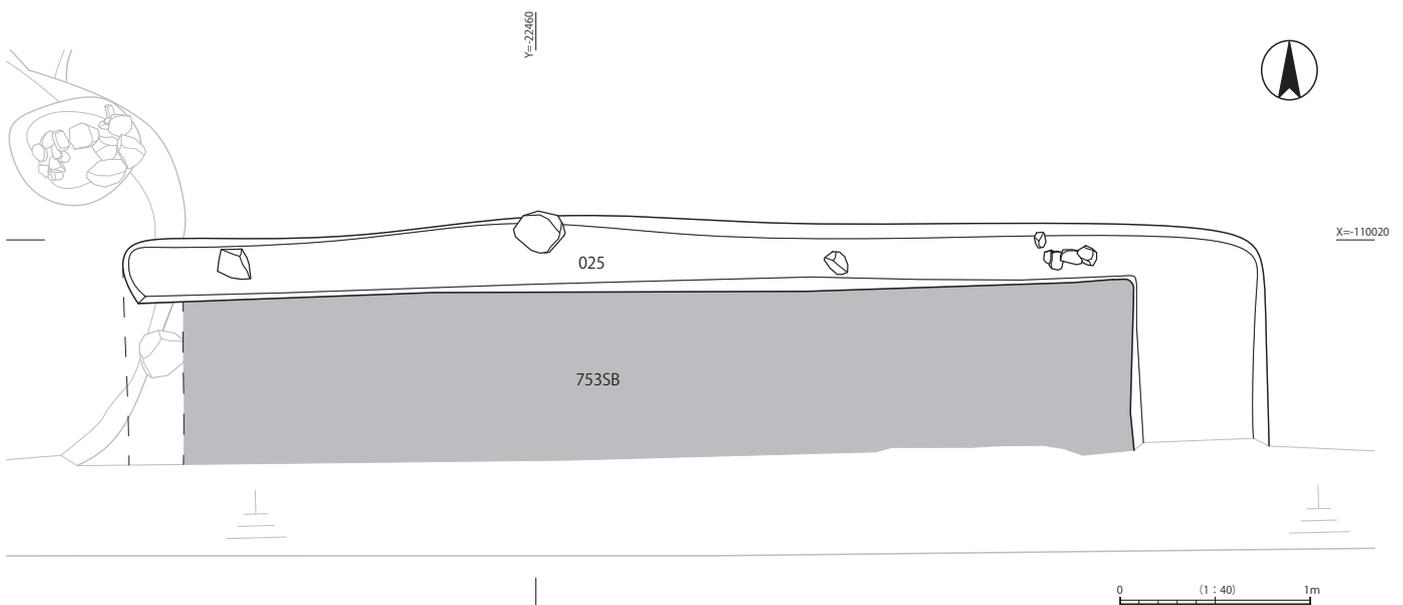


図 56 土蔵 753SB

## 18. 第 17 期の主要遺構

京XV期新～XVI期の時期の遺構と考えられる。第14～16期とは異なり、染色工場が主要遺構の時期である。

### マチヤA～E (図87)

これまでと同じ様に油小路通に面するのは同じである。大火後、当初は町家建物が復興されたと思われるが、その後は染色工場で構成される建物群となり、最近では駐車場となっていたようである。第16期のマチヤA・B・C/D・Eの敷地は、明治初年の地籍図作成において、現在の住所でいうところの、三条油小路町158、160、162、164番地が割り振られた。主軸はN-1.5°-W余りの第16期と同じで、現状の油小路通の傾きと同じである。敷地奥行(妻行)も現状と同じ油小路通東側から約34mである。

敷地内には、染め方法によっても異なるであろうが、窯場、水洗い場、乾燥場があったと想定される。一般的な染工程では糊置き前の煮込みと乾燥、防染剤を入れた糊による糊置き、染窯による染め、水洗いである水元と晒、そして天日干しとなる。そのため、数多くの井戸や窯場が設けられていた。井戸は、6基見つかっている。小型のコンクリート井筒積みなのが、C1グリットの井戸710SE、B4グリットの井戸676SE、D4グリットの井戸675SE、F4グリットの井戸680SE等がある。大型のコンクリート井筒積みなのが、E4グリットの井戸674SEである。それに第16期の石積み井戸をモルタル補修したD3グリットの大型井戸728SEがある。煉瓦積みのカマドは、B～E・4グリットの029SX、B4グリットの371SX、A3グリットの679SX、E3グリットの696SX等がある。洗い場は、B4グリットの719SX・501SX等がある。昭和の後期には、マチヤA～Eに3棟の建物が建っていた。

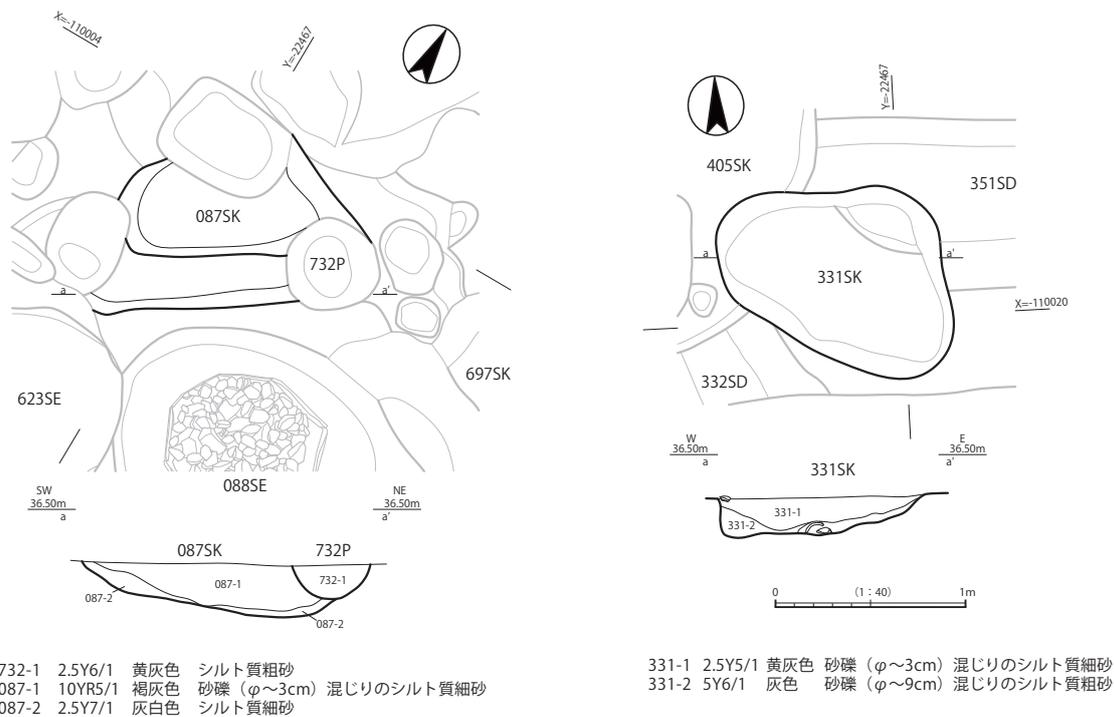
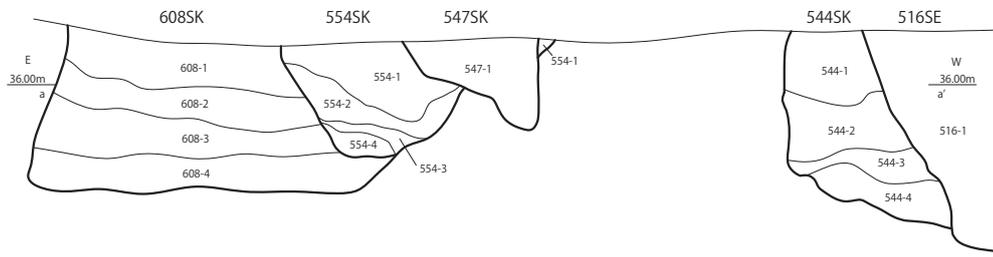
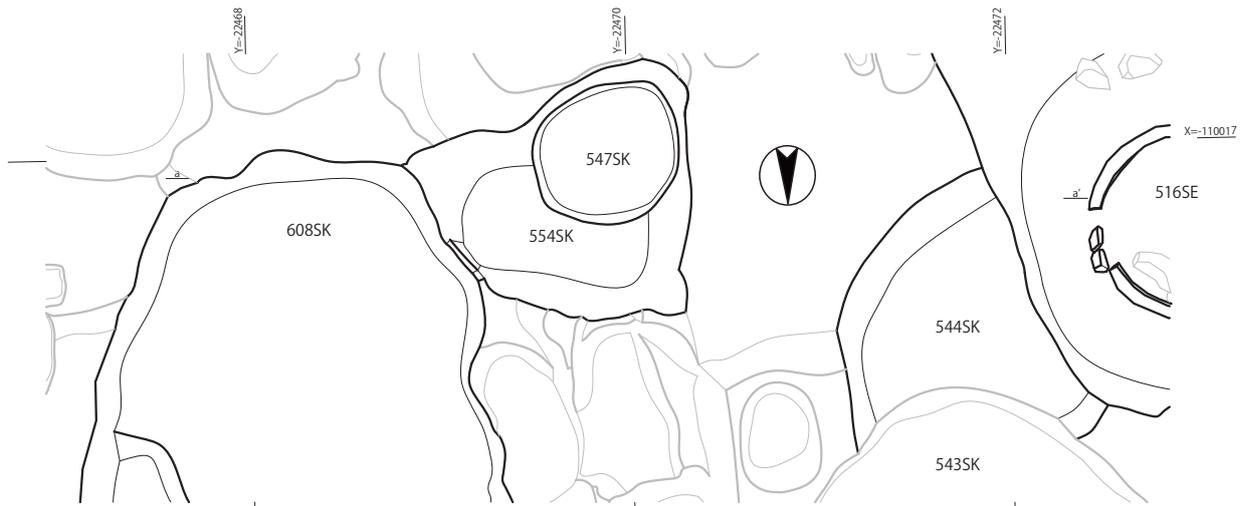
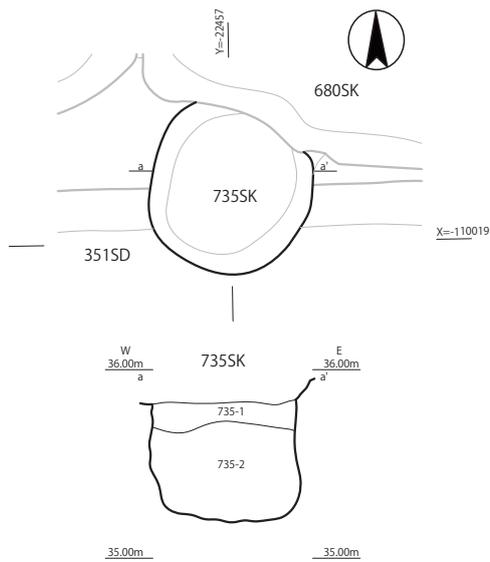


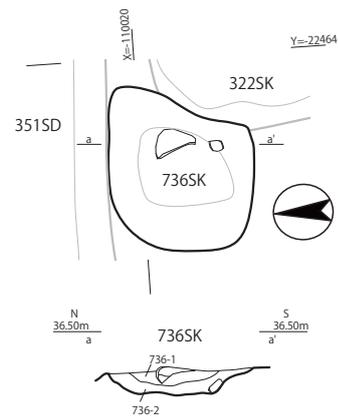
図57 その他遺構図1



547-1	7.5Y4/1	灰色	砂礫 (φ~20cm) 混じりのシルト質粗砂
554-1	7.5Y6/1	灰色	地山塊混じりのシルト質粗砂
554-2	10Y6/1	灰色	シルト質粗砂
554-3	5Y6/1	灰色	地山塊とシルト質粗砂の互層
554-4	5Y6/2	灰オリーブ色	地山塊を多く含むシルト質粗砂
608-1	5Y5/1	灰色	シルト質粗砂
608-2	5Y5/2	灰オリーブ色	シルト質粗砂
608-3	7.5Y6/1	灰色	シルト質粗砂
608-4	2.5GY6/1	オリーブ灰色	地山塊を含むシルト質粗砂
516-1	7.5Y6/2	灰オリーブ	砂礫 (φ~20cm) を多量に含むシルト質粗砂
544-1	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質細砂
544-2	2.5Y6/2	灰黄色	地山塊を含むシルト質粗砂
544-3	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粗砂
544-4	2.5Y5/1	黄灰色	シルト質粗砂



735-1	2.5GY5/1	オリーブ灰色	砂礫 (φ~1cm) 混じりのシルト質粗砂~細砂
735-2	7.5Y6/1	灰色	シルト質粗砂



736-1	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫 (φ~16cm) 混じりのシルト質細砂
736-2	7.5Y6/1	灰色	シルト質粗砂

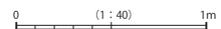


図 58 その他遺構図 2

〈引用参考文献〉

- 1) 柏田有香「まとめ」『平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財発掘調査報告書 2015-7、  
(公財)京都市埋蔵文化財研究所、2015年
- 2) 河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷」『考古学と自然科学』第42号、日本文化財科学会、  
2000年
- 3) 河角龍典「歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化―遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築―」  
『京都歴史災害研究』第1号、2004年

# 第4章 遺物

## 第1節 遺物の概要

今回出土した遺物は、コンテナパッドに72箱（表3）で、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶器、石製品、鋳型、瓦などである。遺物の時期は、平安時代から江戸時代に亘り、そのうち中世の遺物が大半を占める。

南区では、土坑026SKから台付皿がまとまって出土している。また、土坑030SKからは輸入磁器の天目茶碗が出土しているのが特筆される。北区では第2遺構面包含層から青磁の輪花皿が出土している。井戸303SEからは土師器皿がまとまって出土したほか、ロクロ土師器、白色土器、口禿の白磁皿が出土していることが注目される。また、土坑322SKからも土師器皿がまとまって出土したほか、瓦質土器、輸入磁器の天目茶碗の存在により、15世紀後半中葉の一括遺物であると認定出来たことは一定の成果であろう。この遺構からは茶釜を模したミニチュアの瓦質羽釜や大型の青磁の盤が出土していることも付け加えておきたい。そのほかには土坑353SKからは備前焼の水指もしくは建水が出土し、土坑368SKからは志野焼の皿と瀬戸・美濃系の天目茶碗も出土している。また、井戸320SE、土坑406SKからもまとまって遺物が出土している。

北区では、井戸088SEからもまとまって土師器皿が出土した。また、半地下式土坑158SKからは瓦質土器の銚子が出土している。池状遺構588SX（下層）は出土遺物から12世紀を上限とする包含層であることが判明した。この層からは平安期と思われる円面硯が出土していることも注目される。また、土坑500SKからは灰釉陶器の壺か鉢の底部を転用した硯が出土している。平安期の遺物としては土坑527SKから越州窯系の青磁碗が出土している。また、中世の遺物としては土坑543SKから古瀬戸の四耳壺が、土坑556SKからは古瀬戸の卸皿が出土していることも注目される。なお、土坑619SKからは埴塙が出土している。また、石製品としては土坑652SKから16世紀代の石臼が出土している。

表3 出土遺物概要表

時代	内容	コナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	須恵器、灰釉陶器、輸入磁器、円面硯、緑釉陶器、瓦	6	須恵器3点、灰釉陶器2点、輸入磁器1点、円面硯1点、緑釉陶器2点、瓦24点	0	3
鎌倉時代	土師器、ロクロ土師器、灰釉陶器、輸入磁器、瓦器、焼締陶器、瓦、白色土器	30	土師器62点、ロクロ土師器1点、灰釉陶器10点、輸入磁器13点、瓦器1点、焼締陶器1点、白色土器1点	2	25
室町時代	土師器、須恵器、輸入磁器、瓦質土器、国産陶器、石臼、埴塙	35	土師器67点、須恵器4点、輸入磁器8点、瓦質土器19点、国産陶器6点、石臼1点、埴塙1点	3	27
江戸時代	国産陶器、焼締陶器	1	国産陶器1点、焼締陶器1点	0	3
合計		72箱	計230点(9箱)	5箱	58箱

## 第2節 出土遺物

### 1. 包含層出土の土器

#### 第1遺構面包含層

1は土師器皿である。やや丸みを帯びる底部から屈曲して口縁部が伸び、端部は摘み上げる。2は瓦質土器の火鉢である。底部には三方に脚が付き、穿孔している。体部は球形に近く、外面にヘラミガキを施す。3は瓦質土器の羽釜である。胴の張る体部に鏝を貼り付ける。体部外面には使用時の煤が付着する。これらの遺物は土師器皿が京X期中に比定され、また、瓦質土器の羽

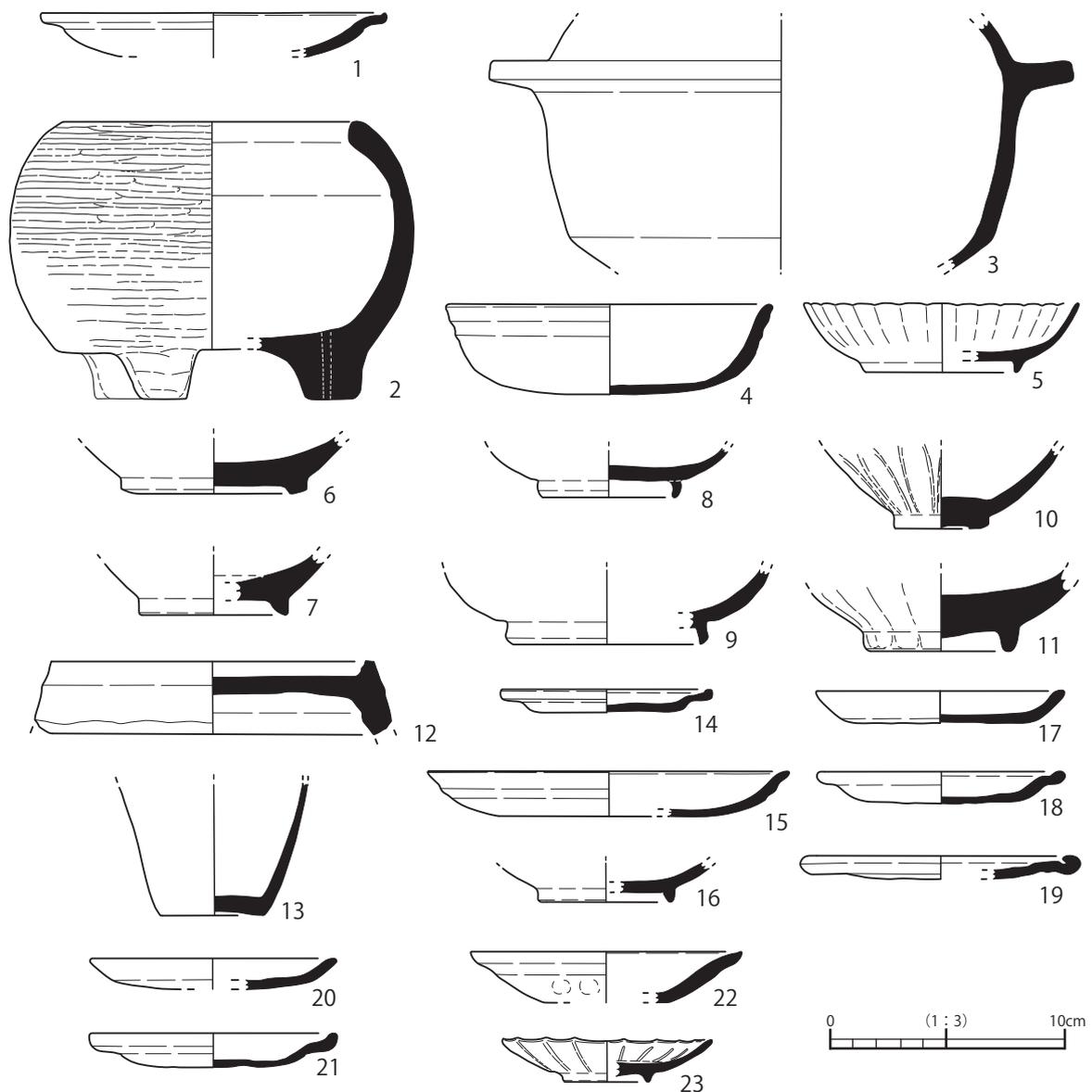


図59 出土遺物1

第1遺構面包含層 (1～3)、第2遺構面包含層 (4・5)、溝 527SD (6)、溝 351SD (7～11)、土坑 500SK (12)、溝 604SD (13)、土坑 311SK (14～16)、池状遺構 588SX 上層 (17～19)、土坑 589SK (20～23)

釜は京XI期新に存在する。これらのことから、この遺物群は京X期中～京XI期新を中心とするものと考えられる。

## 第2 遺構面包含層

4は土師器皿である。やや丸底の底部から口縁部が立ち上がり、端部には二段ナデを施す。5は龍泉窯系の青磁皿である。口縁部は輪花を呈する。これらの遺物は、それぞれの形態的特徴から京VI期古を中心とする可能性がある。

## 2. 遺構出土の土器

### 土坑 527SK

6は越州窯系の青磁碗の底部である。見込みには胎土目が残る。全体的に施釉されるが高台は露胎している。底部の形態からみて土橋分類I B類に相当することから、8世紀中頃～9世紀末に属する可能性がある。その他の遺物として、瓦、灰釉陶器などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の埋没時期は京VI期新であると考えられる。

### 溝 351SD

7は緑釉陶器の碗である。高台は断面三角状を呈し、見込みには沈線を巡らす。全体的に施釉される。これらの特徴から高橋分類B2類に属すると考えられることから、時期は9世紀代の可能性がある。8、9は灰釉陶器の碗である。高台は8が短く内湾し、9は外方に張り出す。これらの特徴から8は山下編年K90-2式に相当し、9世紀後半に属する可能性がある。また、9はH72式に相当し、10世紀後半～11世紀初頭に属する可能性がある。10、11は龍泉窯系の碗である。全体的に施釉され、11は底部外面に釉ハギが看取される。それぞれ外面に鎬が施される。その他の遺物として、土師器、須恵器、白磁、青白磁、瓦質土器、常滑焼、瀬戸・美濃系皿、肥前系染付などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の埋没時期は京XI期古であると考えられる。

### 土坑 500SK

12は灰釉陶器の壺か鉢の底部を転用した硯である。高台内部には使用痕が看取され、高台には巧打痕が残る。時期は判然としないが共伴する土師器皿からみて平安時代後期の可能性が考えられる。その他の遺物として、土師器、須恵器、瓦器、青磁などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の埋没時期は京IX期中であると考えられる。

### 溝 604SD

13は須恵器のコップ形の底部である。底部から体部が斜めに立ち上がり、底部には糸切り痕が看取される。この底部の時期は共伴する土師器からみて平安時代後期の可能性が考えられる。その他の遺物として、土師器、緑釉陶器、瓦質土器などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の埋没時期は京X期中であると考えられる。

### 土坑 311SK

14、15 は土師器皿である。14 はいわゆる「て」の字状口縁の皿である。15 は比較的大型の皿である。口縁部には二段ナデを施す。16 は灰釉陶器である。これらの遺物はそれぞれの形態的特徴から京Ⅵ期古を中心とする可能性がある。その他の遺物として、須恵器、瓦などが出土している。

### 池状遺構 588SK 上層

17～19 は土師器皿である。17 は平底から短く口縁部が伸び、端部は丸く納める。口縁部には一段ナデを施す。18 はいわゆる「て」の字状口縁の皿である。平底から屈曲して口縁部が立ち上がり、端部は玉縁状を呈する。19 はいわゆるコースター形の皿である。平底から短く口縁部に続き、端部は内側に折れ曲がる。これらの遺物はそれぞれの形態的特徴から京Ⅵ期古～新を中心とする時期であると考えられる。その他の遺物として、須恵器、瓦質土器、青磁が出土している。

### 土坑 589SK

20～22 は土師器皿である。20 は平底から口縁部が短く屈曲して立ち上がる。端部は丸く納める。21 はいわゆる「て」の字状口縁の皿である。平底から屈曲して口縁部が立ち上がり、端部は玉縁状を呈する。22 は平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部はやや肥厚し摘み上げる。23 は灰釉陶器の輪花皿である。体部には鎬状の筋が入り、口縁部は波状を呈する。口縁部の内外面に施釉される。これらの遺物は22がやや新しい様相を呈することから混入の可能性が考えられる。それ以外は形態的特徴から京Ⅵ期古を中心とする時期であると考えられる。その他の遺物として、瓦が出土している。

### 池状遺構 588SX 下層

24～33 は土師器皿である。24、25 はいわゆる「て」の字状口縁の皿である。やや丸みを帯びる底部から屈曲して口縁部が立ち上がり、端部は玉縁状を呈する。26 はいわゆるコースター形の皿である。平底から短く口縁部が伸び、端部は短く内側に屈曲する。27 は小皿である。平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部は尖り気味である。また、強い一段ナデを施す。28、29 は小皿、30、31 は中皿、32、33 は大皿である。それぞれ平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部は尖り気味である。また、口縁部には二段ナデを施す。34、35 は緑釉陶器の椀の底部である。34 は高台の特徴から高橋分類 H 類に相当し、10 世紀前半に属する可能性が高い。35 は全体的に施釉され、高台内部には糸切り痕が看取される。高台の形態から高橋分類 X 類に相当し、9 世紀初頭に属する可能性が高い。36 は白磁椀である。体部から口縁部にかけて鎬状の沈線が看取され、全体的に施釉される。この白磁椀は形態的特徴から山本分類 V 4C に相当し、12 世紀中頃～後半に属する可能性が高い。37 は灰釉陶器の椀の底部である。全体的に施釉されるが、高台内部には糸切り痕が看取される。高台の形態から山下編年 O53-1 に相当し、10 世紀前半に属する可能性が高い。38 は須恵器の円面硯である。体部には透かしがあり、口縁部は短く立ち上がり、面を持つ。平安期に属する。土師器皿はそれぞれの形態的特徴から京Ⅵ期古、

12世紀中頃を上限とする池状の包含層であると考えられる。

**井戸 303SE**

39～57は土師器皿である。39、40はいわゆるコースター形の皿である。それぞれ比較的口径が大きい。39は器壁がやや厚手である。それぞれやや丸みを帯びる底部から口縁部が短く伸び、端部は短く内側に屈曲する。41～48はいわゆる「て」の字状口縁の皿である。それぞれ平底

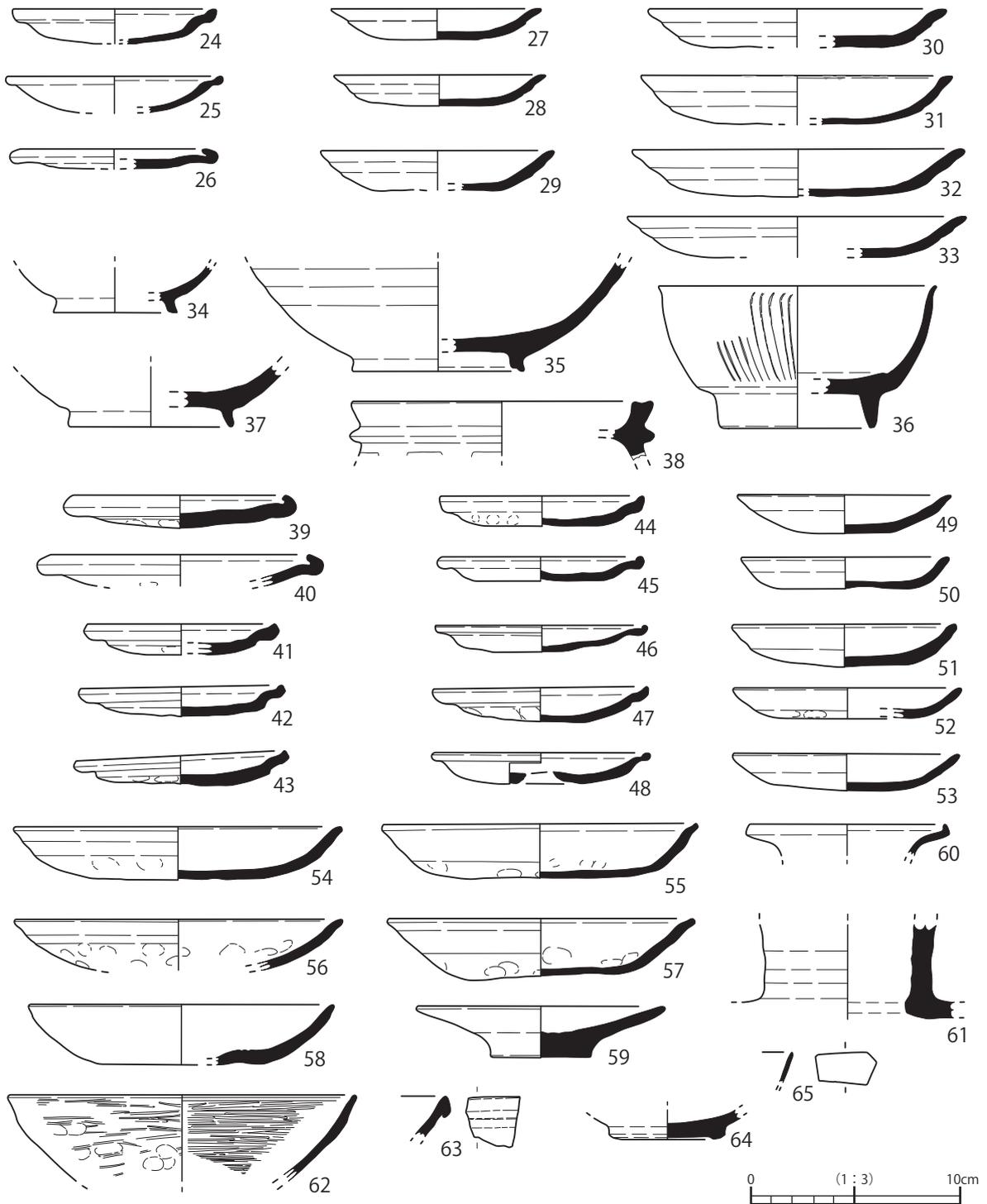


図60 出土遺物2  
池状遺構 588SX 下層 (24～38)、井戸 303SE (39～65)

から短く屈曲して口縁部が立ち上がり、端部は玉縁状を呈する。41～43は厚手で、口縁端部は面をもつ。44～46はやや薄手である。47は丸みを帯びる底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部は尖り気味である。48は底部中央に穿孔を施す。穿孔は焼成後に行われていることから呪術的意味合いを含んでいる可能性が考えられる。49～53は小皿である。平底から緩やかに口縁部に続き、一段ナデを施す。54、55は大皿である。平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部は短く屈曲する。口縁部には二段ナデを施す。56、57はやや深手の皿である。平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部は短く屈曲する。口縁部には二段ナデを施す。58はロクロ土師器皿である。底部には糸きり痕が看取され、口縁部は緩やかに立ち上がる。全体的にナデで仕上げる。59は白色土器の皿である。厚手の底部には糸切り痕が看取される。口縁部は斜めに立ち上がる。全体的にナデで仕上げる。60、61は須恵器の壺である。60は口縁部のみで、受け口状を呈する。61は頸部である。それぞれ全体的にナデで仕上げる。62は瓦器椀である。口縁端部の内面には沈線が巡らすため楠葉型である。斜めに伸びる体部から若干屈曲して口縁部へと続く。外面にはやや粗いヘラミガキを、内面には細かいヘラミガキを施す。形態的特徴からみて森島分類Ⅱ-1に相当することから、12世紀中頃に属する。63、64は白磁の椀である。63は口縁部のみで、端部が肥厚して外側に折れ曲がる。64は底部である。全体的に施釉されるが、底部は露胎している。65は椀の口縁部である。全体的に薄く、端部は口禿である。土師器皿は京Ⅵ期古に相当するが、白色土器は京Ⅵ期中から出現し、ロクロ土師器と瓦器椀は京Ⅵ期新に存在する。これらのことから瓦器椀は森島編年と年代的に矛盾はしない。白磁椀もその形態的特徴から京Ⅵ期中に属する。白磁口禿皿は京Ⅷ期中に属することから混入の可能性が高い。これらのことからこの遺物群は京Ⅵ期古～新を中心とすると推察される。

#### **土坑 618SK**

66～74は土師器皿である。66、67はいわゆるコースター形の皿である。平底から口縁部が短く内側に折れ曲がる。68、69は比較的浅い小皿である。平底から短く口縁部が立ち上がる。69は口縁部に強いナデを施す。70は小皿である。平底から緩やかに口縁部が立ち上がる。71、72は比較的深い中皿である。平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部は尖り気味である。73、74は比較的浅い中皿である。平底から緩やかに口縁部は立ち上がる。これらの土師器皿の口縁部にはそれぞれヨコナデが施される。これらの遺物はそれぞれの形態的特徴から京Ⅵ期新を中心とする時期であると考えられる。その他の遺物として、須恵器、常滑焼が出土している。これらの遺物からみて、この遺構の最終埋没時期は京Ⅷ期中であると考えられる。

#### **土坑 314SK**

75は白磁の椀である。全体的に施釉される。この土器の時期は形態的特徴から京Ⅶ期古に属する可能性がある。その他の遺物として、土師器、青磁、灰釉陶器、瓦質土器、常滑焼などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の最終埋没時期は京Ⅸ期中であると考えられる。

井戸 088SE

76～79は土師器皿である。76は平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部はやや尖り気味である。口縁部には二段ナデを施す。77は平底から屈曲して口縁部が立ち上がり、端部は丸く納める。口縁部には一段ナデを施す。78、79は比較的口径の大きい皿である。それぞれ平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部が僅かに外反する。口縁部には強いナデを二段に施す。80、81は白磁である。80は口縁部が肥厚する。81は底部である。全体的に施釉されるが、高台部は露胎している。82には大型の青磁の盤である。全体的に施釉されるが、高台部は露胎し

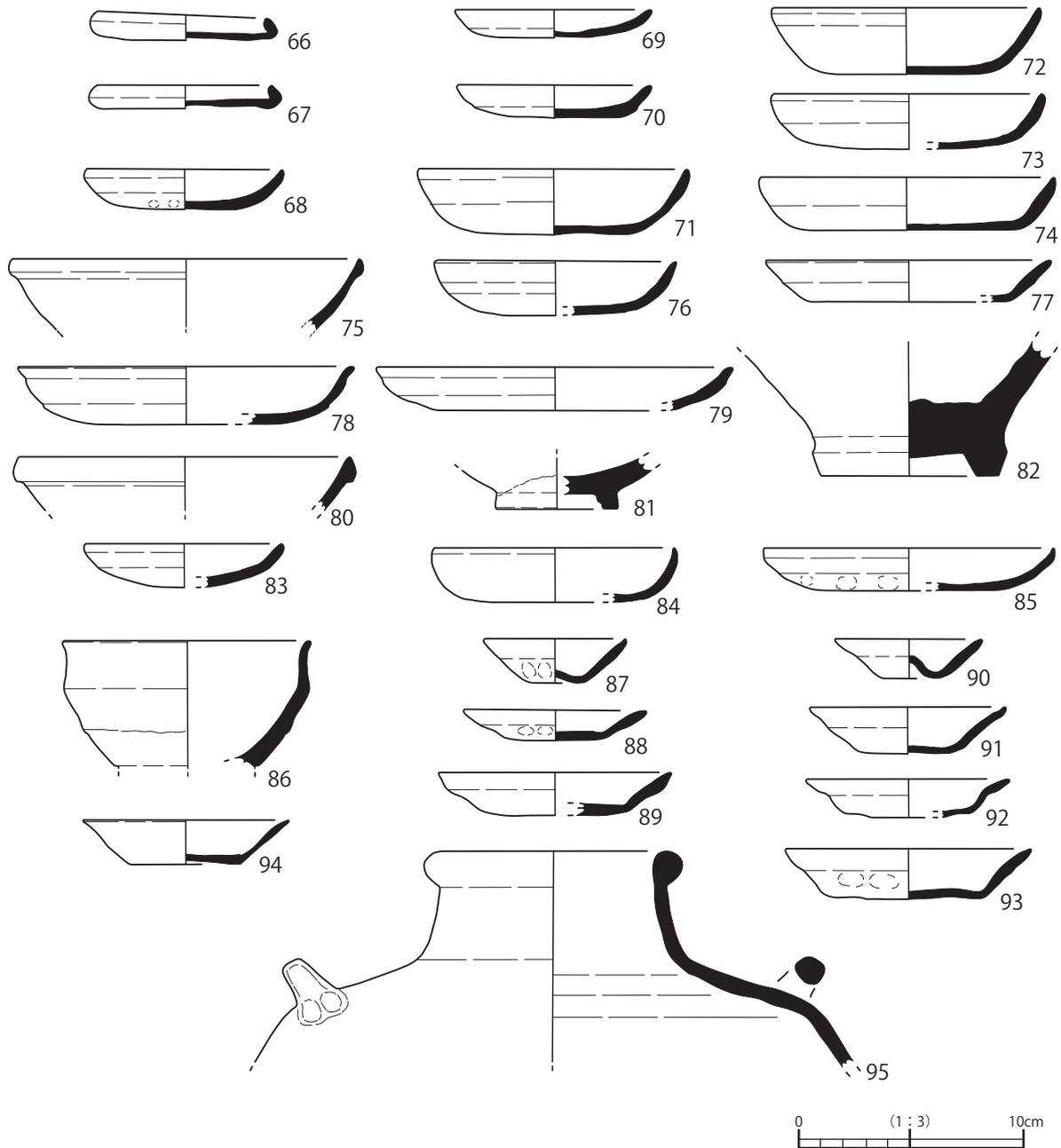


図 61 出土遺物 3

土坑 618SK (66～74)、土坑 314SK (75)、井戸 088SE (76～82)、土坑 078SK (83～85)、  
土坑 030SK (86)、土坑 301SK (87～89)、土坑 332SK (90～93)、土坑 599SK (94)、土坑 543SK (95)

ている。この遺構は土師器皿、青磁、白磁が共伴するのが特徴的である。また、土師器皿は小森編年では皿Nに相当する。このことから76、78、79は京VI期中に比定され、77は比較的新しい様相を呈し京VII期中を中心とする時期であると考えられる。青磁、白磁は両者の時期に亘って存在する。これらの事実を踏まえこの遺構が井戸であることを鑑みると、それぞれの遺物の時期は京VI期中～京VII期中に亘る可能性が高いと推察される。その他の遺物として、須恵器、土師質土器、瓦質土器、瓦、石製品、埴埴などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の最終埋没時期は京XI期中であると考えられる。

#### **土坑 078SK**

83～85は土師器皿である。83はやや丸みを帯びる底部から短く口縁部が立ち上がり、端部は丸く納める。84は平底から内湾気味に口縁部が立ち上がり、端部は尖り気味である。口縁部にはヨコナデを施す。85は平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部は尖り気味である。口縁部にはヨコナデを施す。これらの遺物はそれぞれの形態的特徴から京VII期古～中を中心とする時期であると考えられる。その他の遺物として、須恵器、青磁、白磁、瀬戸・美濃系陶器、瓦質土器、常滑焼、瓦などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の最終埋没時期は京XI期中であると考えられる。

#### **土坑 030SK**

86は輸入磁器の天目茶碗である。内外面に施釉し、底部周辺は露胎している。この土器の時期は形態的特徴から比較的古相を呈する。これらのことから京VIII期中に属する可能性がある。その他の遺物として、肥前系染付、瀬戸・美濃系陶器、信楽焼などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の最終埋没時期は18世紀代と考えられる。

#### **土坑 301SK**

87～89は土師器皿である。87はいわゆる「へそ皿」である。口縁端部はやや摘み上げる。88、89は褐色系である。それぞれ口縁部は肥厚する。作りは粗雑である。これらの遺物はそれぞれの形態的特徴から京VIII期中を中心とする可能性がある。その他の遺物として、瓦質土器、瓦、瀬戸・美濃系染付、常滑焼、信楽焼などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の最終埋没時期は19世紀前半と考えられる。

#### **土坑 332SK**

90～93は土師器皿である。90はいわゆる「へそ皿」である。91は白色系の小型の皿である。口縁部は緩やかに立ち上がり端部を摘み上げる。92、93は褐色系である。92は口縁部が屈曲して立ち上がる。93は口縁部が肥厚する。それぞれ作りは粗雑である。これらの遺物は形態的特徴から京VIII期中を中心とする可能性がある。その他の遺物として、須恵器、常滑焼、信楽焼、丹波焼、京・信楽系陶器、肥前系陶器、焼塩壺、瓦、すずりなどが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の最終埋没時期は京XIV期中であると考えられる。

#### **土坑 599SK**

94は白磁皿である。平底から斜めに口縁部が立ち上がり、端部は口禿である。この皿は形態

的特徴から京Ⅷ期中を中心とする時期であると考えられる。その他の遺物として、須恵器、灰釉陶器、瓦質土器、瓦などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の最終埋没時期は京Ⅹ期中であると考えられる。

#### **土坑 543SK**

95は瀬戸・美濃系の茶壺である。胴の張る体部から頸部が伸び玉縁状の口縁部へと続く。全体的に施釉され、肩部には把手状の耳が付く四耳壺の可能性もある。この壺の時期は藤澤編年古瀬戸中Ⅳ期に相当することからからみて14世紀中頃を中心とする時期であると考えられる。その他の遺物として、土師器、青磁、瓦質土器、瀬戸・美濃系陶器、備前焼などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の最終埋没時期は京Ⅺ期中であると考えられる。

#### **土坑 307SK**

96は緑釉陶器の椀である。底部に短い高台を貼り付け、見込みには胎土目が残る。これらの特徴から高橋分類B1類に相当し、9世紀代の可能性もある。97は瓦質土器の鍋である。98は土師質土器の鍋である。両者とも口縁部は屈曲して受け口状を呈する。99は東播系須恵器の捏鉢である。口縁部は肥厚し、面を持つ。これらの遺物は形態的特徴から京Ⅷ期新～京Ⅸ期古を中心とする可能性がある。その他の遺物として、土師器、須恵器、白磁、青磁、常滑焼、瀬戸系染付、肥前系染付、瓦などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の最終埋没時期は17世紀後半であると考えられる。

#### **半地下式土坑 158SK**

100～102は土師器皿である。それぞれ平底から緩やかに口縁部が伸び、端部は尖り気味である。口縁部にヨコナデを施す。103、104は瓦質土器の銚子である。平底から斜めに体部が伸び口縁部へと続き、口縁端部は小さく面を持つ。この口縁部に比較的短い把手が付く。片口部はこの把手からみて約90度反時計回りの位置に存在する。それぞれ内面にヨコハケを施す。105は瓦質土器の鍋である。斜めに伸びる体部から屈曲して口縁部に続く。口縁部は受け口状を呈し、内面にヨコハケを施す。これらの遺物はその形態的特徴からみて京Ⅸ期中を中心とする時期であると考えられる。その他の遺物として、須恵器、白磁、灰釉陶器、常滑焼、信楽焼、埴などが出土している。

#### **土坑 077SK**

106～108は土師器皿である。106は平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部はやや尖り気味である。107は平底から短く口縁部が立ち上がり、強いヨコナデを施す。そのため底部との境に稜を造り出す。108は平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部は丸く納める。これらの遺物はそれぞれの形態的特徴から京Ⅸ期新を中心とするものの若干の時期幅を含んでいるものと考えられる。その他の遺物として、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器、瀬戸・美濃系陶器、常滑焼、埴などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の時期は京Ⅸ期新～京Ⅻ期古に亘ると考えられる。

### 土坑 556SK

109は瀬戸・美濃系の卸皿である。口縁部は斜めに立ち上がり、見込みには卸目が入る。口縁部周辺は施釉される。底部には糸切り痕が看取される。この卸皿は形態的特徴からみて藤澤編年古瀬戸後Ⅲ・Ⅳ期に相当することから15世紀前半を中心とする時期であると考えられる。その他の遺物として、土師器、須恵器、備前焼、瓦などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の埋没時期は京X期新であると考えられる。

### 土坑 406SK

110～115は土師器皿である。110は白色系で比較的口径が小さい皿である。平底から短く口縁部が立ち上がり、端部は摘み上げる。口縁部にはヨコナデを施す。111はいわゆる「へそ皿」

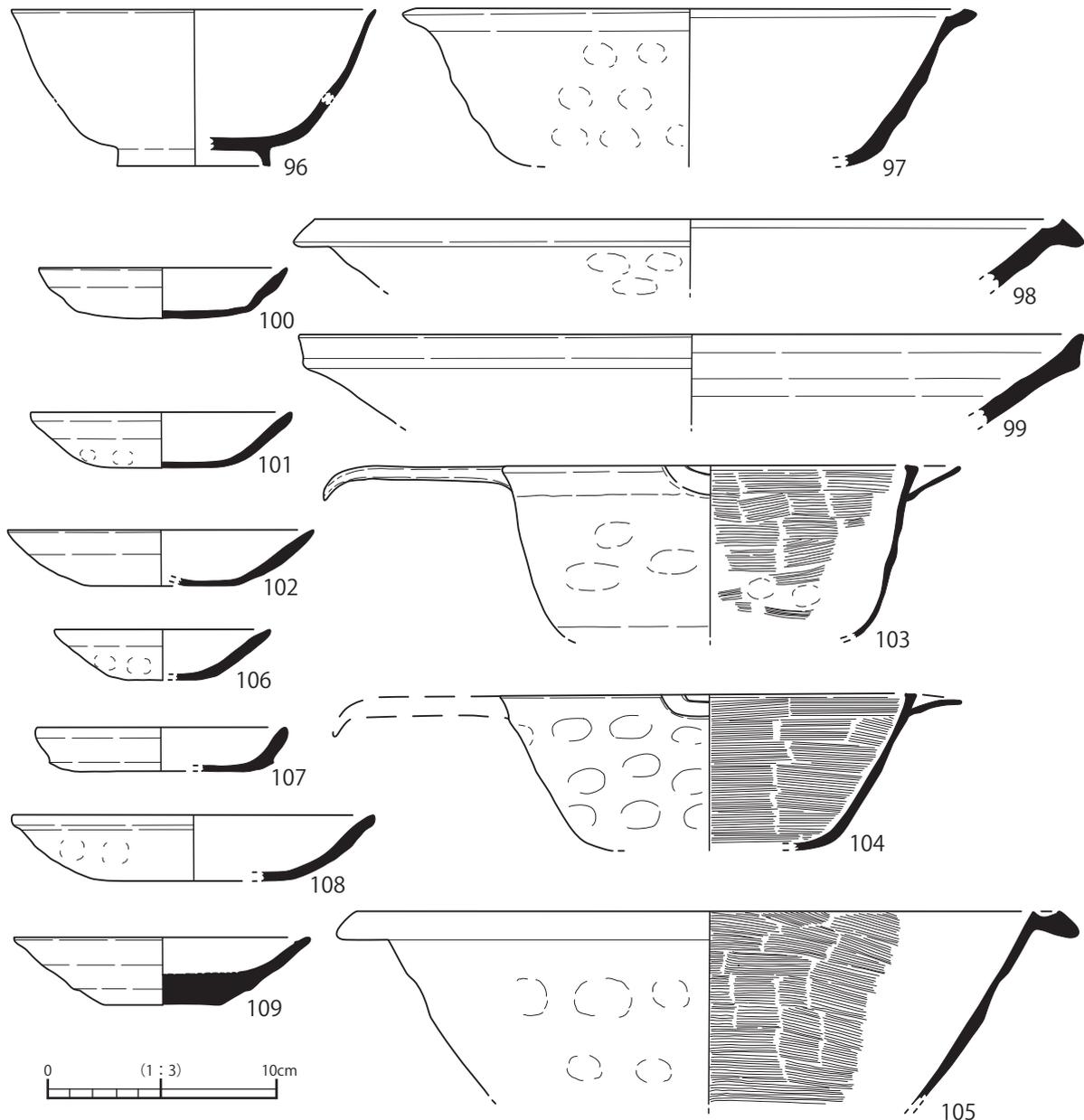


図 62 出土遺物 4

土坑 307SK (96～99)、半地下式土坑 158SK (100～105)、土坑 077SK (106～108)、土坑 556SK (109)

である。口縁端部は短く屈曲する。112、113は白色系の中皿である。それぞれ平底から口縁部が立ち上がり、端部は肥厚する。口縁部にはヨコナデを施す。114、115は白色系で比較的口径が広い皿である。平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部は摘み上げる。口縁部にはヨコナデを施す。116は白磁碗である。口縁端部は口禿である。117は青磁碗の口縁部である。118は灰釉陶器の底部である。高台外面には糸切り痕が看取される。119、120は東播系捏鉢である。119は口縁部が短く屈曲する。底部外面には離れ砂が残る。このため森田分類第Ⅲ期第4段階に相当し、15世紀前半に属する。120は口縁部が肥厚し面を持つ。このため森田分類第Ⅲ期第1段階に相当し、14世紀後半に属する。121は瓦質土器の鍋である。口縁部は受け口状を呈し、

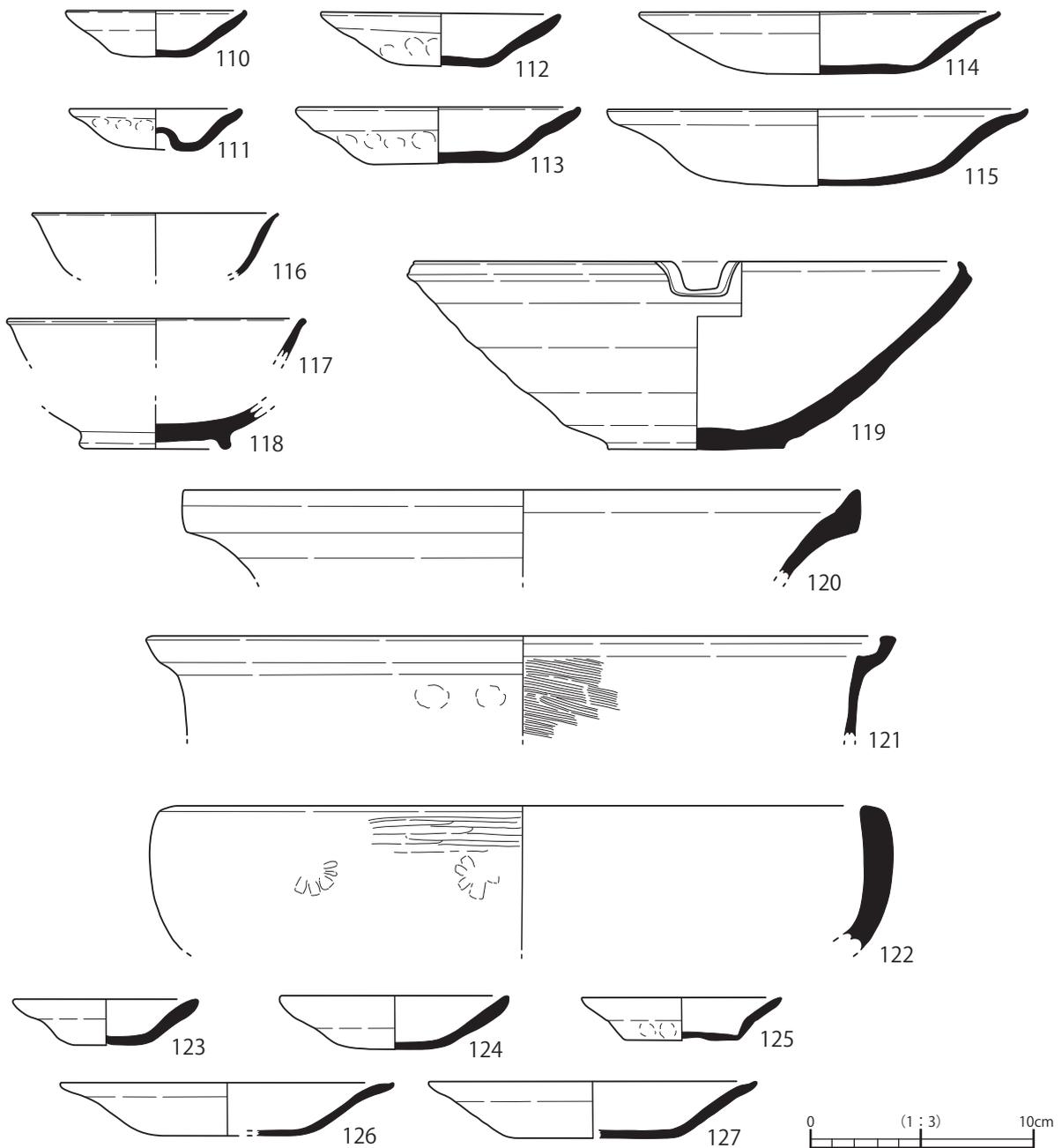


図 63 出土遺物 5  
土坑 406SK (110 ~ 122)、土坑 334SK (123 ~ 127)

内面にはヨコハケを施す。122は瓦質土器の火鉢である。胴の張る体部から内湾気味に口縁部へと続く。外面には花形のスタンプ紋を施し、ヘラミガキをおこなう。これらの遺物は119と120に時期差があるもののそれぞれの形態的特徴から120は京Ⅶ期中に比定されるが、土師器皿と瓦質土器の鍋が京Ⅹ期古に属すると考えられるため、これらの遺物はかなりの時期差を含んでいると思われる。このためこの遺構の時期は京Ⅹ期古であると考えられる。

#### **土坑 334SK**

123～127は土師器皿である。123、124は白色系で比較的口径が小さい皿である。平底から短く口縁部が立ち上がる。それぞれ口縁端部は肥厚する。口縁部にはヨコナデを施す。125は褐色系の皿である。比較的作りは粗雑である。口縁部は短く屈曲して立ち上がる。126、127は白色系で口径が広い皿である。平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部は摘み上げる。口縁部にはヨコナデを施す。これらの遺物は形態的特徴から京Ⅹ期古を中心とする可能性がある。また、比較的新しい土師器も出土していることから、これらの遺物からみて、この遺構の時期は京Ⅺ期中であると考えられる。

#### **土坑 114SK**

128は土師器皿である。平底から口縁部が立ち上がり、端部は摘み上げる。129は瓦質土器の鍋である。胴の張る体部から口縁部は屈曲して立ち上がり、受け口状を呈する。130～133は瓦質土器の羽釜である。胴の張る体部から口縁部が立ち上がり、口縁部直下には鏝状の羽根部が付く。これらの遺物はそれぞれの形態的特徴から128と129は京Ⅸ期中に比定され、130～133は京Ⅹ期新に属することから比較的時期幅があるものと考えられる。これらの遺物の他に常滑焼が出土している。

#### **井戸 320SE**

134～142は土師器皿である。134～136は白色系で比較的口径が小さい皿である。134は平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部は丸く納める。135、136はやや上げ底気味の底部から口縁部が屈曲して立ち上がり、端部を摘み上げる。137、138は褐色系の小皿である。平底から緩やかに口縁部が立ち上がる。端部は肥厚する。全体的に作りは粗雑である。139、140は中皿である。139は褐色系で、平底から屈曲して口縁部が立ち上がり、端部は肥厚する。作りは全体的に粗雑である。140は白色系で、平底から緩やかに口縁部は立ち上がり、端部は肥厚する。141、142は比較的白色系で口径が広い皿である。平底から口縁部が立ち上がり、端部は屈曲して摘み上げる。143は比較的口径が広い皿である。平底から短く口縁部が立ち上がり、端部は面を持つ。144は白磁碗の底部である。全体的に施釉される。145は灰釉陶器の碗である。口縁部は体部から短く外湾気味に立ち上がる。146は瀬戸・美濃系の片口である。これらの遺物の時期であるが143は比較的古い様相を呈し、146は18世紀代であることからこれらは混入と考えられる。これらの遺物は土師器皿から鑑みると京Ⅹ期古～中を中心とする時期に相当すると考えられる。その他の遺物として、青磁、常滑焼、瓦などが出土している。これらの遺物は京Ⅹ期新に相当することから、この遺構の時期は京Ⅹ期全般に亘ると考えられる。

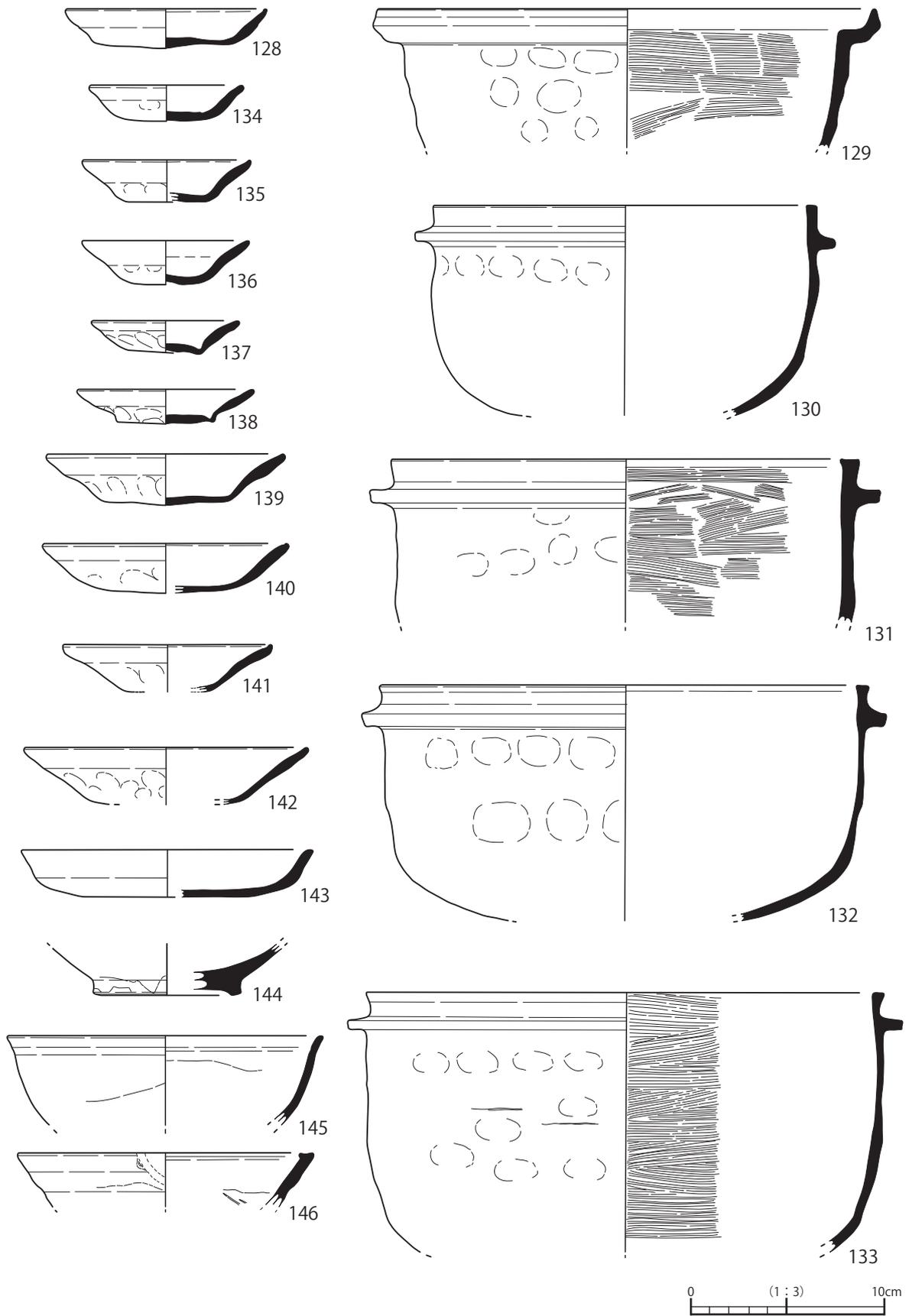


图 64 出土遺物 6  
土坑 1145K (128 ~ 133)、井戸 320SE (134 ~ 146)

## 土坑 322SK

147～170は土師器皿である。147～150はいわゆる「へそ皿」である。底部が上方に拡張して上げ底になり、口縁部は斜め上方に立ち上がる。端部を147は上方に摘み上げ、148～150は丸く納める。151～155は白色系の小皿である。それぞれ底部はやや上げ底気味で、体部はやや屈曲して口縁部へと続く。ただ153は平底で器高も低いのが特徴的である。端部を151、153は摘み上げ、154、155は丸く納める。152は肥厚し面を持ち、口縁部にはヨコナデを施す。156、157は褐色系の小皿、158は中皿である。それぞれ平底から口縁部が屈曲して立ち上がり、端部は丸く納める。作りは粗雑である。159～164は白色系の中皿である。このうち159～161は口径が僅かに小さく、深い皿である。それぞれ平底から口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部は僅かに肥厚し、丸く納める。また、それぞれヨコナデを施す。162～164はやや口径が大きく、浅い皿である。それぞれ平底から口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部は若干摘み上げ、ヨコナデを施す。165～170は白色系の大皿である。そのうち口径の大きさによって、165～167は小、168、169は中、170は大に細分される。それぞれ平底から斜め上方に口縁部が立ち上がり、端部は僅かに屈曲して丸く納める。このうち165は摘み上げ、166はやや面を持つ。それぞれ口縁部にはヨコナデを施す。171～174は台付皿である。それぞれ褐色系の小皿の底部に粘土帯を貼り付け、脚台を作り出している。全体的に作りは粗雑である。175、176は青磁である。175は大型の盤である。緩やかに広がる体部から口縁部は短く屈曲して、端部は摘み上げる。176は口縁部が下方に屈曲する。177は白磁碗の底部である。全体的に施釉され、高台部は露胎している。178、179は灰釉陶器である。178は小型の皿である。平底から短く口縁部が立ち上がり、全体的に施釉される。179は底部である。全体的に施釉される。高台の形態からみて山下編年H72に相当することから、10世紀後半～11世紀初頭に属する。180、181は東播系捏鉢である。それぞれ口縁端部は肥厚し面を持つ。ただ形態的特徴から180は森田分類第Ⅲ期第1段階に相当し、13世紀前半～後半に属する。181は森田分類第Ⅱ期第2段階に相当し、12世紀末葉～13世紀初頭に属する。182～185は瓦質土器である。182は鍋である。体部から短く屈曲し、受け口状を呈する。端部に面を持つ。183、184は羽釜である。183は小型の羽釜である。丸みを帯び胴張りの体部から短く口縁部が、体部中ほどに短い錨状の羽根が付く。形態からみて茶釜を模したものであろう。184は直立する体部から口縁部に続き、直下に錨状の羽根が付く。185は火鉢である。胴の張る体部から内湾気味に口縁部に続き、端部は丸みを帯びる。内外面に粗いヘラミガキと、外面には菊花状のスタンプ紋を施す。186は瀬戸・美濃系の碗である。斜めに伸びる体部から口縁部へと続き、端部はやや尖り気味である。全体的に施釉される。187は輸入磁器の天目茶碗である。体部から短く屈曲して口縁部が立ち上がる。全体的に施釉されるが、高台部は露胎している。188は常滑焼の壺である。頸部はくの字に外反し、口縁部は短く屈曲し、端部は面を持つ。形態的特徴から中野編年1b型式に相当し、12世紀後半に属する。これらの遺物を概観すると青磁の盤は京Ⅷ期中に、白磁碗は京Ⅷ期新まで存在する。また瀬戸・美濃系の碗は京Ⅹ期古から存在する。しかし土師器皿、瓦質土器の鍋、羽釜、天目茶

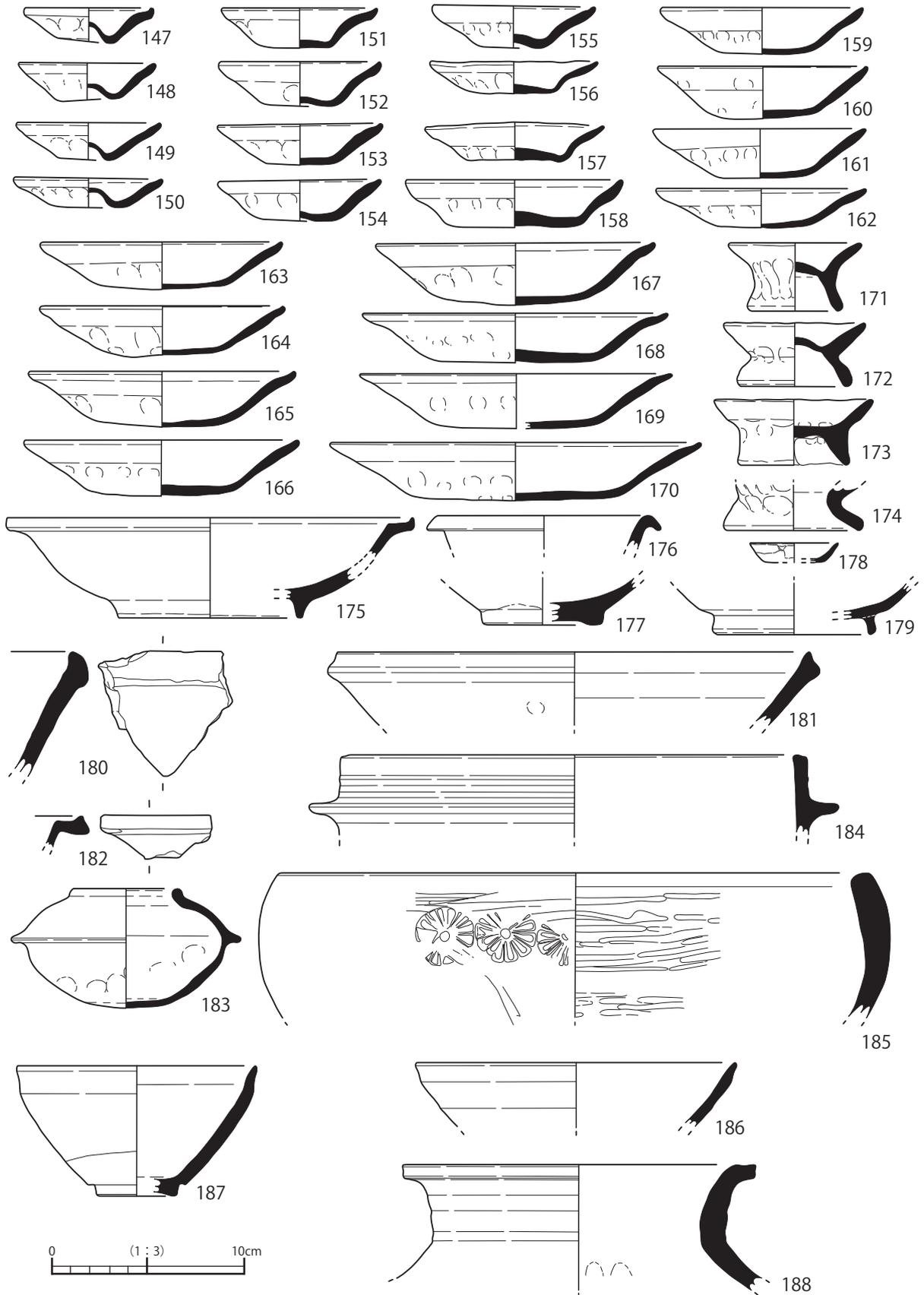


图 65 出土遺物 7

土坑 322SK (147 ~ 188)

椀が京X期中を中心とすることから、これらの遺物群は15世紀後半中葉に属すると推察される。

#### **土坑 330SK**

189～192は土師器皿である。189はいわゆる「へそ皿」である。体部は器壁が薄く、口縁部はやや肥厚する。190、191は浅く平たい底部から短く口縁部が伸び、端部は尖り気味である。192は瓦質の羽釜である。口縁部は内傾し、直下に短い鏝を貼り付ける。これらの遺物は形態的特徴から京X期中を中心とする可能性がある。その他の遺物として、常滑焼、信楽焼、瓦が出土している。これらの遺物からみて、この遺構の最終埋没時期は京X期古であると考えられる。

#### **土坑 503SK**

193は瀬戸・美濃系の椀である。口縁部は体部から真直ぐ立ち上がる。全体的に施釉されるが、高台周辺は露胎している。この椀は形態的に比較的古い様相を呈するため、時期は京X期中を中心とすると考えられる。その他の遺物として、土師器、須恵器、青磁、瓦質土器が出土している。これらの遺物からみて、この遺構の時期は京X期新～京X期中に亘ると考えられる。

#### **土坑 619SK**

194は埴塙である。底部に穿孔があり、銅と思われる金属が付着している。このため調査地が旧本能寺の北側に相当し、全体的に二次焼成を受けていることから、寺院周辺で何らかの製品を製作していたものが混入した可能性もある。時期は他の土器小片から、京X期古を中心とすると考えられる。

#### **土坑 652SK**

195は石臼である。全体的に細かく加工されているが、中央に軸穴を持つ下臼で、8分割の摺目が残る。石材は花崗岩である。この臼は形態的特徴から16世紀代に属する。

#### **土坑 368SK**

196は褐色系の土師器皿である。口縁部は短く屈曲して立ち上がり、端部は尖り気味である。197は白磁皿である。口縁部は短く屈曲して立ち上がる。198は瀬戸・美濃系の天目茶椀である。やや胴の張る体部から短く口縁部が立ち上がる。199は志野焼の皿である。口縁部は緩やかに立ち上がり、高台外面には砂目痕が看取される。これらの遺物は形態的特徴から京X期古を中心とする可能性があるが196は古い特徴を残しているため混入の可能性が高い。

#### **土坑 026SK**

200、201は白色系の土師器皿である。200は小型で平底から短く屈曲して口縁部が立ち上がり、ヨコナデを施す。端部は摘み上げる。201は大型で平底から緩やかに口縁部が立ち上がり、ヨコナデを施す。端部は尖り気味である。202～205は褐色系の土師器皿に短い脚部を付ける台付皿である。それぞれが底部は上げ底であり、脚部は粘土帯を貼り付けている。全体的に作りは粗雑である。これらの遺物はそれぞれの形態的特徴から京X期新～京X期古を中心とするものと考えられる。その他の遺物として、須恵器、常滑焼、信楽焼、肥前系染付などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の最終埋没時期は18世紀後半であると考えられる。

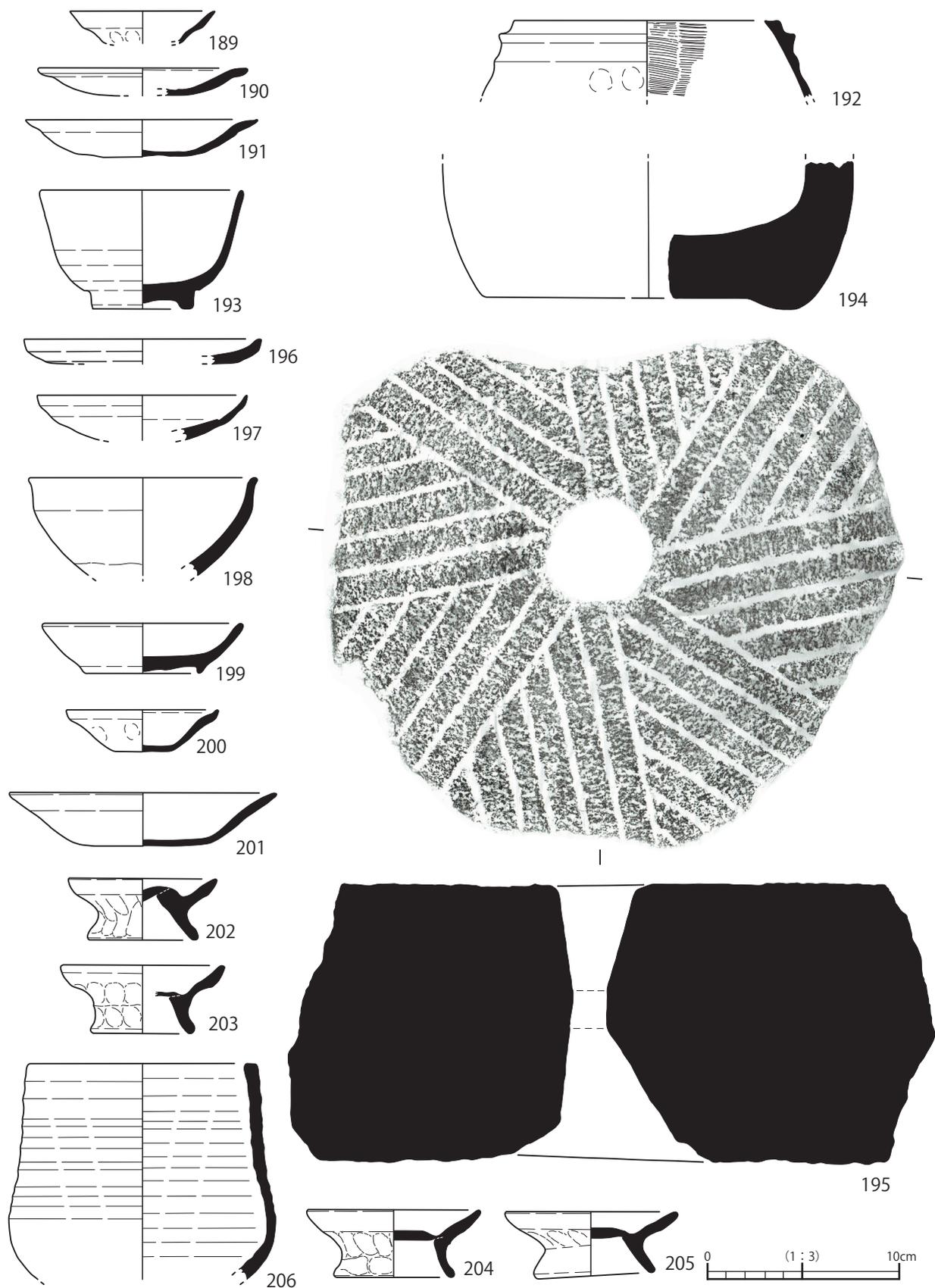


图 66 出土遺物 8  
 土坑 330SK (189 ~ 192)、土坑 503SK (193)、土坑 619SK (194)、土坑 652SK (195)、  
 土坑 368SK (196 ~ 199)、土坑 026SK (200 ~ 205)、土坑 353SK (206)

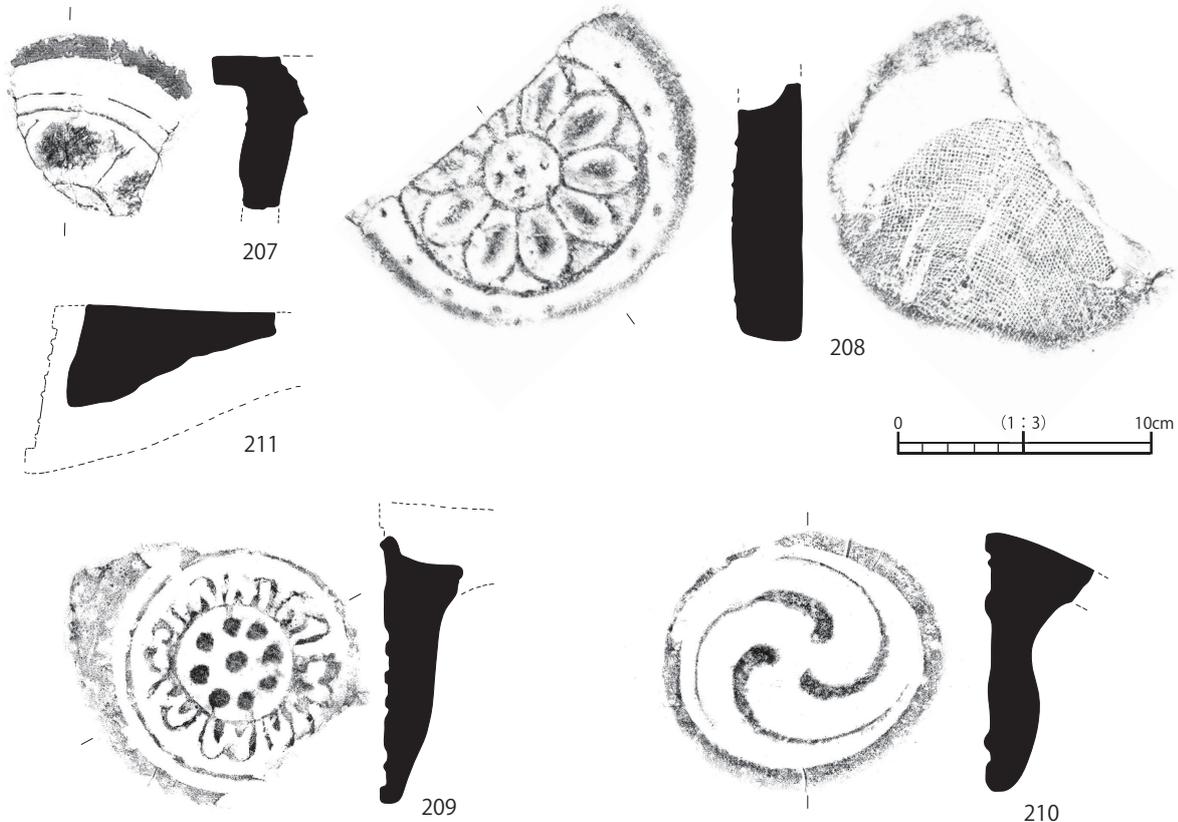
### 土坑 353SK

206 は備前焼の水指もしくは建水である。胴の張る体部から口縁部が直立して伸びる。時期は京Ⅻ期新を中心とする可能性がある。その他の遺物として、土師器、青磁、常滑焼などが出土している。これらの遺物からみて、この遺構の時期は京Ⅷ期古～京Ⅻ期に亘ると考えられる。

### 3. 包含層及び遺構出土の瓦

#### 包含層

207 は単弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏面には布目痕がみられるため、一本造によるものかと考えられる。平安時代中期のものである。208 は単弁十葉蓮華文軒丸瓦である。外区には珠文が配され、界線が巡る。連弁と中房の輪郭は凸線によって表現されている。瓦当裏面には布目痕がみられるため、一本造によるものと考えられる。平安時代中期のものである。209 は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。外区には界線が巡る。播磨系で平安時代の後期のものである。210 は左巻きの三巴文軒丸瓦である。尾は他の巴には接しない。瓦当は楕円形で、裏面はナデ調整されている。平安時代後期のものである。211 は軒平瓦である。瓦当面は欠損するが、平瓦部には部分的に緑釉が残る。



包含層 (207 ~ 211)

図 67 出土瓦 1

### 土坑 527SK

212は唐草文軒平瓦である。平瓦部は凸面、凹面ともにナデ調整されている。

### 井戸 303SE

213は左巻きの三巴文軒丸瓦である。尾は他の巴には接しない。瓦当裏面はナデ調整されている。平瓦部凸面はナデ調整されているが縄目叩痕が残る。凹面には布目痕が残る。平安時代後期のものである。214は唐草文軒平瓦である。外区には界線が巡る。顎部から瓦当裏面にかけてナデ調整されている。平安時代後期で播磨系のものである。215～217は丸瓦である。215の凸面には縄目叩き痕残り、凹面には布目痕が残る。216、217の凸面はナデ調整されている。いずれも凹面に布目痕残り、216には糸切痕が残る。218～221は平瓦である。218の凸面には縄目叩き痕、凹面には布目痕が残る。また、両面ともに糸切痕が残る。219の凸面には斜め方向の縄目叩き痕残り。凹面には、布目痕と糸切痕が残る。220は両面ともに糸切痕が残る。221の凸面には格子目叩痕、凹面には布目痕と糸切痕が残る。

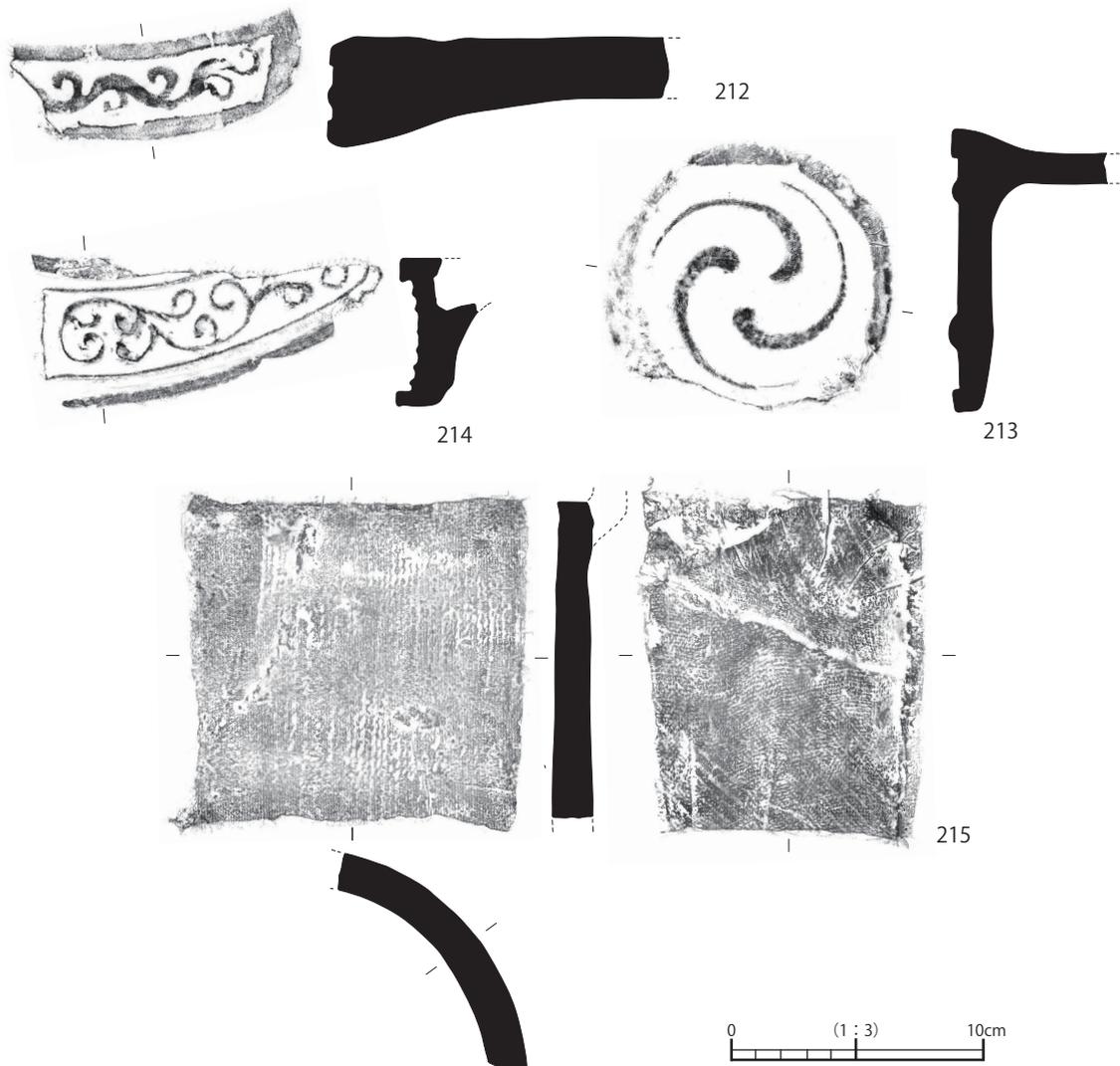


図 68 出土瓦 2  
土坑 527SK (212)、井戸 303SE (213～215)

**土坑 301SK**

222 は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当面には範傷がみられる。瓦当裏面はナデ調整されている。平安時代中期のものである。

**土坑 729SK**

223 は右巻き三巴文、雁行文、二巴文の軒平瓦とみられる。瓦当上面まで布目痕がみられる。平安時代後期のものである。

**土坑 322SK**

224 唐草文軒平瓦である。外区には珠文を配し、界線を持つ。顎から平瓦凸面にかけてケズリ調整され、凹面はナデ調整されている。

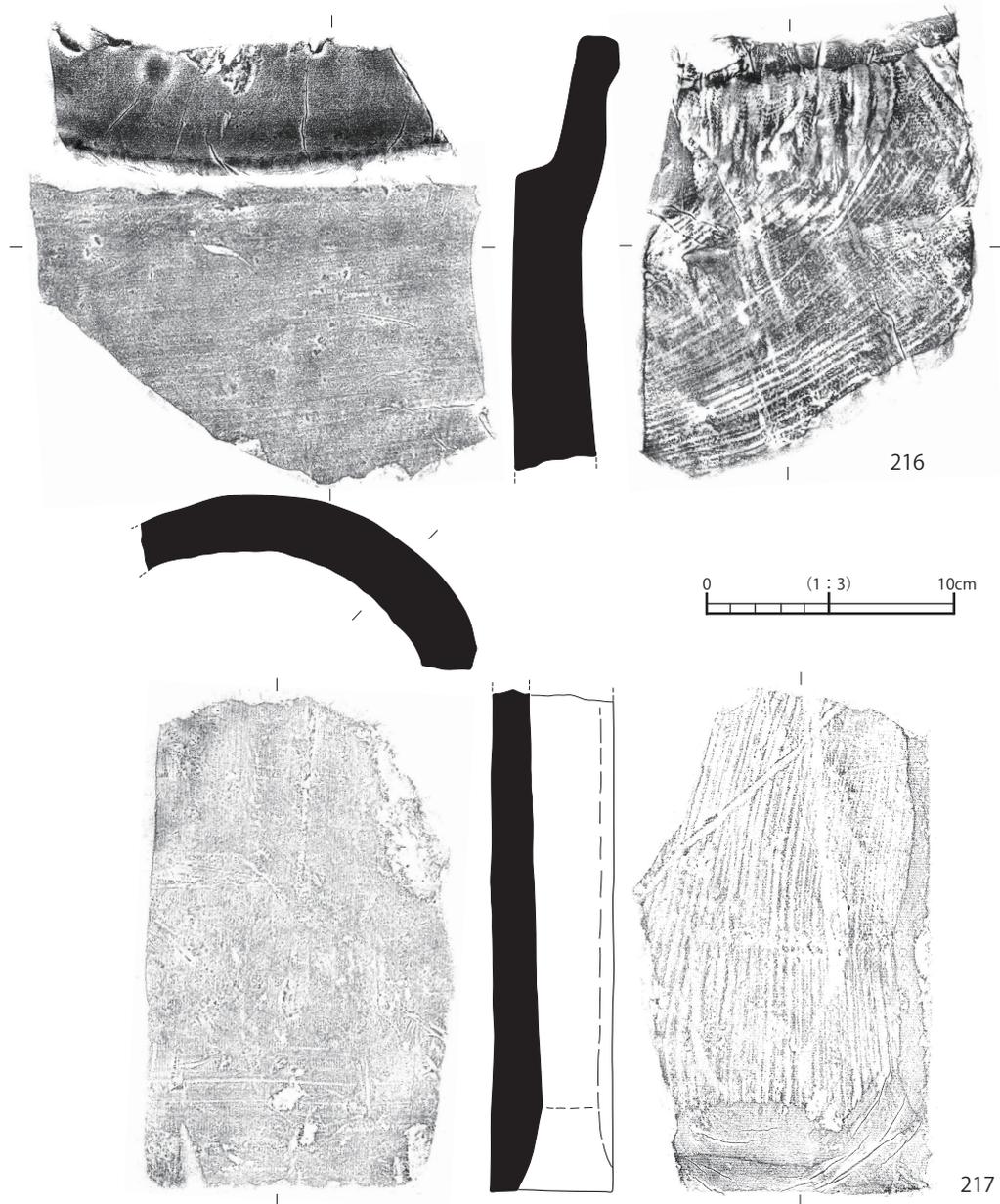


図 69 出土瓦 3

井戸 303SE (216・217)

柱穴 068P

225は唐草文軒平瓦である。外区には界線が巡る。平安時代後期のものである。

井戸 160SE

226は複弁九葉蓮華文軒丸瓦である。外区には界線が巡り、珠文を配する。顎部から平瓦部凹

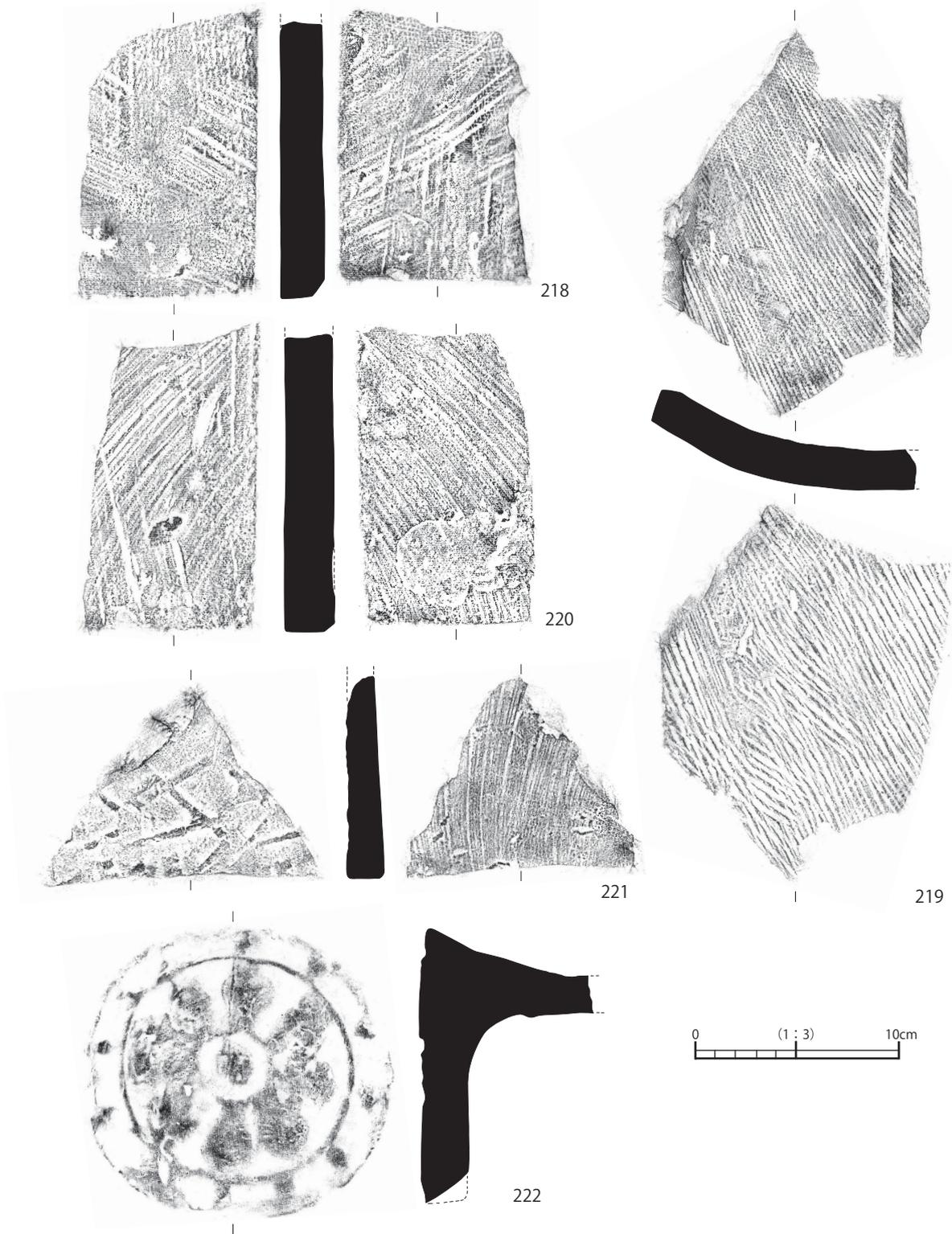


図70 出土瓦4  
井戸 303SE (218 ~ 221)、土坑 301SK (222)

面にかけてナデ調整されている。平瓦部凸面はナデ調整されている。平安時代後期のものである。227は単弁八葉軒丸瓦である。裏面はナデ調整されている。播磨系で、平安時代後期のものである。

**土坑 318SK**

228は単弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏面から平瓦部凹面にかけてナデ調整されている。平瓦部凸面はナデ調整されている。

**土坑 587SK**

229は剣頭文軒平瓦である。瓦当裏面はナデ調整されている。瓦当上面から平瓦部凹面には布目痕が残る。平安時代後期のものである。

**溝 598SD**

230は左巻き三巴文軒丸瓦である。外区には界線が巡る。巴の尾は他の巴に接している。顎部から平瓦部凹面にかけてナデ調整されている。平安時代後期のものである。

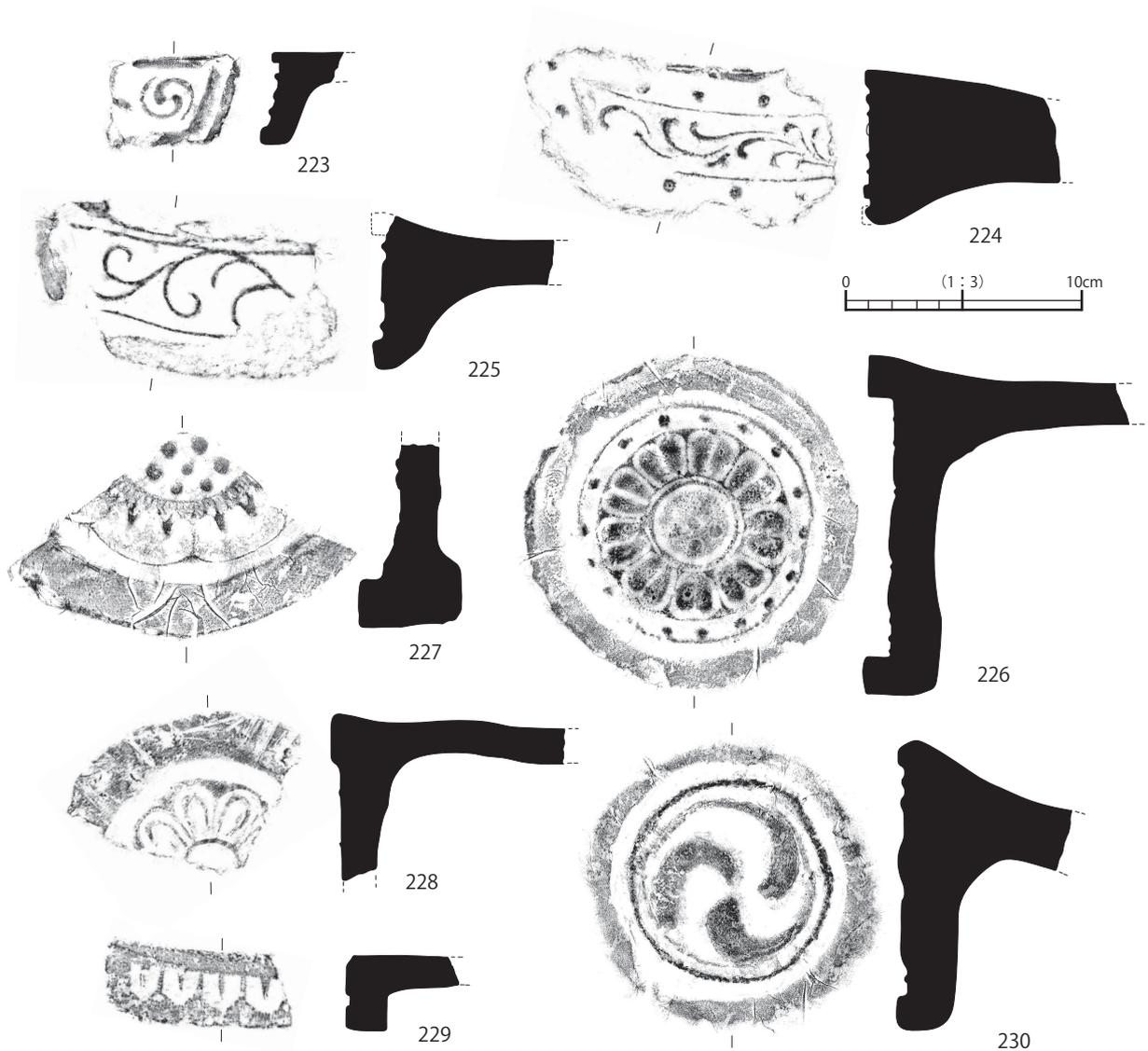


図71 出土瓦5

土坑 729SK (223)、土坑 322SK (224)、柱穴 068P (225)、井戸 160SE (226・227)、土坑 318SK (228)、土坑 587SK (229)、溝 598SD (230)

## 第3節 井戸 088SE 井戸杵材の樹種同定

### はじめに

発掘調査により検出された井戸 088SE 井戸杵材の樹種同定結果を報告する。

### 1. 試料

試料は井戸 088SE 井戸杵材 1 点である。

### 2. 分析方法

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Richter 他（2006）を参考にする。

### 3. 結果

井戸 088SE 井戸杵材は針葉樹のスギに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

### 4. 考察

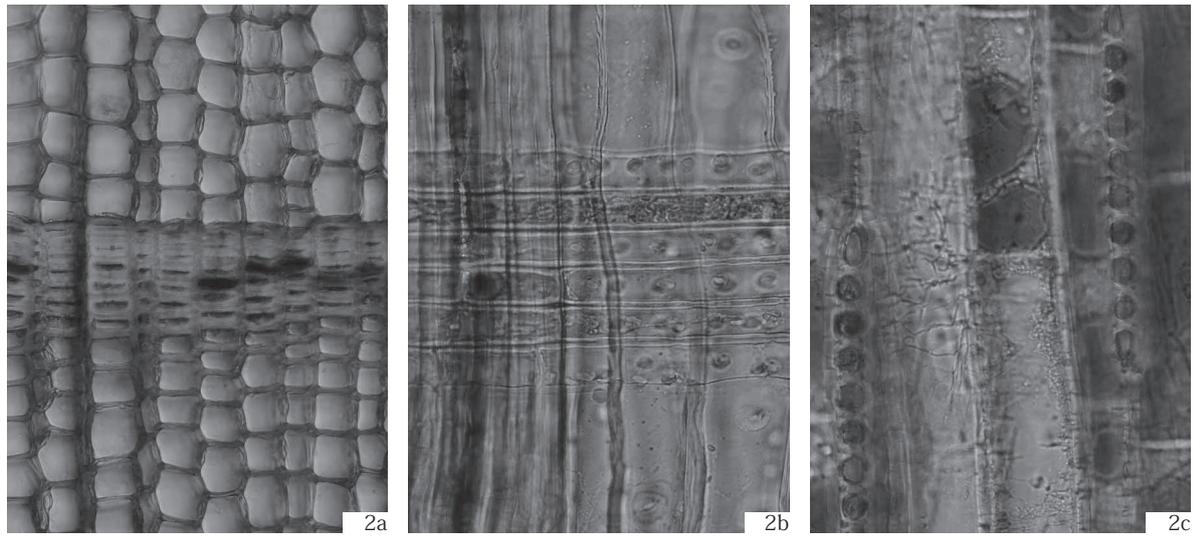
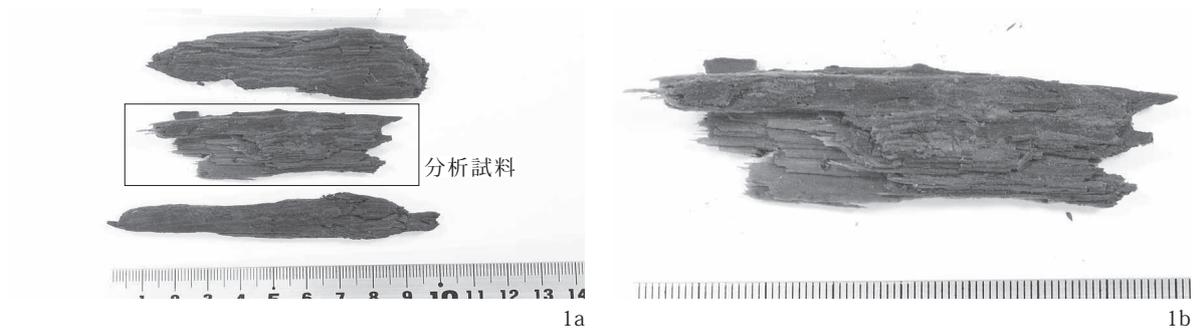
井戸 088SE 井戸杵材は、針葉樹のスギに同定された。スギは、水分の豊富な沖積地等に生育する常緑高木であり、木材は木理が通直で割裂性と耐水性が比較的高い。材質を考慮すれば、加工性と耐水性が比較的高い木材を井戸杵として利用したことが推定される。このようなスギは、井戸杵として利用される事例も多い。

#### 〈引用参考文献〉

伊東隆夫・山田昌久（編）,2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡の特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修）,海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.



1. 資料の外観（井戸樫） a：全資料、b：分析資料  
 2. スギ（井戸樫） a：木口、b：柁目、c：板目

100  $\mu$ m:2a  
 100  $\mu$ m:2b, c

図 72 分析試料（木材）

# 第5章 総括

## 第1節 井戸 303SE、土坑 322SK、池状遺構 588SX の遺物組成

### 1. はじめに

今回の調査では中世の遺物を中心に大量の遺物が出土した。このうち大半を占めるのは土師器皿である。ここでは大量の土師器皿がまとまって出土した井戸 303SE、土坑 322SK、池状遺構 588SX 上層・下層を中心に、主に土師器皿の器種組成について考察を加えてみたい。

### 2. 遺物組成について

#### 井戸 303SE

303SE からはコンテナパッドにして 12 箱、まとまって土師器皿が出土した。このため各器種についてその組成をみてゆきたい。出土した土師器皿のうち代表的な器種を小森編年に準じながら器種分類してみたい。ここでは仮にそれぞれ 39 に代表されるいわゆるコースター皿を皿 Ac、46 の「ての字」口縁部皿を皿 A、49 は皿 Na、53 のうち一段ナデを施すものを皿 Nb、二段ナデを施すものを皿 Nc、54 は皿 Nd、57 のうち一段ナデを施すものを皿 Ne、二段ナデを施すものを皿 Nf とする。器種組成をカウントするうえで口縁部が全体の四分の一以上残存しているものに限って個体数を数えた。その結果皿 Ac は 60 個体、皿 A は 157 個体、皿 Na は 72 個体、皿 Nb は 101 個体、皿 Nc は 66 個体、皿 Nd は 70 個体、皿 Ne は 195 個体、皿 Nf は 97 個体確認することが出来た。全体で 818 個体を数える。それぞれの割合をみると皿 Ac は 7.3%、皿 A は 19.2%、皿 Na は 8.8%、皿 Nb は 12.4%、皿 Nc は 8.1%、皿 Nd は 8.6%、皿 Ne は 23.8%、皿 Nf は 11.9% を占める。これらのことから皿 A、皿 Nb、皿 Ne、皿 Nf が主体を占めることがわかる。その中でも皿 Ne が全体の約四分の一程度を占めていることは特徴的である。

遺物の概要でも記したように、井戸 303SE の土師器皿は京 VI 期古を中心とし、二段ナデを施すことが主流であるとされているが、今回の分析によってこの時期から既に京 VII 期に一般化する一段ナデが出現している可能性が考えられた。この遺構が井戸であり、土師器皿以外の遺物ではロクロ土師器の皿、白色土器の皿、楠葉型瓦器椀、白磁椀などの京 VI 期新までの遺物を含むことを鑑みると、今回図化しなかった一段ナデの皿が京 VII 期の乙訓産のものであることから、この井戸が京 VI 期～京 VII 期に亘り京 VII 期を主体とする可能性があることを指摘しておきたい。

#### 土坑 322SK

土坑 322SK からはコンテナパッドにして 7 箱、まとまって土師器皿が出土した。ここでも各器種についてその組成をみていきたい。ここでも出土した土師器皿のうち、代表的な器種を小森編年に準じながら器種分類してみたい。ここでも仮にそれぞれ 148 に代表されるいわゆる「へ

そ皿」を皿 Sh、155 は皿 Sa、156 は皿 Na、158 は皿 Nb、161 は皿 Sb、163 は皿 Sc、165 は皿 Sd、169 は皿 Se、170 は皿 Sf とする。ここでも器種組成をカウントするうえで口縁部が全体の四分の一以上残存しているものに限って個体数を数えた。その結果、皿 Sh は 28 個体、皿 Sa は 113 個体、皿 Na は 34 個体、皿 Nb は 29 個体、皿 Sb は 80 個体、皿 Sc は 66 個体、皿 Sd は 130 個体、皿 Se は 106 個体、皿 Sf は 127 個体確認することが出来た。全体で 713 個体を数える。それぞれの割合をみると皿 Sh は 3.9%、皿 Sa は 15.8%、皿 Na は 4.8%、皿 Nb は 4.1%、皿 Sb は 11.2%、皿 Sc は 9.3%、皿 Sd は 18.2%、皿 Se は 14.9%、皿 Sf は 17.8% を占める。これらのことから皿 Sh、皿 Na、皿 Nb が少なく、皿 Sa、皿 Sd、皿 Se、皿 Sf が主体を占めることがわかる。そのうち皿 Sd、皿 Sf で全体の四割近くを占めることが特徴的である。また、図化できなかったが褐色系の台付皿が一点出土していることも特徴的である。

この土坑 322SK から出土した土師器皿は、褐色系と「へそ皿」が極端に少なく、白色系が主体を占めることがわかる。遺構の形態は全体を検出していないため判然としないが、遺構の平面や断面、遺物の出土状況等から、墓壇ではなく廃棄土坑と考えられる。土師器皿以外の遺物を観てみると灰釉陶器、東播磨系捏鉢、常滑焼壺、瓦質土器の小型茶釜、瀬戸・美濃系椀、青磁大型盤、白磁椀、輸入磁器の天目茶椀などが存在する。今回の調査地が本能寺北側隣接地であることから、このうち小型茶釜と天目茶椀は喫茶との関連が、大型盤は華道との関係性があることを指摘しておきたい。このことから今回出土した土師器皿の組成は、人為的に選別されたものが投棄された遺構であった可能性が高く、遺物の出土状態からもそのことが裏付けられる。このため、これらの土師器皿は、京X期中を中心とする一括資料と考えられる。

#### **池状遺構 588SX 上層・下層**

池状遺構 588SX は調査時に上層と下層で遺物を取り上げられていることから、ここでは両者の遺物をまじえて内容を概観してみたい。遺物はコンテナパッドに 5 箱出土した。この遺構から出土した土師器皿の組成は、小森編年に準じてここでは仮に 26 を皿 Ac、24 を皿 A、27 を皿 Na、29 を皿 Nb、31 を皿 Nc とする。ここでも器種組成をカウントするうえで口縁部が全体の四分の一以上残存しているものに限って個体数を数えた。その結果、皿 Ac は 18 個体、皿 A は 32 個体、皿 Na は 48 個体、皿 Nb は 43 個体、皿 Nc は 54 個体を確認することが出来た。全体で 195 個体を数える。それぞれの割合をみると皿 Ac は 9.2%、皿 A は 16.4%、皿 Na は 24.6%、皿 Nb は 22.1%、皿 Nc は 27.7% を占める。このことから、皿 Ac は少なく、皿 Na、皿 Nb、皿 Nc が主体を占めることがわかる。このうち皿 Nc が若干多いことが判明した。このため、皿 Na の一段ナデを施すもの。また、皿 Nb、皿 Nc の二段ナデを施すものが存在する。

この池状遺構 588SX は、池状の湧水遺構と考えられ、池状遺構 588SX の埋め戻し時には土師器皿は既に破碎されており、土と共に投棄されたと考えられる。土師器皿以外の遺物としては、須恵器の円面硯、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁椀などが存在する。このうち円面硯、緑釉陶器、灰釉陶器は比較的古い時期に属するが、白磁椀は 12 世紀中頃～後半に属することから、土師器皿との年代に大きな齟齬はない。このことからこれらの土師器皿は、京VI期古～中を中心とする比

較的短期間のあいだに投棄された遺物と考えられる。

〈引用参考文献〉

小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房 2005年

藤沢良祐「瀬戸窯跡群」『日本の遺跡 5』同成社 2005年

『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995年

- ・土橋理子「初期貿易陶磁器」
- ・高橋照彦「緑釉陶器」
- ・山下峰司「灰釉陶器・山茶椀」
- ・山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」
- ・森島康雄「瓦器椀」
- ・森田稔「中世須恵器」
- ・中野晴久「中世陶器（常滑・渥美）」

『江戸時代の美濃窯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2003年

(財)京都市埋蔵文化財研究所『木村捷三郎収集瓦図録』中西印刷株式会社 1996年

上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14 (財)元興寺文化財研究所 1978年

下條信行ほか『三條西殿跡』(財)古代学協会 1983年

※石白(195)については、野村美術館桐山秀穂氏にご教示を得た。

## 第2節 八角形井戸 088SE についての一考察

### 1. はじめに

平安京域からは、これまでに数々の井戸が検出されている。このうち井戸全般については、古くは宇野隆夫氏<sup>1)</sup>、黒崎直氏<sup>2)</sup> などによりまとめられてきた。また、近年では、鐘方正樹氏<sup>3)</sup> によって体系的に考察が加えられている。その中でも長岡京出土の井戸については、山本輝雄氏<sup>4)</sup> の論考に詳しい。また、井戸に伴う「土坑」については、久世康博氏の考察<sup>5)</sup> がある。本稿ではこれらの論考を踏まえ、今回検出された八角形井戸 088SE について考察してみたい。

### 2. 八角形井戸 088SE について

八角形井戸 088SE (図 73) の掘方平面形は楕円形で、長辺が約 2.16m、短辺が約 1.35m、深さは約 2.75m を測る。井戸枠は、全部で 8 枚あり、井戸の内径は、一辺 0.7 ~ 0.76m の八角形を呈する。井戸枠材 (図 74) は、上端が腐朽しているため全長の明らかなものはないが、残存しているもので最も長いものは長さ約 1.5m、幅は何れも 30 ~ 32cm、厚さは 3 ~ 4cm を測り、一枚を除き先端を矢板状に加工するものである。矢板状の井戸枠が打ち込まれている層は、シルト~シルト質細砂 (6-2 層) である。井戸枠内の底には、拳大の円礫が多数入れられていた。井戸の埋土は、三層に分かれる。なお、久世氏の論ずるような、井戸上面の土坑は検出されなかった。

八角形井戸 088SE は井戸枠に縦板を用いるもので、鐘方氏の打ち込み式、矢板型に属する。この井戸のような打ち込み式は、鐘方氏によると矢板を使用する例と縦板を使用する例がある。この打ち込み式は、弥生時代にもよくみられるもので、井戸枠としてはかなり初現的なものであり、低湿地によくみられるものである。このことからこの井戸枠は、湧水が激しく脆弱な地盤に対応するためのものであることが考えられる。

また、今回検出した井戸の中心的時期であ

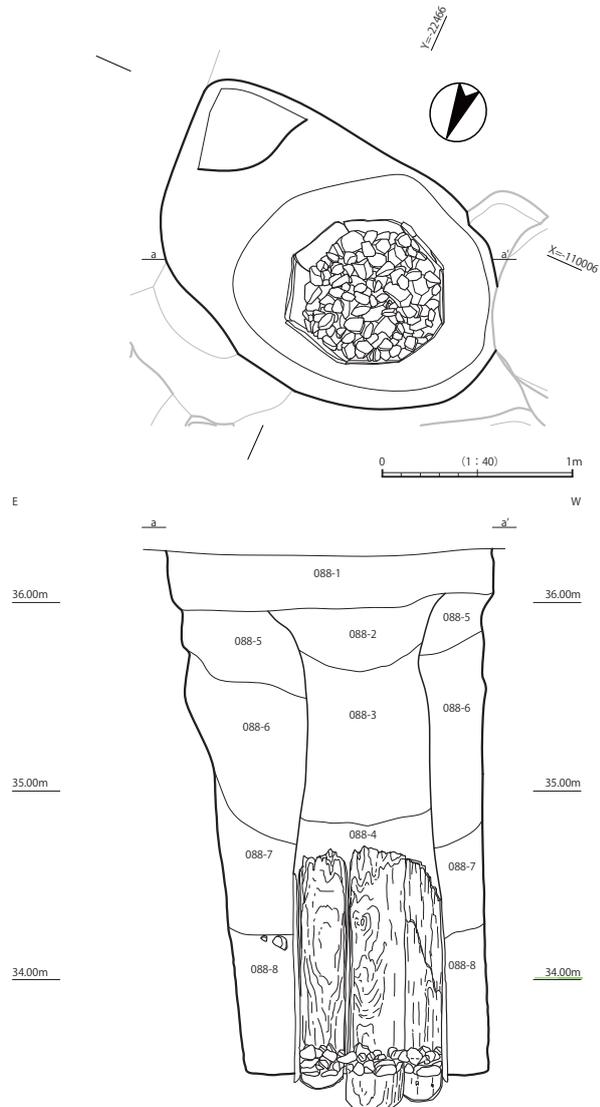


図 73 八角形井戸 088SE

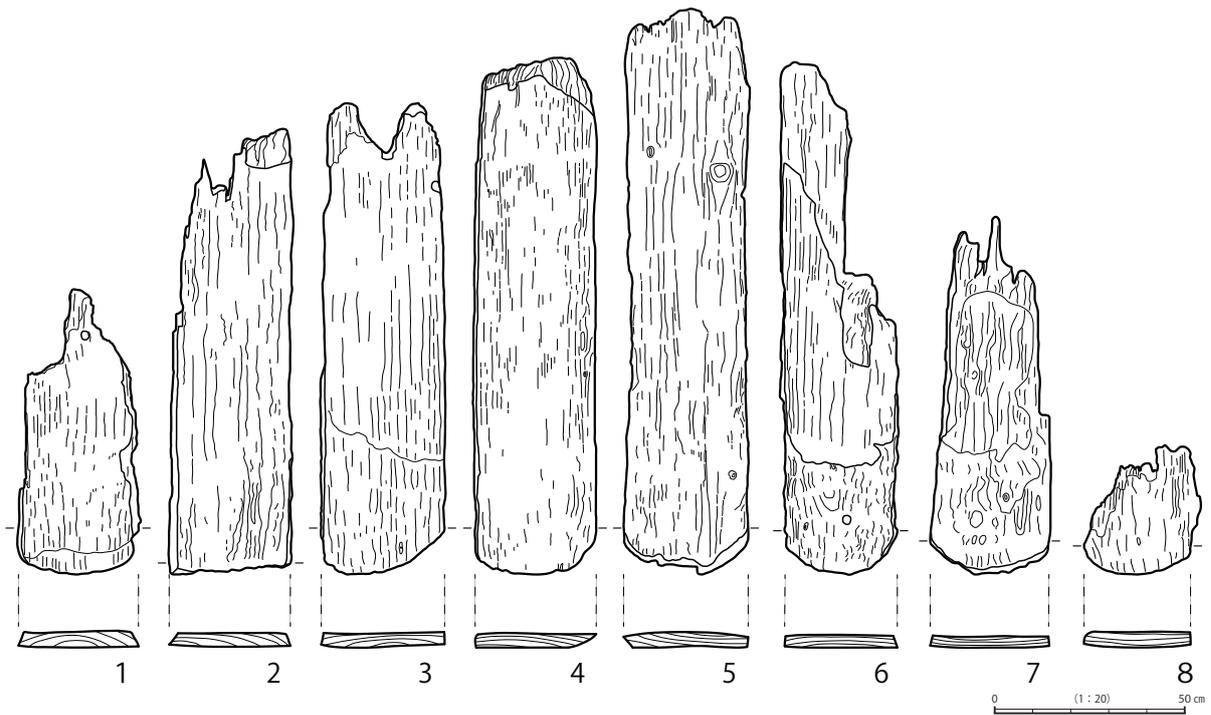


図74 八角形井戸 088SE 井戸枳材

るが、出土遺物から見て京VI期中～京VII期中（12世紀中頃から14世紀初頭）に亘ると推察され、この遺構の最終埋没時期は京XI期中（16世紀中頃）であると考えられる。

### 3. 平安京城での類例

平安京城では、管見に及ぶ限り八角形井戸 088SE の類例が4例（図75～77）確認出来た。それぞれ中世に属する。ここではそれぞれについて詳細をみていくことにしよう。

左京八条二坊三町<sup>6)</sup>の井戸 137（図75）では、粘土層と砂礫層の互層に八枚の縦板を打ち込んでいる。井戸の深さは1.57m、井戸枳の長さは約1.3m、幅32～34cmを測る。平面形は八角形を呈する。実測図と報告書記載からみて縦板式の可能性はある。埋土は三層からなり、2層からは瓦質土器の鍋、最下層からは瓦器の皿が出土している。また、井戸の息抜き用の竹片も検出されている。この井戸の時期であるが掘方の埋土からは京VIII～X期、14世紀から15世紀頃の遺物出土し、最終埋没時期は京XI期、16世紀であると考えられている。

左京五条四坊一町<sup>7)</sup>の井戸 57・井戸 58（図76）では、砂泥層とシルト層に縦板を井戸底まで組んでいることから縦板式であると考えられる。平面形は十角形を呈する。井

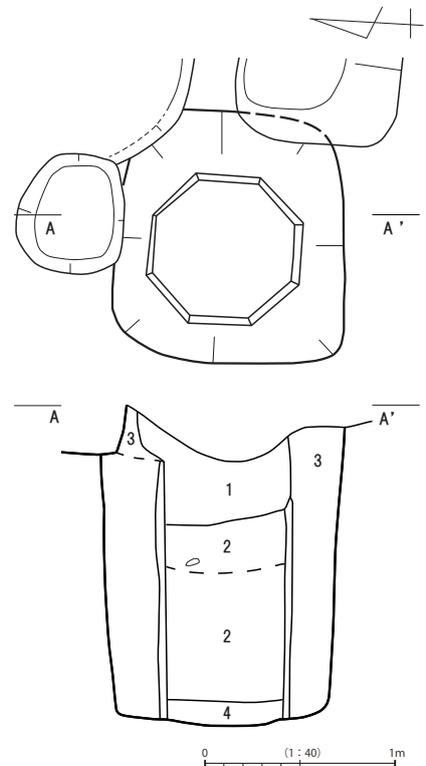


図75 井戸 137

戸 58 の深さは約 2.2m で、井戸枠の長さは 2.2m 以上、幅 30cm、内径 1m を測る。井戸の底には川原石が 5 個体残存していた。また、この井戸 58 は後に作り変えられており、その際の井戸 57 は 12 枚の縦板が使用されている。この井戸からは、土師器皿、焼締陶器、瀬戸産の壺が出土している。この井戸の時期は、出土した遺物より京都市期中（15 世紀中頃）であるとされている。

左京八条三坊 C7 区<sup>8)</sup> の SE1（図 77）では、砂泥と砂礫層に木製桶を利用して井戸枠の縦板を組んでいる。井戸の深さは 1.6m で、井戸枠は木製桶を転用している。この桶は 9 枚の板を使用して九角形を呈している。板は長さ 1～1.2m で、幅は約 30cm を測り、各板と板の継ぎ目の裏面に幅 10cm の薄板があてられている。井戸枠内の埋土は三層に分けられ、土師器皿、瓦器、瓦、銭貨、石製品、金属製品などが出土している。この井戸の時期であるが、遺跡の層位から鎌倉時代後半から室町時代であると考えられている。

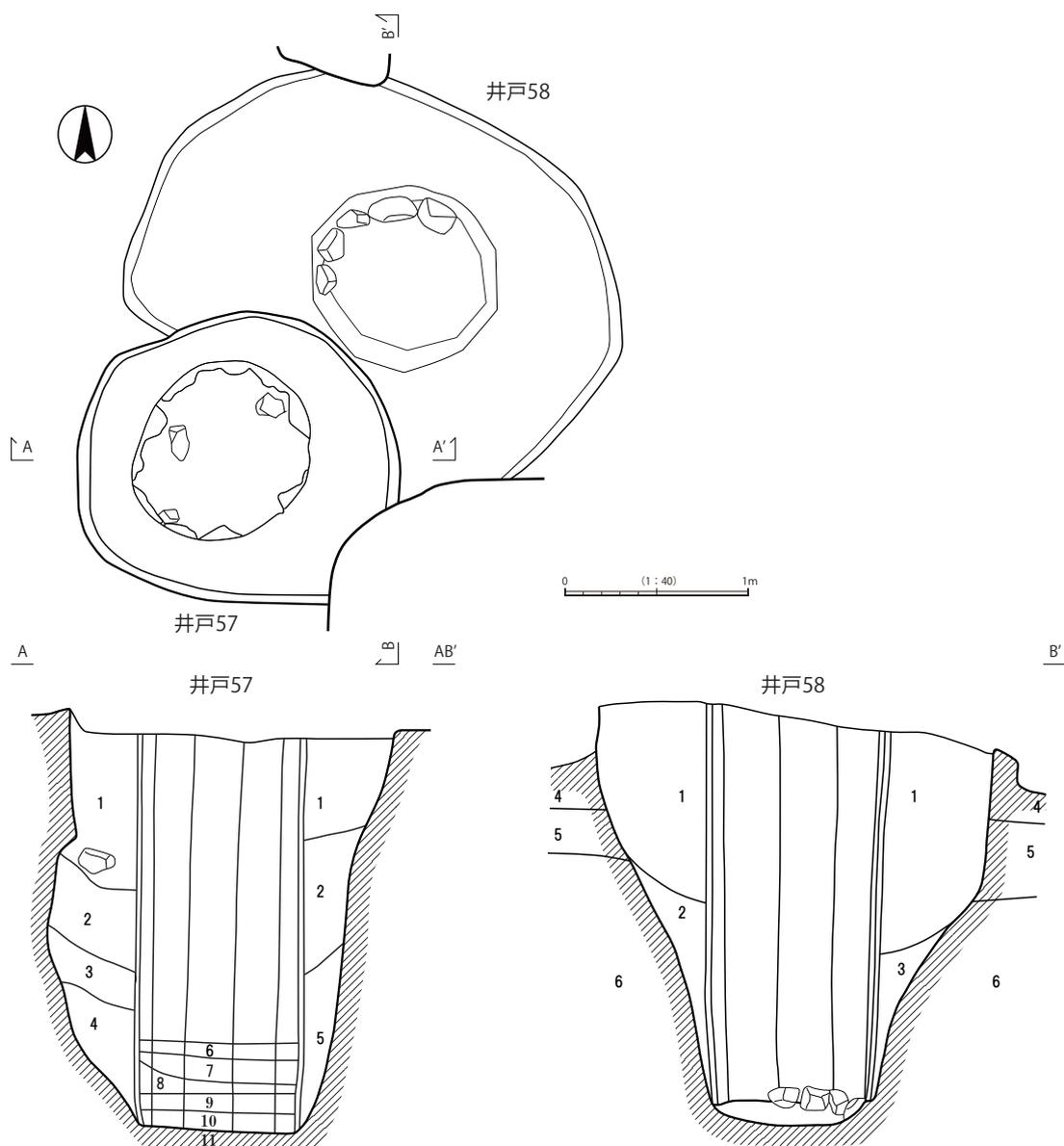


図 76 井戸 57・井戸 58

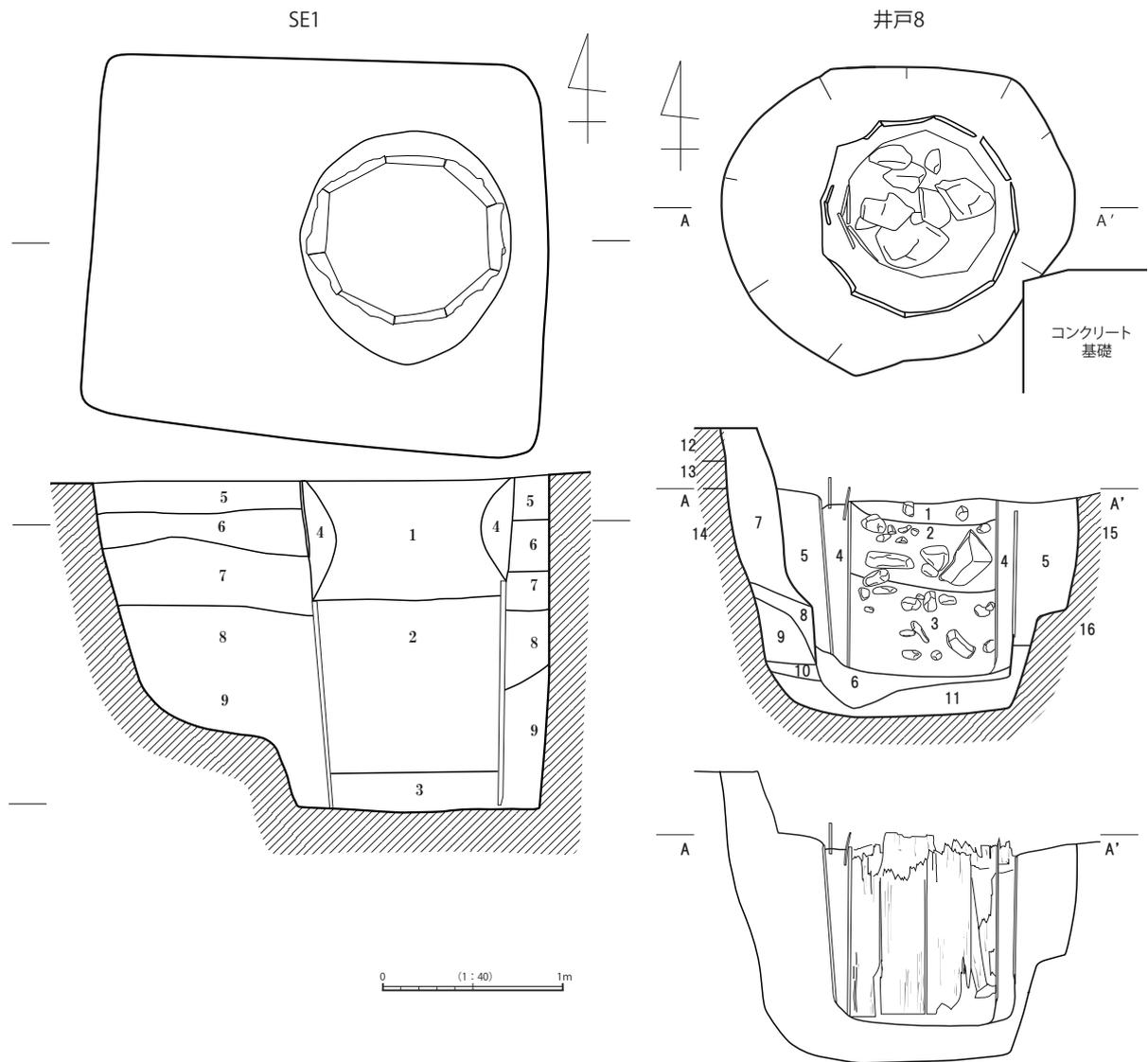


図77 SE1・井戸8

左京八条三坊九町<sup>9)</sup>の井戸8(図77)では、縦板を二重にし、井戸枠を構成している。井戸枠は砂礫層に組まれている。図面から推測すると、井戸枠の外側は12枚、内側は11枚である。そのため平面形は十二角形を呈する。井戸の深さは1.6m、木枠の長さは0.9mを測る。井戸枠内の埋土は三層に分かれる。埋土からは埋戻しに伴う比較的大きな石が出土している。この井戸の時期であるが、出土した遺物から室町時代と考えられている。

#### 4. 八角形井戸 088SE と縦板組井戸の特徴

これまで八角形井戸 088SE と同じように複数枚の縦板を組み合わせる井戸について類例をみてきたが、ここではそれらを総称して縦板組と呼び、いくつかの類似点について検討を加えたい。まず、井戸が築かれているのが比較的脆弱な地盤でシルト、細砂、砂礫などで湧水の激しい場所である。鐘方氏の説くとおり弥生時代に多く見られるのも当時の集落が比較的低位に築かれたことと無縁ではないだろう。特に井戸は水の湧きやすい低湿地に造られるからなおさらである。こ

のように縦板組の井戸は湧水が激しく、比較的脆弱な地盤に適した井戸のタイプだと言えよう。

また、これらの井戸の出現から廃絶の時期であるが、中世に限ることも特徴的である。ここで平安時代から中世にかけての井戸の形態を概観してみると、半数以上が山本氏の縦板組横棧止め井戸に相当することがわかる。また、奈良時代から続く井籠組は、左京四条一坊二町<sup>10)</sup>の井戸359で京Ⅱ期中～新(9世紀前半)、右京三条一坊三町<sup>11)</sup>でSE150の10世紀初頭など、前期にみられるもののその後は管見に及ばない。また、右京三条一坊三町と同じ調査区では、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての石組み井戸、井戸SE200が検出されている。鐘方氏によると石組み井戸の平安京域内での普及は、保元・平治の乱(1156・1159年)や太郎焼亡(1177年)、次郎焼亡(1178年)の大火によって井戸枠に再利用される建築資材の不足に起因するとされている。これ以後平安京内でも石組み井戸が普及することを考えると、先述した井戸SE200のような例はその嚆矢となるのかもしれない。

ところで、平安時代の前期には細長い縦板にホゾ穴を開けて組み立てて円形の井戸枠にする例が、右京三条一坊六・七町<sup>12)</sup>の井戸470や左京四条二坊十四町<sup>13)</sup>の井戸SE3000、井戸3444などで確認されているのが注目される。一見すると縦板組に類似するようにも思われるがホゾ穴を開けていることなどから山本氏の丸太刳抜き井戸に含まれると思われる。

ではなぜ弥生時代に盛行した縦板組が、中世京都で散見されるのであろうか。中世京都ではこの時期、石組み井戸や縦板横棧止め井戸ばかりでなく、曲げ物を重ねたものや、羽釜を重ねたものなど色々な種類の井戸が盛行する。縦板組も簡易に井戸枠を作ることが出来る井戸として利用されたのではないだろうか。平安時代には覆い屋を設ける大型の井戸が造られるのに対して、中世になると簡素化するのには決して水に対する意識が変わったのではなく、それだけ水を必要とした。つまり人口の増加が起こした現象ではなかったのだろうか。12世紀頃には祇園社なども成立し、その後土倉や酒屋も増えていることから、益々人口は増加していったものと考えられる。八角形井戸088SEのような一見簡素化した縦板組の井戸が成立するのも、このような人口増加による水利用の多様化が背景としてあった可能性を指摘しておきたい。

<引用参考文献>

- 1) 宇野隆夫「井戸考」『史林』第65巻5号、史学研究会1982年
- 2) 黒崎直「平城京の井戸」『月刊文化財』151号、文化庁文化財部1976年
- 3) 鐘方正樹『井戸の考古学』同成社2003年
- 4) 山本輝雄「長岡京の井戸」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会1986年
- 5) 久世康博「『井戸』検出に伴う『土坑』の検討」『研究紀要』第8号、(財)京都市埋蔵文化財研究所2002年
- 6) 吉村昌ほか『平安京左京八条二坊三町跡』(株)イビソク関西支社2014年
- 7) 家崎幸治ほか『平安京左京五条四坊一町跡』古代文化調査会2006年
- 8) 鈴木廣司ほか『平安京左京八条三坊』(財)京都市埋蔵文化財研究所1982年
- 9) 前田義明『平安京左京八条三坊九町跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所2010年
- 10) 丸山真史ほか『平安京左京四条一坊二町跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所2015年
- 11) 平尾政幸ほか『平安京右京三条一坊三町(右京職)跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所2002年
- 12) 丸川義広ほか『平安京右京三条一坊六・七町跡—西三条第(百花亭)跡—』(財)京都市埋蔵文化財研究所2013年
- 13) 平尾政幸ほか『平安京左京四条二坊十四町跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所2003年

### 第3節 半地下式土坑 158SK についての一考察

#### 1. はじめに

今回の調査では、調査区西側で半地下式土坑 158SK が検出された。このような半地下式土坑については、平安京城では古くは堀内明博氏<sup>1)</sup>、前川佳代氏<sup>2)</sup>によってまとめられており、近年では柏田有香氏<sup>3)</sup>、丸川義広氏<sup>4)</sup>によって論考がなされている。また、江戸遺跡においては、古泉弘氏<sup>5)</sup>、山口剛志氏<sup>6)</sup>、菅谷通保氏<sup>7)</sup>などによって考察がなされている。ここでは 158SK について、平安京城で管見に及ぶ範囲で類例との比較検討を行いながら、半地下式土坑について考察をめぐらしたい。

#### 2. 半地下式土坑 158SK について

この半地下式土坑 158SK (図 78) は、一辺に三基の柱穴を持つもので、6 個の柱穴が残存し、そのうち 3 ヲ所に根石が残されていた。土坑の規模は、長辺約 3.3m、短辺約 2m、深さは約 0.65m を測る。その状況からこの土坑には、上部を支える構造物の存在が推測された。この土坑の時期は、出土した遺物から京VII期中～京IX期中、13 世紀前半～15 世紀初頭に亘ると考えられる。

158SK のような土坑は、報告者によって穴蔵、方形土坑、地下式倉庫、地下室<sup>8)</sup>、室等、様々な名称で呼ばれる。江戸遺跡で一般的に呼ばれている「地下式土坑」は、横穴の様な土天井の掘り抜き式のものから、木材等による天井式のものまでみられるため、特に前者と区別する意味で、以下にはこの遺構を「半地下式土

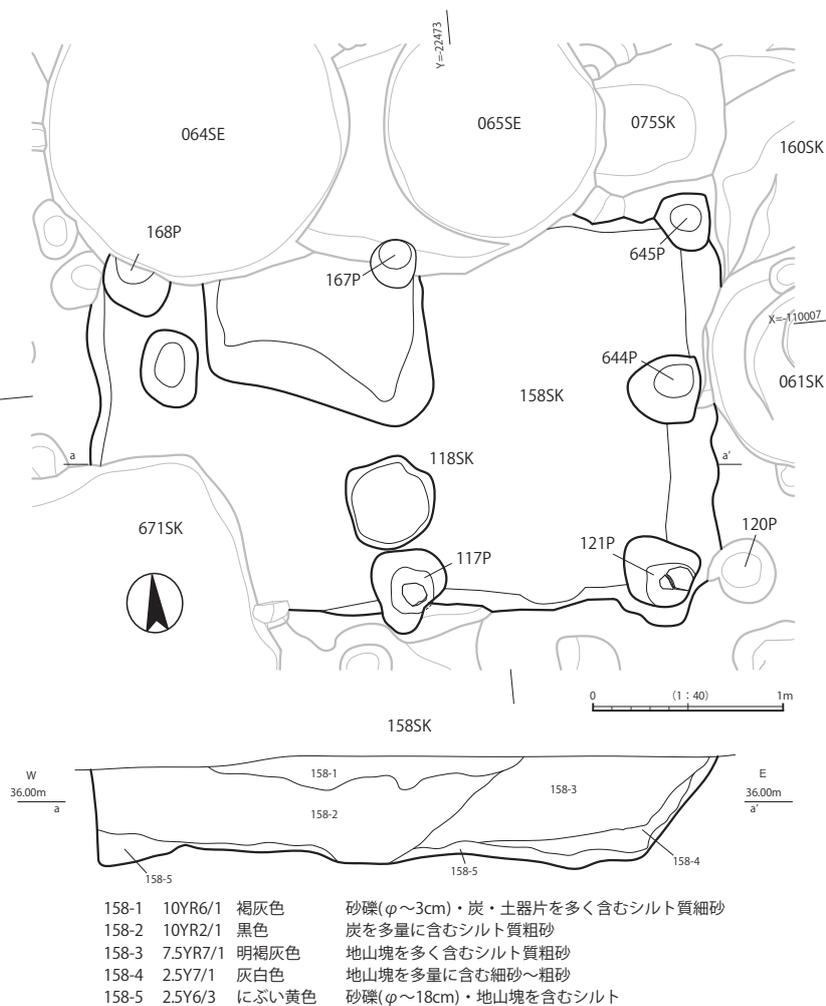


図 78 半地下式土坑 158SK

坑」と称することとする。

### 3. 半地下式土坑の類例

#### 1) 旧平安京城での検出例

平安京左京五条三坊九町跡<sup>9)</sup>からは、半地下式土坑とその可能性がある土坑が合わせて5基検出されている。そのうち地下式倉庫370(8)は東西約4.8m、南北約2.6m、深さは約1.1mを測る方形土坑で、全体的に床土を張り、一部に礎石が残る。床は板貼りだったと想定されている。時期は出土遺物から京Ⅶ期古～中、13世紀後半であると考えられている。また、地下式倉庫450(9)は東西約3.2m、南北約3.3m、深さは約1.7mを測る正方形の土坑であり、全体的に床土を貼り、壁沿いに柱痕跡が検出されている。時期は出土遺物から京Ⅵ期新、13世紀前半であると考えられている。これらの他に半地下式土坑の可能性があるものとして土坑418、土坑791、土坑471が存在する。これらの土坑もそれぞれに床土を貼っている。土坑418は四隅と東西壁中央に方形柱痕が確認されている。土坑471(13)は東壁木杭跡が検出されている。また、土坑791では四隅と東西壁際中央部に柱穴が認められ、北半には数箇所木杭痕が残されていた。土坑418及び土坑791の時期は、出土した遺物からみて16世紀前半の可能性がある。

平安京左京三条三坊五町跡<sup>10)</sup>からは、半地下式土坑の可能性があるものとして土坑45(10)がある。東西約2.5m、南北約2.0mを測る方向の方形土坑であると推察される。遺構の詳細は定かではないが、全体図から北西と南東隅に一カ所、東壁に二カ所、北壁に一カ所柱穴らしき痕跡が確認できる。時期は出土した遺物から京Ⅸ期古、14世紀後半である。

平安京左京四条四坊二町跡<sup>11)</sup>からは、地下室と穴蔵、土蔵及び石室とする半地下式土坑が検出されている。この地下室410(4)は東西2.5～3.0m、南北約5.8m、深さは約1.4mを測り、東、西、南壁底面には川原石が列状に並べられている。また、全体的に柱痕跡が認められることから、底面に根太を据え上面に板を敷いた板張りで、「穴蔵」であると考えられている。時期は出土した遺物からみて京Ⅸ期古、14世紀後半、鎌倉時代後期であると考えられている。穴蔵1(19)は東西約4.1m、南北約3.7m、深さは約0.6mを測り、東西南北面には石組を施す。この穴蔵の時期は出土した遺物から京Ⅻ期、17世紀前半と考えられている。穴蔵7は東西約2.4m、南北約4.0m、深さは約0.5mを測る。北壁全面と東壁、西壁の一部に石組が残存している。この穴蔵の時期は出土した遺物から江戸時代初頭である可能性がある。土蔵110は地業を敷設するための西側の溝が検出されている。この土蔵の時期は出土した遺物から江戸時代前期であると考えられている。石室は小規模で三基検出されている。石室168は一辺約1.5m、深さは約0.9mを測る。石室169は一辺約1.4m、深さは約0.9mを測る。石室170は一辺約1.0～1.1m、深さは約1.0mを測る。これらの石室の時期は、出土した遺物から江戸時代前期である可能性がある。

平安京左京八条三坊跡<sup>12)</sup>からは、小規模な方形土坑、SK14(11)が検出されている。規模は南北約0.75m、東西約1.35m、深さは約0.35mを測り、四隅と各辺の中間部の7か所に木杭を打ち込んでいた。また、杭と壁面の間に横板が入れられ、土留めであると推定されることから貯

蔵用の施設の一つと考えられている。この遺構の時期は、調査地全体の層位から鎌倉時代後半から室町時代と考えられている。

平安京左京四条三坊八町跡<sup>13)</sup>からは、地下室が5基検出されている。このうち地下室574は、南壁部分のみの検出であったが底面には径20cm以下の小礫が敷かれていた。また、地下室581(2)では掘方底面には上面平坦な束石を検出しており、上屋の床を支えるか、地下室の間仕切りの可能性が指摘されている。時期は出土した遺物から京Ⅷ期中～新、14世紀前半、南北朝時代の初頭頃であると考えられている。地下室650及び685(1)は一連の遺構と考えられている。650は木組み壁面に裏込めの川原石を入れ、西半部には川原石を多く敷いていた痕跡が残っていた。また、685は650の付属屋もしくは出入口であった可能性が考えられている。これらの遺構は、出土した遺物から京Ⅶ期新～Ⅷ期古、13世紀中～後半と考えられている。

平安京左京五条三坊八町跡<sup>14)</sup>からは半地下式土坑に相当するものとして室跡1基、方形土坑3基が検出されている。室跡(6)は北辺2.24m、東辺1.44m、深さ0.4mを測る土坑である。底面の東西南北隅には礎石が据えられていた。方形土坑No.36(12)は東西1.7m以上、南北0.6m、深さは約0.18mを測る東西に長い土坑である。底面には杭穴を6本ずつ二列検出した。この土坑の時期は、出土した遺物から14世紀中葉に位置付けられている。方形土坑No.38は東西1.84m、南北0.54m、深さは約0.46mを測る。北壁には柱穴が3基検出されており、柱の底面には根石と思われる石が据えられていた。このことより上屋構造の存在が想定されている。この土坑の時期は、出土した遺物から14世紀後半後葉～15世紀初頭に位置付けられている。方形土坑No.140は南北1.22m、東西0.7m、深さは約0.3～0.4mを測る小規模な土坑である。底面には杭穴が4基検出されている。この土坑の時期は、出土した遺物から14世紀中葉に位置付けられている。

平安京左京四条三坊四町跡<sup>15)</sup>からは、地下室109(3)が検出されている。南北3.5m、東西2.0m、深さ1.3mを測る。底部は整地土によって嵩上げし、拳大の礫を敷き詰める。室の内側には縦板の痕跡が残る。この土坑の時期は、出土した遺物から15世紀後半～16世紀初頭であると考えられている。

平安京左京一条三坊十町跡<sup>16)</sup>からは、小規模な石室が検出されている。石室161A・B(15)は掘形が東西1.7m、南北2.5m、深さは約1.0m以上の隅丸方形を呈し、二時期に亘って構築されている。この石室の時期は出土した遺物から17世紀前半～中葉であると考えられている。石室177は掘形が東西2.2m、南北1.8m、深さは約0.5mの隅丸方形を呈する。0.2～0.4mの川原石の小口面を内側に向けて積み上げている。この石室の時期は、出土した遺物から16世紀代と考えられている。

平安京左京五条三坊九町跡<sup>17)</sup>からは、小規模な石室と土坑が検出されている。石室208は0.15～0.2mの石の小口を揃えて方形に組み、内法は一辺約0.3mの正方形を呈する。深さは約0.3mを測る。この石室の時期は17世紀後半であると考えられている。土坑236は規模の大きな方形土坑である。東西約4.2m、南北約3.4m、深さは約1.3mを測り、隅丸長方形を呈する。

底部壁際に木杭痕が数箇所確認されたことから半地下式土坑であったとみられる。この土坑の時期は、出土した遺物から 17 世紀前半であると考えられている。

平安京左京北辺二坊八町跡<sup>18)</sup>からは、比較的規模の大きな土坑が 2 基検出されている。このうち土坑 1001 (14) は東西 4.95m、南北 2.3m、深さは約 0.52m を測り、土坑の壁に積み上げられた川原石の痕跡が残存している。この土坑の時期は、出土した遺物から京Ⅷ期中～新、17 世紀後半～18 世紀前半であると考えられている。また、土坑 2002 は地下室の可能性があると不明確であるとされている。

平安京左京北辺三坊六町跡<sup>19)</sup>からは、小規模な土坑(石室)が 2 基検出されている。このうち土坑 22 (16) は東西内径 0.95m、南北内径 0.7m、深さ 0.85m を測る。平面形は隅丸方形を呈し、石組を有する。この土坑の時期は、出土した遺物から 17 世紀後半～18 世紀代であると考えられている。土坑 160 (18) は東西約 2.8m 以上、南北約 2.5m 以上、深さ約 1.6m を測り、西側と北側に石組を有する。この土坑の時期は、出土した遺物から江戸時代後期と考えられている。

平安京左京三条四坊十町跡<sup>20)</sup>からは、土坑が 1 基検出されている。この土坑 03 (17) は東西約 3.0m、南北約 0.9m、深さ 0.8m を測り、北壁、南壁、西壁には石組が存在するが、東壁には石組が積まれておらず、板があてられていた可能性がある。この土坑の時期は、出土した遺物から 18 世紀～19 世紀前半であると考えられている。

平安京左京三条四坊十町跡<sup>21)</sup>からは、室が 1 基検出されている。室 SX2 (5) は掘形が南北 2.5m、東西 1.3m、深さ約 2.0m を測る。西壁下では礎石が 3 基検出され、西壁、南壁には材木の痕跡が確認されている。これらのことから、この室の壁は縦板組横棧止であった可能性が考えられている。この室の時期は、出土した遺物から 19 世紀であると考えられている。

平安京外ではあるが京都大学吉田南構内 AN22 区<sup>22)</sup>では、中世の石組み土坑が検出されている。そのうち石室 SX35 (25) は四方を石組みで囲い南北にそれぞれ柱穴と思われる痕跡がある。また石室 60 (22)、26 (21) は、三方を石組みで囲い、東側に開口部を持つ。これらの石組みは、出土した遺物から 14 世紀代と考えられている。また、石室 SX17 (23) は北西部の石組みが崩れているが、本来四方を囲んでいたものと思われる。一方、石室 SX29 (24) は全体的に石組みが崩れているが、本来三方を囲み西側を開口していたものと考えられる。これらの石組みの時期は、出土した遺物から 15 世紀から 16 世紀前葉であると考えられている。

## 2) 江戸遺跡検出例

ここで江戸遺跡において検出されている地下式土坑についてみていきたい。江戸遺跡においては数々の地下式土坑が検出されているが、ここでは東京大学本郷構内の遺跡を中心に、主に平安京域で検出される半地下式土坑と同じタイプの類例について概観してゆきたい。

このうち医学部附属病院地点<sup>23)</sup>では、F23-2 (25) は土留め用の壁板のある土坑で、四方に杭列が並ぶ。この土坑の時期は、出土した遺物から 19 世紀前半から幕末にかけてと考えられている。

I・J20・21区で検出された地下式土坑120-3(26)は、三方に杭列が存在し、北壁が一段下がることから、この部分が入り口であった可能性が高いと考えられている。この土坑の時期は、出土した遺物から18世紀前半を中心とすると考えられる。

X36区では、土坑X36-1(27)が検出されている。この土坑は、正方形で東北隅に入り口であったと思われる張り出し部が存在する。壁には板を張るための柱穴が存在する。地下式土坑であった可能性が高いと考えられている。

AE35・36区にまたがって位置する半地下式土坑AE-6(28)は、東西方向に長軸をもつ。底には礎石と考えられる平坦な自然石が7個確認されている。また、水溜もしくは間仕切りと思われる溝が掘られているのが特徴的である。この土坑は、出土した遺物から18世紀前半であると考えられている。

AE36区の土坑AE36-4(29)は長方形を呈し、四方の壁に柱穴が確認され、柱根の残存するものも存在する。また、この柱穴と壁の間に板材が存在していたことも確認されている。

AE34・35区では、半地下式土坑AE34-5(30)が検出されている。北東隅には入り口と思われる四段の階段が存在し、壁には柱穴が確認されている。そのうち礎石が残存するものもある。この土坑は、出土した遺物から17世紀末から18世紀前半であると考えられている。

AE36区では、土坑AE36-5(31)が検出されている。切り合いのため全容は定かではないが南北に長軸をもつ土坑である。南壁に柱穴を持つ。

理学部7号地点<sup>24)</sup>では、長方形を呈する土坑が検出されている。そのうち63号土坑(33)では壁際に溝があり、溝内に杭痕が確認されている。74号土坑(32)では壁際に杭痕が確認されている。75号土坑(34)では柱穴が確認されている。これらの時期は、出土した遺物からみて18世紀中葉から幕末であると考えられている。

#### 4. 半地下式土坑の分類

ここまで平安京城及び江戸遺跡における半地下式土坑を概観してきたが、構造的に幾つかのタイプに分類が出来る。

I-A類(1～4)は、大型で床に礫を敷くものである。(1)は入り口と思われる張り出し部がつくのが特徴的である。(2)は柱を支えていたと思われる根石が残存している。(4)は床に敷かれていたと思われる板の痕跡が看守される。これらの時期は、13世紀中葉～16世紀初頭に亘ると考えられる。

I-B類(5・6)は、礫を敷かず根石だけを置くものである。特に(5)は木枠の痕跡が確認されているのが特徴的である。これらの時期は、14世紀中葉～19世紀に亘ると考えられる。

II-A類(7～13)は、礫を敷かず壁の周囲に杭列及び柱穴を配するものである。規模は様々で特に(8)は麴室の可能性があると考えられている。今回検出された158SKのタイプである。このタイプが、平安京城では一番多い半地下式土坑の可能性があると見られる。これらの時期は、13世紀後半～15世紀初頭に亘ると考えられる。

Ⅱ-B類(14)は、柱穴も礎も持たないものである。規模からみて半地下式土坑の可能性があると考へたい。時期は、17世紀後半～18世紀前半であると考へられる。

Ⅲ類は、石組みを配する土坑である。

Ⅲ-A類(15・16・21・22)は、比較的小型のものである。中世から近世まで存続するが、中世の(21)(22)は石の積み方が近世に比べて雑なつくりになっている。これらの時期は、14世紀～18世紀に亘ると考へられる。

Ⅲ-B類(17・18・20・23・24)は、中型のものである。このタイプも中世末期から近世まで存続する。(23)(24)は、やはり近世のものに比べて石組みの積み方が粗雑な感は否めない。これらの時期は、15世紀～19世紀に亘ると考へられる。

Ⅲ-C類(19)は、大型である。中世では管見に及ばない。(19)の時期は、17世紀前半であると考へられる。

Ⅳ類は、江戸遺跡の地下式土坑である。

Ⅳ-1類(25)は、やや長方形を呈するものである。四方に柱穴を配し、壁には板の痕跡が残る。時期は、19世紀前半から幕末にかけてと考へられる。

Ⅳ-2類(26・31)は、長方形を呈するものである。(26)は北側に入り口部と思われる段差が見て取れる。これらの時期は、18世紀前半を中心とするものである。

Ⅳ-3類(27)は、正方形を呈するものである。北東隅に入り口と思われる張り出し部が存在する。地下式土坑であった可能性が高いとされる。

Ⅳ-4類(28・29・30)は、半地下式土坑の可能性が高いものである。(28)は柱を支えるための礎石が残存している。また、(28)(29)では四方に柱穴を配する。(29)は壁に板の痕跡が残る(30)は、北東隅に入り口と思われる階段を設ける。これらの時期は、17世紀末～18世紀前半であると考へられる。

Ⅳ-5類(32・33・34)は、比較的小型の土坑である。それぞれ柱穴を配する。これらの時期は、18世紀中葉～幕末であると考へられる。

## 5. まとめ

以上のように大まかではあるが管見に及ぶ範囲で半地下式土坑について概観し、その分類を行ってみた。始めにも触れたが、平安京域で最初に半地下式土坑について論考をめぐらせたのは堀内明博氏である。それによると、半地下式土坑の出現は11世紀末～12世紀初頭であり、14世紀以降は石組みが出現するとされている。遺構の性格としては、基本的には倉庫と考へられ、小規模な土坑については便槽の可能性があるとされた。今回の検討でも石組みを持つⅢ類は、京都大学吉田南構内AN22区(20)～(22)のような14世紀に遡るものが出現していることが注目される。しかしながら、その石組みの積み方は近世のものに比べて粗雑な感は否めない。

また、平安京域では半地下式土坑で一部に入り口と思われる張り出し部の存在するものもあるが、使用後は廃棄土坑<sup>25)</sup>として利用されているものがほとんどで、全容が明らかな例は多くは

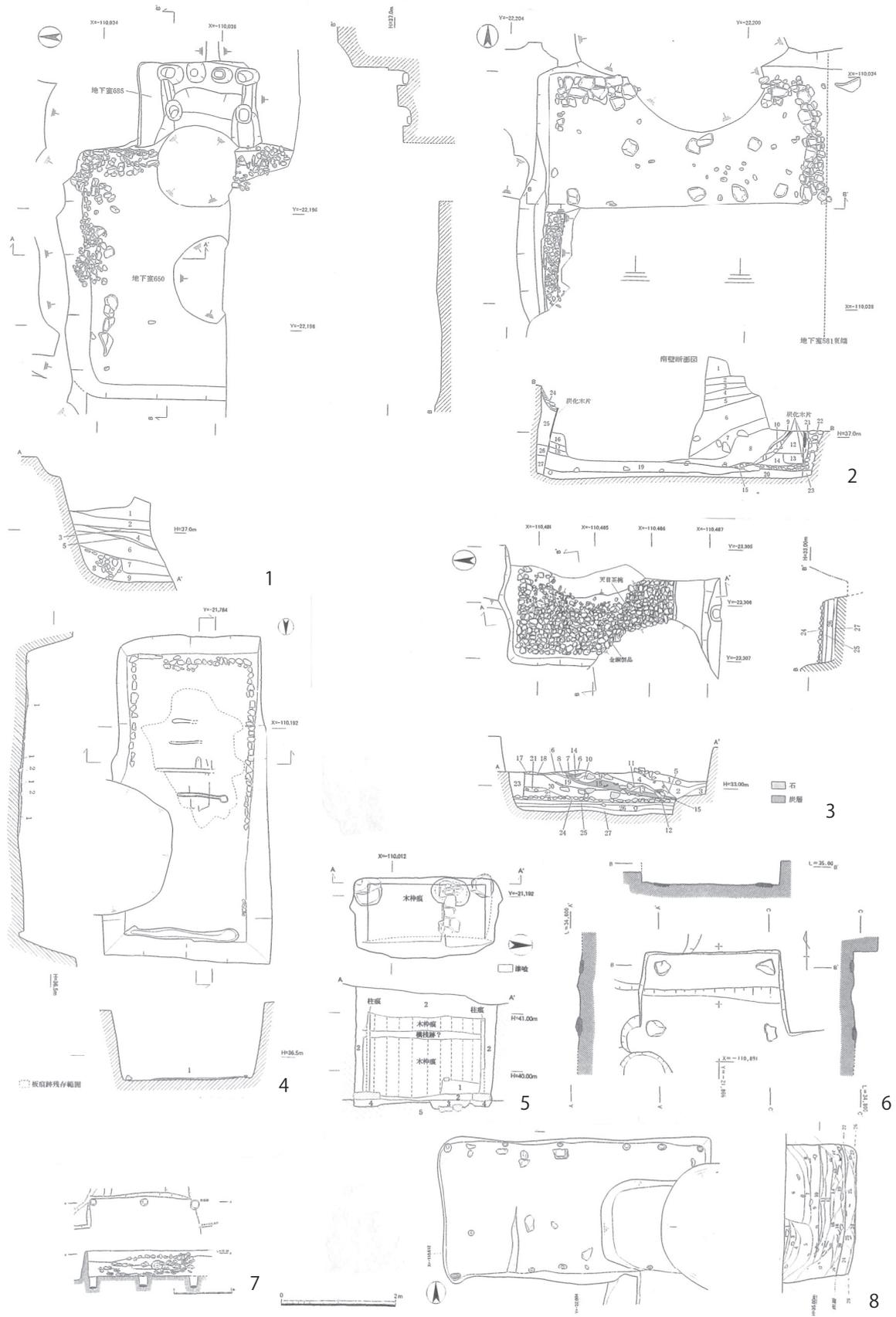
ない。また、(8) のような麴室の可能性もあるものも存在するが、断定は難しいと言わざるを得ない。このような状況の中、平安京域では近世に入ると石組みに変化するのが一般的である。

一方、江戸遺跡を概観すると様々な地下式土坑の例がある。この点については、小泉氏の論考<sup>26)</sup> に詳しい。それによると地下式土坑のタイプを、I～V群に分類されている。このうち平安京域と共通しているのは、IV群とV群である。IV群は木製の桁形の部屋を設置するもので、V群は石組み桁形の部屋を設置するものである。今回は江戸遺跡すべてについて概観する事はできず、東京大学構内の医学部附属病院地点の遺跡を中心にして検討したために、V群については管見に及ばなかったが、IV群についてはある程度検討することが出来た。そのため今回分類したIV-4類のうち土坑AE34-5(30)は、比較的早い17世紀末から18世紀前半には出現することがわかる。小泉氏によると、この様な開鑿型の穴蔵は、西日本の天板仮設型の穴蔵に類似点が求められるという。これについては、低湿地で天板仮設型の穴蔵しか作れず、防水上木造が望ましいためとされている。また、『守貞謾稿』<sup>27)</sup> では、京阪の穴蔵は石作りで江戸ではヒバ材で作ると記載されているという。今回の検討でも、同じ傾向が伺えると言えよう。

今回の検討では半地下式土坑という用語を用いたが、一般的にはこのような遺構は「穴蔵」と呼ばれる。「穴蔵」の初出は、『親長卿記』<sup>28)</sup> 文明10年(1478)で、また慶長8年(1603)の『日葡辞書』<sup>29)</sup> にも「anagura」の記述がある。これらのことから小泉氏は、17世紀前半には「穴蔵」という言葉が存在したことは確実であるという。今回検討した穴蔵1(19)や、土坑AE-5(30)などは、この時期のものであると考えられる。

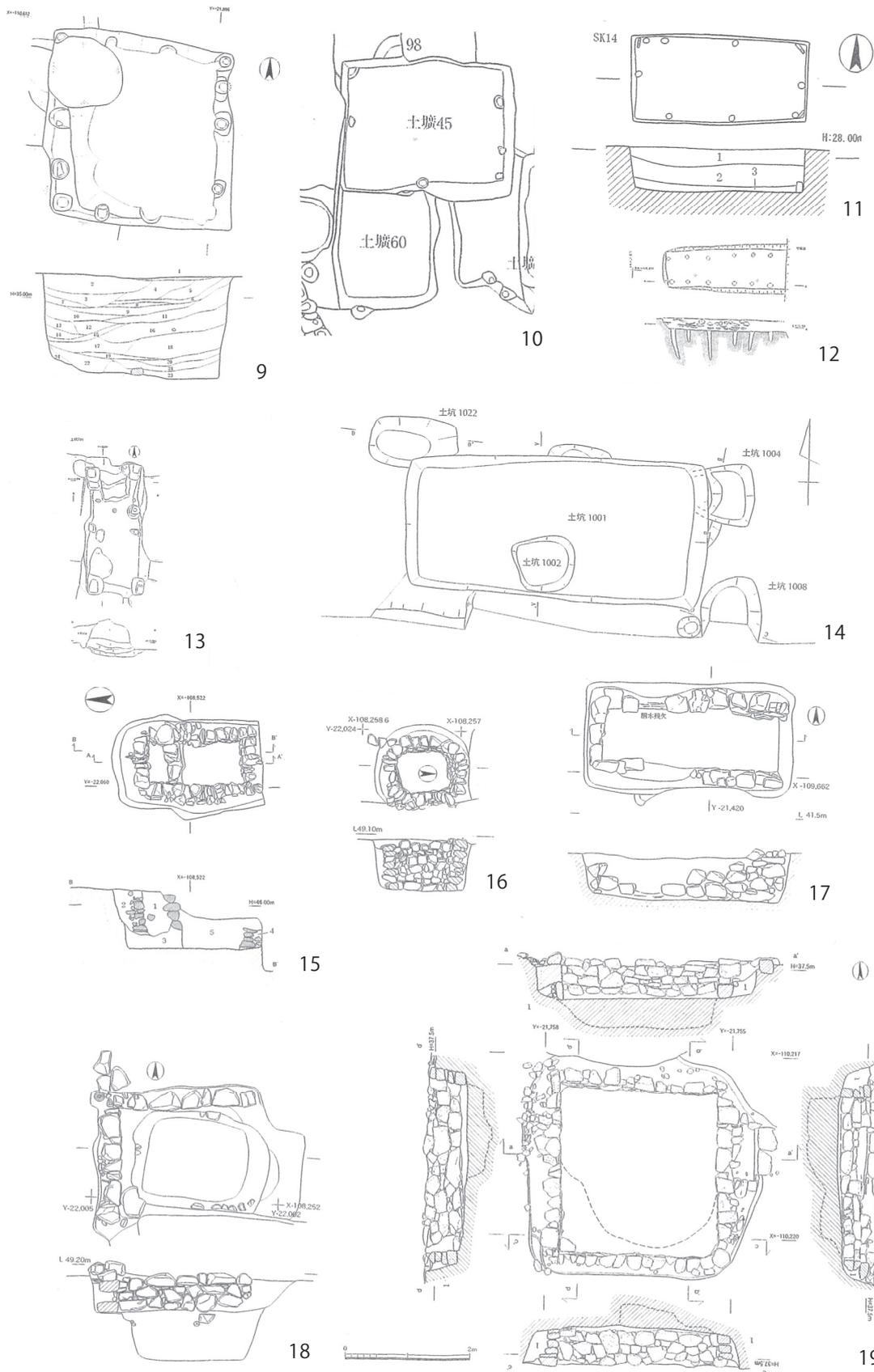
今回用いた「半地下式土坑」という用語であるが、冒頭でも触れたように平安京域では関東のようにローム層を掘り込んでドーム状の屋根を作るような横穴状の完全な地下式土坑とは異なる。平安京域ではある程度掘り込みを行い、その上に上部構造が付随すると思われる例が多いことから、関東の「地下式土坑」とは区別するうえで今回は「半地下式土坑」という用語を用いた。はじめにでも述べたが、このような土坑についての名称は、各研究者によって様々である。今後は、それぞれの調査において各遺構の性格に応じた的確な名称が必要とされよう。また、関東では明確に検出されている麴室などが、平安京域では検出例が極端に少ないのも、今後の課題であると言えよう。

最後に限られた範囲で、平安京域と江戸遺跡での半地下式土坑について検討をおこなってきた。事実誤認等があれば、それはひとえに筆者の力量不足によるものであることをお断りしておく。

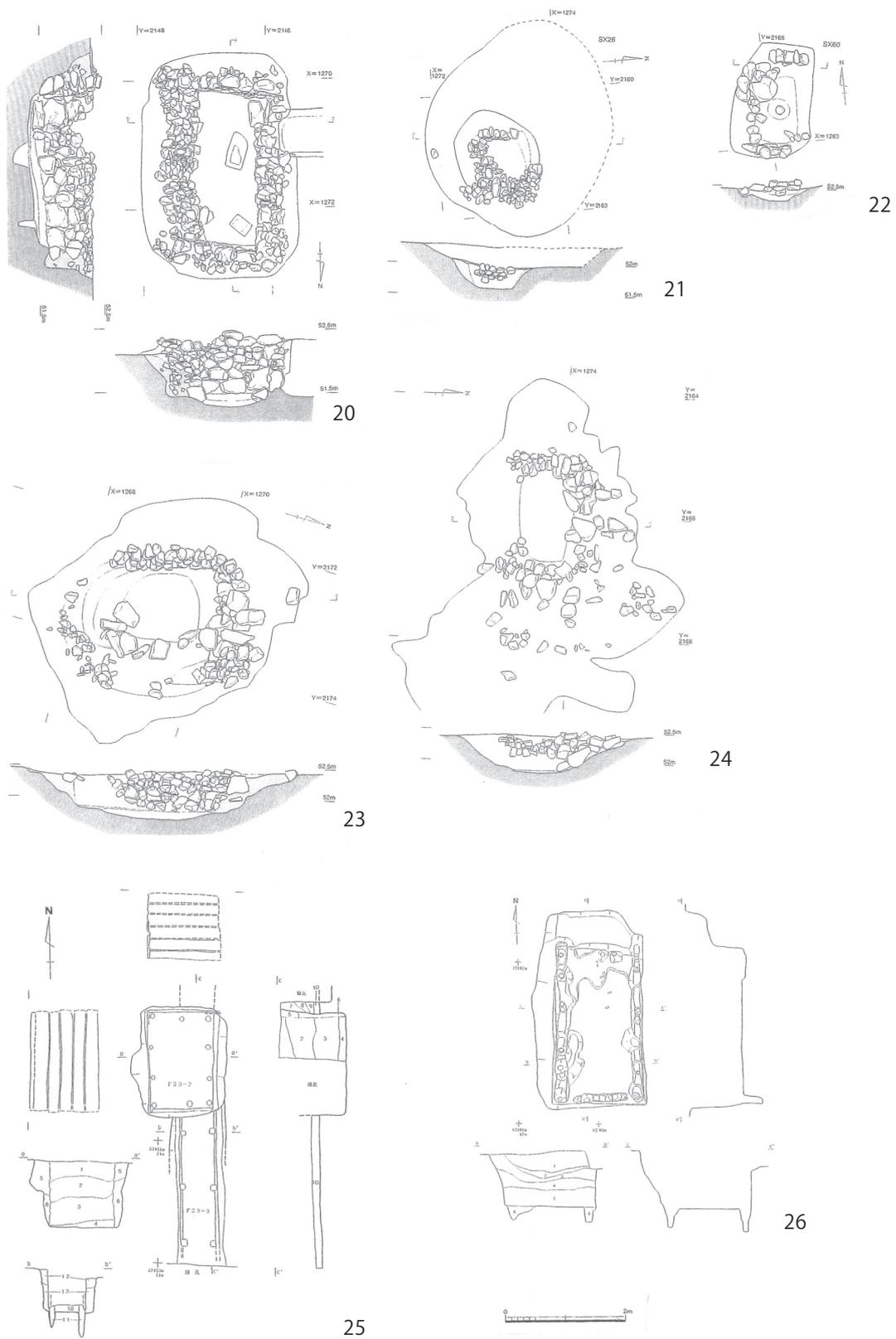


I -A 類 (1 ~ 4)、I -B 類 (5 · 6)、II -A 類 (7 · 8)

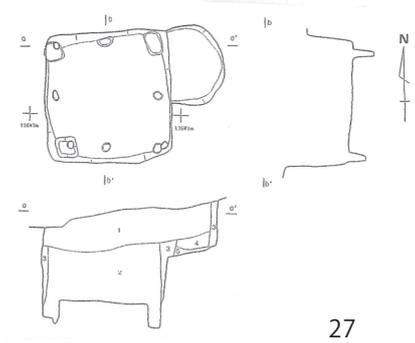
图 79 半地下式土坑分類图 1



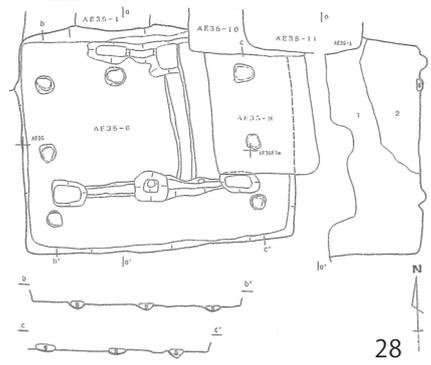
II -A 類 (9 ~ 13)、II -B 類 (14)、III -A 類 (15 · 16)、III -B 類 (17 · 18)、III -C 類 (19)  
 图 80 半地下式土坑分類图 2



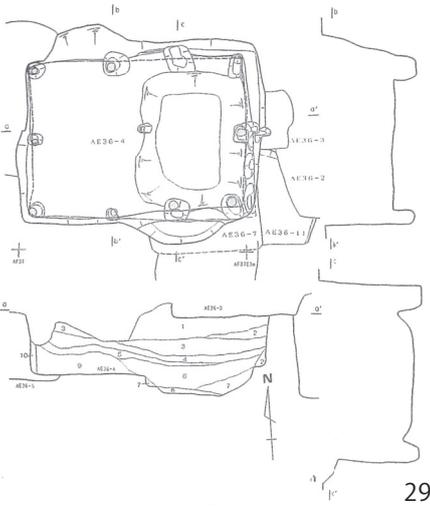
III -A 類 (21・22)、III -B 類 (20・23)、IV -1 類 (25)、IV -2 類 (26)  
 圖 81 半地下式土坑分類圖 3



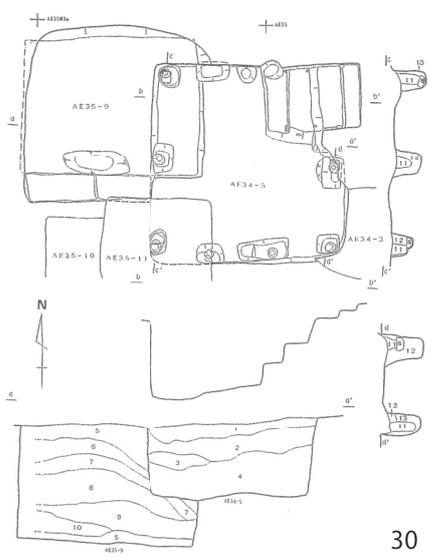
27



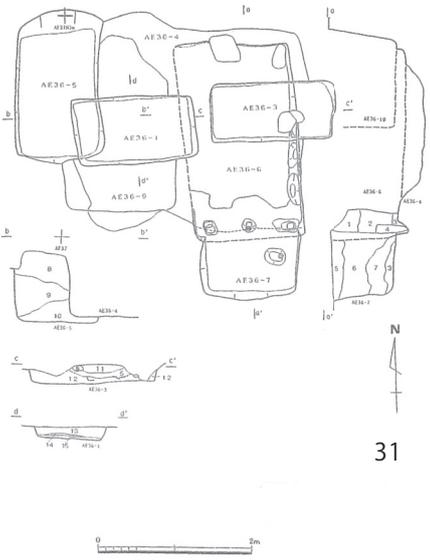
28



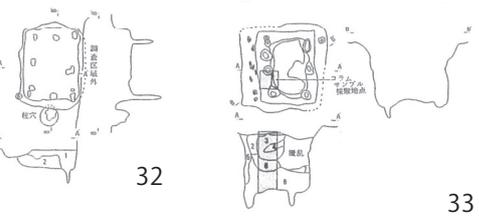
29



30

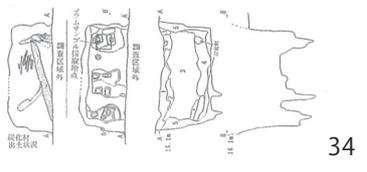


31



32

33



34

IV -2 類 (31)、IV -3 類 (27)、IV -4 類 (28 ~ 30)、IV -5 類 (32 ~ 34)  
 图 82 半地下式土坑分類图 4

〈引用参考文献〉

- 1) 堀内明博「穴蔵に関する遺構群をめぐって—一中世から近世に至る京都検出の地下式土坑群の類型化と変遷—」『関西近世考古学研究』3 関西近世考古学研究会 1992 年
- 2) 前川佳代「第 2 章遺構と遺物」『平安京左京五条三坊八町』(勸古代学協会 1997 年)
- 3) 柏田有香「平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡の発掘調査」『第 210 回京都市考古資料館文化財講座資料』2009 年
- 4) 丸川義広「土倉と酒屋の遺跡」『第 252 回京都市考古資料館文化財講座資料』2014 年
- 5) 小泉弘「地下室」『図説江戸考古学研究辞典』江戸遺跡研究会編 2001 年  
小泉弘「地中に設けられた耐火倉庫」『辞典江戸の暮らしの考古学』2013 年
- 6) 山口剛志「地下式土坑」『理学部 7 号館地点』東京大学遺跡調査室 1989 年
- 7) 菅谷通保「『地下式抗』の系列と変遷」『法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室編 1990 年
- 8) 地下式土坑の名称については、小泉弘氏によって「地下室」と呼称されている。  
小泉弘「地下室」『図説江戸考古学研究辞典』江戸考古学研究学会編 2001 年  
また、古くは「穴蔵」と呼称されていたことも判明している。  
小泉弘「地中に設けられた耐火倉庫」『辞典江戸の暮らしの考古学』2013 年
- 9) 『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』(勸京都市埋蔵文化財研究所 2008 年)
- 10) 『平安京左京三条三坊五町・烏丸御池遺跡』古代文化調査会 2011 年
- 11) 『平安京左京四条四坊二町跡』(勸京都市埋蔵文化財研究所 2009 年)
- 12) 『平安京左京八条三坊』(勸京都市埋蔵文化財研究所 1982 年)
- 13) 『平安京左京四条三坊八町跡・烏丸御池遺跡』(勸京都市埋蔵文化財研究所 2013 年)
- 14) 『平安京左京五条三坊八町』(勸古代学協会 1997 年)
- 15) 『平安京左京四条三坊四町跡・烏丸綾小路遺跡』(公団)京都市埋蔵文化財研究所 2016 年
- 16) 『平安京左京一条三坊十町跡・旧二条城跡』(勸京都市埋蔵文化財研究所 2013 年)
- 17) 『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』(勸京都市埋蔵文化財研究所 2008 年)
- 18) 『平安京左京北辺二坊八町跡発掘調査報告書』(株)イビソク 2013 年
- 19) 『平安京左京北辺三坊六町内膳町遺跡発掘調査概要報告書』古代文化調査会 2014 年
- 20) 『平安京左京三条四坊十町烏丸御池遺跡発掘調査概要報告書』古代文化調査会 2012 年
- 21) 『平安京左京三条四坊十町跡』(勸京都市埋蔵文化財研究所 2004 年)
- 22) 千葉豊・阪口英毅「京都大学吉田南構内 AN22 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡研究調査年報』2000 年度京都大学埋蔵文化財研究センター 2005 年
- 23) 『医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室編 1990 年
- 24) 『理学部 7 号館地点』東京大学遺跡調査室編 1989 年
- 25) 中野高久「遺跡からみた江戸のゴミによせて」『江戸遺跡研究会会報』No. 89、江戸遺跡研究会 2003 年
- 26) 小泉弘「地中に設けられた耐火倉庫」『辞典江戸の暮らしの考古学』2013 年
- 27) 喜多川守貞『守貞謄稿』、小泉弘「地中に設けられた耐火倉庫」『辞典江戸の暮らしの考古学』2013 年
- 28) 甘露寺親長『親長卿記』、小泉弘「地下室」『図説江戸考古学研究辞典』江戸遺跡研究会編 2001 年
- 29) 『日葡辞書』、小泉弘「地下室」『図説江戸考古学研究辞典』江戸遺跡研究会編 2001 年

## 第4節 「本能寺城」の範囲と遺構の変遷

この第4節では、「左京四条二坊十六町・本能寺城跡」調査区において考えられる本能寺城の範囲と、17期にわたる遺構の変遷を眺めて総括としたい。

### 1. 「本能寺城」の範囲

まず、今回の調査地が、「本能寺」や「本能寺城」であったのかについて、明らかにしておきたい。

第2章第2節でも記したように、天文十四年（1545）頃に帰洛し再興された本能寺は、平安京条坊の「左京四条二坊十五町」（北を六角、東を西洞院、南を四条坊門（蛸薬師）、西を油小路の各通りに囲まれた範囲）に土地を購入したことは、売主である沢村家旧蔵文書（『熊谷家文書』<sup>1)</sup>の「天文十四年六月二十四日付沢村千松売券案」の「六角与四条坊門、油小路与西洞院中間方四町々、但除未申紫野地」により明らかである。この時の「但除未申紫野地」とは、「四条坊門油小路北東頬屋敷」である大徳寺長勝庵領を除くということである。このことについては、その後同年八月に幕府に出した申請に、「是茂今度同買得仕候」とあるので、全ての土地購入が終了していたと考えられる<sup>2)</sup>。また、本能寺では、山門大衆等の横槍を防ぐため、幕府に対し天文十四年八月に保証を申請し、「天文十四年八月十八日付室町幕府政所執事加判奉書」<sup>3)</sup>を得ている。この様に、売り手側と買い手側の両者の書類の存在からも、当時呼ばれていた「四条坊門西洞院の本能寺」の敷地が一町四方であったことは疑う余地がないといえる。二町説<sup>4)</sup>であれば、その後に買い足された土地に関わる売券、奉書、本能寺雑掌の記録等が存在するであろうから、それが無い現状では二町説は誤信と考えざるを得ないであろう。

織田信長という戦国時代の覇者と、覇者の京都での住まいである「御座所」としては防備もなく狭い敷地である本能寺とのギャップが、二町説を生むことになったのかもしれない。

今回の調査地である左京四条二坊十六町は、二町説であれば北側敷地内に入ることになる。しかし、油小路通側の拡張区において堀跡は確認できておらず、調査区内にも寺跡や「御殿」<sup>5)</sup>を示す建物遺構は検出できなかった。特に調査地では今回の第11期（京XI期中・新）頃が、織田信長が上洛した永禄十一年（1568）から、本能寺の変で自刃する天正十年（1582）に相当する。第11期の土地利用は、調査地が畠であったとみていて、建物が存在していた可能性は極めて少ないと考えている。この状況を、十六町全体にまで広げて語ることはできないが、調査地が本能寺や本能寺城であった可能性は低いと思われる。

いずれにしても、今後の左京四条二坊十六町内での調査例の増加を待って、結論が出る問題であろうと思われる。

### 2. 遺構の変遷

今回の左京四条二坊十六町・本能寺城跡の調査地では、17期に分けてその変遷を明らかにし

てきた。各期の変遷で気が付いたことや、画期となったであろう事象について記しておきたい。

### 第1期（縄文時代晩期以前）

調査区の北東から南西にかけて、完新世段丘面形成層（6-2層）<sup>6)</sup>上を流れる、縄文時代晩期以前の自然河道770SRの時期である。この自然河道770SRの湧水が、その後の第3期での湧水遺構にも引き継がれており、長期にわたる利用が確認できる。

本文中にも記した油小路通三条南の「小井」<sup>7)</sup>（『日本紀略』『本朝世紀』）については、その後の記載が見られず位置は不明であるが、西洞院通三条南の「柳水」（『雍州府志』『山城名勝志』『京羽二重織留』）については、「洛中名水の一」とされ、寛永十四年（1637）『洛中絵図』に「柳水」と丸い井戸の記載がみられ、現在の柳水町北側に比定される。『雍州府志』には、「在西洞院三条南元内府織田信雄公之宅井也、斯水至清冷也、植柳於井上避日色、因号柳水、千利休専賞此水点茶、故茶人無不汲之」と記している。その後も当地は、岡部内膳、加藤清正、紀州徳川家の京邸となった。

これらの井戸についても、当初は同様の自然河道の鉄分の少ない湧水を用いた、井戸であった可能性が高いと考えられる。

### 第2期（～平安時代中期）

京V期中以前の時期と考えられる。

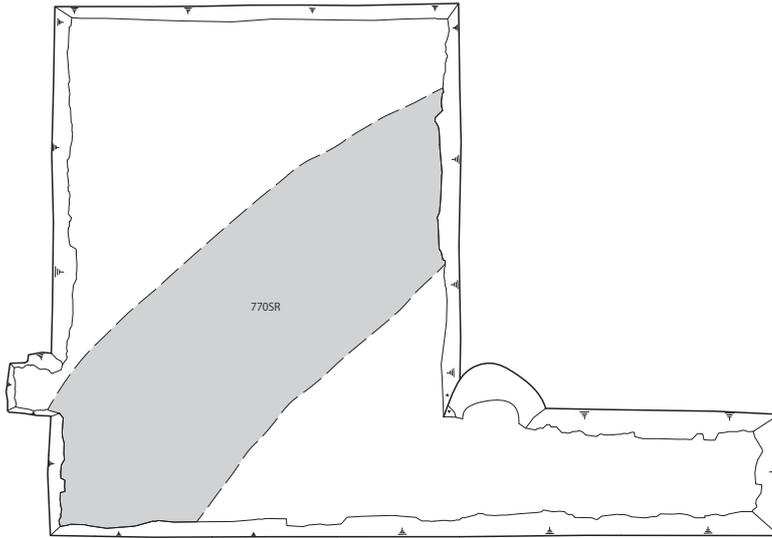
小規模な柱穴と単層の土坑状遺構からなる。6-2層上面の平安時代前期・中期以前の遺構とみられるが、遺物を含む明確な遺構は確認していない。遺物についても、調査区西側を中心に散在して各遺構から出土しているが、遺構に伴うものではない。この時期の主要な遺構群が、この調査区付近にはない可能性が高い。

この第2期と次の第3期の間は、平安時代中期後半の京V期中・新に相当する、遺構面としての把握が困難であった5層上面の遺構も存在していたものと思われる。これについても5層の残りが悪く、確認できていない。

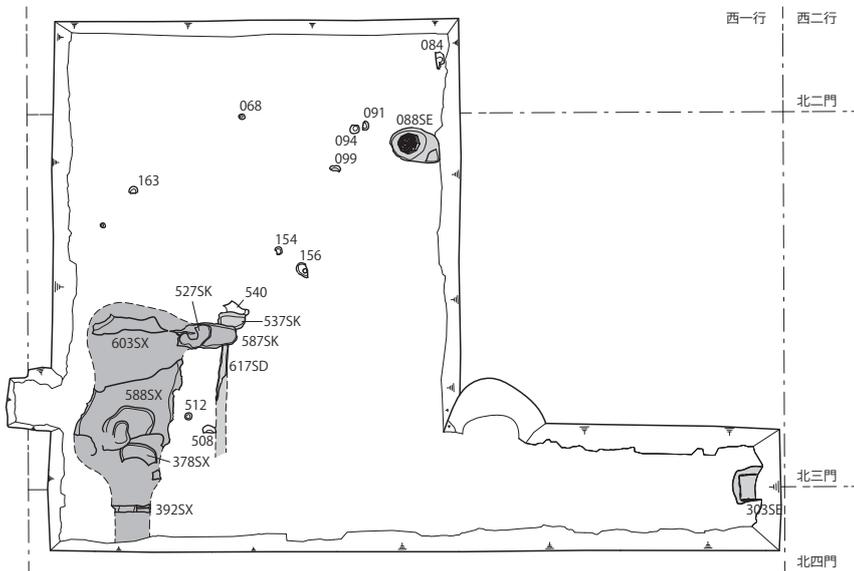
第2期から第3期宅地（屋敷）への直接的な契機が何であったのかは、明確ではない。この5層の堆積は、「990年から1040年頃」<sup>8)</sup>の洪水多発時期の堆積物ではないかと推測している。この頃の代表的な洪水が、長元六年（1033）の建物が多く倒れるなど被害が大きかったものと、翌七年（1034）八月九日条の「自昨日降雨之中、終夜終日殊甚、定有田舎愁歎…入夜東風大吹、所々舎屋中門等多以損破、及夜半之間成巽、其勢甚盛、樹木中門屏所々雜舎悉以顛破、成人之後未見如此之間…京条大小舎屋顛破殊甚、又諸司所々如此、人畜之類多以被打死云々…禁中損壞不可勝計…」（『左経記』）と、同年八月十二日条の「人々云、大風夜洪水、淀山崎河尻長州辺、人畜屋財多以損死、又諸国之船同流云々…諸司所々京畿人宅諸山諸社仏寺衆等、或露其財顛破、或抜其根祈倒云々、風勢雖劣永祚、物損多勝彼年云々」（『左経記』）である。

### 第3期（平安時代後期）

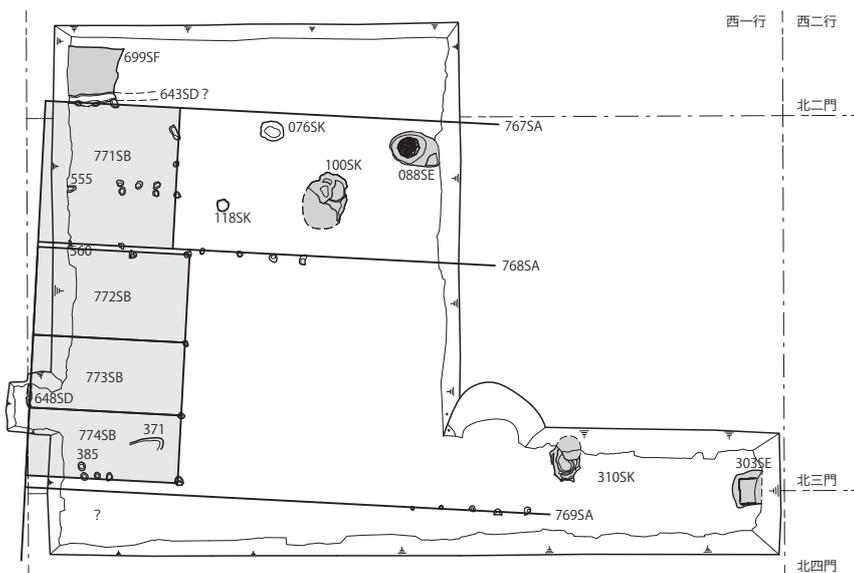
京VI期古～新の頃、長元年間（1028～1036）頃から安元三年（1177）の太郎焼亡までの宅地（屋



第1期

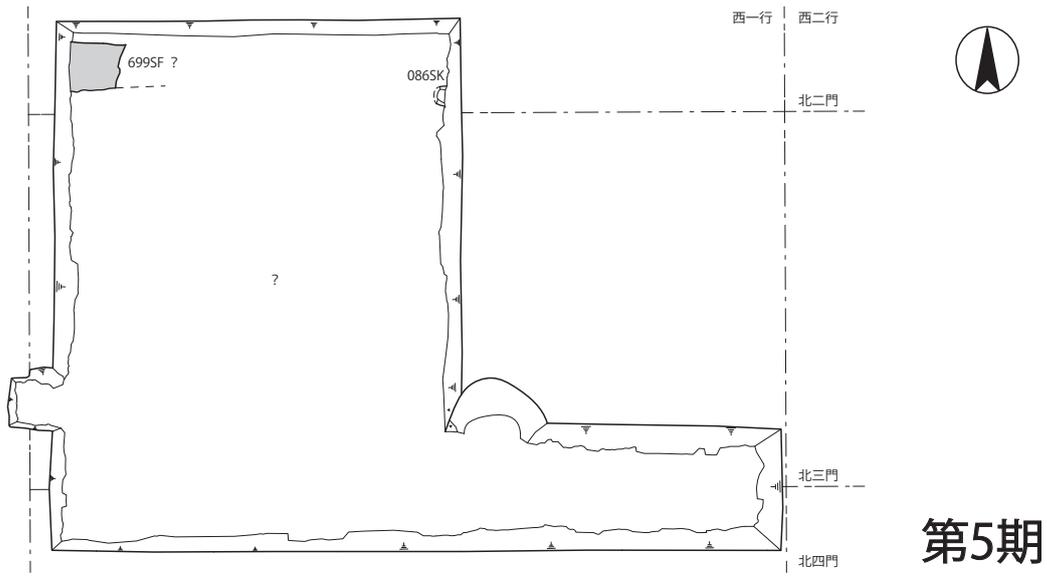


第3期

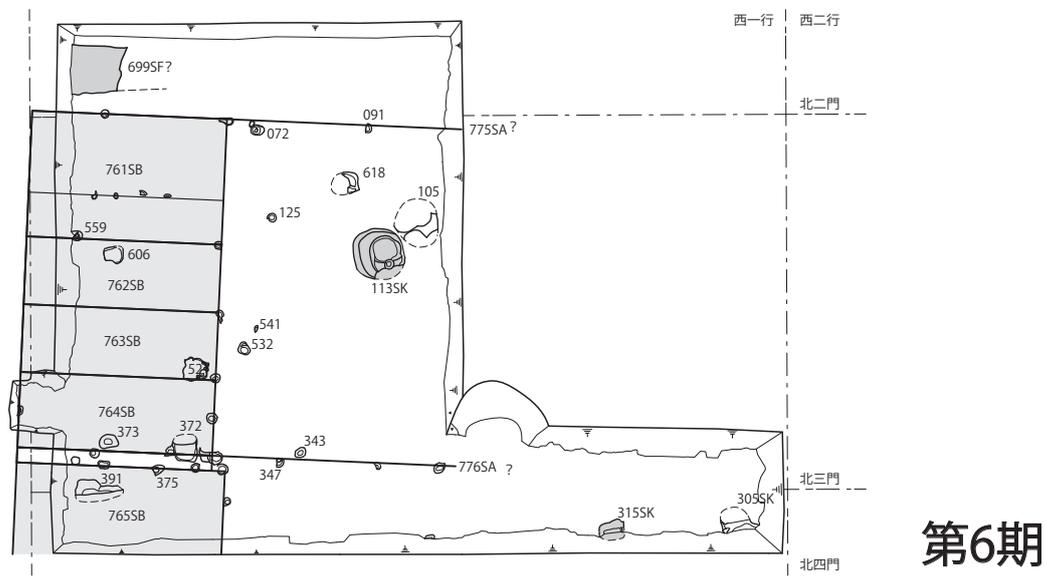


第4期

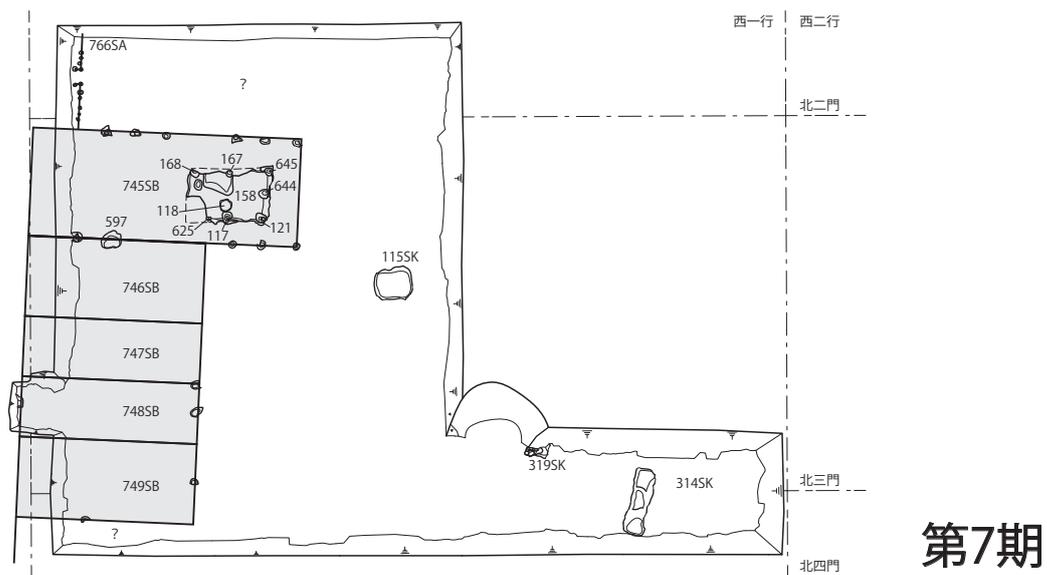
図 83 第 1 ~ 4 期遺構変遷図



第5期

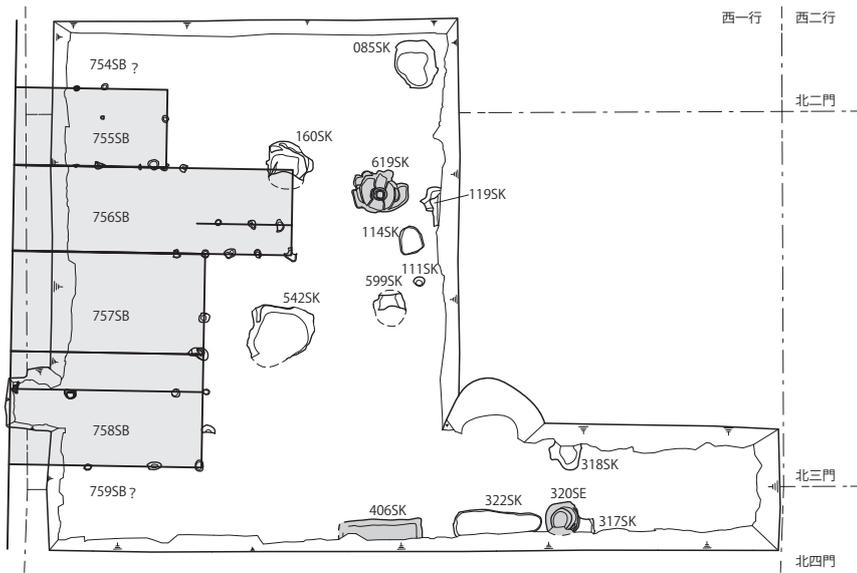


第6期

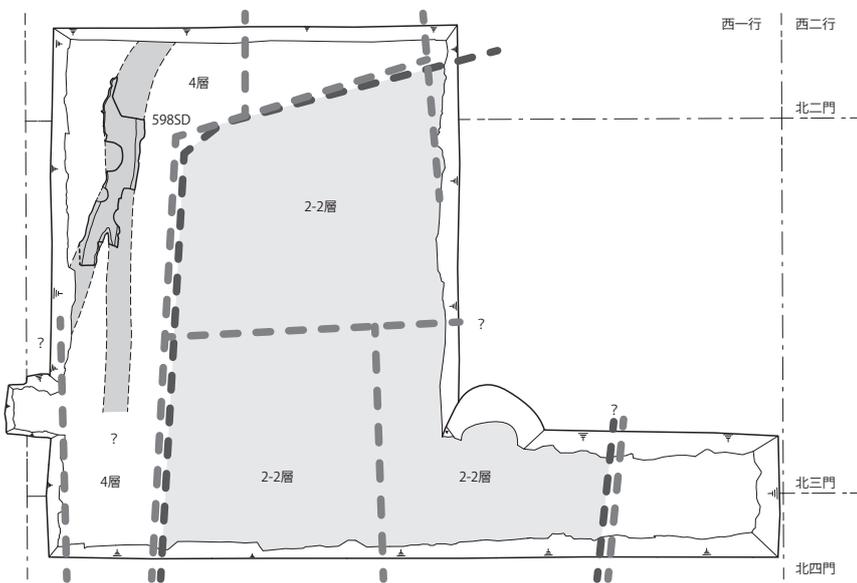


第7期

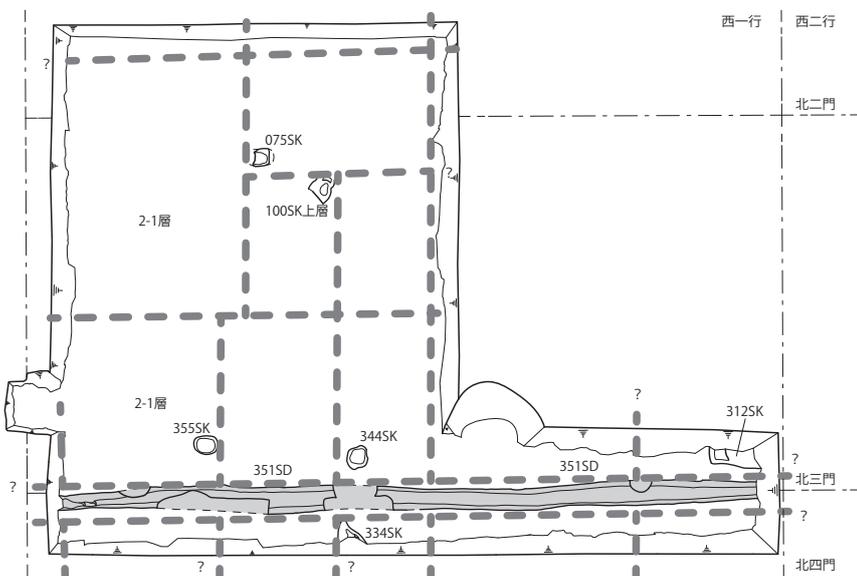
図 84 第 5 ~ 7 期遺構変遷図



第8期



第9期



第10期

图 85 第 8 ~ 10 期遺構変遷図

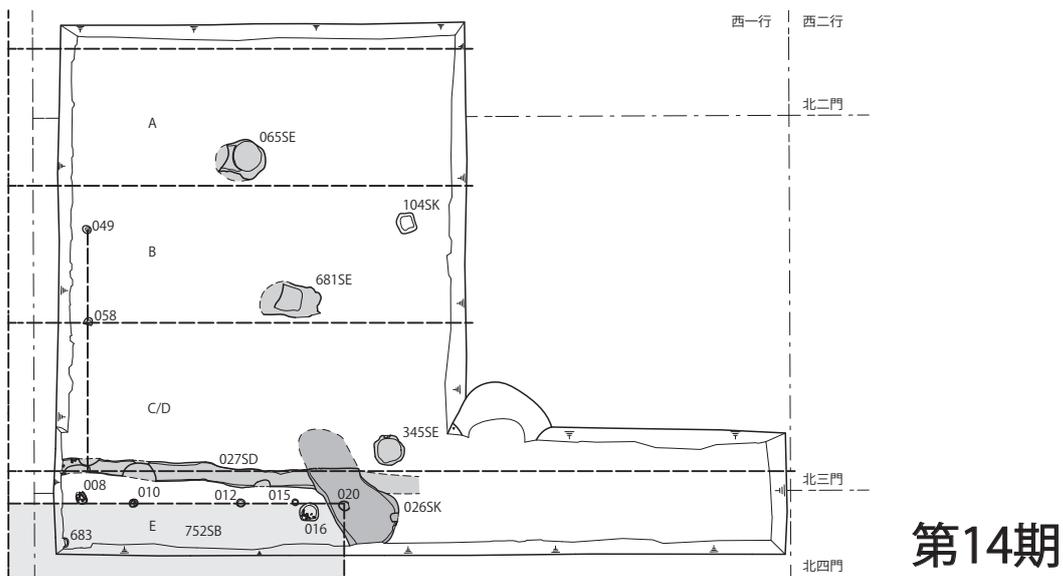
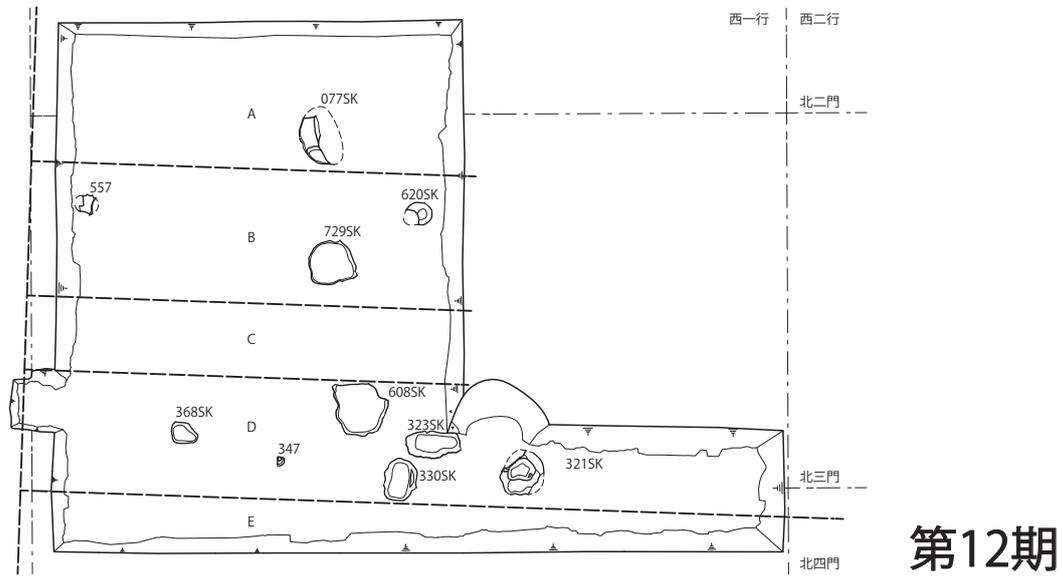
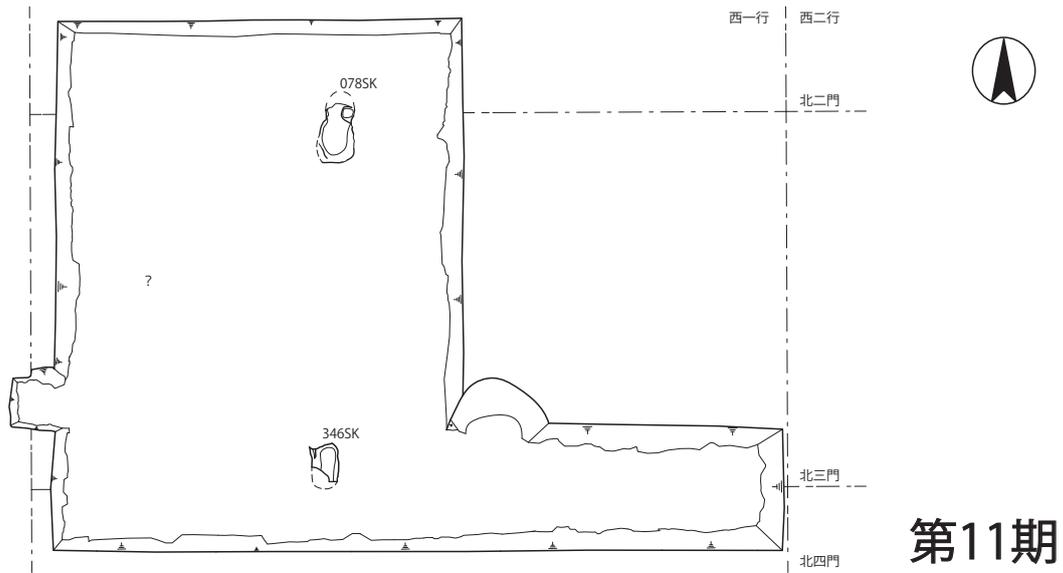
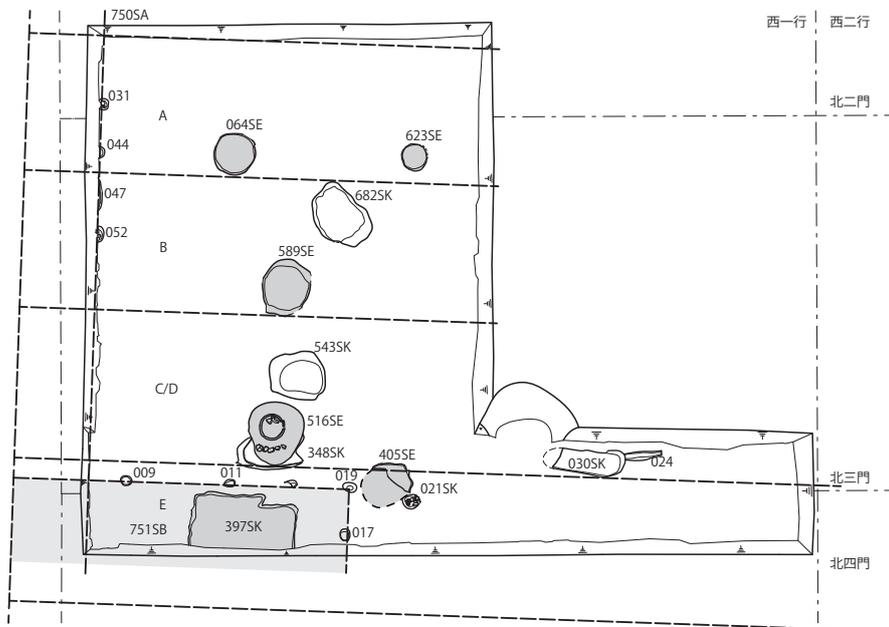
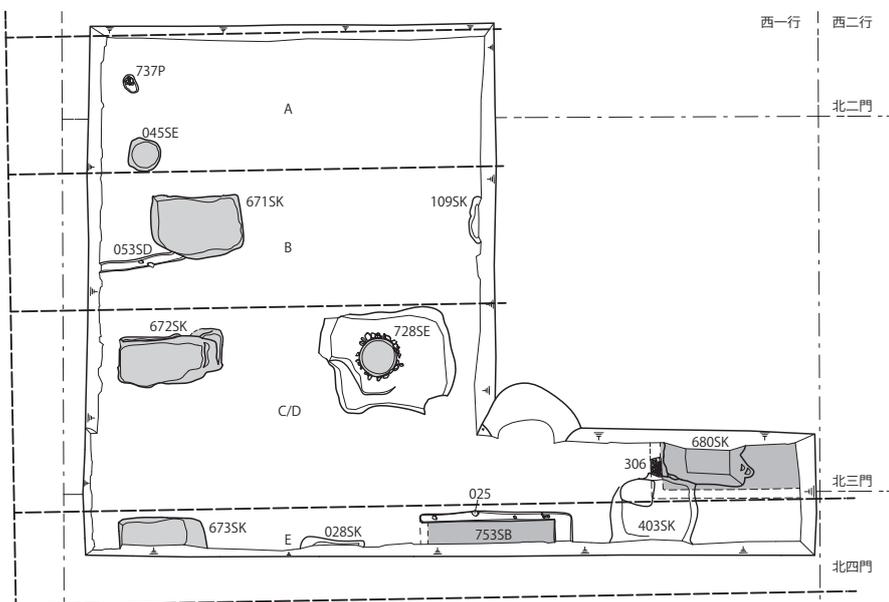


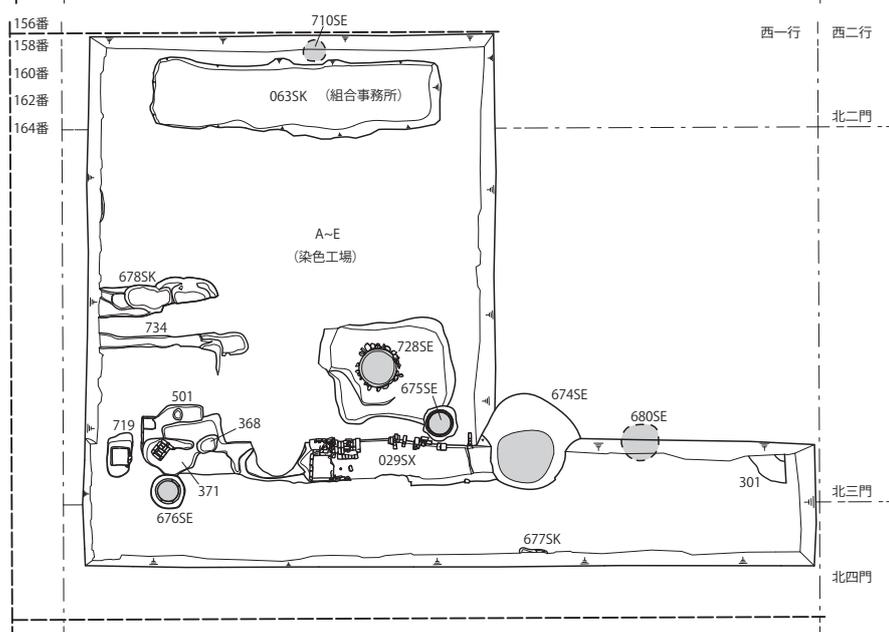
图 86 第 11 ~ 14 期遺構變遷圖



## 第15期



## 第16期



## 第17期

図 87 第 15 ~ 17 期遺構変遷図

敷)の時期と考えられる。

主要な遺構は、2 時期の湧水導水遺構(京Ⅵ期古; 537SK \* 617SD、京Ⅵ期古~京Ⅵ期新; 588SX・378SX・603SX・587SX \* 392SX)と、2 基の井戸(京Ⅵ期古~新; 方形縦板組横棧留式井戸 303SE、京Ⅵ期古; 縦板組矢板打ち込み式八角形井戸 088SE)等である。宅地(屋敷)の一面と考えられるが、湧水導水遺構の範囲や井戸の配置からも、四行八門制の西一行北三門だけに収まる宅地とは思えない。宅地としてはもう少し広い範囲を占有し、建物跡はもう少し東側に所在するのではないかと考えられる。このため、建物主軸の方向は確認できていない。

この時期の遺構は、第 2 章第 2 節でも記したように、12 世紀初には下野守藤原為元(「下野守為元家入強盗語」『今昔物語』卷二十九第八)が居住していた。12 世紀中頃の長寛元年(1163)には検非違使別当藤原顕長(『清辨眼抄』)が居住しており、この年、六角大宮からの火災により、四条二坊の北半分が焼失し、十六町の藤原顕長邸の南車宿などが被災している。12 世紀後葉の安元三年(1177)には、十六町に大納言藤原実定(後徳大寺左大臣)邸があり、邸宅はこの年の太郎焼亡により全焼したことが古記録(『清辨眼抄』)に残る<sup>9)</sup>。

第 3 期宅地(屋敷)から第 4 期町家への直接的な契機は、安元三年(1177)の大火<sup>10)</sup>と考えている。安元の大火(『玉葉』『清辨眼抄』『愚昧記』『顕広王紀』『仲資王記』『吉記』『百練抄』『方丈記』等)は、安元三年(1177)四月に樋口富小路付近より出火し、南東部から北西方向に燃え広がり、北は大内裏の一部にまで達し、当時の市街地の約三分の一を焼き尽くした大火である。焼失範囲は、東が富小路、南が六条、西が朱雀大路西(右京)の藤原俊盛邸も焼失、北は大内裏(応天門・東西の二樓・会昌門・八省院・大極殿・真言院・神祇官・大膳職・式部省・民部省・主水司・主計寮・主税寮・朱雀門)や大学寮・勸学院にまで及び焼亡した。以後、大極殿は再建されることはなかった。調査地もこの焼失範囲に入る。この大納言藤原実定邸が、調査区の近隣に所在したのか、当地に在って攪乱を受けてしまったものかは分からないが、今回の調査では明確な建物遺構を確認できなかった。

#### 第 4 期(平安時代後期末~鎌倉時代前期)

京Ⅶ期古・中の頃、安元三年(1177)の太郎焼亡後で、建保元年(1213)か建保六年(1218)の火災までの町家の時期と考えられる。

第 4 期の主要な遺構は町屋遺構で、主軸は N-3°-E 余り東に傾く。第 3 期の遺構群(屋敷、邸宅)と、第 4 期の遺構群(町家、町屋)の町並景観は大きく異なり、屋敷であった土地は売られたか、借地として町家遺構に変貌したものとみられる。その要因となったものが路の主軸や幅、建物群の主軸を条坊方向と異なる斜めや、町毎の復旧による網田籤状にってしまった原因が、大火災や洪水であった可能性が高いと考える。この第 4 期への直接的な契機は、安元三年(1177)の太郎焼亡であったと推測しておきたい。

この時期の町家遺構は全て掘立柱で、調査区北側の間口約 5.7m × 奥行(妻行)約 5.45m の独立屋(771SB)のウラには、両妻壁の東側延長に柵(塀)・土塀(767SA・768SA)があり、その内側に井戸(088SE)や土坑(廃棄土坑・便所)が存在する。独立屋(771SB)南側妻壁と割

長屋北側妻壁の間は、約 0.2m 空いている。割長屋 3 房分 (772SB ~ 774SB) の間口約 9.1m × 奥行 (妻行) 約 7.7m は、各間口が約 3.5m、約 2.9m、約 2.7m と狭く、ウラには共同の井戸 (303E) や土坑 (廃棄土坑・便所) が存在する。割長屋南の柵 (塀)・土塀 (769SA) は、割長屋の南側妻壁には取り付かず、約 0.5m 離れて南にあり、南側に他の町家遺構が存在していた可能性を高くしている。この独立屋 (771SB) 北側妻壁から、割長屋 (774SB) 南側妻壁までの南北距離は、約 15.0m (1 尺 = 0.29847m とすると、15.0m = 約 50 尺 = 5 丈 = 1 門) で、四行八門制の一区画戸主に相当する。辻子 (699SF) とその南側側溝 (643SD) は、独立屋 (771SB) の北側の東西通路で、路から東に入ったオクにも町家遺構が存在していたことを示すものである。

第 4 期町家から第 5 期町家への直接的な契機が何であったのかは、今のところよく分からない。京Ⅶ期中の時期で、調査地に関わる大きな火災には、2 件<sup>10)</sup> が該当する。一つは建保元年 (1213) の大火 (『仲資王記』『明月記』等) で、その焼失範囲は南が綾小路、北が三条坊門、東が川尻、西が堀川であった。もう一つが建保六年 (1218) の大火 (『仁和寺日次記』『皇帝紀抄』等) で、三条油小路で出火し、因幡堂、六条院、河原院等を焼失した火災である。これらの火災の焼失範囲は、何れも調査地を含むもので、十六町に関わる記録は不明ながら景観を大きく変えた第 5 期への契機が、建保元年 (1213) か建保六年 (1218) のどちらかの火災か、その両方であったと推測しておきたい。

#### 第 5 期 (鎌倉時代中期)

京Ⅶ期 (中)・新の頃、建保元年 (1213) か建保六年 (1218) の大火後の時期と考えられる。

第 5 期の遺構で大火後も継続したのは辻子 (699SF) のみで、他には辻子の東側にある土坑 (086SK) が確認できる程度である。辻子東側の一部では住んでいる人もいたようであるが、遺構は激減しており調査区の大部分は荒地となっていて、建物は無かった可能性が高い。

#### 第 6 期 (鎌倉時代後期～南北朝前半)

京Ⅷ期古～新の頃の町家の時期と考えられる。

第 6 期の主要遺構は町屋遺構で、主軸は N-2.5° -E 余り東に傾く。第 5 期への契機であった建保の大火から、半世紀余りが経過してようやく町家が復興した状況を示す。

この時期の町家遺構も全て掘立柱で、調査区北側の辻子 (699SF) の南側には間口約 13.4m × 奥行 (妻行) 約 7.6m の割長屋 4 房分 (761SB ~ 764SB) が並ぶ。各間口は、北から約 5.0m、約 2.7m、約 2.7m、約 3.0m と、最も北側の 1 房 (761SB) も 3 間は無いがやや広く、他の 3 房はどれも狭い。ウラには共同の土坑 (廃棄土坑・便所) や井戸かもしれない遺構 (113SK) が存在する。柵 (塀)・土塀は、割長屋北側妻壁に取り付く 775SA と、割長屋南側妻壁に取り付く 776SA がある。また、割長屋南側妻壁から南側に約 0.6m 離れて、独立屋か割長屋かは不明であるが、奥行 (妻行) 約 8.2m の 765SB が存在する。割長屋 (761SB) 北側妻壁から、割長屋 (764SB) 南側妻壁までの南北距離は約 13.4m、765SB と割長屋南側妻壁との隙間は約 0.6m で、合わせた距離約 14.0m (約 47 尺) は四行八門制の一行の長さに近い。割長屋建物内の壁際に 1 ヲ所設けられた隅丸方形の小土坑 (606SK・521SK・372SK) は、水瓶や水槽等を据えた痕跡や、洗い物

の水分を地面に浸透させる水屋の下部構造とも考えることができる。今後の類例分析によっては、遺構の性格を明らかにできるかもしれない。

第6期町家から第7期町家への直接的な契機が何であったのかは、今のところよく分からない。建物主軸がN-2.5°-E余りと同じであり、路に大きな変化がないことから火災や洪水ではなく、単なる建て替えとも考えにくいいため、他の要因であった可能性がある。

### 第7期（南北朝後半～室町時代前期）

京Ⅹ期古・中の頃の町家の時期と考えられる。

第7期の主要遺構も町屋遺構で、主軸は第6期と同じN-2.5°-E余り東に傾く。

この時期の町家遺構も全て掘立柱で、調査区北側の辻子（699SF）上には路から約1.8m下がった位置に柵（766SA）と入口（冠木門 or 釘貫門）が設けられ、継続して何らかの住宅の存在が予想される。その南側には、間口約4.3m×奥行（妻行）約10.6mの、半地下式土坑（158SK）1基を備えた独立屋（745SB）があり。さらに壁を接する南側には、間口約11.2m×奥行（妻行）約7.0mの割長屋4房分（746SB～749SB、さらに749SB南側に房がつながる可能性もある）が並ぶ。割長屋の各間口は、北から約3.2m、約2.4m、約2.4m、約3.2mと、いずれも狭い。ウラには共同の土坑（廃棄土坑・便所）が存在する。柵（塀）・土塀については不明である。割長屋（746SB）北側妻壁から、割長屋（749SB）南側妻壁までの南北距離は約11.2m、独立屋（745SB）約4.3m、合わせた距離約15.5m（約52尺）は、これも四行八門制の一行の長さに近い。

独立屋（745SB）は、同じ位置にある第6期段階の761SBからも路に面する間口が広がったが、さらに奥行を拡大して、建物オクに調査区内では初めて半地下式土坑（158SK）を備えるなど、南側の割長屋4房とは格差が大きい。

第7期町家から第8期町家への直接的な契機が何であったのかは、明確ではない。建物主軸がN-2.5°-E余りから、N-1°-E余りと変化しており、単なる建て替えではなく、他の要因であったと考えられる。最も考えられるものは、「1400年から1550年までは再び洪水の数が激増」<sup>8)</sup>していること、応永七年（1400）～永享二年（1430）頃の、特に応永十七年（1413）、応永二十六年（1413）、応永三十四年（1427）、正長元年（1428）、永享二年（1430）「終夜甚雨、自天明大風、言語道断也、洛中洛外舍屋、皆以破損、官司西廊南門顛倒、東門北門破損云々、洪水又以外也、凶」（『師郷記』）など、京都での洪水<sup>11)</sup>が頻発することである。堆積した層名は不明であり、どの洪水であったかは示せないが、15世紀前葉頃の洪水であったと推測しておきたい。

### 第8期（室町時代中期）

京Ⅹ期新、京Ⅹ期古・中の頃、応永七年（1400）～永享二年（1430）頃の洪水後、文明年間（1469～1486）頃の洪水までの町家の時期と考えられる。

第8期の主要遺構も町屋遺構で、主軸はN-1°-E余り東に傾く。

町家遺構は、これまでと同じ掘立柱である。北側の町屋（755SB）は、間口約3.1m×奥行（妻行）約6.0mの独立屋である。さらに北側の部分にも町家が存在する可能性が高いが、現況では

攪乱により復元できない。さらに壁を接する南側には、間口約 3.4m × 奥行（妻行）約 11.0m の独立屋（756SB）がある。屋内に間仕切りを示す東西柱列があり、南側に土間を設ける片側土間型式の町屋とみられる。その南側には、壁を接して間口約 8.5m × 奥行（妻行）約 7.6m の割長屋 2 房分（757SB・758SB）が並ぶ。割長屋の各間口は、北から約 4.0m、約 4.5m と、第 4～7 期までより広がっている。割長屋南側房（758SB）の屋内北側にも間仕切りとみられる東西柱列がみられ、土間を設ける片側土間型式と考えられる。独立屋（755SB）北側妻壁から、割長屋（758SB）南側妻壁までの南北距離は約 15.0m（約 50 尺 = 5 丈）で、四行八門制の一行の長さに相当し、土地区画としての区画が第 8 期までは機能していたことを知ることができる。ウラには共同の土坑（廃棄土坑・便所）が存在する。柵（塀）・土塀については不明である。割長屋の南には独立屋（759SB）の存在が予想されるが、攪乱の影響で町屋を復元することが困難である。この独立屋の奥行（妻行）は 17m 余りあり、調査区内では最大の建物であったと思われる。建物オクには半地下式土坑（406SK）があり、ウラには土器集積土坑（322SK）や井戸（320SE）が設けられていた。

第 8 期町家から第 9 期水田への直接的な契機は、文明年間（1469～1486）頃の 4 層と 2-2 層の洪水堆積と推測している。文明元年（1469）八月「京都洪水、家舎流亡、人畜溺死」（『和漢合符』）や、文明七年（1475）五月「京都大雨水」（『親長記』『和漢合符』『日本野史』）、同年八月「京都洪水」「霖雨止、鴨川洪水、摂津尼崎海溢人多死」（『親長記』『長興紀』『和漢合符』『日本野史』）、文明九年（1477）五月「七日、八日、洪水、天下大乱」（『如是院年代記』『山科家礼記』）など、京都での洪水が多発する。この時期、京 X 期中の時期は、応仁・文明の乱の時期でもある。近くの六角油小路町では、文明六年（1474）七月に西軍の大内政弘の陣を東軍が攻撃し、「法華堂」が炎上している（『東寺執行日記』）。このため、洪水が来る前に町家遺構は既に無かった可能性もないとはいえないが、この時期の土器集積土坑 322SK や土坑 542SK 等も散見されるので、どの洪水であったかは不明であるが、これまでの景観を一変させたことは間違いがない。

### 第 9 期（室町時代後期）

京 X 期新の頃、文明年間（1469～1486）頃の洪水後、永正年間（1504～1520）頃の洪水までの水田の時期と考えられる。

第 9 期は、4 層と 2-2 層の堆積後に水田化が図られ、水田耕作が行われた時期である。また、このための用水路（598SD・566SD）も設けられた。

第 9 期水田から第 10 期水田への直接的な契機は、再び起こった永正年間（1504～1520）頃の 2-1 層の洪水堆積と推測している。永正二年（1505）五月「此月中雨降、無晴間、洪水超過也」（『隆康私記』）、永正四年（1507）七月「宿雨洪水以外也」（『実隆公記』）、永正十三年（1516）五月「下旬京都洪水」（『年代記抄』『暦仁以来年代記』）、同年七月「暴雨、洪水」（『皇年代略記』）、永正十四年（1517）五月「下旬洪水」（『暦仁以来年代記』）、永正十四年（1517）五月「下旬洪水」（『暦仁以来年代記』）、永正十六年（1519）八月「大風雨、廻々大木吹倒、洪水、人死」（『暦仁以来年代記』）、永正十七年（1520）六月「大雨洪水」（『永正十七年記』）など、毎年のように

洪水<sup>11)</sup>が頻発している。

### 第10期（戦国時代前期）

京XI期古の頃、永正年間（1504～1520）頃の洪水後、天文四年～天文八年（1535～1539）頃までの水田の時期と考えられる。

第10期は、4層・2-2層上に2-1層が厚く堆積し、調査地全体が比較的平らな耕作地となり、水田耕作が行われた時期である。この水田のために東西方向の直線的な用水路（351SD）が設けられていた。この当時の京都は、主に武家・公家の邸宅や寺院がある上京と、商工業者が集住する下京に分かれており、室町通で繋がっていた。調査地はこの内の下京惣構の惣構外北側に位置していて、都市の中にはなかった。

第10期水田から第11期畠への直接的な契機は、天文四年（1535）頃の旱魃と渇水と考えられる。この年には「天晴、久不雨、旱魃之至也」（『後奈良院辰記』）とされ、諸社・諸寺に祈雨が行われた。水田畦畔脇に残る深い土坑（075SK・100SK 上層・355Sk・344SK・334SK・312SK等）は、湧水を少しでも得ようとした、当時の状況を示す遺構と考えたい。そして、天文八年（1539）八月には「百年以来洪水」（『親俊日記』）といわせた洪水などが、引き継いで起きている。水田や用水路が埋没した可能性がある。

### 第11期（戦国時代中期）

京XI期中・新の頃、天文八年（1539）頃の畠化後、豊臣政権の京都改造が行われ町家が再び復活した天正十八年～文禄年間（1590～1596）頃までの時期と考えられる。

水の供給が止まった後、水田から畠に切り替わった時期と考えられる。遺構は、水汲み用と思われる土坑（078SK・346SK）がみられるのみであった。天正十年（1582）六月二日早朝に起きた「本能寺の変」は、南側に隣接する十五町における第11期の時の出来事である。

第11期畠から第12期町家への直接的な契機は、豊臣政権の京都（首都）都市改造<sup>12)</sup>であったと考えられ、商業活動の活発化、洛中の地子免除、市中町割と上京・下京を越えた町家域の拡大が調査区においても町家を復活させたものと思われる。豊臣政権は、天正十三年（1585）に天下統一をほぼ成し遂げた後、京都を首都とし城郭化するために、天正十五年（1587）の聚楽第と武家町の建設、天正十七年（1589）の内裏修築と公家町の再編、天正十五年（1587）と天正十七年（1589）の洛中検知と地子免除、天正十八年（1590）の市中町割（天正地割）と寺町・寺之内・本願寺の形成、天正十九年（1591）の洛中を惣構で囲む御土居・堀の建設などの都市改造を矢継ぎ早に行った。これらの中には、聚楽町や上京に始まる、豊臣政権の二階建命令等の町屋建築への積極的な政策<sup>13)</sup>が行われていたためと考えられる。

### 第12期（戦国時代後期～江戸時代初期）

京XII期古・中の頃、天正十八年～文禄年間（1590～1596）頃の町家の後、元和年間～寛永年間（1615～1644）頃までの洪水の時期と考えられる。

8期の町屋遺構がなくなってから、約1世紀ぶりの町屋遺構の復活である。主軸はN-2.5°-E余り東に傾くようである。第12期以降、建物の構造が掘立柱から土台上に柱を立てる建築方法

<sup>14</sup>～<sup>17</sup>) に変わり、マチヤ単位の確認が困難となる。しかし、町屋ウラには井戸や土坑（廃棄土坑・便所等）<sup>18</sup>) が必ずといっていいほど確認でき、ウラを含めた各マチヤの範囲の所有権が意識され等質化していることを感じることができる。

調査区では、マチヤ A～E の 5 軒のマチヤを復元した。各間口は、マチヤ A とマチヤ E は不明であるが、マチヤ B は約 5.4m、マチヤ C は約 3.0m、マチヤ D は約 4.6m で、第 8 期より各間口が広がっている。

第 12 期町家から第 13 期荒地への直接的な契機は、南区東側に残る 1-11 ～ 14 層を堆積させた洪水と考えている。洪水の堆積時期については、元和六年（1620）五月、元和八年（1622）六月、寛永三年（1626）八月、寛永四年（1627）八月「京都及諸国洪水」（『続皇年代略記』）など候補は多いが確証がない。しかし、この直接的な洪水堆積よりも以前に、豊臣政権が大坂の陣（慶長十九・二十年（1614・1615））で滅び、京都の政情不安、社会不安は元和六年（1620）二月と三月の連続放火による上京大火などで拡大しており、既に洪水前には町家遺構は無くなっていた可能性もある。第 13 期の状況をみると、あったとは言い難いかもしれない。

### 第 13 期（江戸時代前期）

京Ⅱ期新の頃、元和年間～寛永年間（1615～1644）頃の洪水の後、寛文～延宝年間（1661～1681）頃までの荒地の時期と考えられる。実年代幅を決めることが難しい時期である。

遺構は南区の東端に、1-11 ～ 14 層が堆積するまでの期間である。遺構は皆無である。最上層の 1-11 層が土壌化されていないため、荒地であった可能性が高い。この京Ⅱ期新の初めの頃の様子を示すものが、中井家が京中の武家屋敷の位置確認のために作成した寛永十四年（1637）『洛中絵図』<sup>19</sup>) である。調査地は「あぶらのこうじ通」と書かれた西側（四条二坊九町）に「三条油小路丁」とあり、他の記載が街路中央に町名を「町」か「丁」と記載するのとは大きく異なる。この絵図の「町」か「丁」の記載の違いが何に起因しているのかは、現段階では不明であるが、単に「町」を「丁」に略したものではなく、絵図作成者には記載の規則性が存在していたものと考えられる。たとえ「町」と「丁」に違いがなかったとしても、「三条油小路丁」が街路の西側にのみ記載されたことは、四条二坊九町のみ町家が存在する片側町であった可能性を示すものともとれ、そうであれば今回の調査成果を補強するものとなる。

第 13 期荒地から第 14 期町家への直接的な契機は、何であったのかは不明である。なぜ、三条油小路町の地に再び町家が戻ってきたのか、三条油小路町であった理由は何であったのか。この問題は難解である。

### 第 14 期（江戸時代前期）

京Ⅲ期古・中の頃、寛文～延宝年間（1661～1681）頃の荒地の後、宝永五年（1708）の大火後までの町家の時期である。

町家遺構の主軸は、N -0° - E 余りである。各マチヤのウラには井戸（・便所）等が姿を見せる。調査区内では、マチヤ A～C/D の 3 棟の独立屋町家建物と、マチヤ E の独立屋の範囲を復元した。マチヤ E は、北側のマチヤ A～C/D とは、溝 027SD で限られていること、その後の建物構

造<sup>20)</sup>の違いなど、格差が見られた。

町家が再び戻ってきた時期である。町の周辺は、第16期以降でも記すが染色業を生業とする人々が多かった。この生業を支える人口増加をもたらしたと考えられるのが、新地の開発がその一つにあったのではないかと考える。京都では慶長十九年(1614)に、徳川政権の命により角倉了以・素庵親子が、鴨川右岸に方広寺再建資材運搬のための高瀬川を開削した。さらに、寛文十年(1670)には鴨川の護岸工事が行われ「寛文の新堤」が完成し、これにより御土居と鴨川までの間の河原に新たな土地、「新地」が生まれた。寛永十八年(1641)から享保十八年(1733)にかけて31カ所もの新地が開発されたという。主なものとしては、寛文十年(1670)に高瀬新屋敷・新屋敷大和大路・孫橋町が、寛文十二年(1672)に祇園町が、延宝二年(1674)に東河原新屋敷・先斗町が生まれた。この時期の京都は、寛文二年(1662)五月の寛文地震、寛文十三年(1673)五月の上京公家町から内裏・仙洞御所等を焼亡した寛文大火、延宝三年(1676)十一月の御所・仮御所を焼亡した延宝大火など、上京公家町を中心に壊滅状況にあった。これらの諸施設の徳川幕府主導になる再建や多くの屋敷の復興には、莫大な材木等の建築材と人手が必要であった。高瀬川と新地に設けられた多くの問屋と職人町(木屋町・材木町・樵木町・石屋町等)が、これらの物資輸送と建設に携わっていた。さらに、新地の普請後には、早々と茶屋旅館が許可され、そして遊郭も差し置かれた。第13期から第14期への転換は、このような社会情勢が関わっている可能性があるものと思われる。

第14期町家から第15期町家への直接的な契機は、宝永五年(1708)の大火<sup>21)</sup>と考えている。火元は油小路姉小路下ル西側北より出火し、北東に燃え広がった火事は、300～470町、御所や周辺の公家屋敷、寺町の寺院等を焼失(『翁草』『月堂見聞集』等)した。調査地は出火地に近く、被災推測範囲に接する地域で、これまではぎりぎり焼け残ったと理解されていたが、火災処理土坑(半地下式土坑397SK)の存在などから焼失範囲に含まれていたものと推測される。

### 第15期(江戸時代中期)

京XⅢ期新、京XⅣ期古・中の頃、宝永五年(1708)の大火後、天明八年(1788)の大火後までの町家の時期である。

町家建物と推測されるものは、主軸はN-2°-E余りである。各町家のウラには、マチヤEを除き、建物の裏口に近い敷地の南側に外井戸を設けている。マチヤEは、建物裏口の敷地北側際に設ける。マチヤA～C/Dの3棟の独立屋町家建物と、半地下式土坑(397SK)をもつマチヤEの独立屋の範囲を復元した。これらのマチヤA～Eの規模は、主軸が異なるものの、前代の第14期とほぼ規模は同じである。半地下式土坑(397SK)内には焼土塊や炭を多く含み、火災後の処理土坑として転用されていた。

第15期町家から第16期町家への直接的な契機は、天明八年(1788)の大火<sup>22)</sup>である。この大火は天明八年正月晦日の暁に、鴨川東の団栗阪辻子から出火し、北西の川西に飛び火し、京都の中心部を焼き尽くした最大級の火災である。その被害は、町数1,424町、外20カ所、家数36,797軒、寺数201カ所、社数37カ所、武家屋敷67カ所余りが焼失(『町代日記』『天明火

災実録』『新日吉神社文書』等)した。被災範囲は、東を鴨川、西を千本通、南を六条通、北を鞍馬口通で、それに鴨川東岸四条通以南五条通辺まで、二条新地から三条通以北の一体と考えられている。調査地もこの被災地範囲内に相当することから、火災により焼失したものと推測される。

#### 第 16 期 (江戸時代後期～幕末)

京XIV期新、XV期古・中の頃、天明八年(1788)の大火後で、元治元年(1864)の大火後までの町家の時期と考えられる。

マチヤA・B・C/D・Eの主軸は、N-1.5°-W余りで、初めて主軸が西側に傾く。この主軸の傾きは、現状の油小路通の傾きと同じであり、次の第17期でも踏襲される。不明となった油小路通の確定と、町の再開発が執り行われたものと思われる。

マチヤA・B・C/D・Eでは、不明なマチヤAを除き、火災に備えて建物内に半地下式土坑が設けられていた。マチヤC/Dではウラに外井戸が、マチヤAでは初めて内井戸が見られた。さらに、マチヤC/DとマチヤEでは、中土間を挟んだウラに土蔵が初めて現れる。

このマチヤの景観を、それもこの三条油小路町の東側筋の様子を伝える絵図史料が存在する。京都府立京都学・歴彩館所蔵の文政三年(1820)「三条油小路町町並絵図」(『近江屋吉左衛門家文書』(館古399))である。この文書群は、油小路通六角上ルに居住した「糶もやし」の製造販売をしていた、寛文十二年(1672)創業の近江屋(近藤家)が所蔵していた、延宝年間から大正に至る文書群である。この絵図は、三条油小路町の東側筋と西側筋を各1巻とする彩色画で、文政三年(1820)に画家村上松堂が描き、近江屋(糶屋)吉左衛門が屋号・職種・軒役・抱屋敷等を墨書したものである。つまり、文政三年(1820)当時の三条油小路町の町並、調査地(東側筋)に所在したマチヤA・B・C/D・Eが、そのまま描かれている。天明の大火から32年後の、復興した町の姿である。

第88図に、絵図の東側筋の該当部分の写真と翻刻<sup>23)</sup>を掲げる。

マチヤAは、「こふく師 家城屋金兵衛 居宅」、並べて左に「うらかし家 こふくし 大黒や利介」とある。「こふく師」とは古服飾で、今でいう古着屋と考えられる。「うらかし家」とは裏の離れが貸家であることを示し、「家城屋金兵衛」が同じ古服飾であった「大黒や利介」に家を貸していたことを示す。

建物構造は、厨子二階建、棧瓦葺で、本屋南側に卯建が上がり袖壁がみえ、庇も棧瓦葺で雨樋が架けられる。一階は、北側に呉服屋格子か糸屋格子(仕舞屋格子)の出格子、南側の中央には千本格子戸の入口、入口左側には出格子と同じ平格子、その前には半間の揚見世(ぼったり床几)、入口右側には白塗壁と腰板、出格子の前には直線的な犬矢来がみられる。二階は、外壁を青漆喰塗壁、長細い土塗格子開口の虫籠窓としている。ここでは「居宅」とされ、店を出していなかったためか、暖簾や看板は無く、仕舞屋風である。

マチヤBは、「町中持家 中形師 井つゝや弥兵衛」とある。「町中持家」とは、町毎の規約である町式目に合わないなどの適切な買い手のいなかった家屋敷について、町中が負担して共同

で買得し管理するもので、貸家や会所として使われた。「中形師」とは中形（中型）染師のことである。元々は中形紙（鯨尺3寸7分～7寸5分）という型紙によって染めた、庶民の夏用の木綿浴衣等を主として生産する染師のことである。

建物構造は、厨子二階建、棧瓦葺で、庇は柿葺で雨樋が架けられる。一階は、北側に板壁、呉服屋格子か糸屋格子（仕舞屋格子）の平格子、平格子前に一間の揚見世（ぼったり床几）、南側に「井」紋入りの長暖簾を掛けた入口、その入口左側が平格子、入口右側が台格子である。二階は、外壁を白漆喰塗壁とし、二分割して土塗格子開口の虫籠窓としている。

マチヤC/Dは、「米商売 釜屋九兵衛」とある。「米商売」、つまり米屋である。このマチヤC/Dは、「二軒役」とはなっていないが、南北間口約8.0mと広い間口である。

建物構造は、厨子二階建、棧瓦葺で、庇は柿葺で雨樋が架けられる。一階は、北側に米屋格子の平格子、南側は二分され、左側に半暖簾を掛けた入口、右側も米屋格子で、その前には一間の揚見世（ぼったり床几）がある。二階は、外壁を白漆喰塗壁とし、隅丸の土塗格子開口の虫籠窓としている。看板は、二階の軒下には京行燈風のものがあり、入口左上米屋格子に縦板の看板が、入口右側平格子に「近江屋」と同じ丸に星形の看板が見られ、入口左の軒下には米屋を示すように俵が積まれている。

マチヤEは、「張物師 坂本や宗兵衛 居敷」とある。「張物師」とは、和服（呉服）の洗濯方法の一つである、染物屋が兼業で行っていた解洗い、洗張等を行う職人か、洗張を専門に行う職人と考えられる。明応3年（1494）『三十二番職人歌合』には専門職である「張殿」が既にみられ、江戸時代には専門化していたといわれることから、後者の洗張の専門店と考えられる。

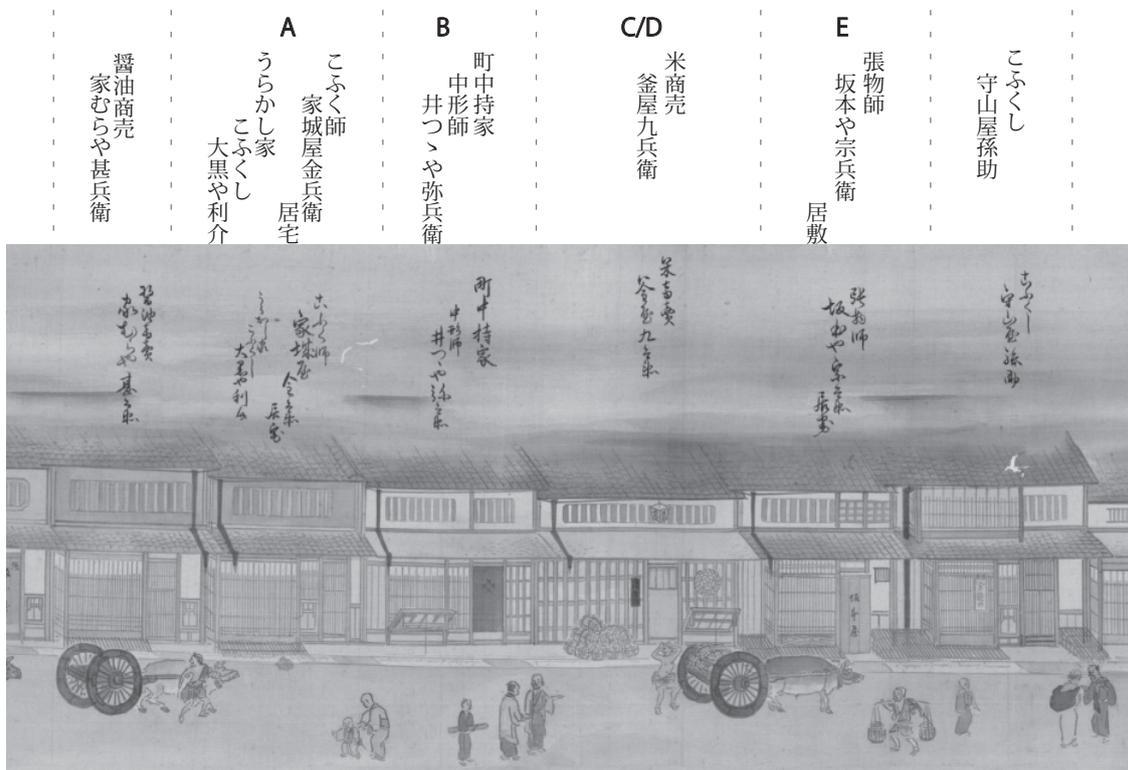


図 88 文政 3 年（1820）「三条油小路町並絵図」（『近江屋吉左衛門家文書』（京都府立京都学・歴彩館蔵）

建物構造は、厨子二階建、棧瓦葺で、庇は棧瓦葺で雨樋が架けられる。一階は、北側に板壁、次いで糸屋格子の出格子、南側に「坂本屋」入りの長暖簾を掛けた入口、その入口右側が白塗壁と腰板で、白塗壁に明かり取りの縦格子の小窓がみられる。また、入口を除く全面に、直線的な犬矢来が置かれている。二階は、外壁を白漆喰塗壁とし、二分割して北側を土塗格子開口の虫籠窓とし、南側を格子窓としている。

この第 16 期の三条油小路町の町並景観は、住環境としては住人にとって不都合な厨子二階建の町並で、路に面する二階表は控え目な土塗格子開口の虫籠窓とし、町並を整えるために通庇を連続させていた。京都では徳川政権の 17 世紀前半に、周辺の眺望統一、風俗営業店の拡散防止、町並の高さ制限等の規制から、厨子二階で通庇、二階表は閉鎖的な開口と塗壁とし、低層均質化<sup>24～29)</sup>していた。さらに、町並の屋根は全てが棧瓦葺であったが、庇は棧瓦葺とするところと、柿葺とする二種類が見られ、高額な瓦葺が普及しつつある状況が見られた。しかし、卯建は三条油小路町の東側筋 24 軒中でマチヤ A のみで、西側筋 19 軒中では 2 軒と少ない。多くは、ケラバを伸ばす棧瓦葺となっていた。棧瓦葺については、第 16 期の前段階である第 15 期の 18 世紀前葉に、大火が続く江戸では、将軍徳川吉宗の享保改革期であるにも関わらず、享保五年(1720)四月触書にて、防火対策として瓦葺の規制解除が行われた。京都では残存する触書の中に同様のものは存在しないが、絵画資料や文献史料から、18 世紀後半には棧瓦葺の普及が拡大していたと考えられている<sup>30)</sup>。この低層均質化した町並と棧瓦葺が広く採用された直接的な契機は、天明八年(1788)の大火であったと考えられる。この大火後の建築規制で生まれた町並景観が、「三条油小路町町並絵図」であったといえる。

これらの絵巻に描かれた建物やその後の建て替え建物は、元治元年(1864)7月19日から3日間に及んだ、御所・蛤御門周辺や伏見での幕府軍と長州軍の抗争による大火災<sup>31)</sup>により、全てが灰燼に帰した。この大火の被災範囲は、北限は下長者通付近、南限は御土居の藪際、東限は寺町、西限は東堀川にまで及んだといわれる。調査地もその被災範囲内に所在していた。火災の処理土坑に使われた半地下式土坑内(671SK・672SK・673SK・028SK)には、これまでの廃棄土坑では見られなかった大量の焼瓦と焼土が放り込まれていた。

### 第 17 期 (近代・現代)

京XV期新～XVI期の、元治元年(1864)の大火以後～現代までの時期である。元治元年大火後のマチヤ A・B・C/D・E は、マチヤとして復興したものと思われる。主軸は N-1.5° -W 余りの第 16 期と同じで、現状の油小路通の傾きと同じである。明治初年の地籍図作成(壬申地券交付事業、地租改正事業、地押調査、地籍編製事業)では新たに 158 番、160 番、162 番、164 番の 4 筆が割り振られていることから、この頃まではマチヤが存在したと思われるが、明確な敷地境界の痕跡は確認できない。その後、明治 28 年に創業した京都煉瓦製造(株)が作った煉瓦で積まれた窯場や洗い場が作られており、正確な建設時期は不明であるが、このマチヤの景観は一変し、4 筆を占める染色工場と事務所が建設されたようである。

### 3. まとめ

今回の「左京四條二坊十六町・本能寺城跡」の発掘調査では、遺構の変遷を、上記のように17期にわたって捉えた。特に「三条油小路町」東側の一画におけるマチヤの変遷は、中世から近世にかけての京マチヤ調査の再評価に繋がるものと信じたい。また、今後は各期の主軸の変遷がいかなる理由でなったのかも含め、三条油小路通の道路境界の変遷を示す遺構が発掘調査により検出されることを期待しておきたい。

#### 〈引用参考文献〉

- 1) 藤井学『本能寺と信長』思文閣出版、2003年
- 2) 河内将芳「中世本能寺の寺地と立地について—成立から本能寺の変まで—」『立命館文学』No.609、2008年
- 3) 藤井学・上田純一・波多野郁夫・安国良一編『本能寺史料』中世編、思文閣出版、2006年
- 4) 碓井小三郎『京都坊目誌』大正4年刊（野間光辰編『新修京都叢書』臨川書店、1967年）
- 5) 今谷明編「信長と本能寺“御殿”について」『王権と都市』思文閣出版、2008年
- 6) 河角龍典「歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化—遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築—」『京都歴史災害研究』第1号、2004年
- 7) 「三条油小路町」『京都市の地名』日本歴史地名体系27、平凡社、1979年
- 8) 中島暢太郎「鴨川水害史（1）」『京大防災研究所年報』第26号B-2、1983年
- 9) 山田邦和「左京と右京」（財）古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店、1994年
- 10) 片平博文「12～13世紀における京都の大火災」『歴史都市防災論文集』Vol.1、2007年
- 11) 立命館大学歴史都市防災研究所「京都歴史災害年表」『京都歴史災害研究』第6号、2006年
- 12) 高橋康夫『京都中世都市史研究』思文閣出版、1983年
- 13) 丸山俊明「豊臣政権期の京都の町家」『日本建築学会計画系論文集』第75巻、第651号、2010a年
- 14) 土本俊和『中近世都市形態史論』中央公論美術出版、2003年
- 15) 土本俊和・坂牛卓・早見洋平・梅干野成央「京マチヤの原形・変容・伝播に関する研究—建物先行型論と棟持柱祖形論にもとづく建築コラーージュ形態史論—」『住宅総合研究財団研究論文集』No.34、研究No.0611、2007a年
- 16) 土本俊和「京マチヤの原形ならびに形態生成」『平安京の住まい』京都大学学術出版会、2007b年
- 17) 内田好昭「中世後期から近世の町屋」『平安京の住まい』京都大学学術出版会、2007年
- 18) 山崎達雄「洛中塵捨場」『洛中塵捨場今昔』臨川書店、1999年
- 19) 『洛中絵図 寛永後萬治前』（京都大学附属図書館蔵・旧中井家蔵）臨川書店、1978年
- 20) 土本俊和・遠藤由樹「掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」『日本建築学会計画系論文集』第534号、2000年
- 21) 股座真実子・谷端郷「宝永京都大火当日に何が起きたか—火災図と文献史料に基づく被災実態の復原—」『歴史都市防災論文集』Vol.6、2012年
- 22) 塚本章宏・中村琢巳「歴史的建造物の被災履歴と火災図を統合した「天明の京都大火」被災範囲の復原」『歴史都市防災論文集』Vol.5、2011年
- 23) 翻刻については、京都府立京都学・歴史館資料課山本琢氏の協力を得た。  
辻真澄「町の姿を伝えるもの」『総合資料館だより』No.173、2012年
- 24) 丸山俊明「17世紀の京都の町並景観と規制—江戸時代の京都の町並景観の研究（その1）—」『日本建築学会計画系論文集』第581号、2004年
- 25) 丸山俊明「18～19世紀の京都の町並景観と瓦葺規制—江戸時代の京都の町並景観の研究（その2）—」『日本建築学会計画系論文集』第587号、2005a年
- 26) 丸山俊明「町家の真壁と京都町奉行所の建築行政—江戸時代の京都の町並景観の研究（その3）—」『日本建築学会計画系論文集』第596号、2005b年
- 27) 丸山俊明「京都の町家に関する「むしこ」」『日本建築学会計画系論文集』第599号、2006年
- 28) 丸山俊明「京都の町家の二階表における土塗格子開口の定義」『日本建築学会計画系論文集』第73巻、第632号、2008年
- 29) 丸山俊明「町家の二階建てに関する規制と命令」『日本建築学会計画系論文集』第74巻、第645号、2009年
- 30) 丸山俊明「京都の町家における瓦葺の普及と卯建減少の関係」『日本建築学会計画系論文集』第75巻、第653号、2010年
- 31) 長尾泰源・谷端郷・浅生将「火災図を用いた「元治の京都大火」被災範囲の復原」『歴史都市防災論文集』Vol.6、2012年

表4 遺物観察表1

※単位は cm、( ) は復元値

挿図 番号	区	出土遺構	器種	器形	口径	器高	底径	形成技法の特徴	色調	備考 (時期・産地ほか)
1	南区 西側	第1遺構面 包含層	土師器	皿	(14.8)	(2.9)	-	口縁部内外面はヨコナデ、体 部内外面はナデ	内外：10YR8/3 浅黄橙	京X期中
2	南区 西側	第1遺構面 包含層	瓦質土器	火鉢	(12.0)	12.0	-	内面は回転ナデ、外面はヘラ ミガキ、脚部はナデ	内面：10YR5/1 褐灰 外面：N4/ 灰	京XI期新
3	南区 西側	第1遺構面 包含層	瓦質土器	羽釜	-	(10.5)	-	内外面ともにナデ、鐙はヨコ ナデ	内面：5Y7/1 灰白 外面：10YR5/1 褐灰	京XI期新
4	北区 西側	第2遺構面 包含層	土師器	皿	(14.0)	4.0	-	口縁部はヨコナデ、内面はナ デ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/3 浅黄橙	京VI期古
5	北区西側 中央	第2遺構面 包含層	青磁	菊花皿	(11.6)	(3.0)	(6.5)	全体に施釉、畳付けは露胎	断面：10YR7/2 灰白	
6	北区 中央	527SK	青磁	椀	-	(2.4)	(8.0)	内外面ともに施釉、畳付けは 露胎	釉薬：2.5GY6/1 オリーブ 灰	8世紀中頃 ～9世紀末
7	南区 中央	351SD	緑釉陶器	椀	-	(6.2)	(2.6)	内外面とも施釉	断面：7.5Y6/3 オリーブ黄	9世紀代
8	南区 中央	351SD	灰釉陶器	椀	-	(2.0)	(5.6)	内面は施釉、外面は体部回転 ヘラケズリ、底部糸切痕	内外：7.5Y7/1 灰白	9世紀後半
9	南区 中央	351SD	灰釉陶器	椀	-	(3.2)	(8.0)	内外面とも回転ナデ	内外：N8/ 灰白	10世紀後半 ～11世紀初頭
10	南区 中央	351SD	青磁	椀	-	(3.2)	4.0	内外面ともに施釉、回転ナデ、 底部外面回転ヘラケズリ	内外：10GY6/1 緑灰	
11	南区 中央	351SD	青磁	椀	-	(3.4)	6.0	内外面ともに施釉、高台内に 一部釉剥ぎ	内外：10YR5/2 オリーブ灰	
12	北区 南西	500SK	灰釉陶器	壺 もしくは 鉢	(14.0)	(3.2)	(13.7)	内面は硯面、外面は回転ナデ、 脚内は回転ナデ	内面：2.5Y8/1 灰白 外面：2.5Y7/1 灰白	平安後期
13	北区 中央	604SD	須恵器	コップ形	-	(5.9)	4.5	体部外面は回転ヘラケズリ、 底部外面は糸切り	内外：N6/ 灰	平安後期
14	南区 東側	311SK	土師器	皿	9.0	1.0	-	口縁部内外面はヨコナデ、内 面はナデ、外面はユビオサエ とナデ	内外：10YR8/2 灰白	京VI期古
15	南区 東側	311SK	土師器	皿	(15.6)	2.0	-	口縁部内外面はヨコナデ、内 面はナデ、外面はユビオサエ とナデ	内外：10YR8/2 灰白	京VI期古
16	南区 東側	311SK	灰釉陶器	椀	-	(1.7)	(5.8)	体部内外面に施釉、見込みは ナデ、高台から高台内に向け 露胎し回転ナデ	内外：2.5Y8/1 灰白	
17	北区 南西	588SX (上層)	土師器	皿	10.6	1.4	6.4	内外面ともに口縁部から体部 にかけてヨコナデ、底部ナデ	内外：10YR8/4 浅黄橙	京VI期古
18	北区 南西	588SX (上層)	土師器	皿	10.6	1.4	6.4	内面は口縁部はヨコナデ、体 部から底部にかけてナデ、ユ ビオサエ、外面は口縁部ヨコ ナデ、体部から底部にかけて ナデ	内外：5YR7/6 橙	京VI期古
19	北区 南西	588SX (上層)	土師器	皿	12.6	1.0	-	内外面ともに口縁部ヨコナ デ、たいぶから底部にかけて ナデ	内面：7.5YR7/6 橙 外面：7.5YR7/4 にぶい橙	京VI期古
20	北区 南側	589SK	土師器	皿	(10.6)	10.6	-	内外面ともに口縁部から体部 にかけてヨコナデ、底部ナデ	内外：7.5YR7/4 にぶい橙	京VI期古
21	北区 南側	589SK	土師器	皿	10.4	1.5	-	内面は口縁部から体部につ けてヨコナデ、底部ナデ、外 面は口縁部ヨコナデ、体部 から底部にかけてナデ、ユビ オサエ	内外：10YR8/2 灰白	京VI期古
22	北区 南側	589SK	土師器	皿	(11.6)	2.2	-	内面は口縁部から体部につ けてヨコナデ、外面は口縁部 ヨコナデ、体部から底部につ けてナデ、ユビオサエ	内外：10YR8/3 浅黄橙	
23	北区 南東	589SK	灰釉陶器	輪花皿	(9.0)	1.9	(3.7)	体部内外面に施釉、見込みと 高台は露胎し回転ナデ	内外：5Y8/2 灰白	
24	北区 南西	588SX (下層)	土師器	皿	(9.8)	1.7	-	内外面ともに口縁部から体部 にかけてヨコナデ、底部ナデ	内外：2.5YR7/6 橙	京VI期中
25	北区 南西	588SX (下層)	土師器	皿	(10.4)	(1.8)	-	内面は口縁部から体部につ けてヨコナデ、底部ナデ、外 面は口縁部ヨコナデ、体部 から底部にかけてナデ	内外：7.5YR8/4 浅黄橙	京VI期中
26	北区 南西	588SX (下層)	土師器	皿	(10.0)	1.0	-	内外面ともに口縁部から体部 にかけてヨコナデ、底部ナデ	内外：5YR7/5 橙	京VI期中
27	北区 南西	588SX (下層)	土師器	皿	10.3	1.5	-	内外面ともに口縁部ヨコナ デ、底部内面ナデ、体部から 底部にかけてナデ、ユビオサ エ	内外：7.5YR8/4 浅黄橙	京VI期中
28	北区 南西	588SX (下層)	土師器	皿	10.3	1.5	-	内外面ともに口縁部から体部 にかけてヨコナデ、底部ナデ	内外：7.5YR8/4 浅黄橙	京VI期中
29	北区 南西	588SX (下層)	土師器	皿	(11.2)	2.0	-	内面は口縁部から体部につ けてヨコナデ、底部ナデ、外 面は口縁部ヨコナデ、体部 から底部にかけてナデ、ユビ オサエ	内外：5YR7/6 橙	京VI期中
30	北区 南西	588SX (下層)	土師器	皿	(14.4)	1.9	-	内外面ともに口縁部から体部 にかけてヨコナデ、底部内面 ナデ、底部外面ナデ、ユビ オサエ	内外：7.5YR8/4 浅黄橙	京VI期中
31	北区 南西	588SX (下層)	土師器	灯明皿	(15.0)	2.4	-	内外面ともに口縁部ヨコナ デ、底部内面ナデ、体部から 底部にかけてナデ、ユビオサ エ、口縁端部に煤付着	内外：5YR7/6 橙	京VI期中
32	北区 南西	588SX (下層)	土師器	皿	(16.0)	2.3	-	内外面ともに口縁部から体部 にかけてヨコナデ、底部内面 ナデ、底部外面ナデ、ユビ オサエ	内外：5YR7/6 橙	京VI期中

表4 遺物観察表2

挿図 番号	区	出土遺構	器種	器形	口径	器高	底径	形成技法の特徴	色調	備考 (時期・産地ほか)
33	北区 南西	588SX (下層)	土師器	皿	(16.4)	2.0	-	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外：7.5YR7/3 にぶい橙	京VI期中
34	北区 南西	588SX (下層)	緑釉陶器	椀	-	(2.2)	6.0	内外面ともに施釉、回転ナデ	内外：7.5Y4/3 オリーブ灰	10世紀前半
35	北区 南西	588SX (下層)	緑釉陶器	椀	-	(5.2)	8.4	内外面ともに施釉、回転ナデ、底部外面に糸切痕	内外：5Y5/4 オリーブ	9世紀初頭
36	北区 南西	588SX (下層)	白磁	椀	(13.4)	6.9	6.8	内外面ともに施釉	内外：N8/1 灰白	12世紀中頃～後半
37	北区 南西	588SX (下層)	灰釉陶器	椀	-	(3.0)	(8.2)	内外面ともに体部施釉、回転ナデ、底部外面に糸切痕	内外：N7/1 灰	10世紀前半
38	北区 南西	588SX (下層)	須恵器	円面碗	(14.4)	(2.8)	-	内外面ともに口縁部回転ナデ、透かし孔有	内外：N6/ 灰	平安
39	南区 東端	303SE	土師器	コース ター 型皿	10.2	1.6	-	口縁部は内外面ヨコナデ、体部から底部にかけて内外面ナデ、外面にユビオサエ	内外断：10YR7/3 にぶい黄 橙	京VI期古
40	南区 東端	303SE	土師器	コース ター 型皿	(12.4)	(1.55)	-	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ユビオサエ	内外：7.5YR7/4 にぶい橙	京VI期古
41	南区 東端	303SE	土師器	皿	(9.0)	(1.5)	-	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外断：7.5YR7/4 にぶい 橙	京VI期古
42	南区 東端	303SE	土師器	皿	9.7	1.5	5.0	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ	内：2.5Y8/2 灰白 外：2.5Y8/2 灰白 ～7.5YR8/3 浅黄橙	京VI期古
43	南区 東端	303SE	土師器	皿	10.0	1.7	5.7	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：10YR7/4 にぶい橙 外面：7.5YR7/4 にぶい黄 橙	京VI期古
44	南区 東端	303SE	土師器	皿	(10.0)	(1.5)	-	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：2.5YR7/6 橙	京VI期古
45	南区 東端	303SE	土師器	皿	(10.0)	(1.2)	-	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：2.5Y8/2 淡黄	京VI期古
46	南区 東端	303SE	土師器	皿	10.0	1.3	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：2.5Y8/2 灰白	京VI期古
47	南区 東端	303SE	土師器	皿	10.2	1.75	4.7	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：10YR8/4 浅黄橙 外面：7.5YR7/4 にぶい橙 断面：7.5YR8/3 浅黄橙	京VI期古
48	南区 東端	303SE	土師器	皿	(10.6)	1.5	-	体部外面上位から内面にかけてヨコナデ、体部外面下位と底部内面はナデ、底部に外から穿孔	内外：7.5YR8/4 浅黄橙	京VI期古
49	南区 東端	303SE	土師器	皿	10.2	1.9	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR7/3 にぶい黄橙	京VI期古
50	南区 東端	303SE	土師器	皿	(10.3)	(1.5)	-	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：5YR8/3 淡橙	京VI期古
51	南区 東端	303SE	土師器	皿	10.6	2.1	5.6	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ	内面：2.5Y8/2 灰白 ～2.5Y6/1 黄灰 外面：2.5Y7/2 灰黄 ～2.5Y6/1 黄灰	京VI期古
52	南区 東端	303SE	土師器	皿	(10.8)	(1.5)	-	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外：5Y6/1 灰 断面：5Y7/1 灰白	京VI期古
53	南区 東端	303SE	土師器	皿	11.0	1.8	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/3 浅黄橙	京VI期古
54	南区 東端	303SE	土師器	皿	(15.6)	2.6	(8.4)	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：7.5YR8/4 浅黄橙 外面：7.5YR7/4 にぶい橙 ～10YR5/2 灰黄褐 /10YR2/1 黒 断面：7.5YR8/4 浅黄橙	京VI期古
55	南区 東端	303SE	土師器	皿	15.0	2.65	9.1	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、ユビオサエ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：10YR8/3 浅黄橙 外面：10YR8/3 浅黄橙 ～10YR7/6 明黄褐 断面：10YR8/3 浅黄橙 ～N6/1 灰/N4/ 灰	京VI期古
56	南区 東端	303SE	土師器	皿	(15.6)	(2.5)	-	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、ユビオサエ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：N5/ 灰 外面：N6/ 灰 断面：N7/ 灰	京VI期古
57	南区 東端	303SE	土師器	皿	(14.6)	3.0	-	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、ユビオサエ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内/断：7.5YR8/4 浅黄橙 ～10YR8/3 浅黄橙 外面：10YR7/4 にぶい黄橙 ～10YR8/3 浅黄橙	京VI期古
58	南区 東端	303SE	ロク口 土師器	皿	(14.6)	2.9	-	内外面ともに回転ナデ、底部外面は糸切り	内外：7.5YR8/4 浅黄橙	京VI期新

表4 遺物観察表3

挿図 番号	区	出土遺構	器種	器形	口径	器高	底径	形成技法の特徴	色調	備考 (時期・産地ほか)
59	南区 東端	303SE	白色土器	皿	(11.8)	2.5	4.6	底部内面から体部外面にかけて回転ナデ、底部外面に糸切痕か	内外断：2.5Y8/2 灰白	京VI期中
60	南区 東端	303SE	須恵器	壺	(9.2)	(1.5)	-	内外面ともに回転ナデ	内外：2.5Y4/1 黄灰	
61	南区 東端	303SE	須恵器	壺	(8.0)	(4.5)	-	内外面ともに回転ナデ	内外：N3/ 暗灰	
62	南区 東端	303SE	瓦器	椀	(16.6)	(4.2)	-	口縁部内面に沈線1条、内外面ともにミガキ、体部外面はユビオサエ	内外：N5/ 灰 断：N8/ 灰白	楠葉型 12世紀中頃
63	南区 東端	303SE	白磁	椀	-	(2.0)	-	内外面ともに施釉	断面：7.5Y8/1 灰白	京VI期中
64	南区 東端	303SE	白磁	椀	-	(1.4)	(5.6)	見込みと体部外面は施釉、高台と高台内は回転ヘラケズリと露胎	断面：5Y8/1 灰白	京VI期中
65	南区 東端	303SE	白磁	椀	-	(1.5)	-	口縁部内面は釉剥ぎ、内外面ともに施釉	断面：7.5Y8/1 灰白	京VIII期中
66	北区 北東	618SK	土師器	コースター型皿	(8.6)	1.3	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/1 灰白	京VI期新
67	北区 北東	618SK	土師器	コースター型皿	(8.8)	1.1	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ	内外：10YR8/2 灰白	京VI期新
68	北区 北東	618SK	土師器	皿	(9.0)	1.9	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/3 浅黄橙	京VI期新
69	北区 北東	618SK	土師器	皿	(8.8)	1.3	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/3 浅黄橙	京VI期新
70	北区 北東	618SK	土師器	皿	(8.8)	1.5	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/2 灰白	京VI期新
71	北区 北東	618SK	土師器	皿	(12.2)	3.0	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/3 浅黄橙	京VI期新
72	北区 北東	618SK	土師器	皿	(12.0)	3.1	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/2 灰白	京VI期新
73	北区 北東	618SK	土師器	皿	(12.4)	(2.5)	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/2 灰白	京VI期新
74	北区 北東	618SK	土師器	皿	(13.2)	2.4	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/4 浅黄橙	京VI期新
75	南区 東側	314SK	白磁	椀	(15.4)	(3.2)	-	内外面は施釉	釉薬：2.5Y8/1 灰白	京VII期古
76	北区 北東	088SE	土師器	皿	(11.0)	2.5	-	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR7/4 にぶい橙	京VI期中
77	北区 北東	088SE	土師器	皿	(12.8)	1.9	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/4 浅黄橙	京VII期中
78	北区 北東	088SE	土師器	皿	(15.0)	2.6	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/2 灰白	京VI期中
79	北区 北東	088SE	土師器	皿	(16.0)	(2.0)	-	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR7/2 にぶい黄橙	京VI期中
80	北区 北東	088SE	白磁	椀	(15.0)	(2.4)	-	内外面ともに施釉	釉薬：2.5Y8/1 灰白	
81	北区 北東	088SE	白磁	椀	-	(2.3)	(5.4)	内外面ともに施釉	釉薬：2.5Y8/1 灰白	
82	北区 北東	088SE	青磁	盤	-	(6.1)	8.0	内外面ともに施釉、高台は露胎し回転ヘラケズリ	内外：2.5Y8/1 灰白	
83	北区 北東	078SK	土師器	皿	(9.0)	(2.0)	-	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/3 浅黄橙	京VII期古
84	北区 北東	078SK	土師器	皿	(11.0)	(2.5)	-	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：2.5Y8/1 灰白	京VII期中
85	北区 北東	078SK	土師器	皿	(13.0)	(2.0)	-	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：2.5Y8/2 灰白	京VII期古
86	南区 東側	030SK	磁器	天目茶椀	(11.0)	(5.7)	-	内面と体部中位まで施釉、体部下位は露胎し回転ヘラケズリ	釉薬：10YR2/3 黒褐	京VIII期中
87	南区 東端	301SK	土師器	へそ皿	(6.5)	2.0	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/2 灰白	京VIII期中
88	南区 東端	301SK	土師器	皿	(8.2)	1.4	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：5YR7/4 にぶい橙	京VIII期中
89	南区 東端	301SK	土師器	皿	(10.4)	2.0	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR7/6 橙	京VIII期中
90	南区 中央	332SK	土師器	へそ皿	(6.7)	(1.8)	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ、体部外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/1 灰白	京VIII期中
91	南区 中央	332SK	土師器	皿	(8.8)	(2.1)	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ、体部外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/1 灰白	京VIII期中
92	南区 中央	332SK	土師器	皿	(9.3)	(1.7)	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ、体部外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/4 浅黄橙	京VIII期中

表4 遺物観察表4

挿図 番号	区	出土遺構	器種	器形	口径	器高	底径	形成技法の特徴	色調	備考 (時期・産地ほか)
93	南区 中央	332SK	土師器	皿	(11.0)	(2.3)	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ、体部外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/4 浅黄橙	京Ⅷ期中
94	北区 西側	599SK	白磁	皿	(9.2)	2.0	(4.9)	内外ともに施釉、口縁部内面は口剥げ	釉薬：7.5Y8/2 灰白	京Ⅷ期中
95	北区南側 中央	543SK	陶器	壺	(10.0)	(9.7)	-	内面は回転ナデ、外面は施釉	内面：10YR7/2 にぶい黄橙 外面：7.5YR2/2 黒褐	瀬戸・美濃系 14世紀中頃
96	南区 中央	307SK	緑釉陶器	椀	(16.0)	-	(6.6)	内外ともに施釉、見込みには胎土目、高台は回転ナデ、高台内は糸切り痕	断面：10YR3/2 オリーブ黒	9世紀代
97	南区 東側	307SK	瓦質土器	鍋	(15.4)	(7.0)	-	内面は回転ナデ、外面はユビオサエとナデ	内面：N7/ 灰白 外面：7.5Y8/1 灰白	京Ⅸ期古
98	南区 東側	307SK	土師質土器	鍋	(33.0)	(3.0)	-	内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR7/3 にぶい黄橙	京Ⅸ期古
99	南区 東側	307SK	須恵器	捏鉢	(35.0)	(4.0)	-	内外ともに回転ナデ	内外：N6/ 灰	京Ⅷ期新
100	北区 中央	158SK	土師器	皿	(11.0)	(2.3)	-	口縁部はヨコナデ	内外：2.5Y8/2 灰白	京Ⅸ期中
101	北区 中央	158SK	土師器	皿	(11.6)	(2.5)	-	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/2 浅黄橙	京Ⅸ期中
102	北区 中央	158SK	土師器	皿	(13.4)	2.5	-	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/4 浅黄橙	京Ⅸ期中
103	北区 中央	158SK	瓦質土器	鉢子	(17.4)	(7.3)	-	口縁部はヨコナデ、内面はヨコハケ、外面はユビオサエとナデ	内外：N8/ 灰	京Ⅸ期中
104	北区 中央	158SK	瓦質土器	鉢子	(18.4)	(6.9)	-	内面はヨコハケ、外面はユビオサエとナデ	内面：10YR8/1 灰白 外面：2.5Y8/1 灰白	京Ⅸ期中
105	北区 中央	158SK	瓦質土器	鍋	(31.0)	(8.5)	-	口縁部はヨコナデ、内面はヨコハケ、外面はユビオサエとナデ	内面：2.5Y8/2 灰白 外面：2.5Y7/2 灰黄	京Ⅸ期中
106	北区 北中央	077SK	土師器	皿	(9.6)	2.3	-	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/2 灰白	京Ⅸ期新
107	北区 北中央	077SK	土師器	皿	(11.0)	2.0	-	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/3 浅黄橙	京Ⅸ期新
108	北区 北中央	077SK	土師器	皿	(16.0)	3.0	-	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR7/3 にぶい橙	京Ⅸ期新
109	北区 西側	556SK	陶器	卸皿	(13.0)	3.0	5.1	口縁部内外面は施釉、体部内外面は回転ナデ、見込みは胎土目、底部は糸切り	内外：2.5Y8/2 灰白	瀬戸・美濃系 15世紀前半
110	南区 中央	406SK	土師器	皿	(8.0)	(2.1)	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/3 浅黄橙	京Ⅹ期古
111	南区 中央	406SK	土師器	へそ皿	7.55	1.9	3.7	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：7.5YR8/4 浅黄橙 ~ 10YR8/4 浅黄橙 外面：7.5YR8/3 浅黄橙 ~ 10YR8/3 浅黄橙 断面：7.5YR8/3 浅黄橙	京Ⅹ期古
112	南区 中央	406SK	土師器	皿	10.65	2.5	3.8	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内/断：10YR8/2 灰白 外面：7.5YR8/3 浅黄橙 ~ 7.5YR8/1 灰白・ 5YR8/2 灰白	京Ⅹ期古
113	南区 中央	406SK	土師器	皿	12.6	2.6	5.7	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外断：10YR8/2 灰白	京Ⅹ期古
114	南区 中央	406SK	土師器	皿	(16.2)	(2.9)	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/3 浅黄橙	京Ⅹ期古
115	南区 中央	406SK	土師器	皿	(19.0)	(3.5)	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/3 浅黄橙	京Ⅹ期古
116	南区 中央	406SK	白磁	椀	(11.0)	(2.9)	-	内外ともに施釉、口縁部内面は口剥げ	内外：7.5Y8/1 灰白	
117	南区 中央	406SK	青磁	椀	(13.2)	(2.05)	-	内外ともに施釉	内外：2.5GY7/1 明オリーブ灰 断面：N8/ 灰 ~ 2.5GY7/1 明オリーブ灰	
118	南区 中央	406SK	灰釉陶器	椀	-	(2.05)	6.4	内面施釉、外面は体部施釉、底部外面は糸切痕	内面：2.5Y7/2 灰黄 ~ 7.5Y5/3 灰オリーブ /7.5Y8/1 灰白 外面：2.5Y7/2 灰黄~ N8/ 灰白 断面：2.5Y7/3 浅黄	
119	南区 中央	406SK	須恵器	捏鉢	24.0	8.5	8.0	内面は擦り痕、外面は回転ナデ、底部は離れ砂	内外：N5/ 灰	15世紀前半
120	南区 中央	406SK	須恵器	捏鉢	(30.6)	(4.0)	-	内外ともに回転ナデ	内外：N7/ 灰白	京Ⅶ期中
121	南区 中央	406SK	瓦質土器	鍋	(34.0)	(4.5)	-	口縁部はヨコナデ、内面はヨコハケ、外面はユビオサエとナデ	内外：2.5Y8/1 灰白	京Ⅹ期古
122	南区 中央	406SK	瓦質土器	火鉢	(31.0)	(6.5)	-	内面はヨコナデ、外面はヘラミガキと花文	内外：N4/ 灰	
123	南区 中央	334SK	土師器	皿	(8.5)	2.1	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/3 浅黄橙	京Ⅹ期古

表4 遺物観察表5

挿図 番号	区	出土遺構	器種	器形	口径	器高	底径	形成技法の特徴	色調	備考 (時期・産地ほか)
124	南区 中央	334SK	土師器	皿	(10.4)	2.5	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/1 灰白	京X期古
125	南区 中央	334SK	土師器	皿	(9.0)	2.0	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はユビオサエとナデ	内外：10YR8/2 灰白	京X期古
126	南区 中央	334SK	土師器	皿	(15.2)	2.4	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/2 灰白	京X期古
127	南区 中央	334SK	土師器	皿	(15.0)	2.6	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：7.5YR8/1 灰白	京X期古
128	北区 東中央	114SK	土師器	皿	(10.2)	(2.0)	-	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内外：5Y7/6 橙	京IX期中
129	北区 東中央	114SK	瓦質土器	鍋	(26.0)	(7.3)	-	口縁部はヨコナデ、内面はヨコハケ、外面はユビオサエとナデ	内面：7.5Y8/1 灰白 外面：N/3 暗灰	京IX期中
130	北区 東中央	114SK	瓦質土器	羽釜	(20.0)	(11.0)	-	口縁部から鐏にかけてヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内面：N8/ 灰白 外面：N7/ 灰白	京X期中
131	北区 東中央	114SK	瓦質土器	羽釜	(14.4)	(9.5)	-	口縁部はヨコナデ、内面はヨコハケ、外面はユビオサエとナデ	内面：2.5Y8/1 灰白 外面：N/3 暗灰	京X期中
132	北区 東中央	114SK	瓦質土器	羽釜	(25.4)	(12.3)	-	口縁部から鐏にかけてヨコナデ、内面はナデ、外面はユビオサエとナデ	内面：N8/ 灰白 外面：2.5Y6/2 黄橙	京X期中
133	北区 東中央	114SK	瓦質土器	羽釜	(27.0)	(13.5)	-	口縁部から鐏にかけてヨコナデ、内面はヨコハケ、外面はユビオサエとナデ	内面：N8/ 灰白 外面：N3/ 暗灰	京X期中
134	南区 中央	320SE	土師器	皿	(7.8)	1.9	-	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：7.5YR7/4 にぶい橙 外面：7.5YR7/3 にぶい橙 断面：7.5YR6/6 橙	京X期古
135	南区 中央	320SE	土師器	皿	(8.6)	2.2	-	内外面ともに口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ	内/断：2.5Y8/3 灰白 外面：2.5Y8/2 灰白	京X期古
136	南区 中央	320SE	土師器	皿	(8.6)	2.3	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ、外面はナデとユビオサエ	内外：7.5YR8/3 浅黄橙	京X期古
137	南区 中央	320SE	土師器	皿	7.5	1.75	3.8	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：2.5Y8/2 灰白 ～2.5Y7/2 灰黄 外面：2.5Y7/2 灰黄 ～2.5Y6/1 黄灰	京X期古
138	南区 中央	320SE	土師器	皿	(9.0)	1.8	(5.0)	内外面ともに口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ	内/断：7.5YR8/4 浅黄橙 外面：10YR7/3 にぶい黄橙	京X期古
139	南区 中央	320SE	土師器	皿	(12.2)	2.7	6.4	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外断：2.5Y8/2 灰白	京X期古
140	南区 中央	320SE	土師器	皿	(12.6)	(2.6)	-	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ	内外断：7.5YR7/4 にぶい橙	京X期古
141	南区 中央	320SE	土師器	皿	(10.6)	2.45	-	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ	内外断：2.5Y8/2 灰白	京X期古
142	南区 中央	320SE	土師器	皿	(14.6)	(3.0)	-	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：7.5YR7/4 にぶい橙 ～10YR8/3 浅黄橙 外/断：7.5YR8/3 浅黄橙	京X期古
143	南区 中央	320SE	土師器	皿	(15.2)	(2.5)	-	内面は口縁部はヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外：7.5YR8/3 浅黄橙	
144	南区 中央	320SE	白磁	椀	-	(2.7)	(7.4)	内外面ともに施釉、底部外面は回転ナデ	内面：7.5Y7/2 灰白 外面：7.5Y7/2 灰白 ～10YR8/1 灰白 断面：10YR8/1 灰白	
145	南区 中央	320SE	灰釉陶器	椀	(16.2)	(4.7)	-	内外面ともに施釉、回転ナデ	内面：5Y7/1 灰白 ～2.5Y7/1 灰白 外/断：5Y7/1 灰白	
146	南区 中央	320SE	陶器	片口	(12.2)	(2.9)	-	口縁部は内外面ともに施釉、体部は回転ナデ	内面：7.5Y6/3 オリーブ黄 ～5Y6/1 灰/5Y4/1 灰 外面：7.5Y6/2 灰オリーブ ～5Y7/1 灰白 断面：5Y6/1 灰	瀬戸・美濃系 18世紀代
147	南区 中央	322SK	土師器	へそ皿	6.6	1.9	3.1	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外：10YR8/3 浅黄橙 ～5YR7/4 にぶい橙 断面：10YR8/3 浅黄橙	京X期古
148	南区 中央	322SK	土師器	へそ皿	7.0	2.05	3.4	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内/断：7.5YR8/4 浅黄橙 外面：7.5YR7/4 にぶい橙	京X期古

表4 遺物観察表6

挿図 番号	区	出土遺構	器種	器形	口径	器高	底径	形成技法の特徴	色調	備考 (時期・産地ほか)
149	南区 中央	322SK	土師器	へそ皿	7.4	2.0	3.4	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：2.5Y8/2 灰白 外/断：2.5Y7/2 灰黄	京X期古
150	南区 中央	322SK	土師器	へそ皿	7.7	1.7	3.8	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ユビオサエ、底部ナデ	内面：10YR8/3 浅黄橙 ～5YR7/6 橙 外面：10YR8/3 浅黄橙 ～5YR7/6 橙・5YR7/4 にぶい橙 断面：10YR8/3 浅黄橙	京X期古
151	南区 中央	322SK	土師器	皿	8.0	2.1	4.3	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外：7.5YR8/4 浅黄橙	京X期古
152	南区 中央	322SK	土師器	皿	8.3	2.35	3.8	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：7.5YR8/4 浅黄橙 外面：7.5YR8/3 浅黄橙 断面：7.5YR7/4 にぶい黄 ～10YR7/3 にぶい黄 橙	京X期古
153	南区 中央	322SK	土師器	皿	8.4	2.2	3.6	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：7.5YR7/6 橙 外面：7.5YR7/4 にぶい橙	京X期古
154	南区 中央	322SK	土師器	へそ皿	8.4	2.2	3.2	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、体部にユビオサエ	内外：10YR8/3 浅黄橙	京X期古
155	南区 中央	322SK	土師器	へそ皿	8.45	2.3	2.9	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、体部にユビオサエ	内外：7.5YR8/3 浅黄橙	京X期古
156	南区 中央	322SK	土師器	皿	8.6	1.7	4.3	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：2.5Y8/3 淡黄 ～2.5Y7/1 灰白 外/断：2.5Y8/3 淡黄 ～2.5Y6/1 黄灰	京X期古
157	南区 中央	322SK	土師器	灯明皿	9.2	2.1	4.9	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：10YR7/3 にぶい黄橙 ～10YR4/1 褐灰・ N2/黒 外面：10YR7/2 にぶい黄橙 ～10YR6/2 灰黄褐 断面：7.5YR7/4 にぶい橙	京X期古
158	南区 中央	322SK	土師器	皿	(11.2)	2.55	(6.0)	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、体部にユビオサエ	内外：7.5YR8/4 浅黄橙 断面：7.5YR8/3 浅黄橙	京X期古
159	南区 中央	322SK	土師器	皿	10.5	2.5	3.4	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、体部にユビオサエ	内外：10YR8/2 灰白	京X期古
160	南区 中央	322SK	土師器	皿	10.8	2.8	4.25	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：10YR6/1 褐灰 ～2.5Y8/2 灰白 外面：10YR8/2 灰白～N7/ 灰白	京X期古
161	南区 中央	322SK	土師器	皿	11.0	2.6	4.3	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、体部にユビオサエ	内外：2.5Y8/2 灰白	京X期古
162	南区 中央	322SK	土師器	皿	10.8	2.1	4.4	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ユビオサエ、底部ナデ	内外：10YR8/3 浅黄橙 断面：10YR8/3 浅黄橙 ～2.5Y7/1 灰白	京X期古
163	南区 中央	322SK	土師器	皿	12.4	2.5	6.4	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：10YR8/2 灰白 外面：2.5Y8/2 灰白	京X期古
164	南区 中央	322SK	土師器	皿	(12.6)	2.7	-	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：10YR8/3 浅黄橙 外面：10YR8/3 浅黄橙 ～5YR8/4 淡橙 断面：10YR8/3 浅黄橙 ～7.5YR8/3 浅黄橙	京X期古
165	南区 中央	322SK	土師器	皿	13.8	2.95	6.1	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：7.5YR8/3 浅黄橙 外面：7.5YR8/3 浅黄橙 ～2.5Y7/1 灰白 断面：7.5YR8/3 浅黄橙 ～2.5Y8/2 灰白	京X期古
166	南区 中央	322SK	土師器	皿	(14.2)	2.95	7.2	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：10YR8/1 灰白 ～10YR8/2 灰白 外面：2.5Y8/1 灰白 断面：10YR8/2 灰白	京X期古

表4 遺物観察表7

挿図 番号	区	出土遺構	器種	器形	口径	器高	底径	形成技法の特徴	色調	備考 (時期・産地ほか)
167	南区 中央	322SK	土師器	皿	14.4	3.3	7.0	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ユビオサエ、底部ナデ	内面：10YR8/3 浅黄橙 外面：10YR8/2 灰白 ～ N8/ 灰白 断面：10YR8/3 浅黄橙 ～ 10YR8/1 灰白	京X期古
168	南区 中央	322SK	土師器	皿	(15.8)	2.6	(8.2)	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内面：7.5Y8/1 灰白 外面：5Y8/2 灰白 ～ 7.5YR8/2 灰白 断面：7.5Y8/3 浅黄橙 ～ 7.5Y8/1 灰白	京X期古
169	南区 中央	322SK	土師器	皿	(16.1)	2.9	(8.0)	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、体部にユビオサエ	内外：10YR8/2 灰白 断面：10YR8/2 灰白 ～ 7.5YR8/3 浅黄橙	京X期古
170	南区 中央	322SK	土師器	皿	(19.2)	3.1	(9.2)	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内/断：2.5Y8/1 灰白 ～ 2.5Y8/2 灰白・N6/ 灰 外：2.5Y8/1 灰白～ N6/ 灰	京X期古
171	南区 中央	322SK	土師器	器台	(6.7)	3.6	(4.4)	内外面ともにナデ、体部外面にユビオサエ	内面：2.5Y8/1 灰白 外面：5Y8/1 灰白 ～ 10YR7/1 灰白 断面：10YR8/2 灰白 ～ 10YR7/2 にぶい黄 橙	
172	南区 中央	322SK	土師器	器台	(7.3)	3.35	(5.6)	内外面ともにナデ、体部外面にユビオサエ	内/断：10YR8/1 灰白 ～ 10YR8/2 灰白 外面：7.5YR8/2 灰白 ～ 5YR6/1 褐灰	
173	南区 中央	322SK	土師器	器台	(8.0)	3.5	(5.5)	内面は底部ユビオサエ、外面は体部から脚ぶにかけてユビオサエ	内面：10YR8/3 浅黄橙 ～ 7.5YR8/3 浅黄橙 外面：10YR8/3 浅黄橙 断面：2.5Y7/2 灰黄	
174	南区 中央	322SK	土師器	器台	-	(2.4)	7.0	内面はナデ、外面はユビオサエ	内面：7.5YR7/4 にぶい橙 外面：7.5YR8/3 浅黄橙 断面：2.5Y6/1 黄灰	
175	南区 中央	322SK	青磁	盤	-	-	(9.6)	内外面ともに施釉	内外：10GY6/1 灰 断面：N7/ 灰白	京VIII期中
176	南区 中央	322SK	青磁	壺	(11.0)	(1.75)	-	内外面ともに施釉	釉薬：7.5Y7/1 灰白 断面：N8/ 灰白	
177	南区 中央	322SK	白磁	椀	-	(2.0)	(5.6)	内面は施釉、外面は体部施釉	釉薬：5GY8/1 灰白 断面：N8/1 灰白	
178	南区 中央	322SK	灰釉陶器	皿	(4.6)	(1.05)	-	内面は施釉、外面は口縁部施釉	内面釉：5Y7/1 灰白 外面釉/断：5Y6/1 灰	
179	南区 中央	322SK	灰釉陶器	椀	-	(2.7)	(8.0)	内外面ともに体部施釉	釉/断：5Y7/1 灰白	10世紀後半 ～ 11世紀初頭
180	南区 中央	322SK	須恵器	捏鉢	-	(6.6)	-	内外面ともに口縁部回転ナデ	内/断：10Y6/1 灰 外面：N5/ 灰	13世紀前半 ～ 後半
181	南区 中央	322SK	須恵器	捏鉢	(24.6)	(3.85)	-	内外面ともにヨコナデ、体部外面にユビオサエ	内外断：N5/ 灰	12世紀末葉 ～ 13世紀初頭
182	南区 中央	322SK	瓦質土器	鍋	-	(2.3)	-	内外面ともにヨコナデ	内面：N4/ 灰 外面：N5/ 灰～ N6/ 灰 断面：N7/ 灰白	
183	南区 中央	322SK	瓦質土器	羽釜	(5.6)	6.3	(4.3)	内面は口縁部から体部上位にかけてヨコナデ、体部下位から底部にかけてナデ、ユビオサエ、外面は口縁部から体部上位にかけてヨコナデ、体部下位から底部にかけてナデ	内面：N6/1 灰～ 7.5Y7/1 灰白 外面：N5/ 灰 断面：N8/ 灰白	
184	南区 中央	322SK	瓦質土器	羽釜	(23.2)	(4.4)	-	内面はナデ、外面はヨコナデ、擬凹線	内面：2.5Y8/1 灰白 外面：N8/ 灰白	
185	南区 中央	322SK	瓦質土器	火鉢	(30.8)	(7.6)	-	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデのちミガキ、外面の口縁部は横方向のミガキ、口縁部はヨコナデ、体部の上部には菊花紋、下部はヨコナデのちミガキ	内面：2.5Y2/2 灰白 ～ N4/ 灰 外面：5Y7/1 灰白 ～ 10YR8/1 ～ 8/2 灰 白 断面：5Y8/1 灰白 ～ 5YR7/3 にぶい橙	
186	南区 中央	322SK	陶器	椀	(16.6)	(3.4)	-	内外面ともに施釉	内外：7.5Y6/3 オリーブ黄 断面：5Y7/1 灰白	瀬戸・美濃系 京X期古
187	南区 中央	322SK	磁器	天目茶椀	(12.4)	6.9	(4.2)	内外面ともに施釉	内面釉：10YR4/1 褐灰 ～ N2/ 黒 外面釉：7.5YR4/1 褐灰 ～ N2/ 黒 断面：5Y8/1 灰白	
188	南区 中央	322SK	陶器	壺	(18.6)	(6.6)	-	口縁部は内外ともに回転ナデ、体部内面はユビオサエとナデ、外面はナデ、口縁部内面と体部外面一部に自然釉	内外：2.5YR3/2 暗赤褐	常滑 12世紀後半
189	南区 中央	330SK	土師器	へそ皿	(7.6)	(1.8)	-	内面は口縁部から体部中位にかけてヨコナデ、下位ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外：10YR6/3 にぶい黄橙	京X期中
190	南区 中央	330SK	土師器	皿	(11.0)	1.5	-	内外面ともに口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ	内外：10YR8/3 浅黄橙	京X期中
191	南区 中央	330SK	土師器	皿	12.2	2.0	-	内面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてナデ、ユビオサエ	内外：10YR8/2 灰白	京X期中

表4 遺物観察表8

挿図 番号	区	出土遺構	器種	器形	口径	器高	底径	形成技法の特徴	色調	備考 (時期・産地ほか)
192	南区 中央	330SK	瓦質土器	羽釜	(14.0)	(4.0)	-	内面にヨコハケ、外面は口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ユビオサエ	内外：10YR8/1 灰白	京XI期中
193	北区 南西	503SK	陶器	椀	(10.6)	6.3	(5.1)	体部外面中位から内面にかけて施釉、体部外面下位から高台内にかけて回転ヘラケズリと露胎	内外：7.5YR3/2 黒褐色	瀬戸・美濃系 京XI期中
194	北区 北東	619SE	陶器	埴塼	-	-	-		内面：N3/ 暗灰 外面：N7/ 灰	京XI期
195	北区 南西	652SK	石製品	石臼	30.0	-	-	擦り目	内外：5Y8/1 灰白	花崗岩 16世紀代
196	南区 西側	368SK	土師器	皿	(12.4)	1.4	-	内面はナデ、外面は口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部ナデ	内外：7.5YR7/6 橙	
197	南区 西側	368SK	白磁	皿	(11.0)	2.4	-	内外面ともに施釉	内外：10YR8/1 灰白	
198	南区 西側	368SK	陶器	天目茶椀	(12.0)	(5.4)	-	内外面ともに施釉	内外：10YR2/1 黒	瀬戸・美濃系 京XI期古
199	南区 西側	368SK	陶器	皿	(10.6)	2.7	-	内外面ともに施釉、底部外面に砂目痕	内外：7.5Y7/2 灰白	志野 京XI期古
200	南区 中央	026SK	土師器	皿	8.0	2.2	-	口縁部から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面は体部から底部までユビオサエとナデ	内外：10YR8/3 浅黄橙	京X期古
201	南区 中央	026SK	土師器	皿	14.0	2.8	-	口縁部外面から体部内面までヨコナデ、底部内面はナデ、体部外面から底部までナデ	内外：10YR8/3 浅黄橙	京X期古
202	南区 中央	026SK	土師器	器台	(7.8)	3.3	-	口縁部はヨコナデ、体部内面はユビオサエとナデ、体部外面から脚部外面まではユビオサエとナデ、脚部内面はナデ	内外：10YR7/4 にぶい黄橙	
203	南区 中央	026SK	土師器	器台	(8.6)	3.6	-	口縁端部はヨコナデ、体部内面はユビオサエとナデ、外面はナデ、脚部外面はユビオサエとナデ、内面はナデ	内外：10YR7/4 にぶい黄橙	
204	南区 中央	026SK	土師器	器台	(9.0)	3.6	-	口縁部はヨコナデ、体部内面はユビオサエとナデ、体部外面から脚部外面まではユビオサエとナデ、脚部内面はナデ	内外：10YR7/4 にぶい黄橙	
205	南区 中央	026SK	土師器	器台	9.0	3.5	-	口縁部は内外ともにヨコナデ、体部外面はナデ、底部内面はユビオサエとナデ、脚部内外ともにナデ	内外：10YR7/4 にぶい黄橙	
206	南区 中央	353SK	陶器	水指 もしくは 建水	14.0	11.5	-	内面は回転ナデ、外面は口縁部から体部中位にかけて回転ナデ、下位は回転ヘラケズリ	内外：5YR7/6 橙	備前 京XI期新